## 調 古 静 嘉 査 写 堂 経 لح 研 群 所 蔵

静嘉堂所蔵古写経群の研究資源化プロジェクト編

華手經悉第四

授无上

道

記餘

加

上

部

号

智

出

光

A

現

在

為

无法

行

善

阿薩授无上道

記

餘

如

上

燕

M

德

刹

至

14

中

間

有

世

界

名

離

垢

后藤原

光

明

子

奉

為

律 方贈 一位 永 莊 成菩提之 樹 嚴 橘 ÉS 既 氏 聖 3 位 太 朝 伏 夫 太 恒 長些 癲 1-政 这福 太 敎 優 臣 般若 馬 斯 壽下及 府 勝 切 君 7 国 紅 導 律又 奉省 寮 論 水北 米

及

真

贈

灾一切 迷方 會 縣覺 路

至

燈

無

躺

流

布天

下間

为持

老猴福

共盡

忠節

又光

明

了自

菱

**誓言** 

磨流

願

勤

除

煩

璋

外

翦

諸

法

早契

善

提

3

天平土年五月一日 記

静嘉堂所蔵古写経群の研究資源化プロジェクト編

静 嘉 堂 所 蔵 古 写 経 群 0) 調 査 ٤ 研 究

静嘉堂所蔵古写経群の概要と調査研究	1 大般若波羅蜜多経 巻第	2 大般若波羅蜜多経 巻第	3 華手経 巻第四(五月一	4 心経(般若波羅蜜多心経、	5 心経(般若波羅蜜多心経、	6 増壱阿鋡経 巻第二二(	7 大般若波羅蜜多経 巻第	8 仏説中心経(仏説忠心経)	9 大宝積経 巻第二三	10 大般涅槃経 巻第一一	11 妙法蓮華経	12 古経貼交屏風	13 古経鑑	14 仁王護国般若波羅蜜多経	15 仏母大孔雀明王経		16 金光明最勝王経 巻第二	韓婆沙 卷第六	金光明最勝王経 韓婆沙 巻第六	金光明最勝王経 4、説阿弥陀経 4、説阿弥陀経	金光明最勝王経 一、 一、 一、 一、 一、 一、 一、 一、 一、 一、	金光明最勝王経 一、 一、 一、 一、 一、 一、 一、 一、 一、 一、 一、 一、 一、	金光明最勝王 韓婆沙 巻第 仏説阿弥陀経 人。 大般若波羅蜜 人。 人。 人。 人。 人。 人。 人。 人。 人。 人。 人。 人。 人。	を主要を ・ 一般若波羅華経 ・ 一般若波羅華経 ・ 小説阿弥陀経 ・ 少法蓮華経 ・ 少法蓮華経 ・ 少数法蓮華経 ・ 少数法蓮華経 ・ 少数法蓮華経 ・ 少数法蓮華経 ・ 一般若波羅蜜 ・ 一般若波羅蜜 ・ 一般若波羅蜜	金光明最勝王 金光明最勝王 金光明最勝王 全光明最勝王	本	報告     文献     24     23     22     21     20     19     18     17     16       金     分數法     大般     數數法     基準     22     21     20     19     18     17     16       金     分數法     決別     數數法     數數     22     21     20     19     18     17     16       金     光     決別     數數     次數     28 <td< th=""><th>堂所蔵古写経の料紙 型所蔵古写経の料紙 型所蔵古写経の料紙 型所蔵古写経の料紙 型が 型が 型が 型が 型が がた経 発 型が を 光明最勝王 ほ の 料紙 型 の 料紙 の 料紙 の 料紙 の の に に の に に の に の に の に の に の に の に の に の に の に の に に の に に に の に に に に の に に に に に に に に に に に に に</th></td<>	堂所蔵古写経の料紙 型所蔵古写経の料紙 型所蔵古写経の料紙 型所蔵古写経の料紙 型が 型が 型が 型が 型が がた経 発 型が を 光明最勝王 ほ の 料紙 型 の 料紙 の 料紙 の 料紙 の の に に の に に の に の に の に の に の に の に の に の に の に の に に の に に に の に に に に の に に に に に に に に に に に に に
<b>査研究</b>	巻第二四五 (長屋王願経)	巻第五二六 (永恩具経)	(一日経)	経、隅寺心経)	経、隅寺心経)	(善光朱印経)	巻第四三四 (安倍小水麻呂経)	·経、五月一日経)							経	経	至 経	(神護景雲経)	是景雲経)	(是)	巻 第二 第 第 三 五 四	三   雲	普   三   雲     -	· · · · · · · · · ·	() () () () () () () () () () () () () (	( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )	( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )	(切) (景雲経) (景雲経) (景三五四 (第三五 (第三五 (第三五 (第三五 (第三五 (第三五 (第三五 (第三五
浦木賢治																												山口悟
図版	6	7	8	9	9	10	11	12	13	14	15		16	35   16	46 35 16	48   46   35   16	51 48 46 35 16	52 51 48 46 35 16	53 52 51 48 46 35 16	54 53 52 51 48 46 35 16	55 54 53 52 51 48 46 35 16	56 55 54 53 52 51 48 46 35 16	57 56 55 54 53 52 51 48 46 35 16	58 57 56 55 54 53 52 51 48 46 35 16	60 58 57 56 55 54 53 52 51 48 46 35 16	60 58 57 56 55 54 53 52 51 48 46 35 16	60 58 57 56 55 54 53 52 51 48 46 35 16	60 58 57 56 55 54 53 52 51 48 46 35 16
解 3	62	64	66	68	70	72	74	76	78	80	82		91	117 91	136 117 91	139 136 117 91	143 139 136 117 91	145 143 139 136 117 91	147 145 143 139 136 117 91	149147145143139136117 91	151 149 147 145 143 139 136 117 91	153151149147145143139136117 91	155153151149147145143139136117 91	157155153151149147145143139136117 91	161157155153151149147145143139136117 91	163 161 157 155 153 151 149 147 145 143 139 136 117 91	163 161 157 155 153 151 149 147 145 143 139 136 117 91	xii   179   163 161 157 155 153 151 149 147 145 143 139 136 117 91

## 凡 例

- ◆本書は二○二一年度東京大学史料編纂所一般共同研究「静嘉堂所蔵古写経群の研究資 源化」の成果である。その組織は左記の通り。
- ─研究組織──※役職は当時のもの

共同研究員

浦木賢治(静嘉堂文庫美術館学芸員、研究代表者)

吉田恵理 (静嘉堂文庫美術館学芸員)

市川理恵(東京大学史料編纂所学術専門職員)

稲田奈津子(画像史料解析センター・准教授、所内担当者)

山口英男 (古代史料部・教授)

- ◆本書の編集、解説執筆は右記のメンバーが担当した。 ◆一般共同研究で撮影した写真は東京大学史料編纂所閲覧室での閲覧公開を予定してい る。なお、本書に掲載した図版はその一部である。掲載図版の縮尺は統一していない。
- ◆今後、静嘉堂文庫美術館HPで本書の内容を公開する予定である。
- ◆解説ページに掲載した細目データ表は左記のルールで記載している。
- 細目データは、今回調査に際して記録した調書の内容を整理し、所見を示したもの である。今後の補訂を要することもあろう。

「紙数」には、現状で貼り継がれている本紙の枚数を示した。表紙・軸附紙については、

• 「全長」は、表紙・軸附紙(原装・後補とも)を含めた値である。

原装は紙数に含め、後補は含めなかった。

- •【料紙】項は原則として第2紙の計測値によったが、最大値・最頻値とした場合が ある。該当しない項目は「一」とした。
- •「一紙」は、本来の料紙一紙の大きさに相当するであろう値を示した。
- 「界幅」は、複数行(原則として5行または10行)の平均値によった。
- 「行数」は、界線がある場合は空行も含めて示した。
- •「1・2行頭字」には、各紙の右端から1・2行目の行頭1字を示した。
- ・文中の「/」記号は、原文の改行箇所を示す(解説本文においても同じ)。 • 「該当箇所」には、当該史料(経典)の内容と対応する『大正新脩大蔵経』の該当 蔵経』に収録されていないものについては、別の参考文献により記した箇所もある。 箇所の始・終を示した。表記は、同書の「№ 220 大般若経第3巻 444 頁上段5行目 査に際しては SAT 大正新脩大藏經テキストデータベースを利用した。『大正新脩大 から 666 頁下段7行目」を「大正蔵 220.03/444a5 ~ 666c7」の要領で略記した。調

## 静嘉堂所蔵古写経群の概要と調査研究

**浦木賢治**(静嘉堂文庫美術館学芸員、研究代表者)

れぞれに古写経が保管され、その中には奈良時代に遡るものも含まれている。 公益財団法人静嘉堂(以下、「静嘉堂」)には書庫と美術庫の二つの収蔵庫がある。経緯は判然としないが、そ

明治時代の廃仏毀釈により寺院等から流出したと思われる古写経などを岩﨑家が蒐集し、 かではない点も多い。 の所蔵となっている。その一部は松浦武四郎旧蔵品であることがわかるが、古写経の蒐集過程、旧蔵者など明らの所蔵となっている。その一部は松浦武四郎旧蔵品であることがわかるが、古写経の蒐集過程、旧蔵者など明ら (一八五一~一九〇八)、その嗣子で三菱第四代社長・岩崎小彌太 (一八七九~一九四五) によって蒐集された。 静嘉堂の約二十万冊の古典籍と約六五○○件の美術品のコレクションは、三菱第二代社長・岩﨑彌之助 現在、それらは静嘉堂

般涅槃聖行品 は間違いなく、近代に形成された古写経コレクションの一つとして貴重な古写経群を形成している。 に該当するのかもしれない。いずれにせよ、静嘉堂が所蔵する古写経の一部は、彌之助の時代に蒐集されたこと ことができる。「屏風」項には、「第六十八号 古筆裂張 小屏風 壱双」とあり、これは「古経貼交屏風」(№12 この三種の目録のなかでは『蔵品目録』が最も古いものに思われ、その成立は早くても明治四十年頃と推測される。 (ヨヒシ) 静嘉堂には三種の目録、『蔵品目録』全五冊、『家蔵品彙目録』全五冊、『静嘉堂鑑別目録』全七冊が伝わっている。 『蔵品目録』「古文書」項には「讃岐切経巻」「仏説阿弥陀経 世尊寺行成卿筆」「鼠跡心経 弘法大師筆 弐巻」「大 小野道風筆」などが列記され、現在でも静嘉堂が所蔵する写経に同定できる記述を複数確認する

| 九八二年四月三日~五月三十日)である。この展覧会では「古経貼交屏風」「古経鑑」のほか十件の経典を公 一九七七年に静嘉堂文庫展示館が開館した後、古写経のまとまった展示といえるのが「日本の書跡」展(会期

巻首と巻尾のみを撮影する場合が多い。 することは稀である。写真撮影も同様で、 する場合、経巻の巻首か巻尾のみを公開することが通例であり、数メートルに及ぶこともある古写経全体を展示 れて展示された古写経であるが、その全容を一堂に会する機会はなかった。というのも、美術館で古写経を展示 「古経貼交屏風」「古経鑑」が展示されたほか、「華手経」(No.3)など八件の経典が陳列された。以後、折りにふ ~十一月三日)が開催され、日中韓の仏教絵画、重要文化財「十二神将立像」七軀などが展示された。ここでも 次いで、一九九二年に静嘉堂文庫美術館が開館すると、一九九九年、「仏教の美術」展(一九九九年十月二日 巻首から巻尾まで古写経全体を撮影することは少なく、展示と同様に

は二〇二一年度一般共同研究に申請し、「静嘉堂所蔵古写経群の研究資源化」を採択していただいた。 図ることを目的としている。この活動の一つに編纂所外から研究課題を公募する一般共同研究があり、 部門山口英男教授、同稲田奈津子准教授、市川理恵氏の協力を仰ぎ、同所の一般共同研究を申請することとなった。 現実が、古写経研究者の足かせになっている可能性がある。このような課題は当館に限ったことではなく、 文全体が重要な考察対象となる。そのため、古写経を所蔵している館にとって経巻全体を公開することが難しい を受け、二○一○年度よりその活動をスタートさせている。この活動では、 を所蔵する美術館・博物館に共通した問題ではないだろうか。そこで静嘉堂では、東京大学史料編纂所古代史料 くの研究者との共同調査・共同研究を立ち上げ、研究資源の蓄積と共同利用の促進、そして日本史研究の向上を 東京大学史料編纂所は、二〇〇九年、文部科学大臣より「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」の認定 しかしながら、古代史研究・仏教学などの分野で古写経を専門とする研究者にとって、その経典に書かれた経 国内外に所在する史料について、多 静嘉堂で 古写経

来的には、これらのデジタル画像を閲覧に供することを予定している。このことは、二〇二三年四月に施行となっ の高精細デジタル撮影は三回に分けて行い、古写経群のデジタル画像は九○○カットを超えるものとなった。将 紙質調査(十月二十五日、二十六日、二十八日)は合計三日間行った。資料調査では静嘉堂古写経群の計測、基 (二〇二一年五月三十一日、七月五日~八日、八月三十日、九月六日、十月二十一日、十二月十三日) は合計九日間、 た改正博物館法にある「博物館資料のデジタル・アーカイブ化」にも適うものといえる。 本情報収集、目録化を行いつつ、目視および顕微鏡等を用いた紙質調査(非破壊)も並行して実施した。古写経 ン研究会(二〇二一年四月二日、九月二十八日、十二月十三日、二〇二二年二月四日)を四回実施し、 本研究では、静嘉堂が所蔵する古写経群の基本情報収集、デジタル撮影を主な目的とした。期間中、 資料調查

ができた。 する期間とも重なり、 本研究は新型コロナ感染症の拡大状況を注視しつつ実施することとなった。幸い、丸の内へギャラリー 世田谷区岡本の静嘉堂文庫美術館の展示室を調査や撮影場所として有意義に活用すること

典の基本情報等を記載した。可能な範囲で付属品も掲載している。このたび撮影した写真を全て本書に掲載する だけでは刊行できない内容である。 ことは叶わないが、静嘉堂古写経群の概要を知れる調査報告書になったと思われる。美術史を専門とする学芸員 本書は、その成果概報として作成したものである。 冒頭には、 古写経群の写真を掲載し、 解説ページには各経

口悟史氏の両氏に紙質調査を踏まえた報告を寄稿いただいた。この場を借りて、 巻末には東京大学史料編纂所前近代日本史情報国際センター特任助教・渋谷綾子氏、 両氏に御礼申し上げたい。 同所史料保存技術室・ Ш

経研究・古代史研究に資することがあれば幸いである。 からはそれら個別の課題に取り組む予定である。そして、 本研究により、静嘉堂古写経群の全体像が明らかとなったが、 今後、 本書が静嘉堂古写経群の研究のみならず、古写 新たな課題・検討事項も浮かび上がった。これ

- (注1) 詳細は別稿にて報告する予定。
- (注2)長谷川祥子「静嘉堂の肥前磁器コレクション」(所収、静嘉堂 古伊万里』二○○八年)では、明治二十年代の成立を想定しているが、その後に蒐集になった美術品・計算をできる。 古伊万里』二○○八年)では、明治と想定した。
- (注3)このことについても別稿にて報告したい。
- (注4) 静嘉堂文庫 『静嘉堂 日本の書跡』 (一九八二年)
- 墨画─」(二○一九年)などにも掲載されている。(注5) 静嘉堂文庫美術館『入門 墨の美術─古写経・古筆・水年)、静嘉堂文庫の古典籍 第三回 日本の貴重書』(二○○○議事堂文庫美術館『仏教の美術』(一九九九年)。以後、静嘉堂







界意 无 法 波 清净卷 故 故股若波羅蜜多清净 若 = 盖 界乃 无二分无 羅審多清净何以故 般 現 二分无别无 波 石 界乃至意 現一切智智清海故 地 識 暉 **岩波耀蜜多清净** 一切 界清净若般 至 界及 意界清 審多清净无二元二分元别无断故 意 智智清淨故意界清淨意果清 ·觸 竟觸意觸 觸 别充断故一切 断 為 净着般 為 聚 線/所 故 若波 一切 平 何以故若一切 地界清 生 生 卷一切智智清净卷 何以故 為 若波軍 多清净无 智智清淨故水大 諸受清 揮盛多清淨无二 諸受清 級所生諸受清淨 智 智清净 着一切 净地果清净 净着 净故殿塔 智智清 智 故

老

波

耀

蜜

多清

净何以故

着

切

智智清

老

火

風空識東清淨若

般

若波羅 蜜多请

充二

分

无利龙

薪

故

善

現

不好智

净

何

六人

故

若

切

智

智清

浄

若

无明清

故

龙

明

清

净

无

明

清

净

故

般

若波

羅

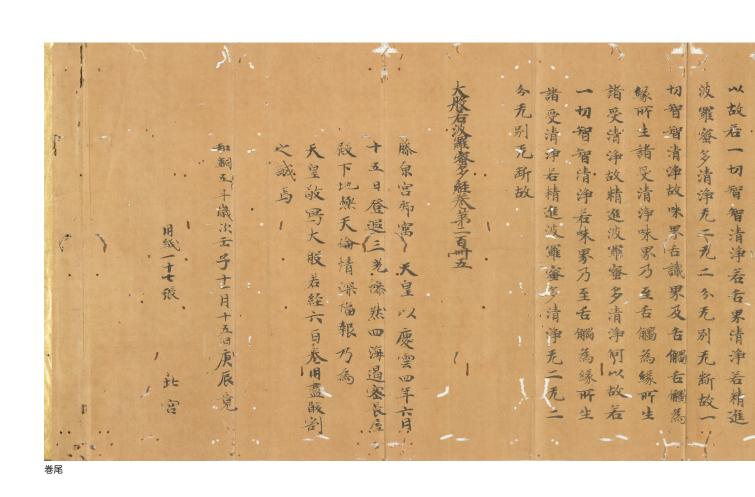
承

空識

界清淨水火風空識界清

净

巻



第三分方便, 吾巧品第二十六之四 大般若波羅塞多姓老弟五八千六

得

初

智

智所以者

何是

善薩摩訶薩

貓

佛法乃至未具成熟

應任意精進備

行如来十力及餘无量无邊

有情嚴淨佛土精未發

行

般若波

羅塞多方便善巧以一切

智

轉地得受記思復次善現

若菩薩摩訶薩

間 多到一切法究竟被岸依此義 羅塞多基 波 般 今時善現沒白佛言世尊常 該甚深 若波羅察多佛告善 獨覺菩薩 羅塞多復 深般 如来能 次善 若波羅塞多依 現由 到彼岸保此義故名為 此般若 現由 此 波 般 何義 故 名為 羅塞多曆 若 妓 般 故 羅塞 名為 般 若 若 波 巻首

大般若波羅盛多經恭弟五百千六

一部六百卷 右京一條二坊黃君端伯馬奉

無見若

有

對

若無對

依

此義故名為般若

波

若

相應

若

不

相應

若

有色若無色若

有見若

有少法

難

1/4

神以

者

何

基深般

**岩波羅姿多非** 

相

非

不

相應無色

無見無對一

相

所謂無

相

多復次

善現由此般若波羅塞多無

乃至

不思議界

依此

義故

名

為

般差波

羅塞

多依

勝義理分析諸法乃至無有少分可得

般若波羅塞多復次善現由此般

**着波** 

羅塞

諸

有所為这

**能證得一切智** 

智如是軍隊方

便善巧皆

由

般

若波羅塞多

而得成就

是故

善現諸菩薩

摩訶薩應勒備學甚深般若被

塞夕夕

嚴

净佛

本

漸次

證得一切

智

智

如是名為方

便

善

巧岩

菩薩摩訶薩成就如是方便善巧

訶薩

成

就軍隊方便善巧恒時增長勝妙善

相 十刀

和

切法

無作

無能入諸行

相是菩薩摩

法

性

相

皆空無起無成

無轉無

減

入諸

法

根

由

址

善

根常增長故使

能具足成就有情

依

此

義

故名為

般

若波羅客多復次善

現

由

洲

般若波羅塞多攝

蔵真如法界法

性廣

勝善

於

一切

智慧

辯才能引

一切

世出

能能能

夏

次

善

現

由

山此般

若效羅客多能生一

to

殊

世

一切

基深美

理係

此義故名

為

若

波

塞多复

水

善現由

此

般

若波羅塞多

巻尾

華手經想相品第十四

3

善明是中有佛号无殿眼令現在為智自在普明是中有佛号无殿眼令現在為智自在 薩摩訶薩授无上道記餘如上就 善意是中有佛号日炒肩令現在為益意善 東方去以度三万一千阿僧祇果有世界名 東方去此過三万一千阿僧就果有世界名 摩訶薩授无上道記餘如上就 善是中有佛号旃檀窟令現在為重智菩薩 東方去此過三万二千何僧祇果有世界石 菩薩摩訶薩授无上道記餘如上說 菩薩摩訶薩授无上道記餘如上說 東方去此過三万二十阿僧祇界有世 善養摩訶養授无上道記餘九上流 東方去山過三万二千阿僧祇果有世界 菩薩摩訶薩授无上道記餘四上就 日 華盖是中有佛号口一盖令現在為一寶藏 相是中有佛号称樓肩令現在為自在 廣妙是中有佛号日上聚今現在為智聚 方去以過子三万阿僧 被果被 有世里 界名 力 名

> 使常妻利至此中間有世界名書現是中河使常妻利至此中間有世界名書現差 在書現別至此中間有世界名書見是中有 在書現別至此中間有世界名書見是中有 在書見到至此中間有世界名書見是中有 在書見到至此中間有世界名書見是中有 在書見到至此中間有世界名書見是中有 在書見到至此中間有世界名書

巻首

華手經悉第四

中有佛号智出完今現在為无法行菩薩摩

後生諸功德利至此中間有世界名

離垢是

訶薩授无上道記餘四上就

上奉 從一位 皇后藤原氏光明子奉為 共盡 尊方贈四一位太 政太臣 助 律莊嚴既了伏 永庇菩提之樹長遊服若之律又願 勤 忠節又光明了自義誓言私濟流 除 橘氏太夫人敬 煩 障妙窮諸 聖 朝恒这福壽下及豪米 癲 隱 法早與菩提乃 馬 斯勝 府 一切經論及 君尊 因奉省真

天平土年五月一日記

消

切迷方會縣覺路

傳燈無窮流布天下間为持養養福

巻尾

菩薩摩訶薩授无上道記餘如上就

是中有佛子智華寶明德令現在為上嚴

方去此過三万一千阿僧祇界有世界石讚

東方去此過三万一午阿僧被果有世

界

名

樂是中有律号寶華德令現在為高華德

摩訶薩授无上道記餘如上

乳

寶德是中有佛号口纲明今現在為智德菩

8

5

心経

(般若波羅蜜多心経、隅寺心経

亦无老死盡无苦集滅道无智亦无得以无 不憎不減是故空中无色无受想行識无眼是舍私少是諸法空相不生不減不城不净 異色色即是空空即是色受想行識亦復 觀自在菩薩行深般 若彼羅蜜多時 見 多是大神咒是大明咒是无上咒是无等等 得阿 想完竟沒縣三世諸佛依般若波軍蛋多故 里礙无里礙故无有恐怖遠離一切顛倒夢 无意識男无无明亦无无明盡乃至无老死 是舍利子是諸法空相不生不減不垢 耳鼻右身竟无色聲香味觸法无眼 男乃至 随好空度一切者在舎利子色不異空空不 能除一切苦真實不虚故說般若波羅審 得故菩提薩強依般若波羅蜜多故心无 科多雖三狼三 提故知般若波羅蜜 就明日

多是大 九意蘇界無無明無無無 耳鼻舌 里 开 不惜不感 是 完竟 是大神究是大明究是無阿得多罪三狼三菩提故 服 得故 舎利 色色 一 自在 即就究日 無軍嚴故 空度 九涅縣三世 子是諸 苔 身意 即 提舊陸 初 是 是 춑 古真 切岩色舍 無色聲香 空空 故 蓝 空中 法 诸 有 空想不 實 依 即是 佛 恐怖 不 般 垂 右 虚 依般若波 若 叶觸法 色 色受 利 波 旦无智二无得以无典明盡乃至无老死 無上吃是 無受想 故 遠 波 主 子 知般若波羅養 不 **武殿若波羅蜜** 離 军 想 色 無 滅 3 行 不 牽 行 不 羅塞多故 識 里 眼界乃至 切 多 五等等 空空不 顛倒夢 藏 佑 = 服 故 無 不净 真如 見 2,

汝罪揭諦 汝罪借揭諦 菩提沙姿可

揭諦揭諦波躍揭諦 波耀僧揭諦 菩提薩婆呵

经被十 應五 差九十五種 那道若欲

若百遍千遍无問畫夜常誦此经

養十方諸佛報十方諸佛恩當誦觀世音

巻首

姓 姓 志 時 婆 堅 日 上 獨 面 為 步 為 閒 增壹阿給經增上品菜卅 萌 子 震 用 生 類 如 首多所饒益 固 岩 坐 如 rh 是 是 開 隻 秋 漏 石 15 如 尔 門身行不净親 出 信聖 婆 作漿導該彼見我皆起輕愧 基 汝 獨處隻步用心 時婆羅門白世尊 歩用心甚難娑羅門白佛言若有 静穴震我你時便 家學道我最為上首多所饒 行恒作是 婆羅門往至世事 一時佛在各衛 羅門如 严 難 固 言 所 為彼 出家學道今沙門瞿曇軍 開 アス 居心 汝 念 鈥 严言諸 在 前類而作择導世等 者 近 甚難 周 震 問静心震甚為告於 我曩昔未成佛 圝 居 作 甚為告於獨 所 祇樹給 日 是念諸 有族 在 世 共 无人之象身 事 開 相 姓 問 居亦 新獨園 告日 有 子 評 首 益 憲 沙 道 象 山 與 いん 如 是 介 門 澤 被 信 族 時

天平實 字三年 正月四日散位大初位上三鳴縣主思林品 大平實字二年三月七日覆位藥師寺沙門善宇勘本經 左 用 內史蒙書近少初位上長江臣多古志成日 覆 大舎人少初 後人佐下 初 位上大隅忌 秦 'z' 善 す 寸 产 君 覺 道 国 是 對 初 叁 再 校 校

巻尾

不

净唐

勞其

功

不是

真行畏

**感不善法** 

然我

今

日

身行非為不净親近問静之處諸

有身



巻首



巻尾

佛告日連被有大國去斯一千處在邊境 恒沙諸天替首靡不師 會聽经佛右面以立石日日連神通妙達智 時諸菩薩四事第子天龍一神帝王臣氏日 佛說七經一卷 虚空随時慶化權智並行普逐濟眾數如 如是一時佛在含衛國祇樹给狐 印 獨 園 是

巻首

佛說思姓一卷 持卷養 聖 推 勝 經 提 況 忠 规仁 皇后藤 尊考贈正一位太政太臣府 岩 贈後一位橘氏太夫人敬馬力 朝 目奉資真助永成菩提之樹長 論及律 嚴既方伙領憑 淪 即又完明子日義禮言於齊 股 为 若之律又額上奉 至 勤 恒 逐福壽下及家来共盡 原氏光明子奉為 傳燈無窮流布天下開名 除 福 消 煩 障效窮諸法早善 灾一切迷方會聯曾 巻尾

連各口吾自懸虚誰抑汝等山姓志三進道

梵志呼日

王令吾等為民除患汝柳之為目

門當其山上梵志愈日正是瞿雲第子所為

力

啟令山移山又三下遂成平地

有道

頂山為不動梵志舊日此山已起誰還之字

其日民令遠三逢承震福堂日連受教成佛

神尋路放光邊絕日明態處虚空當其山

告日連汝往被國親道神化長度梵志濟

佛

生

各一其心以道定力山起啟移

日又无光此将

有異中有明者以道定意賴

眾第子心誰穢濁者令山不移朝見其心香

净國禁寶色不機其心仰頭觀見一以

志春王日吾等自為民除患王無感為即統

惠之王以此山為民艱難具向梵志說之梵

流分身變化因有大山塞民徑路學園

住

及臣民奉事梵志等五百人各有五通能移 神妙情化智於顛倒衆那之行以為真諦王 親三等之至靈希明如来无所者公真等覺

9 巻第二三

甲 復次無 邊慧諸甚薩摩訶薩乃於無邊甲胄 大口 甲 境界無 能 杉 近 斯 大寶積经被甲莊嚴會第七之王大唐三藏菩提流志奉該譯悉以 自 何以故於一切處能随 曹 若 77 遇 為 随 大 加 道 法 郁 現 欲 不 1 未 得 随 法 邊大亲境界無邊大道 不 於 故 随 不能選 来有為無為 杂於大無 觩 入一切 入若 切法若 少法若 切法 證不能 能 熊選 法 作 檡 得 内 平 若 热, 校 不 證 熊 住 等 被 验 外 欲 桿 若 過 不 大 决 若 若 故 随 能 故諸菩薩摩 甲胄 3 任 入 一 觩 不 魚 而 超 境界而 者 若 水 不 遇 可 簽 3 郁 乃 為 名 若 加 细 趣 法 可 若 若 欲 為 遍 14 业 甲 簽 能 随 石 透 狱 哲: 知 被 遍 岩石 住 此

巻首



平应

道無有又法

不遍

知

者

是

故

此

道名

上

道

無

數

量道無等等道

邊慧諸菩薩摩訶薩被天甲曾

遍

郁

随

十几

聚生

105

21

所

行

通能清淨一切聚生

煩

個

来

松

大年

楢

長

聚生一

加

善

根

住

斯

乃

至

觩

於

一切諸法平应大道

而

簽

趣

2

此

山

来

名

為

大来

法

善巧

杂至

涅

縣

来

無

上

来

無

寺等亲又此

大道

亦無

头

法

若

闪岩

至

廽

何

切智

智 大

遍

知随

入作

證 若

超

過是

故

被

大

甲

自入此

来

亦

無

头

法

円着

外

10 大般涅槃経 巻第一一

小時佛告迎禁菩薩善男子菩薩摩 等為 當於是大般沒縣經專心思惟及榜 张涅縣 经里行品上第十九

訶隆應

嬰兒行五者病行善男子菩薩摩訶薩常當 習是五種行後有一行是如来行所謂大 五一者聖行二者梵行三者天行四者

巻首

告 校去养男子苦受者名為三苦所謂苦苦行 能多 醇 夢覺道之根本亦能長養阿耨多羅三狼 云 僧 若是 虚忘諸佛世尊久於元量百千万億 確正為最樂如是等經所就樂更是 虚 則 意是随俗就是虚忌不如佛所統修 苦 生 菩提以是義故先於經中就是樂相 聞 /six 瑀 喝 謂 能 壞苦餘二要者所謂 是義故一切皆苦无有樂想善男子菩薩 苦因 女色 何 受樂報持戒安樂身不受苦乃至衆事 說言有樂必葉菩薩白佛言世 專諸佛菩 至死之中實无有樂但 樂性不相捨離是故說言一切皆苦善男 直 绿生死之中實有樂受菩薩摩訶薩 又衣服瓔路馬馬車乗奴婢僮 如世 我切脩菩提道已離 忘語今作是說其義 1 珊 辟文佛等不知此因為如是人找下苦 知是苦因樂目 ·可養找是八苦解苦元去善男子一切層 7. 佛言善男子如 酒甘味乃至倉藏下能令人生大憂怡 瑚 樂因是名為樂善男子如是等物 縣相唯有菩薩住於 間 找女人生男子若憂愁悲泣乃至新 真珠倉庫敷米如是等物世 躭 所須資生能為樂因故名為樂 酒飲酒上饌甘味渴時得水寒時 上四說諸受樂偈即是 行苦壞苦善男子以 請佛菩薩 八乘大般涅縣 僕金銀 行善者 間 善男子 随 忘 明朝 亦能 四項

巻尾

具色諸根家静其心桑和清淨家減即至其 時善隆即至僧坊若見如来及佛弟子威儀

善男子如是菩薩云何當復與人戰爭其 旬生大苦松言是菩薩復當與我與大戰

而求出家剃除續緩服三法衣既出家

持禁戒威儀不致進上安詳先所觸犯乃

罪

生怖畏謹戒之心

指如金 對善男

際

明

循

如虚空一

切善法因之增長若在家

家學道復作是合我今定當出家修學元

不得盡壽净終死行我今應當割除騎時

区

真菩提之道菩薩如是欲出家時天魔

家逼迫指

如军教

十刀 煩

性由之而生出家

写 馬車乗牛羊難大指 及之属復作是念居 霸歲妙瓔珞香華发樂人漢给他男女大 諸

故

拾

離所愛妻子眷属所居舍完金銀

方等大乗經典我令當為爱樂貪求大乗 佛世算有无上道有大心法大衆心行 是大温

縣經

聞巴生信信已應作的是思惟

行菩薩摩訶薩若侵聲聞若役如来得聞

大里縣性如今一行及摩門衛門各門各

摩訶薩两修聖

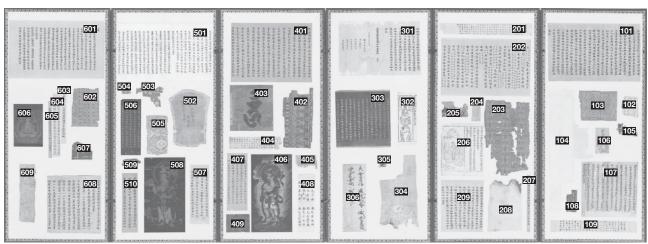
勒苦薩續積菩薩南師菩薩如是等菩薩摩 無量力菩薩裁三界菩薩威险婆罪菩薩於 薩實月菩薩月光菩薩滿月菩薩大力菩薩 薩不住息菩薩賣掌菩薩藥王菩薩易施告 利菩薩觀世音菩薩得大勢菩薩常精進菩 量世界能度無數百千衆生其名曰文殊師 善入佛慧通達大智到於彼岸名稱善問無 **呼殖聚德本常為諸佛之所稱數以慈循身** 轉不退轉法輪供養無量百千諸 三狼三菩提不退轉皆得危罪尽樂說辯才 六千人俱雖職羅毋耶輸危罪吐丘尼亦具 羅睺羅如是衆四知識大阿羅漢等復有學 色羅難 医富接那於 多羅尼子頂 菩提阿難 多里陵伽娑選薄枸羅摩訶拘錦雖難随然 訶如旃延阿處樓歐切實那橋梵波提雜婆 华你 其名日阿若傷陳如摩訶迦葉優樓頻螺迎 盡無復煩悩達得已利盡諸 眷属俱菩薩摩訶薩八万人皆於附耨多罪 無學二千人摩訶波閣波提比年尼與眷属 如是我間一時佛住王舎城耆閣堀山中與 妙法蓮華經序品第 大此立衆方二千人俱皆是阿羅漢諸 耶迦葉那提迦葉舎利弗大目捷連摩 有结心得自在 佛於諸佛 漏巴

巻第一 巻首



巻尾





附番号配置



明流 澗 此四流者 謂名 貪欲盖悉盖強 若不知智 亦 无信見 說此語如来乃就四 不 面立个時被 熊 見 則 頂泛州 15 破 70 不樣四學 云 不 何 愈 眠 = 无 時被 除 天 天 此 不 諰 恒 明 而 没来至我所頭面 云何為四 300 流 四 有希望及其 流 戲蓋髮盖 白我 天所此 語已循四 流 所 謂无 所謂質 明

The sale

4

雅

此

W

鲱

在是語已我後告日

蝉

沙

蝉

但縣縣若凡夫之人 不知

160

子

142

铁

所言若不 覺此四派則不得

與被

天人漸漸共為下謂論者

論生天之論欲不净想隔為大患出

人以簽散喜之心是時我便





代 麗九 八鉢羅上代 多三 断 告 较 瑟 里 地 相 多 毗 羅上曳惹 **交舉**末 住尼 建尼七告達 哈可薩婆但 產職播吸輸 成第十 指十 尼 相議 二 天 警 最かる 曳瑟 汝引 哥 杜 净 末 產工 制 欧坎 曾 極 中 Æ 析

無垢浄光大陀羅尼経 (百万塔陀羅尼)

意思惟此法已諸

塵垢盡

得法眼净我

四流之法及

就

四

鲱

小時被天雪

四法四

四

部之法

**小時緒此丘** 

刑

佛所

阿烷舊 菱 化 叶溪 中 九 奪 薩 麗刺 揭 六 擊 塵 親 搖 泥脊 溪 鄉 京那 二 成 命 南 良 縣 彩 蓮 婆 翻 羅 到 盧 蘆 敞 塞 姿 距 尼 多 薩 毗 婆 普 也 以毗 你 一 訶 废 佛 南 納 談 戶 净 上 播 毗 拏 莲 稻 宴 羅 武 老 赤 十 奪 婆 攻 阿 魏 三 善 瑟 伐 南 崖 多 枢 一 婆 薄 羅 聚 浆 泥 附 婆 尼 崖 監 聚 陶 麗 毗 庾 怛 達 伐 鲁 登 提 婌 羅 談 羅 談 羅 談 優 三 納 如 秦 悠 图 毗 二 十 毗 尼 一 块 羅 帝 南 八 布 櫛 他 尼 羅 五 二 潭 星 琴 蓝 引 多 取 燕 伐 伐

無垢浄光大陀羅尼経(百万塔陀羅尼)

12 1 1

12 1 201

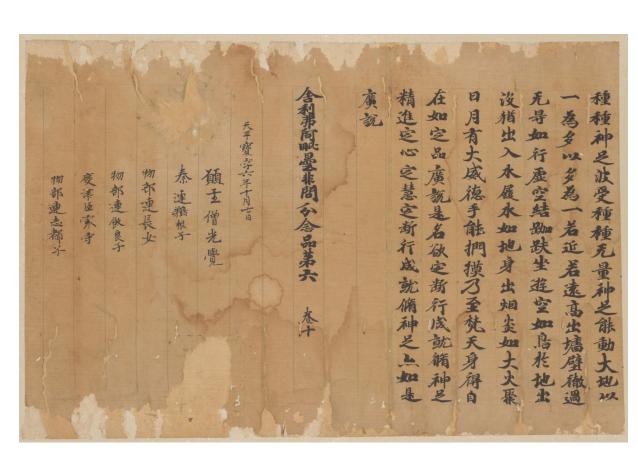
者法不 赤雀明 佛 自問多表 今 速 間 不 滅 時 則 站重 也明 虚 若 初 乖 苞名 盡 明外 大慧菩薩本令其遠維 大德真義者 故 日不随一切外直至故義為多明可廣如華嚴 想 证 多問合物本 道 非 無明 冊 為 善種 奇科符簡 不計 諸 相建 合他 稣 世 绿亦明今 生 復 計着 間 諸 減等性 減 顯標 系 是故欲求 義問時用廣 就可 斯巴春天文字有 新 人 道 经 論 身 明 春 議 者 自 不 值 解 美 隆 論 身 明 春 漢 者 自 不 值 新 人 後 后 百 有 新 人 後 后 百 有 新 人 後 后 百 有 新 人 卷 六 次 字 有 弱 水彼多間 義 陈所 性 生 不生 毌 說及佛 佛 涅 称 威 間 YX 亦齊說 斌 及次 所 神而 佛明說 駅 开 謂 應 統外 無 明 不生 何 善 白



12-1-20 大般若波羅蜜多経 巻第八一

都不可得天子當知如有二人家一山谷谷人

头儿 100 減解減 后住 有勝 小海 垃圾 濟 和 實知 是 勝心无勝心如實知如是不放逸觀得 實知有欲心无欲心如實知无欲心以實知无欲心以 會知死欲心 12 溪 不放 后住 除 22 觀 解 受是為受 绿受绿 逸親得定心住人 成即无明成 得心樂 即 泛調 九 明 得 练行 15 則行城行旗 複 如 五任得心樂。 次 心樂心調心華 心源 比立思推定 行緣識如 来得从



12-1-33 大方広仏華厳経 巻第五二 (二月堂焼経)



12-1-30 仏説大報父母恩重経



12 - 1 - 306 偈頌断簡



12

1 404

等二 謙 三不剛 等五 養代 華 應 力 四 聞 亦 自 常受言教是 之应慧是為八事 事 末陽 謙 将 无 誰 祭 无 佛 作 浦 往 御 不 曉 其 他 之名 乱 因 佛 佛 充納常如恭 法 不 作 格 樂 緣 教 形 不 何 類 諸 他 力是 九 何 歉 顏 厖 像 等 順 受法 等社 佛 而 所 喜 生被 力 物 為 15 是為三復 不 世 歸 為 積 常 化 无 不 四 常 神 專 法 值 趣 祭 图 在 五 囱 想 M 韵 数 除 信 相 志 甘 囱 有 徳 生 順 有三 念 諸 除 茶 應法 因 由 佛 不 四 使 根 有二事多 力入報應力選道 无我 有五事常懷為信 諸 佛 緣 事得 怯 盾 和 教 事常 見 是 供 貪疾 報 弱 順 弹 法 不 处 為 九人都 養 由 常 者 杨 言 來其 相 值善友何 在隱處 二萬 1/12 罪 樂微妙 政 所统 账 見人得 他 而 道 稻 善悪 不 緣 有 FF 无 歩 徳 謙 旬 my 敦 At 何 何 PT 危 大 作 何 相 供 华 湬 何 方 业 105



相多 產 歷度 題 田tt 栗 播 布 南

無垢浄光陀羅尼経(百万塔陀羅尼)

# 南无為善佛南元大奇讚佛南无人為法佛南元人為法佛南元不虚行佛

12 1

408

仏名経

巻第三〇

何以 該色界眼識界及 施設着香味 就故尊者善現所就 說故尊者善 眼界性等不 觸法 現所 蒙 眼 何以故 法 乾 可就故 觸 中 法 眼 中 不 觸 色家性 不 施 為 尊者善現所就 護 施 綠 設 眼 府 等不 色蒙 果不 主 諸受 施 可

12 1

407

大般若波羅蜜多経

巻第八

大王图境 聚大焰現 清徹无烟 諸天塞空形 观义手 雨聚雜花 慈心又手 獎其德日先臨聖王 王還喜忧摩太子頭以妙實屢縣太子頭 王意大院重賜梵志金角乳牛數百千頭 地動库戶節氣調適風而順時 察今時運太清和順古鳥翔傷 梵志點处心 此此大岩樓 念人先所及 尋己得五通 今事求不偏 思震門甚年 恩愛開甚固當以法篇開生死中秋門 佛本行經何妻決疑品第六 即野弟子未汝莫如吾誤以後記太子 何夷薛還沒 以悲心之角 定翻十方解 當施善法乳 天人飲无飲 解脱聚生禪 或否遍世間 佛樹當生長我薄德不報 今南欲处耀慧定照世間 吾今垂垂滅如何不悲年 佛之大海衛諸佛之實治度至死賈客以實充其俸 際祖杖養結棄不請威儀 尋格貢高意感本所習利 百山聖大師樂深康祠祀 若開佛聖化疾給本祈慮 防通達花天 喻實意帝釋 超净相梵志山典古五傳 介子八頂称牛麻木况海葵大衛日光轉輪五方佛 晋世之嬰羅 座勞之重疾以最勝法藥 當療衆生病 首世相燒此以淫怒震焰 當以法水減如雲而野火 祥瑞普臻 當名太子 号日古 財 天縣善作王教平均 因應豐熟 本 頂 護避甲層 **继後出家** 世應太平 端應至層 格 白天



12-1-50 大方広仏華厳経 巻第六九

及 画 心不動亦能起受一切無生於 解 以苦產 然 己一切業皆不失壞 己一切法 起諸 法 一所修告 性餘 孫思惟行精進沒罪簽起 行所特点 法 皆悉 2 身心惡作 堡固 生决 九 堂

12 - 1 - 510 海龍王経 巻第

不輕傷自省已過不談放織是為四後有四茶魔者也於聚生常議十惡不就人短亦然間佛言菩薩有四事乘諸惠趣何等為四

十方諸佛報十方諸佛恩當誦觀世音般若誦此經破十惡五進九十五種那道若欲供養問諦揭諦 放蠟傷諦 波蠟僧傷諦 菩提薩婆阿

百遍千遍无問盡夜常誦无顧不果

完即 就 先日 星礙无星礙故无有恐怖遠離一切顛倒夢 心经 是大神咒是大明咒是无上咒是无等等兒 严得故善提產堪依般若波羅 蜜多故心无 依除一切若真實不虚故說般若彼羅蜜多 得向稱多雕三旗三菩提故知般若波羅蜜多 想究竟沒縣三世諸佛依般若波羅審多故 亦无老死盡无苦集滅道无智亦无得以无 无意識果无无明亦无无明盡乃至无老死 日鼻右身意无色群香味觸往无眼界乃至 是含利子是諸法空相不生不誠不垢不净 溢皆空度一切苦厄倉利子色不具空空不 不增不減是故空中无色无受想行識无眼 具色色即是空空即是色受想行諭亦復 觀自在善種行深般若放羅 蜜多時照見五

12 1 603 雑阿含経 巻第三四

12 1

608

舎利弗阿毘曇論

巻第四

死 非 有非元 後死 那婆 建 植出 家語號他 DO

12 1 604 中阿含経 巻第三三

從 使 世 此 歸以 尊從定 躭 覺故 戶樓收樂王女賢月色嫁與 令我等後為見佛五結我 供

12 1

605

大般若波羅蜜多経

9克 苦提

清淨

獨覺菩提

清

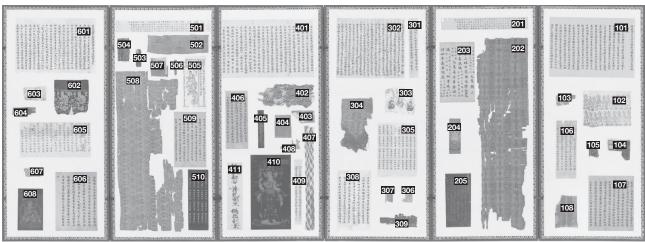
淨 故

初

智智清

一三公或業相應或非業相應或不就業相應 相 相 非業相應一二分或業相應或非業相應 非業相應 四聖孫祭業相 聖爺業云何道聖爺非業云見在學在進 何一三分或業相應或非業相應或不說業 食品定是名道聖部非業 應云何一 應 應非業相應告聖諦是名一三分或業相 立 何一 石 一二分或業相應或非業相應云 非業相應減聖諦是名一非業 二分或業相應或非業相應道 何 應無非業相應 一業相應集聖諦是名一業 一業相應





附番号配置



下浆

中王

得

飯

自

在

W

天

T

中

切

画

赵體性 轉後 阿二外樣成熟阿三有情世間 暫住義是線起義於暫住沒依他義是線起 世間成壞門五食在持門六自 绿起門云何 新海因果 势力受用随業所得愛非愛果門七成勢門 際 義於離有情後无常義是緣起義於无常海 八清净門绿起義 果 後 於依他離作用義是緣起義於雜作用 相續 際 自業所作義是緣起義問為顯何截建 生 相似轉載是錄起載於因果相 不断義是緣起義於因果相續 又 於中際若 謂 依 去何謂 八門蘇起流轉 流轉 離有情義是緣数 若 所 清净是 死生 作業增 内識 門 名 四 器 生 臻 不

> 事我悉當 有賢能當微名之敬賢尊聖如 **坚受機濟循** 躬身臨 朝 之着諸 新事不枉 如 植 人王 松倉 民 其 巷 物 稽 民 15 和 归 物 租 廣普 明 循 顧 义 1/12 母 父母 慈一 若 王 其 自 图 初 國

12 - 2 - 10 大方等大集経 巻第二二

被世界乃至一面合掌而 是雪 背緣 優藝典見是實 中有諸菩薩聲聞 具些亦為四 常真是五年有能 方過九万九億諸 方去 專 在 佛 卷 汝 not 何 頂 黄 凌 衆宣洗開 北 上 受 万九 来 蠔 虚 特 佛世 世等号餐 空中 大光明己 誰 四界北丘北丘尼優婆 億譜 讀 之 誦書写是他 果彼 AT 任 亦 立是時 佛 遣 雜 部 有出 光 飆 1 被 白 四 祭四 明 果 静法 佛 佛 雪 果名 功德 被 各 言 穆海 方 有 To 世 仰見 日為 十号 世 被 算如 产

分別謂我於過去為曾有那為曾无那曾何

於前際九知云何謂於過去諸行起不

如

立緣起那若為顕

因緣所攝除行清净載故

起差别云

何謂於前際无知等如姓廣

謂

來諸行起不如理分別謂我於未来

性

何種類所有无知於後際无知

去



12 - 2 - 25 妙法蓮華経 巻第三



拾 家 旅格行 學道行舞提波軍審能 F 彼 軍事 棄 格 思世 王 位 間 宫 一切 殿 春 七事 馬 士

12 - 2 - 30 某経論疏

不告海者皆以收收告海也经日我為為今識至能除為 五年日中遇 疫傷學至我今於熊梅者養日以养四藏己略 千種至備司 常无機者替日 禁三利智惠有三年私備 结此姓日我於十万界至食難為首雜者皆日花二城惡 克明至一切諸思禁者情日去後 原始成恶也經日勝己百 竹日第二利與生酮有二初与樂以教者後息思以生養 後利智惠領政初也经行動一切有情至成佛首示群迷者 項也四四向即三個少初又有三和本福德領次利祭生領 知詩正法至我今悉職梅者精日以後診法遠思失 者即斷角衛勝於部行敵用於故渡 要業者替日第二息 思以生養有三初數城 恶之教也 初又有二山初与各極樂也經日我為清第生至公今以 葉有四般額即九何二請養郎五何以三職業即五 覺并至我冷悉懶海者替白山次不重勝 强過也把 临傷 四額也 好日我當至十地至清度生死流者替可以沒終 初至果思查消除者持用用以中成惠之行也维日依此金 金光明者即出籍之言故必言除悪業姓日若人有不 榜尚有三共初公 歌三看 遇也 姓日於禮 别就在日元

> 升等二如是 得必便為是 八无價實珠 今佛覺悟我 我等无智故 是人既已起 我今後佛聞 华之親 女 か有り 第人 更不願 连行翁 往至親 世尊於長夜 後見此貧人 繁着内衣裏 受記在嚴事 言非實城度 不覺二不 其心大散 好 他 友 家 常態見教 其家甚大富 及轉次受决 得佛无上慧 得少沒縣分 富有諸財賣 黄村順之已 不與見內衣妻 求衣食自濟 聖與 而捨去 化 具設諸 身心遍散喜 介乃為真城 自己不求餘 五 示以不繁珠 時即不覺知 令種无上額 有无價實珠 資生甚樂難 欲 而自 鮪 恣 態

12 - 2 - 30 根本説一切有部毘奈耶雑事 巻第三二

豈 杏口沙即是 其 軍門見問言何故廣就其事此作該燒出 法 合 澒 少即便大 悪 置店 相 物 奉授 何 汝 沽 忽府我女去因山闘 関 何 叫告言聖者 額 酒 所為辜我少見使者答言聖者 汝事問言聖者亦有恋家手 邪報日我以 見出 来尼 吐 聞 脚 羅難拖玉家使 速出便即罵言 蹋怨家頂上作 静諸長者婆

言弟 時應問 語言我聞如是等非法事不應作師若語作 待 岩 岩 莫與後事若是善 事 是是 不 語師 法 右 他如 事如法應作若言喚被女来取酒来應需 應問 法事不作者越比尼罪是名作事自作與 名 起迎報語者和上阿闍梨共語弟子應報 莫受若弟子見 四上生後 D 白者但言我欲作動 · 說是名自作與他作衣鉢事者若欲動鉢 次 師 作 取 不 中有食能使聲不異者應報若不能者 報語作事者和上阿闍梨語弟子作 者 得 應 子口中有食若師語不報者越八足罪 到作維那直月應白師如威 巨磨泥塩及勲時一一應白若不能 問 和上 若欲有所作應問我欲共其甲作是 沙堪 起者 觀相前人若不善 問 報師言何故聞我語不罪應語 一食 一何 應 上着 勲 恆 閣科 頭 不堪者應受若言不堪應 師 後動為一 持式 若受一 不起者越北尼罪是名 F 随 一 白角 師教應 欲 者 食 持 動 法時 武者 **康勲**若 不 如威谦中 作若 應 若言 了動野 白

12-2-405 大般若経 巻第一六七 題箋



12 - 2 - 406 優填王経



12 - 2 - 40 菩薩善戒経 巻第

持菩薩戒不不也世等舎利弗如香象王之一不於無量世中無量佛所植諸德本能得受

12 - 2 - 11 偈頌断簡



無垢浄光大陀羅尼経 (百万塔陀羅尼)



12 - 2 - 507 梵字



有色 皆以華供養釋迦年尼佛 復次蓮華有三 以蓮華供養 杏日如華首经中說十方佛 餘 一者人華二者天華三者菩薩華人華大 華十餘葉天華百葉菩薩華千葉放園在 物 贈 有香 水水 各日供 異物 問 復 日餘華三有色有香何故 養惟以華香醬盖華有二事 汉 問日 香清 何故 应 妙 ハス 冝 蓮華不以 為 供養力

12-2-50 大方広仏華厳経 巻第五

醉如微 群人無手足 辟 辭如淨火珠 群如人類火 如明淨日 火 未出數 谷 閉目求見色 離緣而求火 推 射過大地 溼 列 休息 能滅 永不後被意 於佛教法中 畢竟不可得 作佛 火勢随止滅 教 法中 懈怠者亦然 御怠者亦然 懈怠者亦然 懈怠者亦然 懈怠者亦此

種法 者我 四展两天 見實者可言見際何以故是人行於二處住 五曲 覺 是人不見一法可覺何以故无有少法可得找菩提非道行故世尊若有衆生求菩提者 心 禮得菩提當知是人行於非任何以故此 甚无過 是 鴻他時 提 去 福 **松不二法不信不入難後如是此人**数 者被 可識 此二法者非真境界世等若養男子養 来者若善男子善女人應為被就此二 等尚不見實况復見際何以故此尊若解而日佛言世事心樂諸天下就實際 如来聞授記己於喜贈忧皆得稱心具王切利天夜摩天兜率路天化樂天等 禄秦乾圍 姿夜又發那羅 到羅伽蘭天諸天衆 等見諸向備羅 伽樓羅龍大龍 他自 非未来非現在非有為非元為非有非 同轉戶雖三龍三菩提故世尊被法非 非道行故世事若有衆生水菩提者 依法非連餘法, 在天王為首與其眷属八十 餘法作對治餘法亦 格非可偷非可證

如一些 2 愣 被 3 諸 信之言 真 樂 根 布 施 気は 故 得 清 15 善 猫。 变 行 冷 不 生 蓝 幣 降 知识 梅 人 表 美 有 害 恐情 净 肝 布 1 84 布 法 故 受 徳 港、 報 悉 善 慈 施 施 得 法 故 回 故 后 故 首 被 於 整 果 品 得 净 14. 信 徐 得 12 導 徐 除 愛 所 善 证 瓷 故 疑 无 海 得 15 生 種 者 故 得 命 法 2.2 種如 善 期 生 次 芷 者 IT, 勤 得 住 等是 身 布 信 除 見 12 战 何 中 不 12 ir 等 法 12 有 猫 故 、べ 語 江 施 生 整 施 港 種 生 崇 膏 果 見 時 净 故 海 故

> 論 者 益 成 若 人就法无畏无怨或律具是三昧成就 者 當作是學介時諸比丘間佛所就數喜奉 就解脫成就解脫見慧成就汝等設欲 得備梵行得至減盡之家无為涅縣界 當論此十事不以然者潤及一切多斤 精動比丘少欲知是有勇猛 沙門之義當念思惟勿去 雜心 心多間能 加 是 智 rt 此



13-1

便 部 漏 城 今 汝 充 谷久 云 汝 食 情 祥 雜 鮪 能充 来 聽 諸 亦 无 何 不 自 加 涤 古 是太 是經像夢 充是也沒持充足一 巻 當 整 拾 汝 算 性 沙 相 造 用 村 由 理 to 求 变 力 切大 欲 色虚 日 切 等 海 若 能 自 算 元 縣 所 此 資 四 充 新 虚 不 勿求 犒 資 作 讃 大 食 虚 不 十八佛不共法 畢 設 开 值 能妙古? 空 慢 海 空 九 切 空 竟 答 能 益 解 Ha 妙 开 界 力 元 界 生 斯 一世 等 日 亦 幻 得 蛭 万 解 食 解 善 亦 陽 无滅 切 閒 不答 た上 何 欲 不 任 轨 及 不 斯 形 祥 死 欲充 汝 样 回 充 焰 頼 量九數 能 不 法身一 可 者 食 法 日 亦 兢 选 欲 言 无 耶无尼连 是 妙吉 光 为法 摩訶在衆首希此 亦欲 A 轨 一边 便 平 加沙 者 宏 食已為充色况 养 色響像夢等亦 者 不 庭 进 景 切 是 閒 充 取 九 即以无食而為方 九量 切 頗 能 食龍古祥日 切 諸 有 何 充色遠離新 切 祥 无邊不可思 等諸 不旨 真 丕出 ba 法空无 矿 tha 言诸 舷 変 妙 清 bo 是 无色 10 来應 充是 是 无邊 化 古 底 雜 YL 妙古 蓝 法 九諸 衆 事尋香 祥言汝 法 九見九 法 界龍古 則 法 切 相 科言 食 者 流 亦 有 諸有 亦 得 則

百

佛

化

為

有情

類

3 旨 情 審 TH 不 妄 连 是 頂 框 靴 觀 諸 資 為 察 故 食 何 不 雀 食 进 有 法 假 法 冷 町 為 切 及 設 值 开 有清 造 資 4. 佛 妙 資 幻 秋 造 12 化 ルと 便 古 白 小 祥 為 然 則 43 者 科 开 被 日 兢 术 俱 食 in 若 日 伽 資 是 空 诸 諸 法 沙 那 待 无少 等諸 趣 及 有 加 龍 是 主 情 都 有 告 真 死 不 不 情 有 祥 實 切 輪 舷 可 首 情 皆 有 則 得 逥 化 類 Ma 虚

能 諸 渴 云 欲 法 能 班 断 何 性 求 古 何 尚 不 v. 包 Ju 所 祥 實 石外 陽 九. 蓝 护 无 自 断 實 性 往 47 何 H4 焰 不 长山 俱 法 断 充。 京 資 东 須 中 飢 不 皆 张 是 待 渴 除 今 輪 水 12 the 断 在久 柱 都 飢 逥 太 断 得 汤 往 唇 生 飢 元 渴 无 除 既 断 始 死 虚 不 飢 Jon 滘 飢 元 诸 调 幻 除 彩 妄 欲 渴 飢 于 趣 飢 切 除 分 何 求 汝 滘 任 有 遠 断 渴 别 开 除 今 除 to 此 蘇 既 FY 情 亦 断 断 是 告 融 能 作 旨 处 断 诸 者 AILE? 法 祥 馬夫 論 3 有 少 所 誰 日 中 12 无 连 约 諸法 溜 能 今 土 飢 者 者

> 知四 梵 獨 里 梵 古 並 THE 卅 何 為 **主月** 各 訓 成 積 I 枸 雜 nh 按 核 不 拆 問 西 去 域諸 塵 鉢 至 此 本 此 以刹 校 去 河 兔 To 百二 5 亳 成 産 解 TI 5 他 I 里 外 非 述 谷 此 是 梵 st 量 五 nh 謂 五 等 云 由 俱 面 10 并 瑜延 糙 胚 1 JUL -果 五 正 麦 射 里 步 村 五 F 梵 由 祭 者 表面 立

天 平 法 右 肥 法 髙 = 中 僧 師 野雲三十卷 傅 紅 长 东 合 磨 三 和 秋 安 云 耶 始 共 + 法 舎 九 普明 晉隆安年達廣州在白沙寺為清 或二十米僧私云毗姿 沙出房檢傳乃是 天 秦 舎 明 今據傳為正故改之見 悉 年 徒 生 言 譯 帮 記 沙 晉 初 法 以應入晉世随人附 為 門 稱 安 五 姚 墨 帝 耶 字 興 北 摩 舍 世 書 嗣 掘 是 理 出 多 为 演 11. 梵 秦 僻 稱 = 義 理 而

土

里

胶

分

别

九

能

古

科

自

tha

In

諸

法

要

the

是

bo

是

法

界

出

現

妙

吉

祥

日

真

法

界

有

土

有

说

有

歷

有

th

开

者

何

真

論

住

天\_

取

无

拾

元

動

輔

无

涤

者

相

新

班

九出

无後

不

国

分

分

不

可

味

道

標

制

至

+

年

翻

譯

方

秦

太

子

部

親

5

别

长

初

法

往

九

开

住

无

依

无

涤

>

无

13-5

号

情

何 在

有

體

社

明

空

也

稍

40

訶

語

ボ 教 意 是 童 替 子 首 質 是 網 F 出 選 维 坐 耶 面 雜 佛 大 城 知 其 行 意 苗 佛 则 所恭南 随 時

出 佛 不 右 葡 應 冷 高 助 右 開 解 胨 12 而 者 為 地。 法 彭 和 益 法 額 22 旅 抗 踊 张 色 雅 大 前 Bp 拆 白 童 佛 子寶 坐 言 越 雅 13-3

五

律

莊

嚴

既

3

伏

顛

憑

准

勝

回

贈

龙

位

橋

代

太

夫

2

敬

写

初

經

尊

贈

区

位

大

大

臣

府

君

皇

庙

藤

原

代

光

明

3

複 12 作 月 為 有五 有 五 排 提 前 白諸天 百諸 在 7] 在 教 苦 道 善 大 天玉 楂 旌 For 師 £ 行 前 前 女 女 利 各 利 谷 各 道 道 各 和 手 執 FIT 持 執 行 凿 4 夭 羅 胡 樹 林 葉 F 在

借

散

華焼

香

TH

設

己

辨

往

前

佛

FF

首

ボ

夜

時

邦

諸

准

具

莊

澈

校

飾

維

耶

離城

懸諸憧

耶

城

施

百

吐

偿

奉

着

뭐

種

種

美

食即

一番

子

齊

何

奥

天

斋

釋

梵

述

夫

王

頃

哩

张

不

應

許

P

童

子

木

特

佛

憋

泉

質

细

细

見

佛

嘿

处

便

後

坐

处

繞

佛三

币

作

礼

And

浦

法

早

契

答

提

万

至

傅

燈

無

剪

流

芸

檀

言

弘

齋

犹

渝

勤

除

煩

璋

好

窮

布

天

F

間

龙

持

卷

獲

稿

消

灾

十刀

迷

方

會

歸

覺

路

奉十二年五月百記

願

开

等

垂

愍

明

日

受

請

及

與

聖

来

佛

2

受

請

下

及

寮

采

共

盡

忠

韩

1

光

明

子

之

津

又

類

上

奉 杏

聖

朝

恒

连

福

書

質

宜

助

永

庇

提

2

樹

長

遊

般

偏

見

宜

戒 受 僧 無 大 聽 諸 和 上 戒 難 此 层 此 事 某 某 基 年 甲 甲 甲 歳 危 某 个 巴 和 楚 甲 上 淌 僧 屋 所 永 气 其 新 鉢 受 清 甲 具 净 大 永 旦

計

天

悉

来

雨

諸

天

華

青

蓮

諸

红

黃

白

聚華

渚

天

意

華審

華香志香雜

香

持

香

其

明

月

珠

恢

百

チ

쬻

到

维

那

離

特

无

央

数

借

百

千

震

動

=

大

チ

諸

佛

4

果

顯

項

+

先

數

億

得

前

入

耶

赫

城

適

欲

城

火口

来

應

時

六

聖

衆

上

虚

变

中

去

THE .

四

丈

九

尺

神

是

經

行

欲

後

哥

FT

宜

時

棉

明

且

者

永

持

婚

與

无块

百

千

下

却

任

面

义

手

白

佛

大

聖

見

1E

時

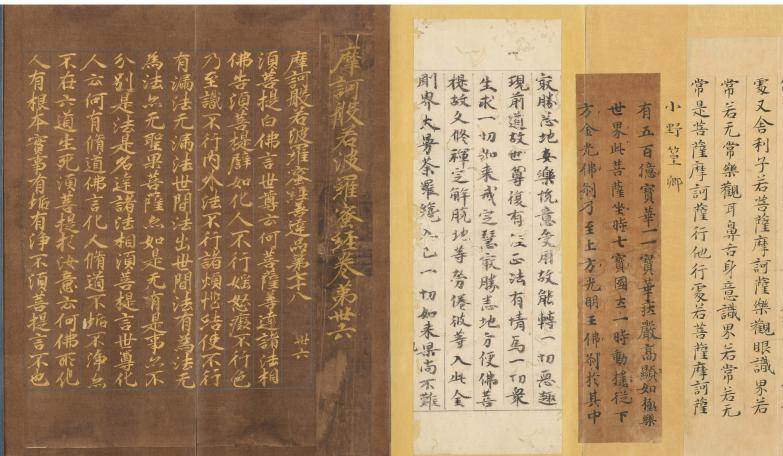
主

食

辨

13-7 13-6





13-17 13-16 13-15

界岩樂岩岩樂觀聲香味觸法界岩樂岩 主夜神音須吉祥主夜神音教樹花主夜神 善主夜神亦現净福主夜神如是等而為上 不等議首主夜神遊戲快樂主夜神話根常 摩訶整 我若无我是菩薩摩訶薩行他行家若菩薩 觀色果若我若无我樂觀聲香味觸法果若 是菩薩摩訶薩行他行處若菩薩摩訶薩樂 復有無量主夜神所謂普德净光主夜神喜 則 意身口意行如是日連當 亦 觸 賴世主夜神雜世精氣主夜神新静海音 佛 法果若净若不净是菩薩摩訶薩行他行 俊不奉持禁式不具 是引口意行當貪專 **众時善養語波自言魔王波自四大** 开 基苔蓝 **流椒喜奉**行 樂觀色界若净若不净樂 人无名氏 作是學介時目連 觀聲香味 13-14 13-13 13-12 13-11

得成如来 應心等竟彼聲聞人名如来不滿 云何諸聲聞人任此靜愿證得法性成聲聞 時世事告滿慈子我今問汝随少意思於意 法性雜箭執着得成如未應心等覺云何可 得法性成聲聞果即諸菩薩任此前屬整得 特滿 菩薩 静 風 代被為陈 慈子日不也世尊 亦特世尊告滿慈子吾首 苦 静 属常不速能一切智 馬 諸 遠離一切智智相應 作意二乗節屋次送速 上何以故滿慈子菩薩静屬波雅養多常不 為最為縣為尊為高 為妙為放妙為上為元 常不速離一切智智勝作意者應知若為多 衆所住静愿政羅蜜多除如未完於指餘定 无上心等菩提有大恩德是改善薩摩訶產 故静 属波羅塞多於諸菩薩摩 可產聚形式 上心等菩提 住静展改羅姿多如是菩薩摩訶薩衆女任 何以故滿感子是諸菩薩應可產我常不遠 第四静 愚格箭毒行現八无餘般涅槃果是 静愿政嚴審多引發无邊殊勝功德疾 趁 爺一切智智縣作意故若諸善產摩訶薩察 即新菩薩住此靜慶證得法性雜坊執新 改更乾蘇箭諸有智者因斯蘇新於其 闡 惡子便白佛言若诸聲聞住好原整 有智相應作意故於菩薩都属為 静慮次定速雜一切智智相應作意 應知如来應心等覺女任不動 智相應作意

13-20

٠٠٠

門

来无

世

開解无上士道法

御天人師方佛聚祐

所着 等云鹭明行成 13-19

第一物 第七礼敬三寶 第八個行五梅 第四供養 朝門 園 電直 獨略 本 修 證 義 市十發軍動後 身意處收空何以故以耳臭 一切三摩地門慶喜耳臭 為方便迴回一切 右身意意 三摩地門无二无二分故世事方何以 尊寺行尹 一切拖雞尼門一切三摩地 平重盛公 釈 元二為方便 第五正生思惟 新者廣議日若, 第二嚴領道場 智智 晉水沙門 循 元生

得相入放ら言産力放入文をて二放八不同一条就何以下依を 一般 化等也言等者至相名是是大年星在明神力及化女人

地

乃

至大

海不以

刀杖以

法

教合合得安隐

端

政

勇益

**无畏张伏** 

他衆被必統

頭山

E

自

在如法法王成就七寶十子兵是顏

轉

輪

王聽

明

老該有四才軍 動御天下

大人相者必有二家真語不虚若在家者必

妙有義有文具是清净顯規梵行後次優多

羅被沙門瞿曼成就卅二大人之在若成就

和

目

覺自作證成就 沒說初少中少竟 之

不先請敬任何人

第九旋院 合誦

第三春請聖賢

被

· 於此世天及魔梵沙門梵老後人至天自

13-25

13-24

13-23

何

12

故

12 眼

震

性

室與

一切

危

羅尼

習

一切他

難尼門

為

方便

元

所得

耳晏

台

身意震

事異母

右身意處性空

門无二无二

如此始發心時十大的行如是十十是名百四次始發心時十大的行如是十十是名百四次相智无為情語是菩薩摩訶薩不不也世事即一切智元為情語是菩薩摩訶薩不不也世事即一切智先編指語是菩薩摩訶薩不不也世事即一切智先編指語是菩薩摩訶薩不不也世事即一切智生精語是菩薩摩訶薩不不也世事即一切智生精語是菩薩摩訶薩不不也世事即一切智生精語是菩薩摩訶薩不不也世事即一切智生精語是菩薩摩訶薩不不也世事即一切智生精語是菩薩摩訶薩不不也世事即一切智生精語是菩薩摩訶薩不不也世

**孟**制

除驗驗者架遊衣至信捨家无家學道

此內也后中的獨塞手望以就主人門每中軍風之文差

烟之名而无虚就嚴 明此品些私养一就中引尽也 故知幼德至无而将引充文何那 答清冷名方德五帝 枫天往中有帝

九之教士成行教取也后情冷遠義 第七引阿德被姦犯

墨承時不可說到表別不思議 法於亦但有 私引受看

张竹明净心產 稱性記行多殊心 展視多刻盛而現除

産中順河諸に便是一重一張現た多殊方成,重之之表

影後能現行心塵內刺後能視到軍~數明軍~至視成

至元盡故此下即第七地精大號之文和傷智正覚世间咨傷

世间次過雅是年依敢左喜以此口證毛孔中劉海形紫世國

若手頂義心下门后中文心下奉依指廣山等下吉山是此

理等者則要有中心呈境地境府委有而現元非稱意

世间後獨果生世间也不不相傷毛孔后現有正見也同素質

~但是德柳也非親下被勸門上下心上不引情 平邊一重殿

13-22

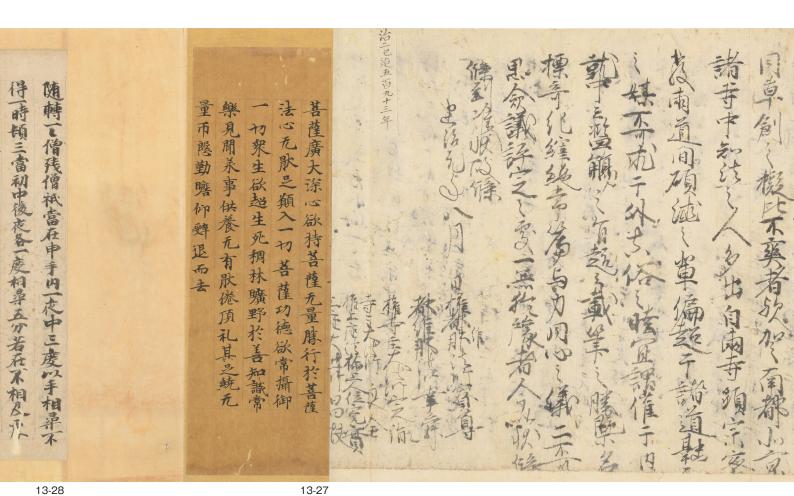
13-21

有寒生色含一切心無疲倦是白菩薩學整

日草月~极大赛者次仍有都上京 大皇右宗这都不是直接的 大皇右宗这都不是直接有 大皇右宗这都不是直接有 大皇右宗这都不是直接有 大皇右宗这都不是直接有 大皇右宗这都不是有 大皇右宗这一个

解脱上人

13-26



净式光料您常慮別異之行山別果想別中四无所畏四无殿解大慈大悲大喜大格 相无預解脫門而逐離般若波雖麼多及方 軍漢果舎利子山諸 菩薩雖有菩薩道空无 甚 薩 在性雜生 位放得 預流果 衛次乃至何 果行故不得入菩薩正性離生位由不得入 大般若波器容多想是第三百廿二 便善巧力故於實際作證耶虧周果 學慶五年六月公於五華寺五華殿三蔵法師玄紫 大慈思寺沙門神的缀文西明寺沙門玄則級文 西明寺份門慧景證義 大慈思子沙門神泰證義 大道思寺沙門頭筆受 加福寺沙門神成 筆 受 西明寺沙門 据尚筆 受 玉華寺沙門光筆 受 玉華寺沙門基筆 受 大慈思寺沙門歌筆受 大慈息寺沙門智通證兼 大慈思寺沙門靖邁安文 大慈思寺沙門慧朗筆受 大慈思寺沙門道側筆受

42

且器而已七相攝諸行足以无伴多麼非法之人但看 利已不准道教故律中以除武偏结和上之罪故律云 及伴者不犯單道中紡績一或律文随解和紫織等 下随成衣不合懶着除上下我非无種相行希宣用 京及中間不犯病亦如是五分者恐怖走時老 指不 諸難好開僧祇不出聚落界除道行便利避道失伴 獨有不犯開獨行中應在不離見聞處若一足大便 出人小便或出受廷論廷若樂静獨處論經或為病尼 具緣中開獨宿者律云兴三尼宿節手相及處若一尼 得作伴丞開五分水法无畏男子處不犯開入村然心前 手離蘭不犯中開度小者若共体漸度不失威係 間處行又伴无諸難緣故犯四分云見聞俱離残見聞 乗松為上躡深躡石件尼死伍道遠行及諸雜難不 随卧了結獨在後行或根本獨去或中間在意雜伴見 夏美粥住飯乃至餘難緣並開僧被若病賊亂圍城 初中後在偷前開明相出僧残二无縁除命杭樂静等三 净式光以精選射應別異之行由別異想別 佛十为尚不可得况有佛十力真如可得此 得 不 不 可得佛十九 此中他 他 可得何以故此 无所畏四元聚解大慈大悲大喜大拾 華尼門真如 華尼門 真如亦不可得何以故此中 中施 可得舍利子此中佛十 不 可 雖是門尚不可得 得 施 那 是門真如

13-29 法東 岛 不可說世界不可說 不願意滿未 校 至 飓 不 无 擦法 摩訶奪 慶智 東轉 未諸 東平等 佛具 佛 便 空法来 利 是 到公臣許蔡寺関色閉 太子、節和之能以子言監於國史高陽郡開 寺面官经判不可到王事臣陳德發 慈思子沙門慧貴證義 同佛 一校写 致使司種大夫臣 雀 无要 為 種 弗 飓 種世東諸 受 法專 轉 越 满 佛境 元量 堂

嚴 賀華自 月 及 聚壽量 不 此 秋 赴 等中無 醫 選 人 等 馬大 因 殊 洞 14 面 甚多善遊准告 緣 重 都起 藥等建殷 阿 積 據法東平等晋入同佛身 羅漢 亦 壽量畫在三十年呼栗 强長 人等能 至梵宮於諸屋衆各 樣福多不易殊室利 利於意公何是善男子善女人普 卿 間 塞堵沒嚴陽供養或 小 獨覺如栗 PI 陳有善男子答 假 嚴 无寻 使死 净心 諸 大山 廻 廻 无 平 奉 種 間 满 紅信受不 导殊 徒 上 施 稍 面 床竹 牛 香寫 妙 現 供 室 是 心見 愈 被 於 女 别 即 不] 於蘆華甘遊 佛 食 む施 vi 报 1 溯 務匹旗 EN 普 3 等盡 康 ナ 衣 預 湿 在 相 相 衆 属克 空 剪 服 初十 般 言 續 若 小 卧 後 甚分 被 福 吾 湍 不 所 男 聚 由 t 13-31



聖衆各 易殊室利巷養若善男子各 經信受不該匹養福聚於前 殊 是善男子善女人等由 + 防供養式以 票 + 級 奉施供養般沒縣後各权 間 男子善 湍 た 墨告 倍 室 年學及多相續不断易殊室 千 前 1. 稻 36 為 利 基以 麻竹 俱盛 論 施 勝乃至都波足煞 即白佛言甚多世等 别奉施介所七寶畢自 倒 头 可. 繕 福百倍為 食衣服 柳量其 人等盡被聖衆壽量短長 灰蘆筆甘遊林等中 複為勝暴殊室 洲預流一来不選阿羅漢獨 ナ 剪淌 料 勝千倍為勝 形 俱惠 具乃皆 方心 者服若之食言真空 硖 冲 墨 而 固 馱 喇 利北 K 不 倍 施 少 其 絲 都起牽堵 積 藥等也段净 面 亦 福 利花意 壽量查夜 X 樵 多 俱 乃至 至梵宫 無 亦 復 百倍為 等 善 福 應 东 悶 為 稿 能 多不 逝 ~Z 學 鄉波 假 啊 樂 移 波 佛 士 覺 た 长 諸 使 有 周 胨 嚴 此 告 諸 1113 何 充 币 庆 世 善 40

等等金 德好悉 無機 it to 推 間 神 益 永断感 独 斯 備七野行 量優娑塞飛倭 舞三 十六心行趣諦 正 赴 有情四 頰 你 深入蘇生 匿王等各與 兼 解 我 拙 极有無量無 備智無邊 假 障方便善 心善 上側三昧 成就很有此丘尼米八 演 堂 金處立 無 該 解 宝無 時佛住 獭 無 百 46 善枝分法 三室門 腕 畏十 姿奏歌母見聖諦彼 水 人俱分問軍漢諸漏 大具善寺三歲沙門不空奉 或 苦 產 慧善 勤 覡 是 諦 相 千十万春属俱假 類孩 神 顧 王舎旅警奉山 力 法 功 一大行願 出 德 剩 炒 解脫 雅 工巧 > 根 曾 有十六大 中 13 有 斌 為 前產質智平 カへ 雷 見 -九 走 在 百人 智 定小 ari 10% 功 震法音近 具 大 勝為十 塾 鉴 徳 ポ 回 + R 無 1 現難 俱站 已盡 圈 復 主 超 智作 有六 潜地 無 為 有無 王 得 法 根 町 道 400) 巻首

> 白義 净信 蜜乡有無量不 諸 及無量苦隆得 仙 何 念不人 走 特 + AT 分 倡 巩 句 有十 中和 有 方 馬受持 功 當成 德 利用 億人得三 越 取一 SA 諸 徳 岩 可 百 佛 讀 倡 尚 就 阿 有 劫 住 等無 人作 無 那 耨 合 + + 誦 空 3 窮 地 為 東 多億個就不可幸 劫 A 軍三般 人解 打 有里 百 十 此 百 十 何 分 蛭中起 苏 I 當 万 死 復 三善 मा 劫 大 億 1 六日 得 生 赴 千 14 提流 功德 死 小

仁王龍國殷若沒羅塞多經卷上

嘉永六甲寅歲盖春 宋寶和何謹載 嘉永六甲寅歲盖春 中寶永奉納玉戲記 建源大郎御真號任美經 那一卷加倩補就累代相兼之 建源大郎御真蹟 更无疑者也 依為 傳領主大通寺士一芸阿神明法樂 最上為 神寶 永奉納玉戲記 真蹟 更无疑者也 依為

巻尾

巻首

有諸次 座前燃 减 優婆塞優婆夷 無 告性 聽我 奉衣服即具 誦 王龍國般若近軍軍三年既因品第五 大王諸國 日二時蘇 時 此 賣班 像百 属 般 為 難城 老沙軍 汝等就 種 若聞是 師 種 讀此 土 7 未破壞班等諸 飲食湯藥 波 燈 中有無 聽受讀 DE. 塵繭百 瀧 斯區 審少嚴 焼 大典善寺三歲的門不空奉 经岩 兼 图 種 迷 種 王等諸大图 量鬼神一 务 图 節道 誦 王大臣 **雪散諸雜** 社 土 師解就此 加法 为合床座 动 個 岩 王應 场 圈 循 土 it 置石佛 岩 欲 行灾難馬 一個 當受 丘八 E 丝 乱 称 初 諦 供 1 鬼 大供 有 立 人持讀 乱 聽 苗 特 蓝 庄 譯 沛

> 般 命 雅 岩 愈諸 放 改 何 羅 族 塞マタ 特 題王白佛 言世 佛 亦得石 告大王山 為甘露 草 錘 石 當 為仁 法樂若有私 何 16 王藏图

此

经 我

仁三人諸衆生酒 欲乐色果無量 并應當受持佛就 量告推摩部推合 夷町 信受奉行 例 £ 量岩有受持 般者改軍審多所 備羅孝一切大衆間 天 讀誦 利弗 是經 如垣 人此 己称 墙 有 立以立足優婆塞優 頂 2 告 चीः 者 SA 所獲 勒 火 科子無量費問 德 佛所就首大管 城 師子奶等無 酒 壁是故 37 KO 徳林讃 虚 堂不

仁王護國般者近軍軍多经卷下

安政五八十年五月 神明法樂最上為 神 理領之師御真蹟仁經一部二卷加備補前累代相承之 更无疑者也依為 霍也如守眼所努力不可令他敬者也 嘉永七甲寅歲盖春 譯仁王經上於次下十六次 神賢永奉納王数記 傳領主人道寺七十一世弘前 裡源大師真蹟 末資和阿證

巻尾

士

图

£

太

子

王

子

百

官

干

相

是

非天

地

豪在

月衆里

共時

共

度

大

头

大水及大風等也

讀

叫

般

岩

波

779

先

南山

鬼神

乱

故师

万

人私當

有

賊

起

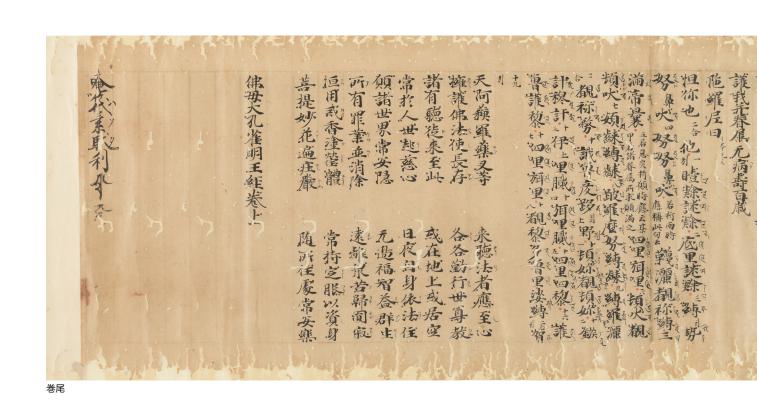
百

杜

空

一切使者一切恐見一切恐節一切諸毒及等諸恶毒苦一切不祥一切惡病一切鬼神 羅此及餘四有一切思神及武盡 既人非人 形處達那盟來就黃耶阿数沙麼羅指沙坦 思新多比各應部多短畔峰布電水門也布里 聖祭庆達鄉界,那難摩藏就無之難刊於 異類鬼神所智当人人能阿賴雅摩魯多樣 何沒好敬礼如是学里教我令讀誦摩丁序 一切新天霊被成 讀誦佛母大孔卷明已經於母請法 告薩 原河馬 南該河境聲聞以水 到佛母明王經式而未請願皆如意所有 死你一切康 為何新他命起毒 苦心行不 特進試為腹獨大五萬一丁三蔵沙門大廣智、雪奉 前譯 使者一切恐風一切恐河一切諸毒及 色該達摩野 南該僧伽野 地上或處虚空或住在大 南與獨鬼聲聞回外

巻首



放亦以此佛母大儿雀明王真言雜謹於我 以大該軍或 果皆处先頭 地大雖長子名日冊也非常常有人 住胡鹿歌國 又将名字所謂 佛告阿難既必要為大樂又王及諸大縣 佛母大孔雀明王班太中 其甲并諸眷属為除死恐事分百歲頭見百 特進試鴻照鄉大與多年之嚴沙門入廣智亦奉 該

巻首

南談室親原多野山南談室親原多野山 有漢軍親母歌野 佛母大乳雀明王蛭悉中 菩提妙花遍在嚴 恒月或香塗管體 **两有罪業並消除** 顛諸世界常安隱 常於人世起慈心 諸有聽徒来至此 權談佛法使長存 天阿羅雅樂又等 如是等衆我歸依 諸有清淨婆罪門 南鎮軍朝息多野 眷属悉皆解院復就你他 惡獸怖两有一切恐怖之時令我 其甲并諸 なな素駄利がる 有其軍親冒歐雲 各各勤行世尊教 來聽法者應至心 速雜聚苦歸圓新 或在地上或居空 雄談我 身并眷属 能除一切諸思葉 南漢華親扇多東 南鎮軍機是打鼓製 常持定股从資身 無遇福智益群生 日夜自身依法住 南謨率都門於夏 随所住房常安稳

巻尾

海俱軍寒之 住於王舎城 管從并看傷有大威神力

大沙金姓馬 毗富軍以住 質塩雅俊多 質感日溪住

大理金剛子 任居王舍城 常在野客山处為依上家

班足大樂文 火雅郭城住 產驗首樂文 上罪多國任 大小里樂又去比雖城住是釋發年尼大師所生康

有处套成 住於舍衛城 沙隆雅遊文 沙難多處住

大黑樂之王 波蘇如斯回 華文名善現 住於占波城

金野大樂之 映為離自任 到天場於雅力士城中任

褐白村那神 放吃梨子處 西战难人人 住家此奴色

賢善人學之 住於少罪城 建船级天神 常居於北京

祖你也如此为其明王真言曰 後次阿難拖做多浮如来正過知者亦随喜班上十四上五上北北縣時看到計 祖你也你也一意風好練一點輕 後次污難陷門句付那如来正通知者之随 武理武理里大沙勢力質十 迎知虚迎知言是城十 養順 顛出就里就里 稿 虚文九水 章語為三多事謎十四十四里十年上 里河里、什見四八夜七時轉樂八時轉羅为時 上产上十户上一户上六户上六沙鸣令賀村 佛告阿難既少人心佛正遍知者不復随喜 黎、煩里與難小意、難底額一難上處黎捨 復次可難防少素如未正遍知者之随書室 杀正益知有能言宣説山佛母大礼作明 宣就佛母明王真言汝當受持殺鉢戶如 既底計"賀繁五質繁八加點七传上繁、煩 於母繁九各妻 金年羅學公拾轉於戶上十户 你也一一堂與相隸一點繁一記點繁四 進代進監即、與妻子完成沙門大等看不空奉 海野香鄉繁和雞和雞 当 彦

巻首

諸有聽後來至此 電花素財利 かる 常於人世起慈心 維摩旨多葉為學園那難摩護難就人 專阿難施及諸大衆天龍樂又房達轉門題 菩提妙花遍莊嚴 恒河 頗 非人等間佛所就好大散善信受奉行 孙時世等就是 紅巴天人樂又及諸思难奉 告稿元量常後安樂事命百年 天阿藥 羅樂又等 佛教教不敢連起好迷惑心義持經者時具 佛母大孔雀明王經悉下 有罪業並消除 諸世界常安隱 用或雪塗塗 體 兵處自身依法住 常持定股以資身 遠離 聚各鄰圓鄉 随 或在地上或居空 各各勤行世尊教 来聽法者應至2 所任慶常安樂

巻尾

依此三 身該無餘涅縣何以故 空 身 故數數出現以不定故法身不介是故二身 子依此二身一切諸佛哉有餘沒縣依此法 不 不住沒縣二身假名不實会会生滅不定住 故不住沒縣離於法身无有别佛何故二身 如 一女口 是法 種身現種種 是受化諸弟子等是法身影以 影 住涅解法身不二是故不住涅縣故依三 次善男子聲 哉 生 **熟住涅縣** 得現種 有感 身一切諸佛說無住處涅槃為二身 如如如如智亦無 現應化身如日月 種異相空者即是無相善男子 相我法身地無有異相善男 如無量無邊水鏡依於光故 切餘法究竟盖故 小 影和合 别 山人 願力故於 頭戶社 出現

巻首



巻尾

-

身不至三身何者為三一者通計所執相

者依他起相三者成就

相如是諸相

不能

善

男子一切凡夫為三相故有縛有障遠離

身

如是三相能解能減能淨故是故諸佛具

-

身善男子諸凡夫

人未能除遣此三心

遠

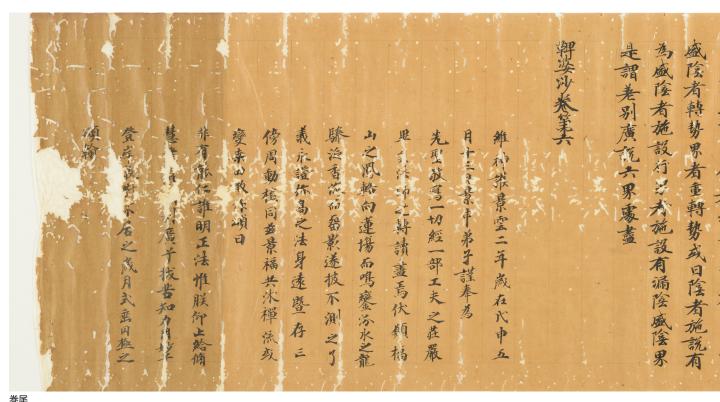
離三身不能得至何者為三一者起事

解

故不能滅故不能學故是故不得至放三

通例 但有言數問己不知增益生寢何以故 所 而施設花去差如是說此非一切如沙門看 境界問日若有作是統 設世尊告日次梵為有十二入後眼入至法 放 作經者份 入味入身入細滑入意入法入問日 十二八者 明八色八月八群入鼻入雪入 公所於 談就 面坐之達聞梵志 契經 有幾所去何瞿曇一切一切有施設而 梵志有介所一切如是如来一切 所到巴共中等面相 親五陰及充為介所一切 有至開發兵被中食後仍得過行先 かん + 成成門當外我就世事各日於悉 於去日生雲一切想一切沒是一 **死作論或日放作經者无事問** 不然差 事為內此是母與經 , Can = 稿 入而作論者可放作 此 年經測法其相端以是 切 白世事口灌臺我欲少 介所一 重 慰勞己在一面坐 施 切譜 設節一切者放 十八界介 右いおん 經者意 施 如非 分的

巻首



巻尾

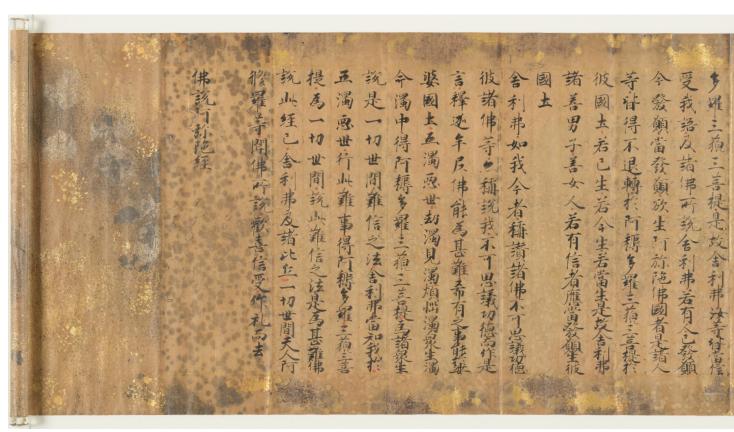
切

韶

四聖諦



巻首



巻尾

19 巻第四

其種種切應精動議特助宣教海嚴監察 梵行者自於如来無談盡其言為之蘇落 乾法被出衆主慶處負者我等於佛切思言 希有随順世間若干種性以方便知見而為 華顏目不整 給而位是念山尊甚奇特然 亦教利喜具足解釋佛之公法而大統益同 不我常稱其於說法人中最為若公前 今時富禄此於多羅尼子後佛則是智慧方 妙法道。华经五百弟子受記品第八 勿謂富樣此但飲養特助宣利海於過去 佛告諸比丘汝等見是高楼郎於多程序子 後座起到於佛前頭面引多都住面照你 新三菩提記度聞宿世目級之事後問新佛 有大自在神通之力得未曾有心泽所跟 张宣作佛世尊 飲知我等深之頭小時 随宜記法又間授諸大弟子阿耨多銀

海人中你 第一又於諸佛所說空法明

十億諸佛 阿議特助宣佛之正治於被

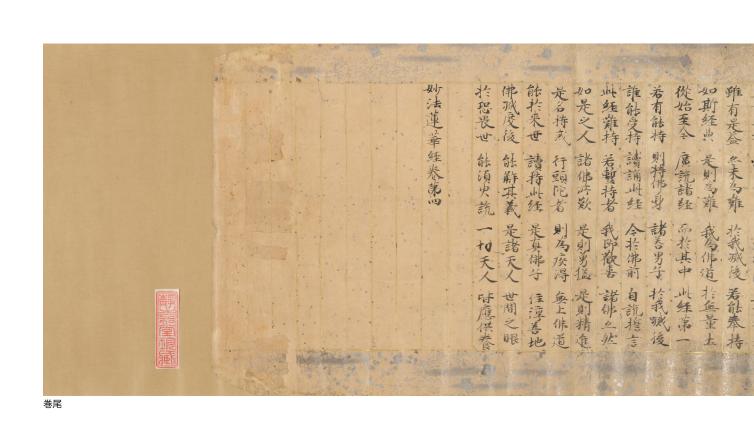
究教具之善隆神通之力随其壽命常的死 通達得四無界有常飲事婦清洋該海看

行彼佛世人成時謂之實是產問而高樣那

於七佛說法人中而得第一今於我所熟

五效常作佛事教化聚生箭比在富楼职你 僧職人合立阿耨多雖三有三菩提馬浮佛 以斯方便務養無量百千乘生文化元量阿

巻首



**處空界不思議界不過標皮皆聖部集然看** 佛无上四寺菩提養現是菩薩摩訶益在 智亦過構定一切吃罪区門八切三摩地門 性不受異性平等性雜生性於写法住實際 是念則退失散若波雅塞多若退失故若波 但住捨性水過構受一切智道相稱八切相 无賴解此門亦通構受五眼女神通亦構 愛文八里道交亦過構受空蘇成門元相 過構受八解成八勝家九次第三十遍家亦通 聖訴亦遍構受四幹遇四元量四元包沒亦 性自性空亦過構受真如法界法性人虚矣 相空一切法空不可得空無性空自性空 無 **处安空安大宝縣義宣有為宝典為黑華竟** 老大格十八佛不共法亦過,構受无忌失法 備受四合住四匹都四种之五 根五力七等 空與除空散空無髮異空本性空自相宏共 受佛十力四元灰侵四元級解大慈大悲大 節處成若波羅安多亦過穩度內室水空內 若波羅慶多過能構度布施净或安屋清運 初分多問不二品第六十之四 復次善現若菩薩摩訶薩依如是念甚然 死一切各莲 摩訶在九小過構逸諸 三截法即京奏

巻首



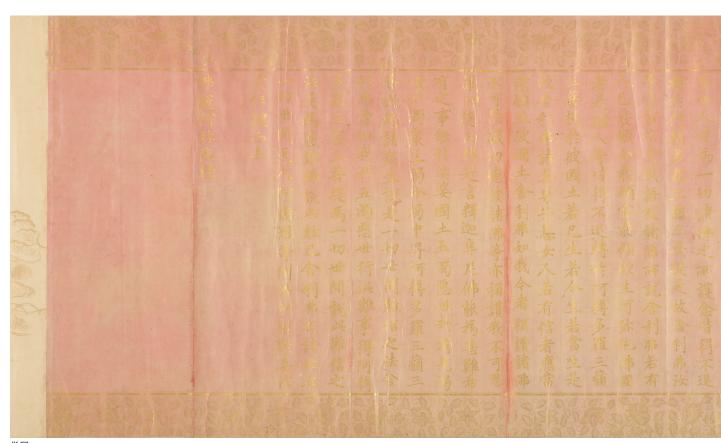
巻尾

應故若波,雅一多天不能構受內室人名

雅蜜多則不能構沒布施淨或安思指沒都



巻首



巻尾



巻首



巻尾



第26面

復次無邊身善隆 経一部其功德不可稱不可量無有邊如斯人等即成里道後福無量善男子若前止然一遍如前一切紹一部若無一卷 羅如人非人等得法眼净行菩薩道復次善男子若復有人得官登 日及新入宅之時即讀此終三遍甚大吉利善神加強延年益喜

身是自無身五體自然是長乃自然長老則自然去生則自然 勇猛精進五十三佛下生與我蓋第七百七十佛發人身命億千萬成常 之者菩薩被魔三十五佛下生與我盖第七百七十佛守護人身令得堅強 盖芽七千佛殺酸人身养盡之者盖其等命七千七百佛下生守酸人身疾病 身断諸惡魔 六百甲子後佛為 等人身命盖之者如来盖等不佛下生與我 軍技我盖第七个佛守護人身令不見感 甲寅将軍殷我盖第七千佛為該人 選歸三观六郎 甲午将軍 与我盖 第七千佛保護人身延年盖書百千歲 甲辰時 生我盖等七千佛所護人身體中除患却福申申将軍養我盖等七千佛被發人身 意淨敬喜踊躍皆見諸相非相入佛知見悟佛知見無人無悟無知無 莫問師千千万万代得道轉法輪 鐵又鐵銷遍身穿水洋銅灌口前骨爛壞一日一夜万生万死受大 下生典我益等三十五佛發道人身威儀無飲衆處自及分衆菩薩與我益等 得佛道六佛下生典我盖等七百七十佛殺人身命聞智慧門通達無處七佛 心乱除聚思消滅甲子将軍生我盖等七千佛所該人身頭得成就心除患甲八将軍 佛說七千佛神存益等経 佛就股酸蓋等身命濟人疾病苦尼經湖既合掌 見不得一法即母縣樂 然死水長不得長水抵不得短苦樂汝自當邪四由汝已欲作有為切讀经 即生誹謗言非佛說是人見世得白廟病惡窟朦血遍身交流解 見職人皆情疾命於之日即監何 鼻無問地獄上大衛下下火衛上 福無董善男子若讀此経一遍如讀一切経一部若寫一卷如寫一 摩訶謹若有衆生不信正法常生那見忽問 佛說八陽神光經一卷 佛說此輕已一切聽報得未自有心明 生死則自

之後無有表品千科散令其人過实度難必年盖壽受持已後壽 四英威星第五危星能消以度難碎除天下度氣疾病針非點動好乱之 思旨去千里萬里之外無急如律令 第一開心符第二益等府第三段襲員 主生命右比斗星主百思三台星主人身命第一怨星第二良星第三群星第 大曲星主恋麥禄存星主百鬼巨門星主張屍貪根星主感象左北斗星 逃蹄野道 児風盡自消滅放軍星主 程虚武曲星主官事 廣貞星主居 七千佛神背打鍛聚處遇道山林社稷郡岸北神蓋自消戚千佛神者打 七十三佛般我頭佛及諸菩薩聲問辟友佛是諸阿羅婆為弟子若差 命将第四金本水火土不相慰府第五主生人阿旗死思耗虚神府所生之主 **协愿物見并敬戚急急如律今** 佛神府保護可年若日東若月東若為東若時表日后當 泉魔風王電后水龍之神上公蓋自消城千佛神行打銀五托六虚惡夢 将軍在子六月壬子朔二十日癸五開日

教源出定楊德楊佛慧之宏略朽宅通入大之文朝化城引昔慢之傳五百授記俱崇密化之跡所以故先現端開發請之

述夫以霊岳降靈非夫大聖無由開化適化府及

非昔縁無

道心所以山死告成機分大小之别金河頭命道殊半滿 豈非教被来時無乏數其高會是知五千退席為進增

法誰者初翻此经名正法華東晉安帝隆安年中後秦和始丘慈 傅震旦三百餘載西晉惠帝永康年中長安青門殿煌菩薩空

間那笈多後所翻者同名妙法三經重沓文百牙陳時所 摩羅什次翻此经名妙法蓮華隋氏仁壽大與善寺北天

-自餘支品别傷不無其添具如序曆故所非

好法連華經者統諸佛降霊之本致也總結大厦出被千龄車

宗尚皆犯秦

縁之不墜擊珠明理性之常在鑿井顯示悟之多方群義死

喻陳惟遠自非大衰曠濟技帶沮之沉流一極悲心极昏

連成四德經樂上之玄都和替莫窮永胎

動軟投經首序而綜之底得早淨

六根你慈尊皇春

諸佛生我諸経載我光明點我陰陽長我四時養我五天将我五雲盖我

長七千佛神台請護身命爾書一百二十獻得等偽是帶持之身佩持之後

菩薩護我六百甲子 優我五命助我五音歌我五兵衛我星辰格我去然

迷夫性自漢至唐六百餘載物歷奉籍四千餘軸

出此経将非機教相扣並智勝之遺塵聞而深敬俱威王

ウラ

甘是阿羅漢諸漏已盡無復煩悩迷得已利盡請有結心得自 王優鈴羅龍王等谷與若干百千眷属俱有四緊那羅王法緊那 世音菩薩得大勢菩薩常精進菩薩不休息菩薩實等菩薩 為諸佛之所稱數以慈修身善入佛慧通達大智到找被岸石 才轉不退轉法輪供養無量百千諸佛 找諸佛所植祭德本常 在其石口阿若搞陳如摩訶迦葉優樓頻螺迦葉伽耶迦葉那 如是我聞一時佛住王舎城者閣過山中與大比丘彩萬二千人俱 妙法蓮華經序品第 阿循羅迎樓羅緊那羅摩瞧羅伽人非人及諸小王轉輪聖王 殊沙華摩訶勇殊沙華而散佛上及諸大衆善佛世界六種震 表處三時身心不動是時天而要随雖華摩訶尋随羅華要 在無量義教菩薩法佛戒誰念佛就此經已結加趺坐入於無量 介時世尊四祭團統供養恭敬尊重請歎為諸菩薩說大·無經 俱幸提希子阿閣世王與若干百千春属俱各礼佛色逐一面 大身巡樓羅主大滿巡樓羅王如意巡樓羅王各與若干百千眷属 **循雖王各與若干百千者属俱有四巡樓雖王大威德巡樓雖王** 脩羅主人羅騫 默阿脩羅王毗摩質多羅阿脩羅王羅 雅羅阿 王美音見聞婆王谷與若干百千者属俱有四阿偷羅王婆雜阿 眷属俱有四則置婆王樂 則國婆王樂音 則置婆王美則置婆 羅主妙法緊那羅主大法緊那羅主持法緊那羅主各與若干百千 婆伽羅 龍王和備古龍王德义巡龍王阿那婆 達多龍王摩那斯龍 克等與其看属萬二千天子俱有八龍王難 龍主跋難随龍王 子與其眷属三萬天子俱娑婆世界王梵天主尸棄大乾光明大 介時釋提祖因與其者属二萬天子俱復有名月天子普香天 薩導師菩薩如是并菩薩摩訶薩八萬人俱 無量力善隆越三界善隆跋险婆羅善蓬称勒善隆寶積善 藥工告達勇施善達實月善達月光菩薩滿月菩薩大力菩薩 香聞無量世界飲度無數百千架主其名口文殊師利菩薩觀 八萬人皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉皆得陷羅及樂說對 羅漢并復有學無學二千人摩訶波閣波提此丘及與眷屬六 富樓那然多羅及子頂菩提阿難羅眼羅如是然於知識大阿 提雜婆多果陵伽婆暖薄枸羅摩訶拘稀羅難施孫险雖難他 提迎禁舍利非大目捷連摩訶迦旃延阿聽機献却資那悔梵波 子質光天子四大天王與其眷属萬天子俱自在天子大自在王 俱羅職羅女耶輸险羅比丘及亦與眷属俱善薩摩訶薩 會中比丘比丘屋優婆塞優婆夷天龍夜义見蘭婆

> 女祥之思符厭無辜之思弟子 巷 佩千佛神有之後四出行来千道照 土家之鬼将厭星死之里将厭 客死之思持歌兵死欲死之思将歌男 之思有厭遊天之思有厭赤舌既四之思有厭比各五五之思存厭日遊 送将看亡将廠死喪新舊哭远雌雄做徒伏連之思将康 ·摩羅虎躍五叶叶三賀賀七蘇但擎八潑沫擊九 急如待令 佛託盖等經 箭萬道無難則不感夢所水常得所願從一件法正如有所初急 地截菩薩補剛真言 百种愛我天門開我地戶出我原泉飲我風伯雨師除道當片者死 刀兵盗賊離我虎狼玩地避我五毒盡道避我之身佩将之後天開四 虎使我公侯吏人愛我百姓敬我 萬姓茶我長者明我鄉里媚我写前衣我五香熟我金库卧我錦被覆教 仙人扶我五女侍我青龍引我白 通百思不從監水不沒刀妥不傷出入者良不连禍残四方五出将軍 所該天道倫具保宣在前賢懷敬我良樂與我神将護我百思遊我 曩該問罪但那一哆羅夜耶二住罪任罪三俱任 婆帝婆帝 那利帝 那利常 吃到婆那娑婆可 山林社稷

极二片資扶福毒 主娘為自身造普賢菩薩勘法品第二十八女弟 造龍音菩薩當門品第二十五 女弟子節十七娘為巨就造他羅尼品第三六 周十大眼為自身道如於中力品第三文弟子除大娘這屬電品第三 士城為自身造法師的德品第十几 女弟子菜至爱造者不軽普隆品二十 女弟子 為一星久世造分别切德品第十七 第子吴 泰 為目則造隨容功德品第六人女弟子桂 使奈彦草与軍典林 無地知實格節第三 弟子王桑 造提波達西第三 弟言軍将杯 弟子今 人民造五百十子吏武品 弟子指揮使原係的及要許十九娘同追法師的第一管衛指 謹具入名如後 第一, 原元後院使推扶禮部尚書無御史太天上柱國郎 女弟子李十七娘与女弟子程十四娘共造妙在敬王本事品第二十七 女都不息 聚五菩薩本事品第二十五 答与妻田玉取造村的第十三 年子金 震程 長共造安樂行品第西 弟子楊取与妻菜 京張芝第二老 資超住界 不為三世人母并及先后久近受皆群住道第三於 人根造從追顧出品第十五 南子徐 条 与女弟子道是像造如来毒量品第十六 弟子林察 上京於衛門分級以外一大大山府沒諸位列下三十六里 系慧釋 致着日為是不是好法逆奉経第一卷 又為已考早高即已就已十 表為以各三有私 審樂鄉寫造妙法灣才是一部 僧德弘造妙哲善養品第二五 子彭成是金十二娘造枕夹 第子王 後 事

巻尾

以至是五行, 俱必禄毒抽给净財書寫 大悲佛、行為此都卷合則問

奉為自身并及家室

这世 問國所議永坐長 犯課誦 如衛華切水无次奏

第 184 面

哲真言 を

回他羅投重子大光童子大領軍子佛被童子法從重子僧改立子金到改重子歷史被 聚而擊法鼓制請外道令起淨心轉妙法輸度人天敢十方佛士悉已莊敬六越有情无 大乗中深信数喜各於明時往前佛所頂礼佛及右繞三币退坐一面沒有四萬二千天 重子虚空叫重子質敬重子吉祥如敬重子如是等人而為上首悉皆安住無上菩提於 三市退坐一面沒有學車此童子五億八十其名日師子光童子師子惡童子法投童子 崔大雲破野苦達如是等無量大苦谁聚谷於 肺時状定而起往前佛所頂礼佛足右統 光菩薩大雲火光菩薩大雲電光菩薩大雲雷音菩薩大雲惠雨死過菩薩大雲清淨雨 大雲牛王吼苦薩大雲古祥菩薩大雲蛮德菩薩大雲日蔵菩薩大雲月蔵菩薩大雲星 雲淨光菩薩大雲持去菩薩大雲名都臣樂菩薩大雲現無過稱菩薩大雲師子吼菩薩 產大金光莊嚴蓄薩洋或菩薩常定菩薩極清洋意菩薩堅固精進菩薩心如虚空菩薩 成苦謹虚空截菩薩實手自在菩薩金別手菩薩敬言力菩薩大法力菩薩大莊敬光苦 自在王告薩大辦莊敬王告薩如高山王皆隆大海源王菩薩發禮菩薩大致煙菩薩地 常我心轉添輪菩薩常精進菩薩不休息菩薩慈氏菩薩妙告祥菩薩觀自在菩薩物持 於大師教能敷減秘掛之法甚深空性皆已了知无後凝感其若曰无障礙轉法輪善薩 在造成微如种通述得物持辨才無盡的請煩惱是漢皆已不久當成一切種指降就軍 哉 施 戒清淨常學奉者忍行精致經無量劫越諸都愿學念 双前門問惹門著松方便自 三市退坐一面沒有菩薩摩訶薩百千万億人俱有大威德如大龍王名稱普問來所知 連唯阿難施住於學地如是養諸大聲問各於賄時從是而起往前帶所項礼備及右續 摩河那摩具奇姿帝利边大边福次慢楼频察边帆仰即边搞那被迎攝合利子大目乳 惹莊嚴監八解脫已到彼岸其名曰具亦阿右临陳如具壽阿該侍多其壽安屋波具壽 脫惹善解脫所作已畢拾諸重怒速得已利盡諸有結得大自在住清净或首巧方便智 與 大慈豊 東九萬八千人皆是阿羅漢能菩 調伏如大為王諸漏已除無後煩悩心甚解 如是我們一時佛薄伽竟在王舎城落峯山液於取清率甚亦法於諸佛之境如來所居 金光明寂勝王經序品第一 子其名曰喜見天子喜枕天子日光天子月碧天子問惡天子虚空津惡天子除烦悩天 王菩薩大雲華樹王菩薩大雲青遊華香菩薩大雲張獨相看清原身菩薩大雲依問苦 不断大願菩薩拖弟菩薩振路煩似病菩薩圖王菩薩歡喜高王菩薩将上投記菩薩大 未來際廣於佛所深種淨目於三世法悟無生思逾於二栗所行境界以大善巧化世間 不蒙益成就大智具及大思住大慈悲心有大壁固力歷事諸佛不敬沒與我必悟心盡 三截法師義學奉 制譯

巻首

寫流通為人解說所獲功德亦復如是是改汝善應動修習今時无量无邊恒沙大衆問 敬說你他日佛說如是經若有能持者當住甚我在来生觀史天世尊我慶後捨天殊勝 權設而表事介府天帝釋合掌养敬疏仰他曰諸佛遊此法為欲報見故饒益菩薩我出 雖能神樂又等或将於此經地上及虚空久住於斯者奉持佛教故或得於此經四花住 總五統前職并檢与發立府前門前便疾 金光明成勝王經卷第十 佛統已皆大被喜信受奉行 劫就不能盡者有必益必益尼斯攻索迦郡政斯地及係善男子善女人等供養恭敬旨 妙經王虔誠流布乃至於我敢沒縣沒不今散城即是无上菩提正因所複功德於極沙 聚合各發心於此經典流通推護衛進苦薩獲利聚生或言善裁善為汝养能於如是撥 法中王我今問是經觀於佛前受诸樂菩提者當為廣宣通分時世華見諸菩薩人天大 善裁分時且喜行難吃合掌向佛就如他日我親從外間无量聚經典未曾問如是深妙 聞來說我抄智慧我今随自力護将如是若有持此經戒當稱受徒殺其詞鮮力常随滿 當往視度天由世等加護廣為人天就介時上坐大巡攝收合掌恭敬說伽他日佛於聲 茂合学恭敬於如他日若見住苦提尚為不前次乃至捨身命為護此經王我問如是法 持此經者是供養如來我當特此經為俱服天然恭敬聪聞者為至菩提奉亦時慈氏苦 威神故我當雅遊彼今時如告祥天子亦於佛前說伽他日諸佛如菩提於此經中說若 他日若有持此經能仗諸頑惧如是聚生類雜遊今安樂若有說是經諸魔不得使由佛 除魔思葉我等於此經亦當勤守護發大精進意随處廣流通分時處王合掌恭敬說伽 護分時魔王子名日尚主合掌恭敬既伽他日若有受持此正義和應經不随魔所行淨 請乗及解脫皆從此經出是改演斯經若說是經與我捨荒天樂高歌如是經亦常為辦 報住於暗的洲宣楊是經典分時索前世界主梵天王合掌恭敬說如他日諸靜愿无量 世演斯經我於彼诸佛報恩常供養設持如是經及以持經者介時觀史多天子合掌恭 今於此經及男女眷属皆一心雜錢令得廣流通若有持經者能作菩提因我常於四方 傾動者介時四大天王間佛說此該持妙法各生随喜護正法心一時同聲說如他日我 相應四聖節敬條存伏四應故該持於此經虚空成質碳質碳成虚空請併所該持无能 護奇於此經降伏一切魔破滅諸和論新除馬見故護持於此經護世并釋楚为至門樣 悲為甲官安住於大慈由彼慈悲力護持於此經福資粮園滿生起智資粮由資稅滿故 時諸大菩薩即於佛前說你他日世尊真實語安住於實法由彼真實故護持於此經大 法菩提正回恭敬遊持不惜身命佛涅縣後於此法門廣追流布當令正法夕住世間介 育作如是語世尊我等城有於樂之心於佛世尊无量大劫勤終苦行所獲甚深微妙之 流布然令正法久住世間介時衆中有六十 俱私諸大菩薩六十俱私諸天大衆異口同 獲甚深法甚提正目已為汝說汝等誰能發勇猛心恭敬守護我深縣後於此法門蛋宣 今 時世尊普告无量菩薩及諸人天一切大衆汝等當知我於无量无數大劫勒修苦行 金光明敬勝至經付嘱品第三十 汝遠證无上法門相好國明普利一切 成无上道介時世等告大轉天日善教善教汝久修胃具大釋十今後於我廣陳戲數令

巻尾

感被 犯盡侵若後多受愁來苦之所過 職眼見思夢回此生烦恼是人當深浴應者鮮潔

思相現前天神旨拾離親友懷收你各傷老分離校此共申追称財育散失思星為要作 諸思業及消聚益患常與無量樂一切智根本諸功德在發來生身不具首命将損或請 以尊南方寶相佛西方無量許北方天敢音我後演妙法吉祥藏中勝能滅一切罪谁除

苦難无不守除減減世四王永及大臣将為无量諸樂又一心皆經衛大胖才天女足速 衣於此如經王甚深佛所職專注心無乱讀誦聽受持由此經威力能能請失損及餘聚 殊勝妙法小時薄如楚於日晡時程定而起觀察大東而說領日金光明妙法散勝諸經 大乘歲誦受持書馬流布各於斯時往前佛所頂礼佛是右繞三市逐坐一面如是养聲

王甚深難得問諸佛之境界我當為大眾宣說如是經并四方四佛威神共加遊東方河

問苦隆人天大聚龍神八部既雲集已各至心合當恭敬暗仰等來目未曾检願樂欲聞

法常樂学好發深信稱楊確識各於明時往前佛所項礼佛是右繞三而退坐一面後有 龍王大吼龍王小沒龍王持歌水龍王金面龍王如意龍王是善龍王而為上首於大乗 指佛所頂礼佛足右為三市退坐一面復有二萬八千龍王莲華龍王啓羅葉龍王大力 子吉祥天子如是青天而尚上首皆教私额護特夫聚紹隆正法能使不能各於腑時往

三萬六千諸蔡又聚毗沙門天王而為上首其名日黃婆藥又持養婆來又遊華光恭蔡

法诉心或持不生放解各於暗時住前佛所頂札佛及右繞三而退坐一面後有四萬九 火道華而藥文城百葉又现大怖樂文動地藥义吞食樂义是華華义悉皆愛樂如來正

千揭路茶王香等男力王而為上首及餘健園姿万蘇羅緊那羅莫呼洛加等山林河海

切神州并站大因所有王家中宫后妃净信男女人天大來悉皆雪集成賴雅遊無上

解

説

編

# № 1 大般若波羅蜜多経 巻第二四五(長屋王願経

る。の二種類がある。本品は前者の和銅経で、日本国内で書写された最古の大般若経といわれの二種類がある。本品は前者の和銅経と、神亀五年(七二八)九月二三日の願文がある神亀経一一月一五日の願文がある和銅経と、神亀五年(七二八)元月二三日の願文がある神亀経の一つ。長屋王願経には、和銅五年(七一二)

一二世紀後半までには流出していたことが指摘されている[岩本 二〇一五]。本品巻尾の「北宮」の語句は、和銅経の願文に共通してみえるもので、長屋王が父高市皇子から引き継いだ家政機関のことを指す。長屋王邸宅南の宮跡庭園下層からは和銅年間皇子から引き継いだ家政機関のことを指す。長屋王邸宅南の宮跡庭園下層からは和銅年間皇子から引き継いだ家政機関のことを指す。長屋王邸宅南の宮跡庭園下層からは和銅年間皇子から引き継いだ家政機関のことを指す。長屋王邸宅南の宮跡庭園下層からは和銅年間皇子から引き継いだ家政機関のことを指す。長屋王邸宅南の宮跡庭園下層からは和銅年間皇子から引き継いだ家政機関のことを指摘されている[岩本 二〇一五]。

後補の表紙は茶地に梅·竹·松が織られた綾を用い、金紙の題箋(縦一四·六、横二・一四) 後補の表紙は茶地に梅·竹·松が織られた綾を用い、金紙の題箋(縦一四·六、横二・一四) 後補の表紙は茶地に梅·竹・松が織られた綾を用い、金紙の題箋(縦一四·六、横二・一四) 後補の表紙は茶地に梅・竹・松が織られた綾を用い、金紙の題箋(縦一四·六、横二・一四) 後補の表紙は茶地に梅・竹・松が織られた綾を用い、金紙の題箋(縦一四·六、横二・一四) は「寫経北宮様御真筆/大臣 補筆/□□□」の墨書がある。



蓋表

表紙

古寫經殘本三州長美書新

蓋裏

【細目データ 1】 (長さの単位 cm)

史料名	大般若波羅蜜多	多経 巻		員数	1 帖					
材質・技法	紙本墨書	t Î	書写年代	奈良時代						
紙数	23	全	長	84	1.8	紙高	23.8	識語	あり	
備考	和銅経(長屋日	和銅経(長屋王願経)。和銅 5 年(712)11 月 15 日付の識語あり。無辺無界。								

### 【表装】

表紙	折本の表紙(縦 23.8、横 8.6)は茶色、綾・文様(梅・竹・松)あり。表紙に題箋「古寫経殘本 三洲長芡書籥」 (金紙、縦 14.6、横 2.1) あり。見返しは金箔紙。											
	原・補別	な	l	軸長		_		軸端	形状	_		
軸	軸端 法量	天部 縦	_	地音	7 縦	_	天部占	最大径	_	地部 最大径	_	
	軸附様態等	_										

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色 打紙	界線		なし	修補	全	面裏打
本文料紙	一紙 長	47.7	一紙 高	23.8	一紙	行数	28	一行	字数	17
半又件瓶	界幅	_	界高	_	天相	闌高	_	地机	闌高	_
	その他所見	現状の折本の抗	<b>斤目と異なる</b> タ	テ折目あり。折	「本装丁	時に 17	紙から 23 糸	氏にされ	る。	

### 【法量】

紙順	表紙 見返し	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
紙長	5.9	46.8	47.7	47.9	28.0	20.2	48.6	48.2	48.2	11.7	36.1	23.9	23.8	23.8	18.4
行数	_	27	28	28	16	12	28	28	28	7	21	19	14	17	11
1・2 行頭字	_	大初	歎无	界羅	切般	波現	断十	陀无	復故	觸浄	断耳	以緑	慮一	現静	多分
紙順	15	16	17	18	19	20	21	22	23	裏表紙 見返し					
紙長	25.5	23.5	48.0	48.0	48.1	48.2	47.7	23.5	43.3	6.8					
行数	15	13	28	28	28	28	14	14	24	_					
1・2 行頭字	空清	浄静	波解	善故	切智	若多	若浄	故觸	二界	_					

### 【内容】

外題	古寫経殘本 三洲長炗書篇
首題 (内題)	大般若波羅蜜多経巻第二百卌五/初分難信解品第卅四之六十四 三蔵法師玄奘奉 詔譯
本文初行	善現一切智智清浄故意界清浄意界清浄
本文末行	分无別无断故
尾題	大般若波羅蜜多経巻第二百卌五
該当箇所	大正蔵 220.06/235.c10 ~ 241.a2

### No. 2 大般若波羅蜜多経 卷第五二六(永恩具経

午三月上旬始寫大般若経/一部六百卷 右亰七條二坊黄君満侶寫奉」の奥書と、「句切了 年(一二三三)に河内国高安郡玉祖神社に奉納したもの。本品は巻尾に「天平二年歳次庚 良時代から平安時代初期の大般若経を集め、朱の句切点を加えて一セットとし、貞永二 永恩」の書入れがある。 永恩具経と呼ばれる大般若経の一つ。鎌倉時代の僧で興福寺の蔵司であった永恩が、奈

麻呂」の名がみえ、写経所の経師として天平一八年から天平勝宝三年(七五一)までの活 下村主廣麿願経、同一六年六月三〇日春日戸比良願経が知られる [田中 一九七三]。本 州国立博物館所蔵)など数巻にみえる。黄君満侶は、正倉院文書に「黄公万呂」や「黄君 品の書写者である「黄君満侶」の名は、巻第五二二(京都国立博物館所蔵)、巻第五二七(九 永恩具経の奈良時代書写巻には、本品と同じ天平二年(七三〇)三月上旬の年紀で「平 都菩臣足嶋」の名がみえる巻、同一三年五月二四日橘戸弥麿願経、同年七月一八日

は鵜飼徹定(一八一四~九一)の号。 似筆法遒剄/有唐人風致焉/甲申七月 五百二十六 天平二年寫本/黄君満侶筆」の墨書がある。裏には「此巻與和銅寫経書躰相 かる [内川 二〇一三]。 紙分析は本書 xiv(一七七)頁を参照されたい。現状は折本であるが、天辺付近のシミの 後補の表紙は、緑地に黄色の宝相華模様のある錦を用い、左上部に題箋が貼り付けられ ミ/天平二年」とあり、 (縦一五・八、横二・三四)がある。表紙と裏表紙の見返しは金箔紙である。料 もとは巻子であったことがわかる。木製箱の蓋表に「大般若波羅蜜多経巻第 松浦武四郎(一八一八~八八)の蔵書であったことがわ 松浦武四郎記念館所蔵『蔵品目録』に「一 大教正松翁□」の墨書と朱文方印がある。松翁 [篠忠]



奥書と「句切了 永恩」の朱書

一部方百卷 在京本條二坊黃名滿個馬奉

天平三年歲次東午三月上旬始馬大般若經



蓋裏



蓋表

【細目データ 2】 (長さの単位 cm)

史料名	大般若波羅蜜多	<b>多</b> 経 巻		員数	1帖					
材質・技法	紙本墨書	İ	奈良	時代						
紙数	19	全	長	96	3.0	紙高	識語	あり		
備考	永恩具経。 黄君満侶筆。 天平 2 年 (730) 3 月の年紀あり。 識語に「右京七條二坊黄君満侶冩奉」「句切了 永とあり。									

### 【表装】

表紙	新補表紙(縦	新補表紙(縦 25.5、横 9.2)。緑に黄色の模様(宝相華)。裏表紙も同じ。											
	原・補別	な	L	軸長		_		軸端	形状	_			
軸	軸端 法量	天部 縦	_	地音	ß 縦	_	天部日	最大径	_	地部 最大径	_		
	軸附樣態等 —												

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色 打紙	界線		墨界	修補	全	面裏打
本文料紙	一紙 長	51.0	一紙高	25.4	一紙	行数	28	一行	字数	17
平义作机	界幅	1.8	界高	19.8	天相	闌高	2.7	地相	闌高	2.9
	その他所見	振り仮名(墨書	書)、句切点(朱	き書)あり。						

7

50.9

28

安三

8

51.0

28

所所

9

50.5

28

界衆

10

50.8

28

无此

11

50.9

28

学圓

12

51.0

28

告性

13

51.0

28

當入

14

51.0

28

説無

### 【法量】

紙順	表紙 見返し	1	2	3	4	5	6
紙長	9.2	47.5	51.0	51.0	51.0	51.0	50.7
行数	_	26	28	28	28	28	28
1・2 行頭字	_	大第	般空	如執	亦等	雖涅	由切
紙順	15	16	17	18	19	裏表紙 見返し	
紙長	50.8	50.8	50.6	50.7	32.5	9.1	
行数	28	28	28	28	18	_	
1・2 行頭字	蜜長	親真	訶滅	能善	切相	_	

### 【内容】

外題	なし
首題 (内題)	大般若波羅蜜多経卷第五百二十六 三蔵法師玄奘奉 詔譯/第三分方便善巧品第二十六之四
本文初行	<b>尒時善現復白佛言世尊常説甚深般若波</b>
本文末行	羅蜜多
尾題	大般若波羅蜜多経巻第五百二十六
該当箇所	大正蔵 220.07/696.a10 ~ 702.a5

### 3 華手経 巻第四(五月一日経

No.

がある。 巻第三から巻第四に相当する。全一八紙からなるが、第六紙と第七紙の間に二紙分の欠落として書写された(『大日本古文書』七巻八四頁)。『大正蔵』所載の一○巻本の華手経では、本品は、天平六年(七三四) 一一月に帰国した玄昉が将来した一五巻本の華手経を底本

楷書で、ところどころに朱の校合注記がみられる。から第四紙の下部には水損汚れがみられる。文字は他の五月一日経に共通する謹厳端正な助状は表紙が失われ、第一紙は全面を裏打し、右端下部は大きく欠損している。第一紙

撥形、赤密陀の軸は本紙に直に取り付けられており、原装と思われる。 て補修している。虫損間隔は第一紙で一一・六、第九紙で八・三、第一八紙で三・八㎝である。 ては本書 xv (一七六) 頁を参照されたい。全体にわたって虫損があり、裏から小紙片を貼っ 文を書き加える際に継ぎ足されたものと考えられる [皆川 一九六二]。料紙分析につい 文を書き加える際に継ぎ足されたものと考えられる [皆川 一九六二]。料紙分析につい 教形、赤密陀の軸は本紙に直に取り付けられており、原装と思われる。

該当すると思われ、宝亀二年(七七一)八月以降に捺されたと推測される。ちれるが、本品の印影は先行研究[田中 一九九九]で「東大寺印C」と称されるものが形朱印(縦六・○、横五・九四)を捺す。奈良時代には複数の東大寺印が存在したことが知左半は原表紙にあったものと思われる。また巻尾の尾題の文字に重ねて「東大寺印」の方差首第一紙右端上部の裏に「東大寺印」の方形朱印影の右半(縦六・○四)が認められる。

経 巻第二二(善光朱印経)」の内箱とともに縦三八・六、横一八・七、高一○・二㎝の木製縦三三・五、横六・○、高四・七㎝の木製箱に納め(内箱)、さらにそれを№6「増壱阿鋡

とあり、M6とともに松浦武四郎の蔵書であったことがわかる[内川 二〇一三]。箱に納める(外箱)。松浦武四郎記念館所蔵『蔵品目録』に「一 華手経/東大寺捺印 一



第 1 紙裏の「東大寺印」





外箱と内箱 外箱は No.6「増壱阿鋡経 巻第二二(善光朱印経)」と共用

卷

### 【細目データ 3】

(長さの単位 cm)

12

46.3

25

華華

13

46.3

25

訶従

14

46.3

25

従中

15

46.2

25

号上

史料名	華手経 巻第四	以 (五月		員数	1巻						
材質・技法	紙本墨書	I.	奈良時代								
紙数	18	全	長	800	0.0 紙高 26.2 識語 あり						
備考		五月一日経。天平 12 年 (740) 5 月 1 日付の願文あり。朱字の校合痕あり。右端裏上部に方形朱印「東大□□」 (縦 6.0、左半欠)、尾題に重ねて方形朱印「東大寺印」(縦 6.0、横 5.9)あり。									

### 【表装】

表紙	なし										
	原・補別	原装	<b>き</b> カ	軸長		29.9		軸端	形状	撥形	
軸	軸端 法量	天部 縦	不明	地音	<b>『縦</b>	不明	天部占	最大径	1.5	地部 最大径	1.5
	軸附様態等	本紙直継	0								

### 【料紙】

	紙質	麻・雁皮	染色・加工	黄色 打紙	界線		墨界	修補	部	分裏打
	一紙 長	46.1	一紙高	26.2	一紙	行数	21	一行	字数	17
本文料紙	界幅	1.8	界高	19.8	天相	闌高	3.0	地相	闌高	3.4
	その他所見	_								

### 【法量】

紙順	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
紙長	43.9	46.1	46.1	46.3	46.2	46.2	46.0	46.3	46.3	46.3	46.3
行数	24	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
1・2 行頭字	華東	徳菩	薩東	東覚	一虚	薩東	従有	有薩	无従	従有	佛薩
紙順	16	17	18								
紙長	46.2	46.2	16.5								
行数	25	25	8								

### 【内容】

1・2 行頭字 | 授従 | 従有 | 助上

外題	なし
首題 (内題)	華手経惣想品第十四
本文初行	東方去此過乎三万阿僧祇界彼有世界
本文末行	訶薩授无上道記餘如上説
尾題	華手経巻第四
該当箇所	大正蔵 657.16/144.c7 ~ 146.b13 147.a6 ~ 150.a18

## № 4 心経(般若波羅蜜多心経、隅寺心経

つと推測される。 
巻尾に三行の功徳文を付した般若心経。類例の多くが隅寺(海龍王寺)に伝わったため、 
巻尾に三行の功徳文を付した般若心経。類例の多くが隅寺(海龍王寺)に伝わったため、 
巻尾に三行の功徳文を付した般若心経。類例の多くが隅寺(海龍王寺)に伝わったため、

表紙には紺地に金色の草木模様が織られた錦で、「心経」と書かれた金色の題箋が貼り表紙には紺地に金色の草木模様が織られた錦で、「心経」と書かれた金色の題箋が貼りと不定である。

蔵品であることがわかる[内川 二○一三]。 ・木製箱(縦二七・三、横四・五、高四・三、蓋高一・六四)に納め、蓋上書に「奥書/隅寺心経」、 ・木製箱(縦二七・三、横四・五、高四・三、蓋高一・六四)に納め、蓋上書に「奥書/隅寺心経」、 ・木製箱(縦二七・三、横四・五、高四・三、蓋高一・六四)に納め、蓋上書に「奥書/隅寺心経」、







蓋裏

蓋表



軸

表紙

### 【細目データ 4】

(長さの単位 cm)

史料名	心経(般若波線	羅蜜多心	経、隅	寺心経)				員数	1 巻		
材質・技法	紙本墨書	紙本墨書 装丁·形態 巻子 書写年代 奈良時代									
紙数	1	1 全長 89.7 紙高 24.9 識語 なし									
備考	隅寺心経。功徳	<b>与心経</b> 。功徳文あり。									

### 【表装】

表紙	表紙(縦 24.9、横 12.6)は草木模様の錦。薄茶の巻緒、竹の八双。見返しは金箔。											
	原・補別 後補 軸長 26.0 軸端 形状 象牙 丸形・ハメ込み										(込み	
軸	軸端 法量	天部 縦	部 縦 不明 地部 縦 不明 天部 最大径 1.6 地部 最大径 1.6									
	軸附様態等新補の軸付紙。糊痕なし。											

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線		墨界	修補	全	面裏打
本文料紙	一紙 長	44.0	一紙 高	24.9	一紙	行数	23	一行	字数	17
平义符队	界幅	1.97	界高	19.7	天机	闌高	2.8	地相	闌高	2.3
	その他所見	_								

### 【法量】

紙順	表紙 見返し	補紙	1	軸付紙
紙長	12.6	18.2	44.0	14.9
行数	_	_	23	_
1・2 行頭字	_	_	心観	_

### 【内容】

外題	心経
首題 (内題)	心経
本文初行	観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
本文末行	揭諦揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提薩婆呵
尾題	なし
該当箇所	大正蔵 251.08/848.c1 ~ 848.c19

## № 5 心経(般若波羅蜜多心経、隅寺心経

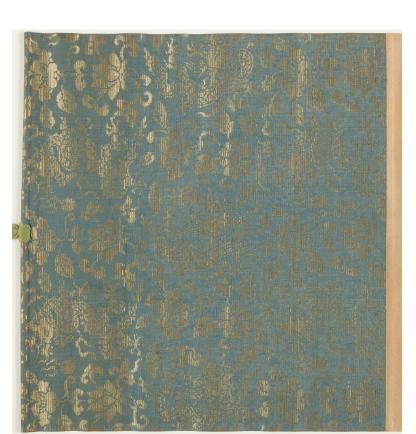
若波羅蜜多心経、隅寺心経)」がある。三点のうち功徳文がないのは本品だけである。は本品のほか、№4(巻子)と、古経貼交屏風に貼り付けられた№12‐1‐60「心経(般功徳文のない般若心経。隅寺心経については№4を参照されたい。当館所蔵の隅寺心経

武四郎旧蔵品であることがわかる[内川 二○一三]。 関寺心経 さ」とあり、松浦は金箔紙である。本紙には奥から巻いた状態で生じた虫損があり、補修されている。本紙は金箔紙である。本紙には奥から巻いた状態で生じた虫損があり、補修されている。本紙は金箔紙である。本紙には奥から巻いた状態で生じた虫損があり、補修されている。本紙には奥から巻いた状態で生じた虫損があり、補修されている。本紙は金箔紙である。松浦武四郎記念館所蔵『蔵品目録』に「一 隅寺心経 さ」とあり、松浦の墨書がある。松浦武四郎記念館所蔵『蔵品目録』に「一 隅寺心経 さ」とあり、松浦の墨書がある。松浦武四郎記念館所蔵『蔵品目録』に「一 隅寺心経 さ」とあり、松浦は金箔紙である。本紙に外題はなく、見返し青地に金色の花草模様が織られた布表紙が取り付けられる。表紙に外題はなく、見返し



蓋裏

祭百秋九月万華無親并遊戲



表紙

軸

### 【細目データ 5】

(長さの単位 cm)

史料名	心経(般若波線	罹蜜多心	経、隅	寺心経)				員数	1 巻		
材質・技法	紙本墨書	紙本墨書 装丁・形態 巻子 書写年代							奈良時代		
紙数	1	1 全長 108.2 紙高 26.5 識語									
備考	隅寺心経。功徳	寺心経。功徳文なし。									

### 【表装】

表紙	表紙(縦 26.5、横 24.9)の表は青色、裏は金色で花草模様あり。薄緑色の巻緒。竹の八双。											
	原·補別     後補     軸長     28.8     軸端 形状     撥形 水晶											
軸	軸端 法量	天部 縦	<ul><li>部縦 不明 地部縦 不明 天部最大径 1.5 地部最大径 1.5</li></ul>									
	軸附様態等 42.6cmの軸付紙あり。											

### 【料紙】

	紙質	麻紙カ	染色・加工	黄色 打紙	界線		墨界	修補	全	面裏打
本文料紙	一紙 長	40.7	一紙高	26.5	一紙	行数	22	一行	字数	17
平义件祇	界幅	1.8	界高	19.9	天棉	闌高	3.2	地相	闌高	3.4
	その他所見	_								

### 【法量】

紙順	表紙 見返し	1	軸付紙
紙長	24.9	40.7	42.6
行数	_	22	_
1・2 行頭字	_	心観	_

### 【内容】

外題	なし
首題 (内題)	心経
本文初行	観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
本文末行	揭諦揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提沙婆呵
尾題	なし
該当箇所	大正蔵 251.08/848.c1 ~ 848.c19

## 6 増壱阿鋡経 巻第二二(善光朱印経

No.

料紙については本書 xvii(一七四)頁を参照されたい。本品は紙継目には縦界線を引かれる。

がわかる[内川 二〇一三]。 増壱阿含経/西大寺印アリ ´ヘ´」とあり、Na3とともに松浦武四郎の旧蔵品であったこと対し、全三三紙の本品には小さすぎる感がある。松浦武四郎記念館所蔵『蔵品目録』に「一対し、全三三紙の本品には小さすぎる感がある。松浦武四郎記念館所蔵『蔵品目録』に「一対し、全三三紙の本品には小さすぎる感がある。松浦武四郎記念館所蔵『蔵品目録』に「一対し、全三三紙の本品には小さすぎる感がある。松浦武四郎記念館所蔵『蔵品目録』に「一対し、全三三紙の本品に外籍に納められ、Na3の内籍とともに外籍に納めら



尾題下の「善光」印





表紙と第1紙の継目裏

軸

### 【細目データ 6】

(長さの単位 cm)

14

51.0

四便

50.8 21 従介

史料名	増壱阿鋡経 考	き第二二	. (善光	朱印経)				員数	1 巻			
材質・技法	紙本墨書 装丁·形態 巻子 書写4							奈良時代				
紙数	33	全	全長		86.9	紙高	27.6	識語	あり			
備考	善光朱印経。「 4日とあり。											

### 【表装】

表紙	表紙(縦 27.6、横 25.7)は旧補。茶色で模様なし。茶色の巻緒。竹の八双。												
	原·補別 原装 軸長 30.7 軸端 形状									撥形			
軸	軸端 法量	天部 縦	不明	地音	地部 縦         不明         天部 最大径         1.6         地部 最大径								
	軸附様態等	本紙直継	紙直継。糊痕あり。										

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色 打紙	界線	:	墨界	修補		なし
المال مل مل مل	一紙 長	50.7	一紙 高	27.6	一紙 行数		21	一行	字数	17
本文料紙	界幅	2.4	界高	23.3	天机	闌高	2.0	地相	闌高	2.3
	その他所見	_								

### 【法量】

紙順	表紙 見返し	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
紙長	25.7	48.2	50.7	50.8	51.1	51.1	51.0	51.0	51.0	51.0	51.0	51.0	51.0	50.9
行数	_	20	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21
1・2 行頭字	_	増聞	以者	浄自	復群	遊得	脩復	歓聞	是王	於在	比王	十上	何多	入至
紙順	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
紙長	51.0	51.0	50.9	50.8	50.6	48.0	48.5	50.8	51.0	50.9	50.9	51.0	50.8	50.8
行数	21	21	21	21	21	20	20	21	21	21	21	21	21	21
1・2 行頭字	復難	者喜	諸於	若无	云者	時身	諸喜	復我	出気	有介	律作	賢樹	沙未	所一
紙順	30	31	32	33										
紙長	50.7	50.7	50.7	40.5										
行数	21	21	21	17										

### 【内容】

1・2 行頭字

娯華

説聞

若雖

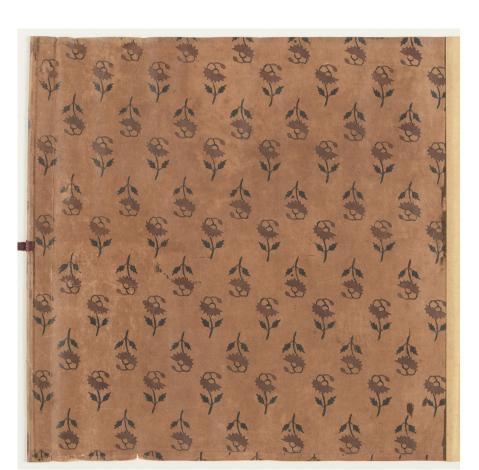
天覆

外題	增壹阿含経巻第二十二 北堂										
首題 (内題)	增壹阿鋡経増上品第卅 廿二										
本文初行	間如是一時佛在舎衛國祇樹給孤獨園介										
本文末行	僧上坐行跡 无常園観地 无漏无息禅 四樂无諍訟										
尾題	增壹阿鋡経巻第廿二										
該当箇所	大正蔵 125.02/665.b12 ~ 673.c13										

## № 7 大般若波羅蜜多経 巻第四三四(安倍小水麻呂経

は安倍小水麻呂経一五二巻が伝来し、重要文化財に指定されている。 取り付けたものである。№13 - 31も安倍小水麻呂経である。埼玉県ときがわ町の慈光寺に を第四三四の第二分地獄品第三十九之一から巻末までを書写した四紙に、表紙と軸を後に ばれるものの一つ。貞観一三年(八七一)三月三日付の願文が記される。本品は大般若経 ばれるものの上野国権大目である安倍朝臣小水麻呂が発願した大般若経で、安倍小水麻呂経と呼

台紙が軸に貼り継がれている。付のため、斜めに切断され、糊痕が残る。現状の軸や軸付紙は後補。全面裏打され、そのつく。第一紙の右端は切断されており、上端近くは紙が毛羽立っている。第四紙左端は軸本品の表紙は茶色の紙で花模様があり、裏は金雲母を散らす。茶色の巻緒、竹の八双が



表紙



蓋表

### 【細目データ7】

(長さの単位 cm)

史料名	大般若波羅蜜多	多経 巻		員数	1巻							
材質・技法	紙本墨書	ř	装丁	· 形態	平安前期							
紙数	4	全	長	17	7.3	紙高	27.3	識語	あり			
備考	安倍小水麻呂紅	·倍小水麻呂経。願文に貞観 13 年(871)3 月 3 日とあり。										

### 【表装】

表紙	表紙(縦 28.5、横 28.5)の表は茶色、花模様、裏は金雲母模様。茶色の巻緒、竹の八双。											
	原・補別	後	後補 軸長 28.5 軸端 形状 なし									
軸	軸端 法量	天部 縦	なし	地音	地部 縦 なし 天部 最大径 1.2 地部 最大径							
	軸附様態等 軸付紙と一体になった裏打紙に本紙 (4紙) が貼られ、表紙がつけられる。											

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色 打紙	界線		墨界	修補	全	面裏打
	一紙 長	52.4	一紙 高	27.3	一紙	行数	27	一行	字数	17
本文料紙	界幅	1.9	界高	20.3	天机	闌高	3.2	地相	闌高	3.8
	その他所見	_								

### 【法量】

紙順	表紙 見返し	1	2	3	4
紙長	28.5	9.0	52.4	52.2	35.2
行数	_	4	27	27	18
1・2 行頭字	_	第介	提修	鈍是	無者

### 【内容】

外題	なし
首題 (内題)	第二分地獄品第卅九
本文初行	<b>尒時具壽舎利子白佛言世尊若菩薩摩訶</b>
本文末行	般若波羅蜜多
尾題	大般若波羅蜜多経卷第四百卅四
該当箇所	大正蔵 220.07/186.c10 ~ 187.b6

## 8 仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経

No.

記」を欠いている[静嘉堂(二〇〇〇][市川(二〇二三]。他の五月一日経と同じ願文があるものの、巻尾に記されるべき日付「天平十二年五月一日(光明皇后発願の五月一日経の一つ。五月一日経については203を参照されたい。本品は

思われ、宝亀二年(七七一)八月以降に捺されたと推測される。 生七紙の巻子本で、新補の黄色表紙に紫色の巻緒、竹の八双をもつ。校合注記があり、全七紙の巻子本で、新補の黄色表紙に紫色の巻緒、竹の八双をもつ。校合注記があり、全七紙の巻子本で、新補の黄色表紙に紫色の巻緒、竹の八双をもつ。校合注記があり、

と「東大寺印」とがともに捺されていること、 類があるとされ ○四間隔で軸付に由来する糊痕が残る。尾題下部の余白と、第一紙と第二紙の継目裏に「内 界線のある第七紙が直接軸に貼り付けられ、第六紙の願文から第七紙にかけて三・五~四・ 題は「佛説忠心経」と記すが、「忠」の右傍に紙片を貼って「中」と墨書し訂正している。 が捺されていることなど、 家私印」の方形朱印(方四・一㎝)が捺されている。「内家私印」は光明皇后の蔵書印で[小 料紙については本書 xviii(一七三)頁を参照のこと。首題は「佛説中心経」であり、 二〇〇三]、現在一六例ほどが確認されている [宮崎 服部 一九七三〕、本品の印影は乙印に該当すると思われる。 検討を要す。 五月一日経でありながら光明皇后の蔵書印 一九九七]。甲印と乙印の二種 「内家私印\_ 尾

説中心経(1巻)とあり、松浦武四郎の旧蔵品であったことがわかる[内川(二〇一三]。軸は赤密陀で原装、軸端は撥形である。松浦武四郎記念館所蔵『蔵品目録』に「一(仏

尾題下「内家私印」



第1.2 紙間の継目裏の「内家私印」



表紙と第 1 紙の継目裏の「東大寺印」(半存、 表紙には印影続かず)



### 【細目データ 8】

(長さの単位 cm)

史料名	仏説中心経(仏	ム説忠心	経、五		員数	1 巻						
材質・技法	紙本墨書	<u>t</u>	装丁	· 形態		奈良時代						
紙数	7	全	長	30:	3.6	紙高	26.6	識語	あり			
備考	五月一日経。原	月一日経。願文があるものの、天平 12 年(740)5 月 1 日の日付がない。「内家私印」「東大寺印」あり。										

### 【表装】

表紙	表紙(縦 27.6、横 25.7) は黄色で新補。茶色の巻緒。竹の八双。											
	原・補別	原装		軸長		30.3		軸端	形状	撥形		
軸	軸端 法量	天部 縦	3.2	地部 縦 3.2 天部 最大径 1.5 地部 最大径							1.5	
	軸附様態等本紙直継。糊痕あり。											

### 【料紙】

	紙質	麻・雁皮	染色・加工	黄色 打紙	界線		墨界	修補		なし
	一紙 長	43.3 一紙 高		26.6	一紙 行数		25	一行 字数		17
本文料紙	界幅	1.8	界高	19.6	天相	闌高	3.5	地村	闌高	3.5
	その他所見	尾題下部、1·2 編 が半存。墨書			りあり。	表紙と負	第1紙の紙絲	継目裏に	左傾の	「東大寺印」

### 【法量】

紙順	表紙 見返し	1	2	3	4	5	6	7
紙長	18.3	43.3	45.9	45.4	45.5	45.5	42.2	17.5
行数	_	24	25	25	25	25	23	9
1・2 行頭字	_	佛	連力	為者	佛観	佛其	是立	_

### 【内容】

外題	なし
首題 (内題)	佛説中心経一巻
本文初行	聞如是一時佛在舎衛國祇樹給孤獨園是
本文末行	无不歓喜為佛作礼
尾題	佛説忠心経一巻
該当箇所	大正蔵 743.17/550.a16 ~ 551.c16

### No. 9 大宝積経 卷第二三

切経のうちの一巻と見られ、平安前期の作成と推測される。松浦武四郎旧蔵品' 大宝積経全一二〇巻のうちの一巻。 神護寺印が捺されており、かつて同寺に伝来した一

裏から補修紙をあてて修繕されている(裏打なし)。第一紙右半および第一~六紙下部に (一七二) 頁を参照されたい。 されている。第一六紙と軸は、 紙は空(白紙)で、墨界が左端まで続き、左端は天地が斜めに切られ、軸に直接糊付け ものと見られる。第一五紙は縦界線が太くなるなど、墨界にやや乱れが見られる。第一六 八紙は行数が二六行と他紙より一行少なく、第七紙左端と第八紙右端の各一行を切除した は水損があり、補修されている。第八紙右端、第七紙との継目左に縦界線がある。第七・ 紙が欠落した後に書き加えられたものであろう。巻子の状態でついた虫損が全体に広がり、 表紙は欠落しており、第一紙右端も破損が見られる。端裏の外題「寶積経 いずれも本来のものと見られる。料紙については本書 xix 廿三」は表

置は第四・五紙と第一〇・一一紙は継目の下寄り、それ以外は上寄りである。 第一五・一六紙継目を除く各紙継目裏には円形朱印 び第二・三紙の継目裏に斜めに双郭方形朱印「海龍王寺」(縦四・七㎝、横二・○㎝)を捺す。 第一紙右端下部に方形朱印「神護寺」(縦四・一㎝、横二・○㎝)、第一・二紙の継目裏及 (直径○・八四)を捺し、その位

品目録』に「一 大宝積経 2」とあり、武四郎旧蔵品とわかる [内川 二〇一三]。 七 経 白木の箱(縦三三・〇㎝、 cm 神護寺捺印」。蓋裏に「木二梅題箋」と墨書し「二梅」の朱文円印(縦一・五 ㎝、横〇・ を捺すことから、書家の木村二梅の揮毫と判明する。松浦武四郎記念館所蔵『蔵 横六・○㎝、 高六・○㎝)に収納されており、箱書は「大寶積



第2.3紙継目裏 双郭方形朱印

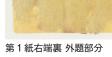


継目裏 円形朱印



蓋裏





### 【細目データ 9】

(長さの単位 cm)

史料名	大宝積経 巻第	宝積経 巻第二三 員数 1巻												
材質・技法	紙本墨書	紙本墨書    装丁・形態    巻子   書写年代   平安前期												
紙数	16	全	長	825	5.7	紙高	27.2	識語	なし					
						1、横 2.0)、1・ 目裏に「□〔弘								

### 【表装】

表紙	なし	なし													
	原・補別	原	装	軸長		30.2		軸端	形状	撥形					
軸	軸端 法量	天部 縦	2.5	地音	B縦	2.5	天部 占	天部 最大径		地部 最大径	1.6				
	軸附様態等	本紙直継	。糊痕あ	り。											

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色 打紙	界線	į	墨界	修補	部分	分裏打
本文料紙	一紙 長	54.1	一紙高	27.2	一紙	行数	27	一行	字数	17
	界幅	2.0	界高	22.1	天机	闌高	2.5	地相	嗣高	2.6
	その他所見	_								

### 【法量】

紙順	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
紙長	50.0	54.1	53.9	54.1	54.1	53.6	51.5	52.1	54.0	54.0	54.0	54.1	54.2	54.0	53.4
行数	25	27	27	27	27	27	26	26	27	27	27	27	27	27	27
1・2 行頭字	大	訶流	一此	深寶	何出	應於	汝諸	我一	若音	千種	如被	大其	佛無	起但	諸無
紙順	16														
紙長	24.6														

### 【内容】

行数

1・2 行頭字

12

外題	寶積経 廿三
首題 (内題)	大寶積経被甲莊嚴會第七之三 大唐三藏菩提流志奉詔譯卷廿三
本文初行	復次無邊慧諸菩薩摩訶薩乃於無邊甲胄
本文末行	若後末世時 聞斯無上法 常於此法中 以速而發趣
尾題	大寶積経巻第廿三
該当箇所	大正蔵 310.11/126a1 ~ 131c7

### No. 10 大般涅槃経 巻第一一

松田雪柯・松浦武四郎旧蔵品。 大般涅槃経 (南本)全三六巻のうちの一巻で、表裏に大般涅槃経疏からの書入れがある。

紙後半~第二六紙は全面裏打とされている。 近に虫損が見られ、第一~二五紙前半は部分裏打としているが、特に虫損の激しい第二五 が残っており、これが表紙との継目であったものと見られる。外題は無い。全体に天地付 表紙は欠落しているが、第一紙第一行は文字がなく、 右端のハガシトリ痕に褐色の紙片

たための不統一と考えられる。 まで継がれた写経用紙に書写を始めたものの、途中で不足に気付いて別紙を一枚継ぎ足し も縦界線をひくが、第二五紙と第二六紙の継目にのみ縦界線が無い。おそらくは第二五紙 第二六紙は色も薄く光沢も無い紙で、他と紙質が異なっている。また本巻では紙継目に

られたものと考えられる。 る修正痕が認められる。表は全面的に墨書・朱書による書入れが多数見られ、第四・六・ 第一二紙第七行、第一三紙第五行、 が考えられる。黄染紙のため擦消痕が目立ち、第九紙第一・五行、第一○紙第二二行、 六・一九・二○紙では裏にも墨書が見える。これらは筆跡も似通っており、 九行、第二二紙第二六行、第二四紙第一〇・二四行、第二五紙第二行などに擦消によ 界線は現状ではやや太めの濃紺に見えるが、本来は銀であったものが変色した可能性 第一六紙第九行、第一九紙第二六行、第二一紙第 同時期に入れ

四郎へと譲られたものと見られる [内川 二〇一三]。 品目録』には「一 宮祠官で書家の松田雪柯(一八二三~八一)の旧蔵品と判明する。松浦武四郎記念館所蔵『蔵 「元修」の朱文円印 小野道風書」、蓋裏「明治十三年庚辰涅槃日/北海老先生属題 (縦三一・三㎝、横六·四 大般涅槃経聖行品/小野道風書 (縦一・○㎝、 cm 高六・○㎝)に収納されており、 横一・○㎝)が捺される。これにより旧伊勢神 | ^」とあり、雪柯から交流のある武(= 巻) 箱書「大般涅槃 松田蔵」と墨

経聖行品之第十九」、第二○紙左端上部裏に「大般涅槃経聖行品之第二十九十九」の墨書 あり、その巻第一一・聖行品第一○九之一に該当する。第一九紙左端上部裏に「大般涅槃 数種ある漢訳『大般涅槃経』のうち、宋代の慧厳らが漢訳した南本三六巻による書写で

> 明 1E

治十三并 度辰

老見は馬

題

経疏』の巻第三~一四からの引用と見られる。 がある。表裏の墨書書入れの多くは、章安灌頂 (五六一~六三二) による註釈 『大般涅槃

第号若軍重无有資權支限三言ける東陸至支其故 夫孔者下有一句傷痛取為可些若離即以首於城難多 西第天才作品,新電院拉要路去多於主此常元 八大门户又与元石经出村入以西户犯有原 爱如文写有 河田了里地毒獨人衣即死館人龍山女亦死行祸夕是古 以内唇石外不照似无有燈明天色彩面聚於地塞以是 伏息畫在常行巫艺天為如巫属陰心万仍饶好意作也 不多麼出景面ろみ純制以充住无座」到不同院 立马声以悦忽以玄雅平宿至万良野搭手以京 此在分出若有人得时是完多然治事奉旨 之為物意数在守衛令不明其以無好意不的學 は兄子起毒更小席相常幽云取切える又 初天備我小是刑妄打言無被懷行歌友些让以 馬色えなる最元をひる人体表此品を力 ちるなはる今後中海立力元老





蓋表

蓋裏

### 【細目データ 10】

(長さの単位 cm)

史料名	大般涅槃経 考	般涅槃経 巻第一一 員数 1巻												
材質・技法	紙本墨書	紙本墨書 装丁・形態 巻子 書写年代 平安後期カ												
紙数	26	全	長	129	7.4	紙高	26.6	識語	なし					
備考	_													

### 【表装】

表紙	なし										
	原・補別	原装また	は後補	軸長		29.4		軸端	形状	切り落とし、	八角形
軸	軸端 法量	天部 縦	不明	地音	ß 縦	不明	天部 揖	最大径	1.1	地部 最大径	1.1
	軸附様態等	本紙直継。									

### 【料紙】

	紙質	楮紙力	染色・加工	黄色カ 打紙 雲母	界線	濃紺、	銀の変色カ	修補部分		全面裏打	
本文料紙	一紙 長	50.1	一紙 高	26.6	一紙	行数	26	一行	字数	17	
	界幅	1.9	1.9 界高 19.9 天欄高 3.2 地欄								
	その他所見	墨書・朱書の注記あり。									

### 【法量】

紙順	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
紙長	49.9	50.1	50.1	50.1	49.9	50.0	50.0	50.0	50.0	50.2	50.0	50.0	50.2	50.3	50.2
行数	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
1・2 行頭字	大	至子	能隠	中辛	波薩	或生	骨涕	忽為	迦浄	攝復	悪分	迦至	彼應	言食	復敵
紙順	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26				
紙長	50.2	49.8	49.8	50.0	50.1	50.0	50.0	49.9	49.6	49.9	47.1				
行数	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	25				
1・2 行頭字	讃膏	前主	善諸	鳥住	柔患	歓王	介蔵	天就	善経	少菩	苦子				

### 【内容】

外題	なし
首題 (内題)	大般涅槃経聖行品上第十九 十一
本文初行	<b>尒時佛告迦葉菩薩善男子菩薩摩訶薩應</b>
本文末行	能知是苦因樂因
尾題	大般涅槃経巻第十一
該当箇所	大正蔵 375.12/673.b16 ~ 681.c7

### No. 11 妙法蓮華経

装飾がなされる。書風や装丁から平安時代のものと推測される。 が撒かれる。表紙には金切箔・銀砂子が施され、金地の題箋、螺鈿付きの軸など、華麗な 妙法蓮華経全八巻がセットで伝来したもの。本紙は銀泥の界線がひかれ、裏には銀砂子

銀によるものと見られる。全体に白や黒のカビ汚れ、褐色のシミ汚れが見られる。 る可能性が考えられる。本紙裏に界線の変質によるシミが現れており、界線に用いられた から第一・二紙にかけての上下中央部分の傷みが強く、改装時の巻緒に由来する損傷であ やシ~が表紙見返しにも続いており、表紙がつけられてからの損傷と見られる。特に表紙 で共通しており、一貫して八巻一括で伝来したものと見られる。全巻ともに第一紙の虫損 八巻がいずれも同一規格で書写されており、現状への表装替えやその後の損傷の状況ま

であらわされている。 の内箱(縦二九・一㎝、横一六・〇㎝、高一三・七㎝)には箱書「妙法芬陀利経」が銀蒔絵 横二○・六㎝、高一七・六㎝)には箱書「光明皇后尊翰/法華経八巻」と墨書され、黒漆塗 八巻は一括して裂で包まれ、二重の箱に収納されている。白木の外箱(縦三二・二㎝、

横五五・七㎝、折畳で縦二二・六㎝、横一○・八㎝)に包まれ、さらに「光明皇后 七㎝)に包まれ、内箱に納められている。 古筆了悦」 とあり墨文方印「琴山」 が捺される。これが「折紙」 と記した檀紙 (縦四〇・五㎝、 極書(折紙)が附属しており、折紙(檀紙、縦四一・七㎝、横五八・○㎝)に「法華経八 全部第一如是我聞第八尒時無尽意/光明皇后尊翰/無疑者也/慶応四年/孟夏下浣 折紙」と記した包紙(縦四○・○㎝、横二九・五㎝、折畳で縦二四・○㎝、横一一・

第一・二・四・七・八巻の巻末下部には「了本」の墨書が見える。









極書 包紙(外)

折纸



極書 折紙



表紙と第1紙裏

行からは「妙法蓮華経方便品第二」が書写される。巻首「妙法蓮華経序品第一」から始まり、第一○紙第一三これは書写時のものであろう。

また第一五紙第一六行では挿入符で「弟」字を補っているが、よび墨の振仮名(第一、六、一三、一六~一九紙)が認められる。本文には朱の句切点(第一~三、六~八、一○~一五紙)おされていない。

【細目データ 11-1】

(長さの単位 cm)

•	-								(及での手匠 田田)
史料名	妙法蓮華経巻	第一			員数	1巻			
材質・技法	紙本墨書	<u>+</u>	書写年代	平安	後期				
紙数	20	20 全長 992.7 紙高 24.5							なし
備考	装飾経。								

### 【表装】

表紙	表紙(縦 24.3、	横 20.8) は親	f補で紺地	、金切箔、	銀砂子を	線状に散	ならす。巻	緒は黄土	と草色で	・虫損あり。グ	双は竹か。
<b>衣</b> 瓶	金地の題箋に	:外題を記す	0								
原・補別 原装カ 軸長 27.0 軸端 形状 切り落とし、螺鈿											
軸	軸端 法量	天部 縦	1.3	地音	ß 縦	1.3	天部 貞	最大径	1.3	地部 最大領	1.2
	軸附様態等	本紙直継。									

### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	黄色 打紙	界線	:	銀界	修補	部	分裏打	
本文料紙	一紙 長	49.0	一紙 高	24.5	一紙	行数	26	一行	字数	17	
平义作瓶	界幅	1.9	界高	19.6	天相	闌高	2.4	地相	闌高	2.4	
	その他所見	巻末下部に「了本」の墨書あり。朱点あり。本紙裏にも銀砂子を散らす。									

### 【法量】

[[本土]															
紙順	表紙	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
紙長	20.8	46.7	49.0	49.3	49.0	49.2	48.6	49.0	49.2	49.2	49.0	49.1	49.2	49.3	49.3
行数	_	25	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
1・2 行頭字	_	妙	万子	睺衆	時眉	能以	諸我	未名	羅今	此有	供最	弗難	介陳	佛會	善聞
紙順	15	16	17	18	19	20									
紙長	49.3	49.1	49.1	49.0	49.1	41.2									
行数	26	26	26	26	26	22									

### 【内容】

1・2 行頭字

比如

樂縁

欲化

	外題	妙法蓮華経巻第一
	首題 (内題)	妙法蓮華経序品第一
	本文初行	如是我聞一時佛住王舎城耆闍崛山中與
	本文末行	随宣方便事 無復諸疑惑 心生大歓喜 自知當作佛
ĺ	尾題	妙法蓮華経巻第一
ĺ	該当箇所	大正蔵 262.09/1.c12 ~ 10b21

或或

以方

舎今

将非魔作佛 **乔時心自謂** 以是於日夜 以是我定知 安住方便中 其心安如海 開如是法音 是時乃可謂 世等知我心 等大衆中說我肯曾於二万億佛所為无上 疑悔永己盡 関佛柔軟音 无漏難思議 令照至道據 我本者那見 為諸於志師 府梯 被那就涅槃 舎利弗吾今於天人沙門婆羅門 您乱我心耶 疑悔悉已除 我聞疑納新 永盡城无餘 亦以方便說 亦好就是去 女住實智中 深遠一些微妙 引是唐作佛 演就如是法 現在未来佛 佛以種種移 佛統為去世 初聞佛所統 演暢清淨法 我堕疑納故 心尊就實道 今者世等 佛於大衆中 天 人夜又然 我悉除那見 於空法得證 我定當作佛 而為八自党非是實頭度 今聞佛音聲 随宜而統法 摩翰巧言就 **說我當作佛** 龍神等恭敬 為天人所敬 謂是魔 所為 被旬无此事 後生及出家 其数无有量 无量減度佛 心中大驚疑 我心大歡喜

第2紙 補筆部分

行からは「妙法蓮華経信解品第四」が書写される。 卷首 「妙法蓮華経譬喩品第三」から始まり、 第一五紙第五

の振仮名

(第一、四~六、九~一一、一三~二○紙) が認めら 補筆している。地辺にもシミに 表紙から第三紙の上下中 および墨

央にシミによる破損があり、

表紙の虫損は補修されていない。

よる汚れがある。

本文には朱の句切点(第一~九、一

五~一九紙)

【細目データ 11-2】

(長さの単位 cm)

13

50.6

28

及淺

14

50.6

28

若若

•	•								(及びの手匠 田川)
史料名	妙法蓮華経巻	第二			員数	1巻			
材質・技法	紙本墨書	紙本墨書 装丁·形態 巻子 書写年代							後期
紙数	22	全	長	24.5	識語	なし			
備考	装飾経。								

### 【表装】

12000											
表紙	表紙(縦 24.5、	横 20.6) は親	f補で紺地	也、金切箔、	銀砂子を	線状に散	ならす。巻	緒は黄土	と草色で	・虫損あり。八刃	は竹か。
<b></b>	金地の題箋に	外題を記す	5								
	原・補別	原装カ 軸長 26.8 軸端 形状 切り落とし、螺									鈿の装飾
軸	軸端 法量	天部 縦	1.2	地音	<b>阝縦</b>	1.2	天部 貞	最大径	1.2	地部 最大径	1.2
	軸附様態等	本紙直継。									

### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	黄色 打紙	界線	4	銀界	修補	部分	分裏打
** - 本- 本- 文化	一紙 長	50.6	一紙 高	24.5	一紙	行数	28	一行	字数	17
本文料紙	界幅	1.8	界高	19.6	天相	闌高	2.5	地標	制高	2.3
	その他所見	巻末下部に「「	了本」の墨書あ	り。朱点あり。	本紙裏	にも銀矿	少子を散らる	۲。		

### 【法量】

紙順	表紙	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
紙長	20.6	47.6	50.6	50.8	50.6	50.6	50.5	50.7	50.8	50.7	50.7	50.7	50.8
行数	_	27	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28
1・2 行頭字	_	妙	以无	餝黄	佛正	為弗	希車	知利	貪焼	子長	如其	住此	以一
紙順	15	16	17	18	19	20	21	22					
紙長	50.7	50.6	50.6	50.7	50.7	50.5	50.7	27.0					
行数	28	28	28	28	28	28	28	14					
1・2 行頭字	如亦	估國	使未	一未	菩教	何不	我我	諸无					

### 【内容】

外題	妙法蓮華経巻第二
首題 (内題)	妙法蓮華経譬喩品第三  二
本文初行	
本文末行	於一乗道 随宣説三
尾題	妙法蓮華経巻第二
該当箇所	大正蔵 262.09/10b22 ~ 19a12



第21 紙下部 手指指紋

は「妙法蓮華経化城喩品第七」が書写される。

行からは「妙法蓮華経授記品第六」が、第九紙第一二行から巻首「妙法蓮華経薬草喩品第五」から始まり、第五紙第二したものと推測される。

とつづく一紙分をまとめて切り落とし、新たな用紙を継ぎ足

表紙および第一・二紙の虫損の破損は補修されていない。表紙および第一・二紙の虫損の破損は補修されていない。本文には朱の句切点(第一、二、五~二〇紙)および墨の振本文には朱の句切点(第一、二、一五紙)が認められる。また第二紙第二三行では挿入符で「難」字を、第二〇紙第二行にあろう。第一二紙第一・二行第三字右にそれぞれ墨点や墨書が見えるが、汚れであろう。第一六、一八~二一紙下部に書が見えるが、汚れであろう。第一六、一八~二一紙下部に書による手指指紋の付着が多数認められる。第二二紙は界線がやや乱れ、界高もわずかに小さく第二一紙と地界がずれている。また第二一紙左端と第二二紙右端にそれぞれ縦界線がいる。また第二一紙左端と第二二紙右端にそれぞれ縦界線がいる。また第二一紙左端と第二二紙右端にそれぞれ縦界線がいる。また第二一紙左端と第二二紙右端にそれぞれ縦界線がいる。また第二一紙右端と第二一紙と地界がずれて重複している。このことから、書き損じた第二一紙

【細目データ 11-3】

(長さの単位 cm)

14 47.7 26 衆介

*····									(及さの年世 田田)
史料名	妙法蓮華経巻	第三			員数	1 巻			
材質・技法	紙本墨書	<u>r</u>	装丁	書写年代	平安	後期			
紙数	22	全	24.3	識語	なし				
備考	装飾経。								

### 【表装】

表紙	表紙(縦 24.3、	横 21.0) は親	「補で紺地	、金切箔、	銀砂子を	線状に散	ならす。巻	緒は黄土	と草色で	・虫損あり。八	贝は竹か。
12/14	金地の題箋に	外題を記す	0								
	原・補別	原装	カ	軸長		26.8		軸端	形状	切り落とし、蝟	細の装飾
軸	軸端 法量	天部 縦	1.2	地音	ß 縦	1.1	天部 貞	最大径	1.2	地部 最大径	1.2
	軸附様態等	本紙直継。									

### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	黄色 打紙	界線	:	銀界	修補	部	分裏打	
本文料紙	一紙 長	47.0	一紙 高	24.3	一紙	行数	26	一行	字数	17	
4 又 件 祇	界幅	1.8	界高	19.5	天相	闌高	2.4	地相	闌高	2.4	
	その他所見 墨書の振り仮名。朱書の句切点あり。本紙裏にも銀砂子を散らす。										

### 【法量】

紙順	表紙	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
紙長	21.0	44.7	47.0	47.5	47.6	47.5	47.6	47.9	47.6	47.7	47.6	47.7	47.6	47.7
行数	_	25	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
1・2 行頭字	_	妙	一阿	有是	貴正	漸妙	乃正	義諸	億小	於諸	我如	恭心	今相	南光
紙順	15	16	17	18	19	20	21	22						
紙長	47.6	47.7	47.5	47.5	47.9	47.5	45.6	34.2						
行数	26	26	26	26	26	26	25	18						
1・2 行頭字	同唯	不罪	恒而	諸其	時及	既等	無無	重汝						

### 【内容】

外題	妙法蓮華経巻第三
首題 (内題)	妙法蓮華経藥草喩品第五 三
本文初行	<b> 介時世尊告摩訶迦葉及諸大弟子善哉善</b>
本文末行	既知是息已 別入於佛慧
尾題	妙法蓮華経巻第三
該当箇所	大正蔵 262.09/19a13 ~ 27b9



七行からは「妙法蓮華経見宝塔品第十一」が書写される。

第 18・19 紙継目部分 天地界線の不連続 紙第二四行からは「妙法蓮華経法師品第十」が、第一三紙第紙第二四行からは「妙法蓮華経授学無学人記品第九」が、第八三紙第三行からは「妙法蓮華経授学無学人記品第九」が、第八本文には未の句数点(第一、一紙第九行では挿入符で「他」字を、第一三紙第二二行であろう。第一一紙第五:六行間に墨書が見えるが、汚れであろう。第一九紙の界線はやや太く乱れており、天地の界線は第一八紙の最末行とつづく一紙分をまとめて切り落とし、新たな用紙を継ぎ足したものと推測される。 巻首「妙法蓮華経五百弟子受記品第八」から始まり、第六本の開紙を継ぎ足したものと推測される。

【細目データ 11-4】

(長さの単位 cm)

表紙から第三紙の上下中央にシミによる破損があり、補筆し

表紙および第一・二紙の虫損の破損は補修されていない。

史料名	妙法蓮華経 巻	第四						員数	1巻
材質・技法	紙本墨書	<u>t</u>	装丁	· 形態		巻子	書写年代	平安	後期
紙数	19	全	長	91	7.0	紙高	24.4	識語	なし
備考	装飾経。								

### 【表装】

表紙	表紙(縦 24.3、	横 20.4) は新	「補で紺地	、金切箔、	銀砂子を	線状に散	らす。巻	緒は黄土	と草色で	・虫損あり。八	贝は竹か。
12/44	金地の題箋に	外題を記す。	)								
	原・補別	原装	カ	軸長		27.0		軸端	形状	切り落とし、蝟	細の装飾
軸	軸端 法量	天部 縦	1.2	地音	ß 縦	1.2	天部占	最大径	1.2	地部 最大径	1.2
	軸附様態等	本紙直継。									

### 【料紙】

	紙質	楮紙力	染色・加工	黄色 打紙	界線	銀界		修補 部		分裏打
** - 本- 本- 文化	一紙 長	47.3	一紙 高	24.4	一紙	行数	26	一行	字数	17
本文料紙	界幅	1.8	界高	19.6	天相	闌高	2.4	地棉	嗣高	2.4
	その他所見	〔紙厚〕0.1 巻	末下部に「了ス		。墨書の	の振り仮	名。朱書の	)返点あ	り。	

### 【注量】

【広里】															
紙順	表紙	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
紙長	20.4	44.5	47.3	47.8	47.8	47.7	47.5	47.7	47.6	47.5	47.6	47.6	47.7	47.3	47.5
行数	_	25	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
1・2 行頭字	_	妙	於人	以度	後行	索友	得及	我号	已欲	脩比	為現	如藥	薩華	不是	一重
紙順	15	16	17	18	19										
紙長	47.6	47.5	47.5	45.7	45.2										

### 【内容】

行数

1・2 行頭字

26

四盡

26

更獄

26

我悉

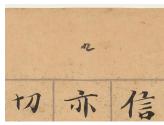
· · · · -	
外題	妙法蓮華経巻第四
首題 (内題)	妙法蓮華経五百弟子受記品第八 四
本文初行	<b>尒時富樓那弥多羅尼子從佛聞是智慧方</b>
本文末行	於恐畏世 能須臾説 一切天人 皆應供養
尾題	妙法蓮華経卷第四
該当箇所	大正蔵 262.09/27b10 ~ 34b22

25

處在

24

而若



第13紙 天欄



第 1 1 紙 天欄



第14紙 天欄



第12紙 天欄

(長さの単位 cm)

### 【細目データ 11-5】

	(長さの単位 cm)											
史料名	妙法蓮華経 巻	第五					員数	1 巻				
材質・技法	紙本墨書	ŧ i	平安	後期								
紙数	21	全長	100	00.3	紙高	24.4	識語	なし				
備考	装飾経。											

からは「妙法蓮華経従地涌出品第十五」が書写される。

### 【表装】

表紙	表紙(縦 24.5、	横 20.9) は親	「補で紺地	、金切箔、	銀砂子を	線状に散	ならす。巻	緒は黄土	と草色で	・虫損あり。八	以は竹か。
12/14	金地の題箋に	外題を記す	0								
	原・補別	原装	カ	軸長		27.0		軸端	形状	切り落とし、螺	!鈿の装飾
軸	軸端 法量	天部 縦	1.3	地音	ß 縦	1.2	天部 貞	最大径	1.3	地部 最大径	1.3
	軸附様態等	本紙直継。									

### 【料紙】

	紙質	楮紙力	染色・加工	黄色 打紙	界線		銀界	修補		分裏打
** - \$- \$0  VII.	一紙 長	47.5	一紙 高	24.4	一紙	行数	26	一行	字数	17
本文料紙	界幅	1.9	界高	19.5	天相	闌高	2.3	地相	闌高	2.5
	その他所見	〔紙厚〕0.1 墨	<b>書の振り仮名。</b>	朱書の返点あ	り。					

### 【法量】

紙順	表紙	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
紙長	20.9	45.0	47.5	47.7	47.7	47.7	47.6	47.7	47.7	47.7	47.5	47.5	47.5	47.4	47.6
行数	_	25	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
1・2 行頭字	_	妙	今具	従詣	是提	退薩	弥記	有悪	為訶	障法	若説	能亦	十於	與之	象或
紙順	15	16	17	18	19	20	21								
紙長	47.4	47.5	47.2	47.5	47.6	45.8	32.6								
行数	26	26	26	26	26	25	18								
1・2 行頭字	深諸	億万	世重	如是	所介	如於	此善								

### 【内容】

外題	妙法蓮華経巻第五
首題 (内題)	妙法蓮華経提婆達多品第十二 五
本文初行	<b></b>
本文末行	是無量菩薩 云何於少時 教化令發心 而住不退地
尾題	妙法蓮華経巻第五
該当箇所	大正蔵 262.09/34b23 ~ 42a28

衆生令人佛道作如是該諸善男子如来所 是人說我小出家得阿轉多羅三狼三菩提 子如來見諸衆生樂於小法德薄垢重者為 成亦已身成亦他身成亦已事或亦他事語 然我實成佛已來久遠若斯但以方便教化 方便說被妙法能令衆生發敬喜心諸善男 同年紀大小亦復現言當八涅縣又以種種 演經典皆為度斯衆生或就已身或就他身 等諸根利針随所應度處自就名字不

第2紙 補筆部分

紙第七行からは 紙第九行からは「妙法蓮華経随喜功徳品第十八」が、 第一五行からは「妙法蓮華経分別功徳品第十七」が、 校合の痕跡なのであろう。 同第二三行「善女人」の左傍に抹消符が付されているのは、 のであろう。第七紙第二一・二二行に文字の修正痕がある。 行では挿入符で「爐」字を補っているが、これは書写時のも 字を、第四紙第三行では挿入符で「服」字を、第六紙第一七 では挿入符で「処」字を、第三紙第一一行では挿入符で「虚」 上下中央にシミによる破損があり、 三、四、九、一二~一五、一八紙)が認められる。第二紙第七行 本文には朱の句切点 (第一~二〇紙) および墨の振仮名 (第 巻首「妙法蓮華経如来寿量品第十六」から始まり、 表紙の虫損の破損は補修されていない。 「妙法蓮華経法師功徳品第十九」が書写され 補筆している。 表紙から第 第一一 第五紙 紙

【細目データ 11-6】

(長さの単位 cm)

									(244 )
史料名	妙法蓮華経巻	第六						員数	1巻
材質・技法	紙本墨書	ţ	装丁・形態			卷子	書写年代	平安	後期
紙数	20	全	長	96	7.0	紙高	24.4	識語	なし
備考	装飾経。								

### 【表装】

表紙	表紙(縦 24.3、	紙(縦 24.3、横 20.3)は新補で紺地、金切箔、銀砂子を線状に散らす。巻緒は黄土と草色で虫損あり。八双は竹か。										
12/14	金地の題箋に	外題を記す	0									
	原・補別	原装	カ	軸長		26.9		軸端	形状	切り落とし、螺	鈿の装飾	
軸	軸端 法量	天部 縦	1.2	地音	ß 縦	1.2	天部占	最大径	1.2	地部 最大径	1.2	
	軸附様態等	本紙直継。										

### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	黄色 打紙	界線		銀界	修補	部分	分裏打
* + 401 VIII.	一紙 長	47.8	一紙 高	24.4	一紙	行数	26	一行	字数	17
本文料紙	界幅	1.8	界高	19.6	天相	闌高	2.5	地棉	嗣高	2.4
	その他所見	〔紙厚〕0.1 墨	豊書の振り仮名。	朱書の返点あ	り。					

### 【法量】

紙順	表紙	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
紙長	20.3	45.0	47.8	47.7	47.8	47.7	47.7	47.7	47.7	47.8	47.7	47.4	47.7	47.6	47.7
行数	_	25	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
1・2 行頭字	_	妙	成祇	佛貪	好作	我寶	訶四	復或	於弥	崛娑	邊種	忍遠	銀馬	可徳	舌為
紙順	15	16	17	18	19	20									
紙長	47.7	47.5	47.6	47.6	47.7	43.6									
行数	26	26	26	26	26	24									

### 【内容】

1 · 2 行頭字

三皆

聲鐘

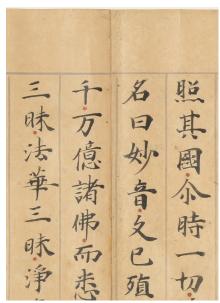
念是

外題	妙法蓮華経巻第六
首題 (内題)	妙法蓮華経如来壽量品第十六 六
本文初行	<b>尒時佛告諸菩薩及一切大衆諸善男子汝</b>
本文末行	能以千万種 善巧之語言 分別而演説 持法華経故
尾題	妙法蓮華経卷第六
該当箇所	大正蔵 262.09/42a29 ~ 50b22

或菩

皆遍

意達



第 14・15 紙 筆跡の変化

表紙および第一紙の虫損の破損は補修されていない。表紙を第二紙の上下中央、および第一紙天地にシミがある。第一二二、一六紙)が認められる。第一三紙第一七行では挿入符で「徳」字を補っているが、これは書写時のものであろう。第一五紙より筆跡が異なる。第一○紙の界線はややあろう。第一五紙より筆跡が異なる。第一○紙の界線はやや太く、線の揺れが見られる。第一○紙の界線はやや太く、線の揺れが見られる。第一○紙の界線はやや太く、線の揺れが見られる。第一○紙の界線はやや太く、線の揺れが見られる。第一○紙の界線はやや太く、線の揺れが見られる。第一○紙第三行からは「妙法蓮華経嘱累品第二十二」が、第八紙第二六行からは「妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三」が、第二四紙第一七行からは「妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三」が、第二四紙第一七行からは「妙法連華経ッ音菩薩品第二十四」が

【細目データ 11-7】

(長さの単位 cm)

*·····								(及び9年世 日日)
史料名	妙法蓮華経 巻	第七					員数	1巻
材質・技法	紙本墨書	書 著	装丁・形態		卷子	書写年代	平安	後期
紙数	19	全長	93	1.7	紙高	24.4	識語	なし
備考	装飾経。							

書写される。

### 【表装】

表紙	表紙(縦 24.4、	横 20.7) は親	f補で紺地	也、金切箔、	銀砂子を	線状に散	ならす。巻	緒は黄土	と草色で	・虫損あり。八	双は竹か。			
<b>衣</b> 瓶	金地の題箋に	位の題箋に外題を記す。												
	原・補別	原装	カ	軸長		27.1		軸端	形状	切り落とし、	累鈿の装飾			
軸	軸端 法量	天部 縦	1.3	地音	ß 縦	1.2	天部 貞	最大径	1.3	地部 最大径	1.3			
	軸附様態等	本紙直継。												

### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	黄色 打紙	界線	:	銀界	修補	部分	分裏打
本文料紙	一紙 長	49.2	一紙 高	24.4	一紙	行数	26	一行	字数	17
<b>平</b> 又 件 祇	界幅	1.9	界高	19.1	天相	闌高	2.3	地相	嗣高	2.4
	その他所見	巻末下部に「丁	「本」の墨書あ	り。墨書の振り	仮名。	朱書の説	医点あり。			

### 【法量】

紙順	表紙	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
紙長	20.7	46.4	49.2	49.3	49.1	49.1	49.1	49.1	49.2	49.3	49.1	49.3	49.3	49.2	49.0
行数	_	25	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
1・2 行頭字	_	妙	悉慢	於菩	不得	放寶	功法	教於	寶諸	佛三	説在	等浄	山為	是種	宿滅
紙順	15	16	17	18	19										
紙長	49.2	49.5	49.3	49.2	28.1										
行数	26	26	26	26	15										

### 【内容】

1・2 行頭字

外題	妙法蓮華経巻第七
首題 (内題)	妙法蓮華経常不軽菩薩品第二十 七
本文初行	
本文末行	無生法忍華徳菩薩得法華三昧
尾題	妙法蓮華経巻第七
該当箇所	大正蔵 262.09/50b23 ~ 56c1

身現

所種

寶是

五多

千三

上下中央、

第一六・一七紙の上下中央に白カビによる傷みがおよび第一紙下半にシミがある。第七紙天辺に破

の虫損の破損は補修されていない。



第6紙 句切点と振仮名

【細目データ 11-8】

(長さの単位 cm)

表紙から第

紐紙

史料名	妙法蓮華経巻	第八		員数	1巻				
材質・技法	紙本墨書	t i	装丁	形態		巻子	書写年代	平安	後期
紙数	17	全	長	79	4.6	紙高	24.4	識語	なし
備考	装飾経。								

一十八」が書写される。

### 【表装】

表紙	表紙(縦 24.4、	横 20.4) は新	<b>「補で紺地</b>	、金切箔、	銀砂子を	線状に散	ならす。巻	緒は黄土	と草色で	・虫損あり。八	贝は竹か。
12/44	金地の題箋に	外題を記す。	)								
	原・補別	原装カ		軸長	27.0			軸端	形状	切り落とし、螺	鈿の装飾
軸	軸端 法量	天部 縦	1.2	地音	ß 縦	1.2	天部占	最大径	1.3	地部 最大径	1.3
	軸附様態等	本紙直継。									

### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	黄色 打紙	界線	4	銀界	修補	部分	分裏打
** - 本- 本- 文化	一紙 長	47.6	6 一紙 高 24.4 一刹		一紙	行数	26	一行	字数	17
本文料紙	界幅	1.8	界高	19.5	天相	闌高	2.4	地棉	嗣高	2.4
	その他所見	巻末下部に「「	了本」の墨書あ	り。墨書の振り	仮名。:	朱書の説	区点あり。			

### 【法量】

紙順	表紙	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
紙長	20.4	45.2	47.6	47.5	47.5	47.4	47.3	47.2	47.3	47.3	47.5	47.2	47.7	47.2	47.6
行数	_	25	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
1・2 行頭字	_	妙	言世	力國	衆是	或呪	百其	介誦	有介	何香	爪告	難堪	通世	於可	茶諸
紙順	15	16	17												
紙長	47.2	47.4	18.1												
行数	26	26	10												

### 【内容】

1・2 行頭字

寫如

大経

外題	妙法蓮華経卷第八
首題 (内題)	妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五 八
本文初行	尒時無盡意菩薩即從座起偏祖右肩合掌
本文末行	語作礼而去
尾題	妙法蓮華経卷第八
該当箇所	大正蔵 262.09/56c2 ~ 62a29

### 【細目データ 12-1】

(長さの単位 cm)

周に草花模様の更紗を貼り、

正倉院宝物「鳥毛篆書屛風」と類似している。おそらく、明治期の古物趣味によるものだ

塔陀羅尼)」五点、その他、墨摺経、印仏三点、仏画六点、染織品・仏具を包んでいたと

交ぜられている。仏教関係の古物が多く、写経断簡四五点、「無垢浄光大陀羅尼経(百万

六枚のパネルを革ひもでつなぎ合わせ、六曲一双とした屛風に、一○三点の古物が貼り

みられる麻布、鎧の残欠等である。現状の装丁となった時期は不明ながら、各パネルの四

左右の端、上下に開けた孔に染皮の紐を通して結ぶ手法は、

史料名	古経貼る	を屏	風	員数	6曲1双							
材質・技法	_		装丁	・形態	・形態 貼交屏風 制作年代 明治時代							
点数	52	_	一扇	縦 109.	5、横 49.4、	1扇の厚さ	1.6					
備考	第一扇、	右	端の縁	はに屏風	と屏風を結。	ぶ金具が2	つあり。					

### 【細目データ 12-2】

(長さの単位 cm)

史料名	古経貼る	を屏	風	員数	6曲1双					
材質・技法	_		装丁	・形態	貼交屏風	制作年代	明治時代			
点数	51	_	一扇	縦 109.	5、横 49.4、	1扇の厚さ	1.6			
備考	第六扇、	5六扇、左端の縁に屏風と屏風を結ぶ金具と紐がそれぞれ2つあり。								

### 【細目データ 12-1-101】

(長さの単位 cm)

史料名	增壱阿含治	径者	員数	1点					
材質・技法	紙本墨	装丁	・形態		断簡	書写年代	奈良	L時代	
紙数	1 全長			43	.1	紙高	26.9	識語	なし
備考	_								

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面裏打	
	一紙 長	_	一紙 高	26.9 一紙 行梦		行数 一		一行 字数		16
本文料紙	界幅	2.0	界高	20.9	天欄高 3.0			地根	高	3.0
	その他 所見	写本。	白書、白点あ	<b>b</b> 。						

### 【法量】

紙順	1
紙長	43.1
行数	21
1・2 行頭字	是无

### 【内容】

本文初行	是謂名為見彼云何无明流所謂无明者
本文末行	奉行
該当箇所	大正蔵 125.02/672b29 ~ c21

### № 12 - 1 - 101 増壱阿含経 巻第二三

行目の上部および中部に虫損が散見されるが補修され裏打がなされる。字で五カ所補う。朱でヲコト点が施され、白書、白点が多数みられる。本紙一行目から七墨でごく細い単線の界線を引く。筆跡は、濃墨で払いが肉太である点が特徴的。欠字を小本来の一紙より左右が詰まっていると思われるが、現状二一行、一行一六文字である。

「南無阿弥陀□□□

∠法□□」と墨書され、金泥で霞の模様、あるいは料紙装飾が施さ(睾ゥ)

れているか。何等かの表紙の残欠か、あるいは札か、不明である。

金剛般若集験記巻中の断簡。

唐・孟献忠が開元六年(七一八)に撰しアジアに広く普及し

### 【細目データ 12-1-106】

【細目データ	【細目データ 12-1-106】 (長さの単位 cm)											
史料名	名号墨書		員数	1点								
材質・技法	紙本墨	書装丁	室町町	寺代カ								
紙数	1	識語	なし									
備考	_											

### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	金箔	界線	な	L	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	_	一紙	行数	_	一行	字数	_
本文料紙	界幅	_	界高	_	天棉	閘高	_	地欄	高	_
	その他 所見	_								

### 【細目データ 12-1-107】

【細目データ 12-1-107】 (長さの単位 cm)										
史料名	金剛般若集験記 巻中 員数 1点									
材質・技法	紙本墨	書	装丁·形態 断簡 書写年代					平安時代カ		
紙数	1	全县	全長 26.5 紙高 25.8					識語	なし	
備考 本紙右端に幅 0.3cmの剥がし取り痕あり。白墨による注記あり。										

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	25.8	一紙	行数	_	一行	字数	約 22
本文料紙	界幅	2.1	界高	21.9	天欄高		1.3	地欄高		3.0
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	26.5
行数	12
1・2 行頭字	縷門

### 【内容】

本文初行	樓説陣文達者梓州郪縣人也身有騎都尉勲毎於 州□
本文末行	須弥地變神是天開聖池非定非慧斯□取斯
尾題	金剛般若集験記巻中
該当箇所	_

思われる糊跡がある。現状は裏打が施される。 巻下は功徳と誠応の計六篇、全七○章からなる。本品は、薄墨単線の界線をもつ一二行の断簡。 た『金剛般若経』の霊験説話を集めたもので全三巻。巻上は救護と延寿、巻中は滅罪と神力、 れており、一行の文字数は不明ながら現状二二字を数える。右端には紙を継いだ時のものと 一三行の断巻となる。総じて虫損や水損などによる欠損が甚だしく、特に下部は大きく失わ 一行目下部および一二行目との間に、淡墨別筆で巻中の本文が記され、これを入れると全

### 【細目データ 12-1-109】

(長さの単位 cm)

裏打ち補修がなされる。版の文字の線は太く滲みがみられる。

に貼付された五点の他に、七一点が確認されている〔増田 二〇〇七〕。

本品は「相輪陀羅尼」である。冒頭に大きな折れ、および上部に大きな欠損があるが、

小塔の中に納められたものが、いわゆる百万塔陀羅尼と呼ばれるもの。当館には、本屛風

『続日本紀』宝亀元年(七七〇)四月戊午条に、百万塔を諸寺に分置するとある。

史料名	無垢浄光	大陀	羅尼経	員数 1点					
材質・技法	紙本墨	摺	装丁・形態		断簡	書写年代	奈良時代		
紙数	2	全	長	長 40.0		紙高	紙高 5.5		なし
備考	相輪陀羅	相輪陀羅尼。							

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	な	L	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	5.5	一紙	行数	_	一行	字数	5
本文料紙	界幅	_	界高	_	天欄高 —		地欄高			
	その他 所見	第一紙	は空。							

### 【法量】

紙順	1	2
紙長	3.5	36.5
行数	_	23
1・2 行頭字	_	無相

### 【内容】

首題	無垢浄光経/相輪陀羅尼					
本文初行	唵引一薩婆怛					
本文末行	引牛莎引訶					
該当箇所	大正蔵 1024.19/719a10 ~ a16					

### 【細目データ 12-1-201】

(長さの単位 cm)

史料名	無垢浄光	大陀絜	羅尼経		員数 1点					
材質・技法	紙本墨	摺	装丁	装丁・形態		断簡	書写年代	奈良時代		
紙数	2	全	全長 42.9			紙高	5.0	識語	なし	
備考	自心印陀	自心印陀羅尼。								

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線な		l	修補	全面	i裏打
	一紙 長	_	一紙 高	5.0	一紙	行数	_	一行	字数	5
本文料紙	界幅	_	界高	_	天欄高		_	地欄高		_
	その他 所見	第一紙	は空。							

### 【法量】

紙順	1	2
紙長	0.8	42.1
行数	_	31
1・2 行頭字	_	無自

### 【内容】

首題	無垢浄光経/自心印陀羅尼
本文初行	南謨薄伽伐
本文末行	言可另一
該当箇所	大正蔵 1024.19/719c27 ~ 720a6

なされる。版の文字の線は太く滲みがみられる。墨摺。「自心印陀羅尼」である。冒頭に大きな折れ、および欠損があるが、裏打補修が

(長さの単位 cm)

五月一日経と推測される [市川 二〇二四]。

で示した。註楞伽経は他に№12-2-20と№13-4があるが、本品は文字がやや小ぶりなの優品といえる。なお註楞伽経は大正蔵に翻刻されていないため、「該当箇所」は楞伽経筆跡は濃墨で筆先まで神経の行き届いた筆力のある線で、唐風を能く受け継いだ奈良時代

による注釈を加えた経典。一行一三文字を基本とし、注は細字で二行の割注の形式をとり、

註楞伽経は「楞伽阿跋多羅宝経(楞伽経)」(求那跋陀羅訳)の経文に、大敬愛寺の智厳

行に一七文字である。本品は一紙一九行の断簡で、極小の虫穴、貼紙による修正がある。

史料名	註楞伽経	卷	第六					員数	1点
材質・技法	紙本墨	書	書 装丁·形態 断簡 書写年代					奈良時代	
紙数	1	全	長	41.	4	紙高	26.7	識語	なし
備考	本紙右端	本紙右端に幅 0.2cmの剥がし取り痕あり。							

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面	i裏打
	一紙 長	_	一紙 高	26.7 一紙 行数		_	一行	字数	13	
本文料紙	界幅	2.1	界高	19.7	天榻	同高	3.2	地欄	高	3.6
	その他 所見	6 行目 とあり。	「誡」の右に	に白い組	氏片を見	貼り、	その	上に墨	書で	「識」

### 【法量】

紙順	1
紙長	41.4
行数	19
1・2 行頭字	死聞

### 【内容】

本文初行	死大慧真實義者従多
本文末行	愛業妄想為縁生諸世間
該当箇所	大正蔵 670.16/507a10 ~ a21

### 【細目データ 12-1-206】

(長さの単位 cm

								(	(長さの単位 cm)
史料名	仏説大報	父母点	恩重経	員数 1点					
材質・技法	紙本墨	摺	装丁・形態 断簡 書写年代				書写年代 室町前期		
紙数	1	全	長	19	.7	紙高	識語	なし	
備考	裏面に墨	書あり	<b>b</b> 。						

### 【料紙】

_										
	紙質	楮紙	染色・加工	_	界線	匡	郭	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	24.4	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	_	— 界高 20.6 天欄高 1.5 地欄高							
	その他 所見	虫喰痕	多数あり。							

### 【法量】

紙順	1
紙長	19.7
行数	5
1・2 行頭字	白人

### 【内容】

本文初行	白佛言世尊如来是三界大師四生慈父衆
本文末行	爺孃吾令礼拝
該当箇所	_

### 版本「仏説大報父母恩重経」の断簡で挿絵 No. 12 - 1 - 206 仏説大報父母恩重経

または「仏説父母恩重難報経」ともいい、父母の恩の広大なことを説く中国の偽経。M12版本「仏説大報父母恩重経」の断簡で挿絵を伴う。「仏説大報父母恩重経」は「父母恩重経」

六月二十七日大平藤光國」の刊記のある類品がある。

1−30、№12−2−50も「仏説大報父母恩重経」である。京都国立博物館に「明徳壬申

407の連れとみられ、本品の後、数紙を経て№12-1-40となる。

虫損甚だしく、補修していない虫損が多い。書風や界線、紙の状態などから、

一行一

七文字のみの断簡。

左右の界線はみられないが、天地に薄墨の線がみえる。

### 【細目データ 12-1-207】

細目アータ 12-1-207   (長さの単位 cm)										
史料名	大般若波羅蜜多経 巻第八一               員数   1 点									
材質・技法	紙本墨	書 装	長丁・形態	奈良	時代					
紙数	1	1 全長 1.5 紙高 27.6 識語 なし								
備考	No. 12-1-40	0.12-1-407 と一連のもの。								

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	27.6	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	_	界高	20.3	天棉	閘高	3.2	地榻	高	3.0
	その他 所見									

### 【法量】

紙順	1
紙長	1.5
行数	1
1・2 行頭字	都

### 【内容】

本文初行	都不可得天子當知如有二人處一山谷各
本文末行	_
該当箇所	大正蔵 220.05/454b27 ~ b28

### 【細目データ 12-1-209】

(長さの単位 cm)

本品を貼り、さらに屛風に貼る。

史料名	舎利弗阿毘曇論 巻第一○(光覚知識経)    員数  1点								
材質・技法	紙本墨	書	書 装丁・形態 断簡 書写年付				書写年代	奈良	時代
紙数	1	全:	長 19.6		.6	紙高	24.0	識語	なし
備考	No. 12-1-3	No. 12-1-301 と一連のもの。							

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	墨界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	24.0	一紙彳	亏数 —	一行	字数	17
本文料紙	界幅	2.0	界高	_	天欄?	高 —	地欄	高	_
	その他 所見	天・地	破損のため、	金箔地	が目立	つ。			

### 【法量】

紙順	1
紙長	19.6
行数	10
1・2 行頭字	縁不

### 【内容】

本文初行	縁知縁解縁受縁即无明縁行行縁識如□					
本文末行	名定心以心定身					
該当箇所	大正蔵 1548.28/618c24 ~ 619a4					

跡は比較的肉太だが、擦れや鋭角的な線もみられる。天地ともに欠損甚だしく、金箔地にかいは、「舎利弗阿毘曇論」は正量部系の論書(仏教の教説を解説した書物の総称)。正量部とは「舎利弗阿毘曇論」は正量部系の論書(仏教の教説を解説した書物の総称)。正量部とは「舎利弗阿毘曇論」は正量部系の論書(仏教の教説を解説した書物の総称)。正量部とは「舎利弗阿毘曇論」は正量部系の論書(仏教の教説を解説した書物の総称)。正量部とは「舎利弗阿毘曇論」は正量部系の論書(仏教の教説を解説した書物の総称)。正量部とは「舎利弗阿毘曇論」は正量部系の論書(仏教の教説を解説した書物の総称)。正量部とは

# №12-1-209 舎利弗阿毘曇論 巻第一○(光覚知識経)

光覚知識経とは光覚が願主となり、畿内地域の知識 (寄進者) を結集して書写された一切経。

### 【細目データ 12-1-301】

(長さの単位 cm)

史料名	舎利弗阿	可毘索	曇論	巻第-	-0	員数 1点			
材質・技法	紙本墨	書	装丁	形態		断簡	書写年代	奈良時代	
紙数	2	全	<b>全長</b>	37.	.7	紙高	25.0	識語	あり
備考	光覚知語	哉経』	顔文あ	り。天	平宝	字6年(76	62)10月7日。	اء 12-1-209	一連のもの。

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色·加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面 3 /	
المار مل مار	一紙 長	_	一紙 高	25.0	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	2.1	界高	20.0	天欄	高	3.1	地榻	高	1.4
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1	2
紙長	14.7	23.0
行数	7	9
1・2 行頭字	種一	廣

### 【内容】

本文初行	種種神足波受種種无量神足能動大地以
本文末行	廣説
尾題	舎利弗阿毗曇非問分念品第六 巻十
該当箇所	大正蔵 1548.28/619c11 ~ c19

### 【細目データ 12-1-302】

(長さの単位 cm)

見えるが、知識の名前は経巻によって異なる。本品の願文には「天平實字六年十月七日/願びつき個人的な祈願のために参加する者が増えた[勝浦 一九八五]。識語に光覚の名前が当初は同四年六月七日に崩御した光明皇太后のための書写であったが、次第に民間信仰と結二九点ほど確認される。識語の年紀は天平宝字五年(七六一)三月から同六年一〇月までで、

主僧光覺/秦連鵜根子/物部連長女/物部連飯良子/度津臣家守/物部連志都子」とある。

本紙は虫損、水損がある。上下は裏打紙も含め欠損が認められる。願文の書は別筆。

史料名	仏説大報	父母点	恩重経		員数	1点			
材質・技法	紙本墨	摺	装丁	装丁・形態		断簡	出版年代	室町	前期
紙数	1	全	長	8.	8	紙高	24.7	識語	なし
備考	絵の部分	会の部分は縦 21.0、横 6.5。							

### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	_	界線	匡	郭	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	24.7	一紙	行数	_	一行	字数	_
本文料紙	界幅	_	界高	21.2	天机	閘高	1.7	地欄	高	1.8
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	8.8
行数	1
1・2 行頭字	身

### 【内容】

本文初行	身焦爛猶不能報父母深恩
本文末行	_
該当箇所	_

№12-1-20を参照。 版本「仏説大報父母恩重経」の断簡で挿絵を伴う。「仏説大報父母恩重経」については

### 【細目データ 12-1-303】

(長さの単位 cm)											
史料名	大方広仏華厳経 巻第五二 (二月堂焼経) 員数 1点										
材質・技法	紺紙銀	字	装丁・ 形態				書写 年代	奈良時代			
紙数	2	全	長	25	.2	紙高	25.6	識語	なし		
備考	_										

### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色· 加工	紺色	界線	銀	界	修補	全裏	
本文料紙	一紙長	_	一紙 高	最大 25.6	一行		1	一个字		17
平义符机	界幅	2.0	界高	_	天欄	高	3.3	地欄	高	
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1	2
紙長	5.5	19.7
行数	3	10
1・2 行頭字	法蜜	應一

### 【内容】

装丁・升

全長

No. 12-2-411 と一連のもの。

本文初行	法輪建立法幢制諸外道脩菩薩行力波羅
本文末行	諸波羅蜜化度衆生顕現菩薩一切功徳化
該当箇所	大正蔵 278.09/725a19~b3

### 【細目データ 12-1-306】

偈頌断簡

1

紙本墨書

史料名

材質・技法

紙数

備考

			員数	1点	
形態	断簡	書写年代	鎌倉~雪	宦町時代	
11.0	紙高	31.3	識語	なし	

が報告された。二月堂焼経は他に奈良国立博物館本などが知られる。

白いシミは、二月堂の消火活動により、

銀が水に溶け出してイオン化したものであること

(長さの単位 cm)

本紙中に散見される

る「二月堂焼経」の断簡。最近、根津美術館本の解体修理がなされ、

本品は、寛文七年(一六六七)に二月堂が全焼した際、焼け跡から発見された、いわゆ

体を金箔で縁取った台紙に貼るため、

銀泥で経文を書写し、界線も同じく銀泥である。二紙一三行の断簡で、一行の文字数は

六○巻本華厳経の巻第五二。現存する奈良時代唯一の銀字経。

楮紙を紺に染めた紺紙に

七文字。上部には損傷はないが、下部は焼失しており、紺紙の裏打が見える。さらに全

四隅に金箔が見える。

### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	なし	界線	な	l	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	31.3	一紙 行数		_	一行 字数		14
本文料紙	界幅	_	界高	_	天棉	嗣高	_	地根	高	_
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	11.0
行数	2
1・2 行頭字	失電

### 【内容】

本文初行	失無常波 風燈抱命 減必□嵐
本文末行	電光世間 成浮雲貯
該当箇所	弘法大師全集 5-295 (右記参照)

### № 12 - 1 - 306 偈頌断簡

つ五句が二行に行書体で書写される。紙や墨にスレが認められ全体に劣化している。法大師全集』第五輯二九五頁、吉川弘文館・六大新報社、一九一○)。紙本墨書。四字ず成浮雲貯」とある。文字の異同はあるが『弘法大師勧発修行記』の一節(祖風宣揚会編『弘本品は№12 - 2 - 41と一連の経文で、「失無常波 風燈抱命 滅必 □ 嵐/電光世間

地の界線の枠をはみ出している文字が比較的目立つ。書風や界線、紙の状態などから、No

一六行の断簡。一行一七文字。界線は薄墨の単線。伸びやかな楷書で書写される。天、

12−1−10の連れとみられ、№12−1−10の左方に五行分の脱落を挟んで本品が接続する

と思われる。

### 【細目データ 12-1-401】

(長さの単位 cm)

史料名	海龍王経	卷第	<b>育一</b>	員数	1点					
材質・技法	紙本墨	書 装丁・形態 断簡 書写年代						奈良	時代	
紙数	1	全	長	37	.5	紙高	27.4	識語	なし	
備考	No. 12-1-51	To 12-1-510 と一連のもの。								

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	部分	·裏打
	一紙 長	_	一紙 高	27.4	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	2.4	界高	23.2	天机	嗣高	2.2	地桐	高	2.1
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	37.5
行数	16
1・2 行頭字	離尊

### 【内容】

本文初行	離諸佛何等八常念諸佛供養如来嗟歎世
本文末行	将護諸縁諸佛世尊皆由清浄而成道徳除
該当箇所	大正蔵 598.15/133a15 ~ b3

### 【細目データ 12-1-403】

(長さの単位 cm)

史料名	梵字	字										
材質・技法	網本墨書 装丁・形態 断簡 書写年代							鎌倉~室町時代				
紙数	1	全	全長		20.0 紙高		21.2	識語	なし			
備考	_											

### 【料紙】

本文料紙	紙質	絹	染色・加工	不明	界線	なし	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	_	一 一紙 行数		一行 字数		_
	界幅	_	界高	_	天欄	高 —	地欄高		_
	その他 所見	_							

濃い色の肌裏が露出している部分もある。M1-2-50も梵字である。 絹本に「吽」の一字が墨書される。本紙料絹は痛みが激しく、墨の部分の絹も劣化し、

版の文字は最も鮮明である。百万塔陀羅尼についてはM2-1-19を参照。

「自心印陀羅尼」を記す。上部に虫損あり、天地左右とも欠損がみられ、状態はよくないが、

### 【細目データ 12-1-404】

【細目データ 12-1-404】 (長さの単位 cm)												
史料名	無垢浄光	無垢浄光陀羅尼経(百万塔陀羅尼) 員数 1点										
材質・技法	紙本墨摺 装丁·形態 断簡 書写年代							奈良時代				
紙数	1	全	長	24	.7	紙高	6.0	識語	なし			
備考	自心印陀	自心印陀羅尼。										

### 【料紙】

本文料紙	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線な		l	修補	全面裏打	
	一紙 長	_	一紙 高	6.0 一紙 行数		_	一行 字数		5	
	界幅	一 界高 一 天欄高 一 地欄高							高	_
	その他 所見	本紙右:	本紙右端大破、虫穴あり。							

### 【法量】

紙順	1
紙長	24.7
行数	20
1・2 行頭字	泥埵

### 【内容】

本文初行	泥□菩□□
本文末行	हिंग <b>ड</b> ि
該当箇所	大正蔵 1024.19/719c29 ~ 720a6

### 【細目データ 12-1-407】

(長さの単位 cm)

史料名	大般若波	大般若波羅蜜多経 巻第八一										
材質・技法	紙本墨	書	装丁	・形態		断簡	書写年代	奈良時代				
紙数	1	全	全長		4	紙高	26.5	識語	なし			
備考	No. 12-1-20	0.12-1-207 と一連のもの。										

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	部分	·裏打
本文料紙	一紙 長	_	一紙 高	26.5	一紙 行数		_	一行 字数		17
	界幅	1.8	界高	20.4	天棉	嗣高	3.0	地榻	高	3.1
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	9.4
行数	5
1・2 行頭字	可施

### 【内容】

本文初行	可説故尊者善現所説法中不施設色處不
本文末行	何以故眼界性等不可説故尊者善現所説
該当箇所	大正蔵 220.05/456a27 ~ b3

1-207と一連とみられる。 の状況などから、補修跡が三種類認められ、複数回修復されたことが推測される。№12-五行、 一行一七文字が記された断簡。 淡墨の単界線がある。虫損が激しく、虫穴の繕い

段上部も同様に朱の印仏の下に名号が墨書される。名号は右上より「南无光照佛

佛」とあり、判読の困難な文字の横に注記がある。

徳佛/南无令喜佛

南无不虚行佛∕南无滅□佛

南无上色佛/南无善□佛 南无大音讃

南无香 下

四行の断簡。

二段に分かれ、

上段上部に朱の印仏、

次いで五字または六字の名号が、

### No. 12 I 1 ı 501 仏本行経

卷第

### 【細目データ 12-1-408】

(長さの単位 cm)

史料名	仏名経	巻第3	Ē0		員数	1点					
材質・技法	紙本墨	紙本墨書 装丁・形態 断簡 書写年代 鎌倉~室町時代									
紙数	1	全	長	7.8		紙高	26.6	識語	なし		
備考	紙背に墨	既背に墨書あり。朱の印仏部分の法量は縦 2.4、横 1.8cm。									

### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	i 裏打
	一紙 長	_	一紙 高	26.6	一紙	行数	_	一行	字数	10、1
本文料紙	界幅	2.0	界高	21.0	天植	嗣高	3.2	地桐	同高	2.4
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	7.8
行数	4
1・2 行頭字	南南

### 【内容】

本文初行	南无光照佛 南无香徳佛
本文末行	南无善□佛 南无大音讃佛
該当箇所	大正蔵 441.14/299a13 ~ a15

### 【細目データ 12-1-501】

		_						(;	長さの単位 cm)			
史料名	仏本行紹	丛本行経 巻第一										
材質・技法	紙本墨書 装丁·形 断簡 書写年代							平安時	寺代カ			
紙数	2	2 全長 44.0 紙高 27.1 識語 なし										
備考	第1紙と	育1紙と第2紙の間に欠落あり。										

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色·加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	i裏打
المار مار المار مار	一紙 長	_	一紙 高	27.1	一紙	行数		一行	字数	16 ~ 20
本文料紙	界幅	2.0	界高	19.6	天欄	高	3.5	地欄	高	3.9
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1	2
紙長	19.1	24.9
行数	10	13
1・2 行頭字	梵察	解愚

### 【内容】

本文初行	梵志黙然 心思斯須 謙遜卑聲 啓白天王
本文末行	即呼弟子来 汝莫如吾誤 以徒託太子 阿 夷辞還退
該当箇所	大正蔵 193.04/60a28 ~ b11 61b20 ~ c16

劣化あるいは焼け焦げなどの痕跡が認められる。 られるが、伸びやかな書である。なお全体に大きな丸いシミ跡がみとめられ、上部は経年 第二紙は一三行、一行二○文字。界線は淡墨の単界。特に二紙の文字は大きく天地の界を は「解脱衆生禪」から始まり、この間に欠落が認められる。第一紙は一○行、一行一六字。 本品は二紙のみの断簡で、 はみ出す。筆跡は総じて左右の払いが大きく、 「仏本行経」は劉宋(四二○~四七九)の法雲の訳。全七巻。釈迦一代の行状を記したもの。 第一紙末尾に「佛本行経阿夷決疑品第六」とあり、 一行の中での中心がばらつく傾向が若干み 第二紙冒頭

### 【細目データ 12-1-506】

(長さの単位 cm)

史料名	成唯識論	卷第	<b>第九</b>	員数	1点						
材質・技法	紺紙金	#紙金字 装丁・形態 断簡 書写年代 平安後期カ									
紙数	1	1 全長 9.9 紙高 26.0						識語	なし		
備考	_										

### 【料紙】

	<b>紙質</b>		染色・加工	紺色	界線	銀	界	修補	な	·l
	一紙 長	_	一紙 高	26.0	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	1.8	界高	19.5	天棉	嗣高	3.1	地根	高	3.4
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	9.9
行数	5
1・2 行頭字	七等

### 【内容】

本文初行	七轉識内随其所應或少或多如煩惚説眼
本文末行	不相應故煩惚障中此障必有彼定用此為
該当箇所	大正蔵 1585.31/48c13 ~ c18

### 【細目データ 12-1-507】

(長さの単位 cm)

とが判明する。

史料名	大方広仏	大方広仏華厳経 巻第六九 員数 1点										
材質・技法	紙本墨	書	装丁	・形態		断簡	書写年代	奈良	時代			
紙数	1	全	長	8.	識語	なし						
備考	備考 No. 12-2-301 と一連のもの。											

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	27.5	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	2.1	界高	21.9	天棉	嗣高	2.6	地榻	高	3.0
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	8.8
行数	4
1・2 行頭字	及心

### 【内容】

本文初行	及以菩薩所修苦行所持正法皆悉堅固其
本文末行	解忍諸法性能諦思惟行精進波羅蜜起一
該当箇所	大正蔵 279.10/374c22 ~ c26

酷似し、加えて虫穴の様態が一致することから、本品の右方に№12-2-30が接続するこ紙にまで影響を及ぼしている箇所がある。本品は№12-2-30と書風や界線、紙の状態ががあり、総じて鋭角的な印象である。虫損は全て補修されるが、下部の補修紙のシミが本四行、一行一七文字の断簡。界線は淡墨で単界。筆跡は筆に割れや擦れがみられる箇所

虫損がある。筆跡は小さくまとまり、端正である。平安時代後期(一二世紀)頃の作だろ紺紙に金泥で経文を書写し、界線は銀泥による単界である。五行の断簡で、一行一七文字。

「成唯識論」はインドの護法らの著書で、六五九年に玄奘により漢訳された。全一○巻。

紙の色は煙草色に近い。本品も天地文字がはみ出している。

三行、

一行一七文字の断簡。

界線は淡墨で単界。連れとみられる№12-1-40同様、

料

### 【細目データ 12-1-510】

(長さの単位 cm)

史料名	海龍王経	巻第	第一	員数	1点							
材質・技法	紙本墨	書	奈良時代									
紙数	1	全	長	7.	1	紙高	27.5	識語	なし			
備考	No. 12-1-40	Vo. 12-1-401 と一連のもの。										

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	27.5	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	2.4	界高	23.2	天机	嗣高	2.1	地桐	同高	2.1
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	7.1
行数	3
1・2 行頭字	欲菩

### 【内容】

本文初行	欲聞佛言菩薩有四事棄諸悪趣何等為四
本文末行	不軽慢自省巳過不譏彼穢是為四復有四
該当箇所	大正蔵 598.15/133a7 ~ a10

### 【細目データ 12-1-601】

(長さの単位 cm)

史料名	心経(射	心経(般若波羅蜜多心経、隅寺心経)											
材質・技法	紙本墨	書	装丁	・形態 断簡 書写年代			奈良	時代					
紙数	1	全	長	44.	2	紙高	26.7	識語	無				
備考	功徳文あり。												

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	26.7	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	2.1	界高	19.7	天棉	闌高	3.2	地桐	高	3.8
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	44.2
行数	23
1・2 行頭字	心

### 【内容】

VI 1. 🗆 V	
首題	心経
本文初行	観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
本文末行	揭諦揭諦 波囉揭諦 波囉僧揭諦 菩提薩婆呵
該当箇所	大正蔵 251.08/848.c1 ~ c19

巻末に功徳文を付す。奈良時代の作。保存状態は良好である。二〇行の墨書の断簡。一行一七文字で、界線は淡墨の単界。所謂「般若心経」を書写し、

版本の断簡二行。虫損あり。

### 【細目データ 12-1-603】

	細目データ 12-1-603】 (長さの単位 cm)														
	史料名	雑阿含経	巻第	員数	1点										
;	材質・技法	紙本墨	紙本墨書 装丁・形態 断簡 書写年代							寺代カ					
	紙数	紙数 1 全長 2.2 紙高 25.7						識語	なし						
備考															

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	25.7	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	_	界高	20.7	天橺	嗣高	2.2	地榻	高	2.6
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	2.2
行数	1
1・2 行頭字	死

### 【内容】

本文初行	死非有非无後死邪婆蹉種出家語詵阤迦
本文末行	_
該当箇所	大正蔵 99.02/245a5 ~ a6

### 【細目データ 12-1-604】

(長さの単位 cm)

史料名	中阿含経	1阿含経 巻第三三 員数 1点											
材質・技法	紙本墨摺 装丁·形態 断簡 書写年代							室町師	寺代カ				
紙数	1	至	長	29.1	識語	なし							
備考	版本。												

### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	黄色	界線	匡	郭	修補	な	·l
	一紙 長	_	一紙 高	29.1	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	_	界高	25.0	天机	嗣高	3.1	地榻	高	0.9
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	3.4
行数	2
1・2 行頭字	使從

### 【内容】

本文初行	使世尊從定覺故令我等後得見佛五結我
本文末行	從此歸以躭浮樓伎樂王女賢月色嫁與汝
該当箇所	大正蔵 26.01/638b6 ~ b8

多経」巻第一九五~二四四の内、いずれかと推測される。

一行一七文字の断簡。上部左にかすかに淡墨の単界線がみえる。本品は「大般若波羅蜜

### 【細目データ 12-1-605】

(長さの単位 cm)

史料名	大般若波	羅蜜多	多経		員数	1点			
材質・技法	紙本墨	書	平安時代カ						
紙数	1	全	長	1.	8	紙高	26.2	識語	なし
備考	_								

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	26.2	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	不明	界高	20.3	天机	嗣高	2.9	地桐	同高	3.0
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	1.8
行数	1
1・2 行頭字	覺

### 【内容】

本文初行	覺菩提清浄獨覺菩提清浄故一切智智清
本文末行	_
該当箇所	大正蔵 220.05/1048a18 ~ a19 ほか

### 【細目データ 12-1-608】

(長さの単位 cm)

史料名	舎利弗阿」	利弗阿毘曇論 巻第四											
材質・技法	紙本墨	紙本墨書 装丁·形態 断簡 書写年代							鎌倉時代カ				
紙数	1	全	全長 24.5			紙高	26.5	識語	なし				
備考	_												

### 【料紙】

	紙質		染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	26.5	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	2.2	界高	22.8	天机	嗣高	2.0	地欄	高	2.7
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	24.8
行数	11
1・2 行頭字	聖念

### 【内容】

本文初行	聖諦業云何道聖諦非業正見正覺正進
本文末行	相應非業相應苦聖諦是名一三分或業相
該当箇所	大正蔵 1548.28/556b16 ~ b27

虫損を補修した裏打紙の薄茶色がひびいている。

引く。筆跡は、写経としてはやや薄い墨で、

瑜伽師地論」

は、

が訳出。全百巻。本品は一紙一九行、一行一七文字である。淡墨でごく細い単線の界線を

糸編の下部や、

「起」の土の第三画など左か

大乗仏教の瑜伽行派の論書。大乗仏教の百科全書。六四八年、

ら右への横画が極端に長いなど特徴的である。朱でヲコト点が施される。奈良時代の作か。

# No. 12 - 2 - 106 七仏所説神呪経

卷第二

### 【細目データ 12-2-101】

(長さの単位 cm)

史料名	瑜伽師地記	瑜伽師地論 巻第九								
材質・技法	紙本墨	紙本墨書 装丁・形態 紙本墨書 書写年代 奈良時代カ								
紙数	1	全	長	39.	.5	紙高	27.6	識語 なし		
備考	本紙右端(	本紙右端に 0.2cm幅の剥がし取り痕あり。朱のチコト点あり。								

### 【料紙】

	紙質	麻紙カ	森紙カ 染色·加工 黄色 界線 墨		界	修補	な	: L		
	一紙 長	_	一紙 高	27.6	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	2.1	界高	20.8	天棉	闌高	3.2	地根	高	3.6
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	39.5
行数	19
1・2 行頭字	際起

### 【内容】

本文初行	際後際生又於中際若流轉若清浄是名縁
本文末行	謂於未来諸行起不如理分別謂我於未来
該当箇所	大正蔵 1579.30/322a17 ~ b7

### 【細目データ 12-2-106】

(長さの単位 cm)

史料名	七仏所説	C 仏所説神呪経 巻第二										
材質・技法	紙本墨	書	装丁·形態 断簡		平安	寺代カ						
紙数	1	全	識語	なし								
備考	または「	陀羅)	已雑集	卷第	第二]	0						

### 【料紙】

ET TAPES											
	紙質	楮紙	染色・加工	茶色 雲母	界線 墨界 修補 全函		墨界		全面	面裏打	
本文料紙	一紙 長	_	一紙 高	26.7	一紙	行数	_	一行	字数	17	
7777/130	界幅	2.0	界高	19.8	天桐	酮高	3.2	地棉	高	3.7	
	その他 所見	_									

### 【法量】

紙順	1
紙長	9.5
行数	5
1・2 行頭字	天事

### 【内容】

本文初行	天下衆星中王得最自在四天下中一切國
本文末行	躬身臨朝断事不枉民物猶如明鏡若其國
該当箇所	大正蔵 1332.21/547a11 ~ a12、a15 ~ a19

虫損も散見される。小さくまとまった端正な書である。平安時代の作か。 
五行の断筒、一行一七文字、淡墨でごく細い単線の界線を引く。全体に水シミがでており、はそれまで行われてきた陀羅尼を収集したもので、梁代の撰述と考えられる。本品は一紙を説く最古の経典。晋代失訳。または「陀羅尼雑集 巻第二」の可能性もある。「陀羅尼雑集」 
薩信仰が、中国で道教の北極星・北斗七星信仰と集合し、仏教の天部の一つとなったもの) 
薩信仰が、中国で道教の北極星・北斗七星信仰と集合し、仏教の天部の一つとなったもの)

巻子装であった時に生じた虫損がみられる。

「大方等大集経」は大集部の経典を集めたもの。曇無讖(三八五~四三三)らの共訳。

### 【細目データ 12-2-107】

(長さの単位 cm)

史料名	大方等大约	大方等大集経 巻第二二 員数 1点										
材質・技法	紙本墨	紙本墨書 装丁・形態 断簡 書写年代 平安時代カ										
紙数	1	全	長	21	.0	紙高	25.5	識語	なし			
備考	_											

### 【料紙】

	紙質	麻紙カ	染色・加工	褐色	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	25.5	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	2.1	界高	21.2	天棉	高	2.4	地桐	高	1.9
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	21.0
行数	10
1・2 行頭字	善彼

### 【内容】

本文初行	善男子汝當受持讀誦書寫是陁羅尼往
本文末行	子南方去此九万九億諸佛世界彼有世界
該当箇所	大正蔵 397.13/155c7 ~ c17

### 【細目データ 12-2-201】

(長さの単位 cm)

史料名	無垢浄光	無垢浄光大陀羅尼経(百万塔陀羅尼) 員数 1点									
材質・技法	紙本墨摺 装丁·形態 断簡 書写年代							奈良時代			
紙数	1	全	識語	なし							
備考	自心印陀	心印陀羅尼。									

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	_	_	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	5.5	一紙	行数	_	一行	字数	5
本文料紙	界幅	_	界高	_	天机	嗣高	_	地欄	高	_
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	40.3
行数	31
1・2 行頭字	無自

### 【内容】

首題	無垢浄光経/自心印陀羅尼
本文初行	南謨薄伽伐
本文末行	<b>हिंग</b> हो
該当箇所	大正蔵 1024.19/719c27 ~ 720a6

墨摺。「自心印陀羅尼」を記す。百万塔陀羅尼については№12−1−19を参照。

六行の断簡。

文初行」「本文末行」は割注を省略し、「該当箇所」は「楞伽経」で示した。

津美術館所蔵「註楞伽経 巻第七」の断簡である可能性がある[市川 二〇二四]。なお「本

一行の文字は一二文字。割注を多用する。本紙には水シミがでている。

根

### 【細目データ 12-2-203】

(長さの単位 cm)

史料名	註楞伽経	主楞伽経 巻第七 員数 1点									
材質・技法	紙本墨	紙本墨書 装丁·形態 断簡 書写年代 奈良時代									
紙数	1	全	長	16	.3	紙高	27.9	識語	なし		
備考	_										

### 【料紙】

	紙質	麻紙	染色・加工	黄色	界線 墨		墨界		全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	27.9	一紙	行数	_	一行	字数	12
本文料紙	界幅	2.7	界高	23.0	天橺	閘高	2.3	地榻	同高	2.6
	その他 所見	_								

### 【法量】

紙順	1
紙長	16.3
行数	6
1・2 行頭字	界造

### 【内容】

本文初行	大慧脩三
本文末行	謂如来蔵名識蔵
該当箇所	大正蔵 670.16/512b4 ~ b7

### 【細目データ 12-2-205】

(長さの単位 cm)

史料名	妙法蓮華網	少法蓮華経 巻第三 員数 1点										
材質・技法	紺紙金	字	装丁	・形態		断簡	書写年代	宁	平安時	寺代カ		
紙数	1	全	長	11.	.9	紙高	24.8		識語	なし		
備考	_											

### 【料紙】

本文料紙	紙質	楮紙	染色・加工	紺色	界線	銀界		修補	なし	
	一紙 長	_	一紙 高	24.8	一紙	行数	_	一行	字数	17、20
	界幅	1.6	界高	18.9	天欄高 2		2.7	地根	引高 3.2	
	その他 所見	下部切断。								

### 【法量】

### 【内容】

紙順	1			
紙長	11.9			
行数	7			
1・2 行頭字	究我			

本文初行	究竟永寂	滅 安住無漏法	今者見世尊	安穏成佛道		
本文末行	輪咸作是言世尊説法多所安穏憐愍饒益					
該当箇所	大正蔵 262.09/22c18 ~ 23a1					

文を書写し、界線は銀泥による単線である。虫損が散見される。平安時代の作と推測される。七行の断簡。前五行は一行に五句二〇文字、後二行は一行に一七文字。紺紙に金泥で経

やや震えがみられ、中心が外れ、全体にやや乱れた印象である。なお本品の左方は121-

二行の断簡で一行一七文字。淡墨でごく細い単線の界線を引く。虫損あり。筆跡は線に

1-507に接続する。

### 【細目データ 12-2-301】

【細目アータ 12-2-301】 (長さの単位 cm)										
史料名	大方広仏	大方広仏華厳経 巻第六九 員数 1点								
材質・技法	紙本墨	本墨書 装丁・形態 断簡 書写年代					奈良時代			
紙数	1	1 全長 4.4 紙高 27.6 識語 なし								
備考	備考 No. 12-1-507 と一連のもの。									

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	27.6	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	2.2	界高	21.9	天机	閘高	2.6	地欄	高	3.1
	その他 所見	_								

# 【法量】

紙順	1
紙長	4.4
行数	2
1・2 行頭字	捨家

# 【内容】

本文初行	捨能捨行尸波羅蜜棄捨王位宮殿眷属出
本文末行	家學道行羼提波羅蜜能忍世間一切苦事
該当箇所	大正蔵 279.10/374c20 ~ 22

### 【細目データ 12-2-302】

(長さの単位 cm)

史料名	某経論疏			員数	1点				
材質・技法	紙本墨	書	装丁	形態		断簡	書写年代	平安時	寺代カ
紙数	1	全	長	31.	.6	紙高	27.3	識語	なし
備考	_								

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	面裏打
	一紙 長	_	一紙 高	27.3	一紙	行数	_	一行	字数	20、23
本文料紙	界幅	1.8	界高	23.9	天桐	高	2.3	地棉	嗣高	1.1
	その他 所見	裏面に	も墨書 18 行る	あり。						

# 【法量】

紙順	1
紙長	31.6
行数	18
1・2 行頭字	悔覺

# 【内容】

本文初行	悔犒幔過有三□初分敬三寳過也経曰於獨
本文末行	因願也経曰我當至十地至済度生死流者賛曰□次證果
該当箇所	_

線を利用して整然と墨書が並ぶ様子が表側に透ける。サコト点や、誤字、脱字を補う箇所がある。虫損が激しく、本紙裏面にも、本紙表面の界チコト点や、誤字、脱字を補う箇所がある。虫損が激しく、本紙裏面にも、本紙表面の界の不得を引く。朱の一八行の断簡。一行二〇文字あるは二三文字。淡墨でごく細い単線の界線を引く。朱の

も認められる。右払いが極端に鋭角的な端正な筆跡に特徴がみとめらよう。

上下に大きく欠損があり、特に上部の欠落は文字部分にも及び、五行目から六行目は水損

○行の断簡。一行に五字ずつ四句、二○文字が書写される。淡墨で単線の界線を引く。

### 【細目データ 12-2-305】

(長さの単位 cm)

	史料名	妙法蓮華海	少法蓮華経 巻第四							
木	対質・技法	紙本墨	書	装丁	・形態	/態 断簡		書写年代	平安時代カ	
	紙数	1	全	全長 18.2		.2	紙高	25.6	識語	なし
	備考	_								

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	25.6	一紙	行数	_	一行	字数	20
本文料紙	界幅	1.8	界高	20.6	天橺	嗣高	0.8	地榻	高	3.4
	その他 所見	_								

# 【法量】

ľ	内	容	

紙順	1
紙長	18.2
行数	10
1・2 行頭字	□以

本文初行	□如貧窮人	往至親友家	其家甚大富	具設諸餚饍
本文末行	我今従佛聞	受記荘嚴事	及轉次受決	身心遍歓喜
該当箇所	大正蔵 262	.09/29b2 ∼ b2	21	

### 【細目データ 12-2-308】

(長さの単位 cm)

史料名	根本説一	艮本説一切有部毘奈耶雑事 巻第三二 員数 1点								
材質・技法	紙本墨	書	装丁	麦丁・形態		断簡	書写年代	鎌倉時代カ		
紙数	1	全	長	:長 15.2		紙高	27.9	識語	なし	
備考	_									

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	面裏打
	一紙 長	_	一紙 高	27.9	一紙 行数		_	一行 字数		16 ~ 18
本文料紙	界幅	2.2	界高	21.4	天机	闌高	2.6	地桐	高	3.0
	その他 所見	_								

# 【法量】

紙順	1
紙長	15.2
行数	7
1・2 行頭字	其人

# 【内容】

本文初行	其女即便大叫告言聖者吐羅難陁王家使						
本文末行	羅門見問言何故廣説其事共作譏嫌諸釋						
該当箇所	大正蔵 1451.24/365b19 ~ b25						

は比較的肉太で写経としては柔らかみがある。そがでており、上部、界線の外に欠落がある。下部に虫損跡があり補修されている。筆跡七行の断簡で一行約一七文字。淡墨でごく細い単線の界線を引く。全体に水損の跡のシ

### 【細目データ 12-2-401】

(長さの単位 cm)

目と一五行目の間には、強い折れ跡や虫損が集中的に、左右対称に認められる。これらは

行最大一七文字の断簡。淡墨でごく細い単線の界線を引く。六行目と七行目の間、一四行と法顕の共訳。十誦律、四分律、五分律とともに四大広律と呼ばれる。本品は二一行、一

「摩訶僧祇律」は東晋時代に成立した律蔵、すなわち教団の規律集の一つ。仏陀跋陀羅

かつて本品が幅一六・三㎝の折本であったことの痕跡と考えられよう。

史料名	摩訶僧祇征	津 者	員数	1点					
材質・技法	紙本墨	書	装丁	形態		断簡 書写年代		平安時代カ	
紙数	1	全	長	長 42.		紙高	26.5	識語	なし
備考	_								

### 【料紙】

本文料紙	紙質	楮紙カ	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面	面裏打
	一紙 長	_	一紙 高	26.5	26.5 一紙 行数		_	一行	字数	14 ~ 17
	界幅	2.0	界高	21.8	天相	闌高	2.7	地欄	高	2.0
	その他 所見	_								

# 【法量】

紙順	1
紙長	42.3
行数	21
1・2 行頭字	法師

# 【内容】

本文初行	法不得起者應伍頭若受一食法時應白師
本文末行	一處應問着上着下随師教應作若欲
該当箇所	大正蔵 1425.22/459a15~b6

### 【細目データ 12-2-405】

(長さの単位 cm)

史料名	大般若経	卷第	第一六	員数 1点					
材質・技法	紺紙金	字	装丁・形態			断簡	書写年代	平安時代カ	
紙数	1	全	全長 2		9	紙高	17.5	識語	なし
備考	_								

# 【料紙】

本文料紙	紙質	楮紙	染色・加工	紺色	界線	な	l	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	17.5	一紙 行数		_	一行	字数	11
	界幅	_	界高	_	天机	闌高	_	地桐	同高	_
	その他 所見	_								

紺紙に金泥で「大般若経巻第一百六十七」とある。経巻の題箋がはずれたものか。

### 【細目データ 12-2-406】

(長さの単位 cm)

上部に虫損があるが補修されている。

は、訳経年代が後漢以前(二二〇年以前)とされる経典。本品は五行、一行一七文字の断

淡墨でごく細い界線を引く。筆跡は中心をはずれて、やや乱れた様子がみうけられる。

西晋の法炬訳とされる「優填王経」、別名「作仏形像経・作像因縁経・憂王作仏形像経」

史料名	優填王経				員数	1点			
材質・技法	紙本墨	書	装丁・形態		態断簡		書写年代	平安時代カ	
紙数	1	全	長	長 10.		紙高	26.8	識語	なし
備考	本紙左端(	×紙左端に 0.2cm幅の剥がし取り痕あり。							

## 【料紙】

	紙質	麻紙カ	染色・加工	褐色	界線	墨	界	修補	部分	分裏打
	一紙 長	_	一紙 高	26.8	一紙	行数	_	一行	字数	17 ~ 18
本文料紙	界幅	2.1	界高	21.2	天欄高		2.6	地根	高	2.9
	その他 所見	_								

# 【法量】

紙順	1
紙長	10.4
行数	5
1・2 行頭字	妖冥

# 【内容】

本文初行	妖聲遠捨正法疑真信邪邪網所纏没在盲
本文末行	心在姪妖其涕唾翫其膿血珍之如玉甘之
該当箇所	大正蔵 332.12/71b18 ~ b23

# 【細目データ 12-2-409】

長さの単位 cm

									長さの単位 cm)
史料名	菩薩善戒	経 き	<b>巻第一</b>					員数	1点
材質・技法	紙本墨	摺	習装丁・形態		形態 断簡		書写年代	室町脚	寺代カ
紙数	1	全	全長 3.2		3.2 紙高		30.1	識語	なし
備考	または「顕	損揚大	戒論	巻第	四」。	版本。			

# 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	なし	界線	匡	郭	修補	な	·l
	一紙 長	_	一紙 高	30.1	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	_	界高	24.6	天橺	嗣高	3.3	地根	高	1.9
	その他 所見	_								

# 【法量】

紙順	1
紙長	3.2
行数	2
1・2 行頭字	不持

# 【内容】

本文初行	不於無量世中無量佛所植諸徳本能得受
本文末行	持菩薩戒不不也世尊舎利弗如香象王之
該当箇所	大正蔵 1582.30/961b21 ~ b23

巻第四」の可能性もある。 版本の断簡。「菩薩善戒経」は「高僧伝」によれば四三一年訳である。

「顕揚大戒論

永劫苦 誇乾闥楽 儲猛利業」が墨書される。

# 【細目データ 12-2-411】

(	長	z	の単位	cm
П				

	史料名	偈頌断簡	質断簡 員数 1点									曷頌断簡	
木	材質・技法	紙本墨	書	書 装丁・尹			断簡	書写年代	鎌倉~雪	室町時代			
	紙数	1	全	全長 7.0		7.0 紙高		31	識語	なし			
	備考 No. 12-1-306 と一連のもの。												

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線	な	l	修補	全面	i裏打
	一紙 長	_	一紙 高	31	一紙	行数	_	一行	字数	12
本文料紙	界幅	_	界高	_	天机	嗣高	_	地桐	高	_
	その他 所見	_								

# 【法量】

紙順	1
紙長	7.0
行数	1
1・2 行頭字	招

# 【内容】

本文初行	招永劫苦 誇乾闥楽 儲猛利業
本文末行	_
該当箇所	弘法大師全集 5-295

# 【細目データ 12-2-501】

(長	8	$\sigma$	畄	付	cm

史料名	無垢浄光	大陀器	羅尼経		員数 1点						
材質・技法	紙本墨	摺	装丁	形態		断簡	書写年代	奈良時代			
紙数	2	全	全長 4		43.8 紙高		5.3	識語	なし		
備考	自心印陀	1心印陀羅尼。									

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	な	l	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	5.3	一紙	行数	_	一行	字数	5
本文料紙	界幅	一 界高 一 天欄高 一 地欄						高	_	
	その他 所見	第一紙	は空。							

# 【法量】

紙順	1	2		
紙長	4.0	39.8		
行数	0	31		
1・2 行頭字	_	無自		

K. 4 11 2	
首題	無垢浄光経/自心印陁羅尼
本文初行	□謨薄伽伐
本文末行	<b>訂明</b>
該当箇所	大正蔵 1024.19/719c27 ~ 720a6

12 - 1 - 206を参照。

版本「仏説大報父母恩重経」の断簡で挿絵を伴う。「仏説大報父母重経」についてはNo

【細目データ 12-2-505】 (長さの単位 cm)												
史料名	仏説大報	父母恩	恩重経	員数 1点								
材質・技法	紙本墨	摺	習装丁・形態			断簡	書写年代	室町前期				
紙数	1	全	全長		6	紙高	24.7	識語	なし			
備考	_											

# 【料紙】

【細目データ 12-2-505】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線	匡	郭	修補	全面	裏打
本文料紙	一紙 長	_	一紙 高	24.7	一紙 行数		_	一行	一行 字数	
	界幅	_	界高	21.8	天橺	閘高	1.5	地榻	同高	1.7
	その他 所見	_								

# 【法量】

紙順	1
紙長	10.6
行数	2
1・2 行頭字	假出

# 【内容】

本文初行	假使有人為於爺孃百千刀輪於自身中左右
本文末行	出入経百千到却猶不能報父母深恩
該当箇所	_

# 【細目データ 12-2-507】

(長	بح	の	単	位	cm)

史料名	梵字			員数 1点						
材質・技法	絹本墨	書	書 装丁・形態			断簡	書写年代	鎌倉~室町時代		
紙数	1	全長		8.3	3 紙高		9.1	識語	なし	
備考	_									

# 【料紙】

	紙質	絹	染色・加工	黄色・ 青色			l	修補	全面	裏打
本文料紙	一紙 長	_	一紙 高	9.1	一紙 行数		_	一行	字数	_
	界幅	_	界高	_	天欄高 一 地欄					_
	その他 所見	本文料紙は辻が花の断片か。								

維が劣化しており、一部裏打ちがみえている。№12-1-40も梵字である。 は、縫製の跡がみられる。辻が花のような技法を用いて染めた古裂に墨書したものか。繊 絹本に梵字「阿」の一字が墨書される。料絹は、黄緑色と茶色に染め分けられ、

No. 12 507

I 2

### 【細目データ 12-2-509】

(長さの単位 cm)

込みが柔らかく、端正な筆跡である。

簡で八行、一行一六文字。ごく薄く淡墨で単線の界線がみとめられる。濃墨で縦画の打ち著と伝える。鳩摩羅什が四○五年から漢訳を開始する。全一○○巻。本品は巻第一○の断

「大智度論」は大品般若経(摩訶般若波羅蜜経)の注釈書で龍樹(一五〇~二五〇頃)

史料名	大智度論	大智度論 巻第一○							1点
材質・技法	紙本墨	書	装丁	・形態		断簡	書写年代	平安阳	寺代カ
紙数	1	全	長	14.	.8	紙高	25.6	識語	なし
備考	_								

### 【料紙】

	紙質	麻紙カ	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	25.6	一紙	行数	_	一行	字数	16
本文料紙	界幅	1.9	界高	20.0	天机	嗣高	3.0	地桐	高	2.7
	その他 所見	_								

# 【法量】

紙順	1
紙長	14.8
行数	8
1・2 行頭字	佛獻

# 【内容】

本文初行	佛皆易之 復次華香清妙宜為供養如人
本文末行	蓮華十餘葉天華百葉菩薩華千葉彼國土
該当箇所	大正蔵 1509.25/129b3 ~ b11

### 【細目データ 12-2-510】

(長さの単位 cm)

史料名	大方広仏	華厳経 巻	員数	1点			
材質・技法	紺紙金	字 装丁	・形態	断簡	書写年代	平安時	寺代カ
紙数	1	全長	9.3	紙高	28.0	識語	なし
備考	_						

# 【料紙】

	紙質	楮紙力	染色・加工	紺色	界線	金(天地	·界 のみ)	修補	な	l
<del>* 子</del> 恕! 如.	一紙 長	_	一紙 高	28.0	一紙	行数	_	一行	字数	20
本文料紙	界幅	_	界高	21.4	天柱	欄高	3.3	地根	高	3.3
	その他 所見	_								

# 【法量】

紙順	1
紙長	9.3
行数	5
1・2 行頭字	辟辟

# 【内容】

本文初行	辟如徵小火	樵濕則能滅	於佛教法中	懈怠者亦然
本文末行	辟人無手足	欲射過大地	永不従彼意	懈怠者亦然
該当箇所	大正蔵 278	.09/428c2 ∼ c	11	

金泥でひかれる。筆跡はこぢんまりとした端正な楷書である。五行の断簡。一行に五字四句、二〇文字を紺紙に金泥で書写する。天地に界の線が薄い

### 【細目データ 12-2-601】

(長さの単位 cm)

られる部分があり、「人」という文字の右払いが極端に長く、左払いが極端に短いという

る虫穴が認められ、かつては巻子であったと推測される。筆跡には、筆の割れや擦れがみ天地には水損によるシミと欠損がみとめられるが、いずれも補修されている。また連続す

九行、一行一七文字の断簡。淡墨でごく細い単線の界線を引く。全体に虫損が激しく、

特徴が認められる。

史料名	大宝積経	大宝積経 巻第六七							
材質・技法	紙本墨	書	装丁	形態		断簡	書写年代	平安時	寺代カ
紙数	1	全	長	36	.7	紙高	24.9	識語	なし
備考	_								

# 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	なし	一紙 高	24.9	一紙	行数	なし	一行	字数	17
本文料紙	界幅	1.9	界高	20.4	天棉	嗣高	2.8	地根	高	1.7
	その他 所見	_								

## 【法量】

紙順	1
紙長	36.7
行数	19
1・2 行頭字	菩介

### 【内容】

首題	菩薩見實三昧経他化自在天得授記品第十八
本文初行	<b></b>
本文末行	菩提者彼法非與餘法作對治餘法亦不與
該当箇所	大正蔵 310.11/382a12 ~ b2

# 【細目データ 12-2-605】

(長さの単位 cm)

史料名	大智度論	大智度論 卷第一一 員数 1点											
材質・技法	紙本墨	書	装丁・形態	断簡		書写年代	平安時	寺代カ					
紙数	1	全	長 32.	.6 紙	高	16.1	識語	なし					
備考	上部破損。	>											

# 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全ī	面裏打
本文料紙	一紙 長	_	一紙 高	_	一紙 行数 —		一行 字数		_	
	界幅	1.9 界高 不明 天欄高 不明 地欄高								1.8
	その他 所見	墨書の	校合痕あり。							

# 【法量】

紙順	1
紙長	32.6
行数	17
1・2 行頭字	妬惟

### 【内容】

本文初行	妬真心布施故除諂曲一心施
本文末行	□□□相因縁所以者何施時
該当箇所	大正蔵 1509.25/141a22 ~ b11

書風とも本文とは異なる。一七行。淡墨、単線の界線をもつ。誤字脱字を数か所加筆しており、加筆部分は、墨色、一七行。淡墨、単線の界線をもつ。誤字脱字を数か所加筆しており、加筆部分は、墨色、現存

# 【細目データ 12-2-606】

(長さの単位 cm)

史料名	增壱阿含	径者	巻第四三								
材質・技法	紙本墨	書	装丁	・形態		断簡	書写年代	奈良時代			
紙数	1	全	全長 18.9		.9	紙高	26.8	識語	なし		
備考	_										

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	褐色	界線	墨	界	修補	部分	·裏打
	一紙 長	_	一紙 高	26.8	一紙	行数	_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	2.2	界高	23.7	天机	嗣高	1.5	地桐	高	2.1
	その他 所見	_								

# 【法量】

紙順	1
紙長	18.9
行数	8
1・2 行頭字	若人

本文初行	若精勤比丘少欲知足有勇猛心多聞能與
本文末行	行
該当箇所	大正蔵 125.02/782a17 ~ a25

態で縦二八・六、横一二・四、高二・四四。表紙・裏表紙は赤・青・緑・茶の糸で草花文様

台紙に貼り込んだ古経等の断簡三一点を折本状に仕立てた手鑑。一帖。

折り畳んだ状

縦二八・四、横二・七㎝)を貼るが、外題の墨書はない。花鳥文様のある黄色系錦地の帙の刺繍のある黄色系の絹地。表紙裏(見返し)は金箔紙。表紙中央に題籤紙(金箔紙、

(縦二八・七、横一二・七、高二・七㎝、象牙爪付)で包み、木製函(外寸、縦三一・二、横

あろう。

五・○、高四・○㎝)に収める。函のかぶせ蓋の外面中央上寄りに「古経鑑」の墨書があ

### 【細目データ 13】

(長さの単位 cm)

史料名	古経鑑				員数	1帖
材質・技法	紙本墨書ほか	武本墨書は				
備考	外寸、縦 28. 経鑑」の墨		〔2.4cm。帙·箖	育に納める。	。箱蓋上	面に「古

### 【表装】

# 【細目データ 13-1】

(長さの単位 cm)

る。貼り込まれている断簡の多くについて、前後の台紙余白に筆者を示す極めを直接書き

あるいは附箋に記して貼り附けている。

史料名	妙法蓮華	妙法蓮華経 巻第四										
材質・技法	紺紙金	字	字 装丁・形態 断簡 (前後欠) 書写年代					平安後期				
紙数	1	술	長	21	.4	紙高	26.4	識語	なし			
備考	紺紙金字 「聖徳皇太					いた宝塔チ	形文様で囲ん	だ装飾経。	左方台紙に			

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	紺色 界線		押界		界 修補 全面		裏打
	一紙 長	-	一紙 高	_	一紙 行数		行数 —		一行 字数	
本文料組	界幅	2.2	界高	25	天棉	嗣高	0.5	地榻	高	1.3
	その他 所見	天辺地	辺切断。							

# 【法量】

紙順	1
紙長	11.8
行数	10
1・2 行頭字	其同

# 【記載内容】

本文初行	其五百比丘 次第當作仏
本文末行	其不在此會 汝當為宣説
該当箇所	大正蔵 262.09/28c20 ~ 28c29

№13-1 妙法蓮華経 巻第四

徳太子ゆかりの京都太秦・広隆寺に伝来したいわゆる「太秦切」であることからの極めでを原状より切り縮めているであろう。断簡左方の台紙に「聖徳皇太子」の墨書がある。聖た装飾経で、法華経(妙法蓮華経)巻四の偈の部分にあたる。界線は押界。料紙は、天地一紙一○行の断簡。紺紙に金字で書写し、一字ごとに周りを囲む宝塔の図形を銀で描い

# No. 13 3 宝網経

### 【細目データ 13-2】

(長さの単位 cm)

巻取径は三・二四前後となる。左端上部裏、裏打紙に「一」の墨書あり。

右方で徐々に広くなることから、虫損は巻子として巻き取られた状態で生じ、この付近の

繕いの裏打紙に補筆をした箇所が見られる。虫喰穴の間隔が

紙の紙長より一行分ないしそれ以上長かったであろう。料紙については本書 xx(一七一)

字の残画が僅かに認められるようである。したがって、料紙の本来の紙長は、

途中で切断したもので、最終行左方に縦界線があり、

二紙四八行の断簡。

第一・二紙の貼継は原状を伝えるとみられる。第二紙左端は料紙を

左端の下から六字目付近に次行の文

現状の第二

頁参照。紙面に虫損があり、

史料名	大般若波	大般若波羅蜜多経 卷第五七六								
材質・技法	紙本墨	紙本墨書 装丁・形態 断簡 (前後欠) 書写年代							時代	
紙数	2	全	長	長 93		紙高	26.6	識語	なし	

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	墨	墨界		全面	裏打	
* 子羽 年	一紙 長	_	一紙 高	26.6	一紙 行数		_	一行 字数		17	
本文料紙	界幅	2.0	2.0 界高 20.2 天欄高 2.9 地欄高								
	その他 所見		那の補修紙に 間隔(右→左)			10.2 →	• 9.7 <sub>°</sub>				

## 【法量】

紙順	1	2
紙長	39.0	54.3
行数	20	28
1・2 行頭字	如喜	離對

### 【記載内容】

本文初行	如来十力四无所畏四无礙解大慈大悲大
本文末行	論无依无住无取无捨无動无転无染无浄
該当箇所	大正蔵 220.07/977b12 ~ 978a1

### 【細目データ 13-3】

(長さの単位 cm)

史料名	宝網経							員数	1点
材質・技法	紙本墨	紙本墨書 装丁・形態 断簡 (前後欠) 書写年付						平安	前期
紙数	2	全	長 47.		.7	紙高	27.1	識語	なし

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色 界線 墨界		修補	修補全面				
	一紙 長	_	一紙 高	_	一紙 行数		一 一行 字数		17		
本文料紙	界幅	2.2	2.2 界高 23.1 天欄高 1.8 地欄高 2								
	その他 所見	I	半に広くしる 、現装幀と異						なび以	下 5 行	

### 【法量】

紙順	1	2
紙長	33.7	14.0
行数	14	6
1・2 行頭字	於敬	聖得

### 【記載内容】

本文初行	於是童子寶網出維耶離大城行詣佛所恭肅
本文末行	天意華蜜華香末香雑香持香其明月珠雑
該当箇所	大正蔵 433.14/79a7 ~ a27

目があり、折本に仕立てられていた時期もあったと思われる。右端上部裏、裏打紙に「二」 である。 すると思われる「しみ」があり、その形状から巻子として巻き取られた状態で生じたもの の書入(鉛筆書)あり。料紙については本書 xxi(一七〇)頁参照。 二紙 二〇行の断簡。 また、現状の装幀に対応する折目とは別に、第二、七、一二、一七行の右方に縦折 第一・二紙の貼継は本来のものであろう。料紙上半に水濡れに由来

No. 13

4

註楞伽経

卷第

左文字)が認められる。同じ箇所の裏にも天地逆の墨うつり文字痕がある。本品と京都国

巻第一」の断簡とは、もと同一巻をなすとの分析がある[市川

天辺・地辺に経年による傷みがそのまま残り、現状の装丁にともなう化粧裁ちはなされて

麻紙か。大きな文字の本文に細字双行の解説を付す註論の形式。

一〇行半の断簡。

立博物館所蔵

「註楞伽経

[〇] [四]

## 【細目データ 13-4】

MARIN >	(長さの単位 cm)										
史料名	註楞伽経	楞伽経 卷第一 員数 1									
材質・技法	紙本墨	紙本墨書 装丁・形態 断簡 (前後欠) 書写年代						奈良	時代		
紙数	2	全	長	28	.4	紙高	27.1	識語	なし		

### 【料紙】

【个十形八】										
	紙質	麻紙カ	染色・加工	茶色	界線	墨	墨界		全面裏打	
	一紙 長	_	一紙 高	27.1	一紙 行数		_	一行	字数	11
本文料紙	界幅	2.6 界高 23.1 天欄高 1.9 地欄高							高	1.9
	その他 所見	大字と細字双行。天辺地辺原状。								

### 【法量】

紙順	1	2
紙長	23.1	5.3
行数	8.5	2
1・2 行頭字	成意	所成

# 【記載内容】

【时取门台】	
本文初行	成何有體性明其空也観文似訶詰大慧
本文末行	十斛梵云落叉此云一万梵云俱胝此云一億
該当箇所	大正蔵 670.16/481c27 ~ 482a3

# - 5 開皇三宝録 巻第八(五月一日経

No. 13

二紙九行の断簡A(第一紙八行、第二紙一行)の左方に、二紙一二行半の断簡B(第三紙五行半、第四紙七行)をつきあわせて貼り込んで構成される。断簡Aは開皇三宝録巻第紙五行半、第四紙七行)をつきあわせて貼り込んで構成される。断簡Aの見付を持つ五月一日経の願文である(五月一日経の開皇三宝録では巻第九・二三が聖語蔵に伝来する)。断簡目と天横界の下三・四㎝にもう一本の横界がある。同書は、断簡Aの文面から巻末までに相当量の本文があり、したがって断簡A・Bは本来連続していたものではない。両者が五相当量の本文があり、したがって断簡A・Bは本来連続していたものではない。両者が五相当量の本文があり、したがって断簡A・Bは本来連続していたものではない。両者が五相当量の本文があり、したがって断簡A・Bは本来連続していたものではない。両者が五相当量の本文があり、したがって断筒A・Bは本来連続していたものではない。両者が五相当量の本文があり、したがって断筒A・Bは本来連続していたものではない。両者が五相当量の本文があり、したがって断筒A・Bは本来連続していたものではない。両者が五相当量の本文があり、したがって断筒A・Bは不可能性は消息がある。

行左側の縦界線が残っていない。操作があったと思われる。第二紙は一行のみで、文字のすぐ左方で切断されているため、操作があったと思われる。第二紙は一行のみで、文字のすぐ左方で切断されているため、く連続する。ただ、天辺と天墨界が継目部分で揃わないのは、現状の装丁がなされる際に写経料紙の本来の貼継を伝えている可能性が高い。料紙の地辺と地の横墨界は特に乱れな等一紙と第二紙の貼継は、文面が連続し、継目部分に縦墨界が引かれていないことから、

断簡AとB、第二紙と第三紙の配置の現状は、紙端同士をつきあわせる形で台紙に貼りある。

めは、手鑑の折幅に合わせて貼り込むための処置かもしれない。ただ、もと一紙であれば両紙同様であるが、切れ目部分でしみの間隔に乱れが生じているようである。この切り縮で台紙に貼り込んだようである。本来その行間に存在したはずの縦墨界が現状で認められを来は同一紙であったものを、願文第五・六行の中間で切断した上で、つきあわせの状態等三紙(願文第一〜五行)と第四紙(願文第六〜一二行)は、中間に文面の欠失はなく、

No.

13 I 6

仏本行集経

卷第八

一紙五行の断簡。

紙面に虫喰穴が散見され、形状の対応から巻き取られた状態で生じた

### 【細目データ 13-5】

【細目データ	[細目データ 13-5] (長さの単位 cm)											
史料名	開皇三宝	録	員数	1点								
材質・技法	紙本墨	基書 装丁・形態 断				前後中間欠)	書写年代	奈良	時代			
紙数	4	至	き長	長 39.		9.7 紙高 26.0		識語	あり			
備考 五月一日経。「天平十二年五月一日」の年紀を含む願文あり。右方台紙に「天 の書入あり。								に「天平帝」				

### 【料紙】

	紙質	麻紙	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面	i裏打
	一紙 長	_	一紙 高	_	一紙 行数		_	一行 字数		17
本文料紙	界幅	1.8	1.8 界高 19.6 天欄高 3.3 地欄高							3.2
	その他 所見	天辺地	<b>天辺地辺切断</b> 。							

### 【法量】

紙順	1	2	3	4
紙長	14.7	1.0	10.0	14.0
行数	8	1	5	7.5
1・2 行頭字	舎差	味	皇尊	之下

### 【記載内容】

本文初行	舎利弗阿毗曇三十卷 或二十卷僧祐云毗婆沙出房撿 傳乃是耶
本文末行	味沙門釋道標制序
該当箇所	大正蔵 2034.49/77b8 ~ b17

### 【細目データ 13-6】

(長さの単位 cm)

史料名	仏本行集	経え	<b>巻第八</b>	員数 1点			1点		
材質・技法	紙本墨	紙本墨書 装丁		・形態	断簡	(前後欠)	書写年代	平安	前期
紙数	1	全	全長 9.5			紙高	24.1	識語	なし
備考	右端下部の書入あ		字「三」	の小書	書あり	(右部切断	f)。本紙左力	方の台紙上に	「傳教大師」

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長		一紙 高	_	一紙 行数		_	一行 字数		17
本文料紙	界幅	2.0	界高	20.9 天欄高 1.4 地欄高						
	その他 所見	天辺地:	辺切断。							

# 【法量】

紙順	1
紙長	9.5
行数	5
1・2 行頭字	以復

# 【記載内容】

本文初行	以為拂在菩薩前引道而行
本文末行	菩薩前引道而行
該当箇所	大正蔵 190.03/691b18 ~ b22

当手鑑編成以前の書込の可能性もあろう。右方の台紙に「傳教大師」(最澄)の書入がある。 朱書がある(右僅欠)。同形式の書込は№13 - 7にも見え、装丁順を示すとも思われるが、 折目ががあり、折本に改装された痕跡の可能性がある。右端の最下部に小字で「三」の ものとみられる。相対応する虫損の間隔は五皿前後である。一方で、第三・四行の間に縦

三行の間に縦折目があり、折本に仕立てられたことのある痕跡の可能性がある。紙面には

紙四行の断簡で一行一二字。本断簡と同文は、「僧羯磨 巻上」に二箇所見える。第二・

の朱書がある(右僅欠、Na13 - 6参照)。左方の台紙に「慈覺大師」(円仁)の書入がある。

ないことから、折本の状態で生じたものではなさそうである。

右端の最下部に小字で「五」

す穴の形状の類似などは確認できないが、上記の縦折目を挟んで左右対称となる虫損では虫喰穴若干が認められる。残存する紙幅が狭く、巻き取りにともなう虫損であることを示

	1							(-	及び学型で明
史料名	僧羯磨	卷上 員数 1点					1点		
材質・技法	紙本墨書装丁・飛		· 形態 断簡(前後		(前後欠)	書写年代	平安前期		
紙数	1	1 全長			10.5 紙高 24.4			識語	なし
備考	左方台約 部切断)	 E方台紙に 「慈覺大師」 の書入あり。右端下部に朱字 「五」 の小書あり (右 『切断)。							

## 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線 墨		界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	一 一紙 行数		_	一行	字数	12	
本文料紙	界幅	2.6	2.6 界高 21.3 天欄高 1.8 地欄高							
	その他 所見	天辺地	2辺切断。							

### 【法量】

紙順	1
紙長	10.5
行数	4
1・2 行頭字	僧受

### 【記載内容】

本文初行	僧聴此某甲従和上尼某甲求
本文末行	無諸難事年歲已満衣鉢具足
該当箇所	大正蔵 1809.40/516a24 ~ a27 ほか

### 【細目データ 13-8】

(長さの単位 cm)

史料名	妙法蓮華海	径者	<b>巻第五</b>					員数	1点
材質・技法	彩箋墨	書	装丁	・形態	断簡	(前後欠)	書写年代	鎌倉	時代
紙数	1	全	全長		1	紙高	24.5	識語	なし
備考	「伏見院賞	賜」	の墨書	<b>小方</b>	形黒印	『「琴山」	の押捺ある	<b>極札を左方台</b>	分紙に貼附。

## 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	黒色、 装飾	界線	金	·界	修補全面		裏打
→ → ※I ◆II	一紙 長	_	一紙 高	24.5	一紙 行数		_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	1.9	1.9 界高 19.2 天欄高 1.9 地欄高							
	その他 所見	装飾経	。料紙に金泥	の文様	、砂子	散らし	。天迈	切断が	•	

# 【法量】

紙順	1
紙長	9.1
行数	5
1・2 行頭字	賞□

# 【記載内容】

本文初行	賞賜或與田宅聚落城邑或與衣服嚴身之
本文末行	之王諸眷属必大驚恠文殊師利如来亦復
該当箇所	大正蔵 262.09/38c25 ~ 39a1

ている。伏見天皇(一二六五~一三一七)は能書で著名。 院賞賜」と墨書し、その下に「琴山」の方形黒印を捺した極札が、左方の台紙に貼布され

いた料紙(あるいは変色か)に墨書した装飾経。天地に見える台紙も同色に彩色。「伏見一紙五行の断簡。金砂子散らし、金箔の草花虫紅葉と砂子を散らし金界線を引いた黒め「

No.

13

1 8

妙法蓮華経

卷第五

No. 13

ı 10

無量義経

徳行品第

極札が左方の台紙に貼布されている。薬師寺伝来の魚養経を示すものであろう。

麻紙か。「魚養が時」と墨書し、その下に「琴山」の方形黒印を捺した

一紙五行の断簡。

### 【細目データ 13-9】

(長さの単位 cm)

史料名	妙法蓮華	径 額	助持品	員数 1点					
材質・技法	紙本墨	書	装丁	形態 断簡 (前後欠) 書写年代			奈良時代		
紙数	1	全	長	12.2		紙高	27.4	識語	なし
備考	「魚養尔時	f」の	墨書、	方形	黒印	「琴山」の	押捺ある極材	札を左方台級	氏に貼附。

### 【料紙】

	紙質	麻紙カ	染色・加工	黄色	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	_	一紙 行数		一一一一行		字数	17
本文料紙	界幅	2.4	界高	23.3	天机	嗣高	1.9	地桐	同高	2.2
	その他 所見	_								

# 【法量】

紙順	1
紙長	12.2
行数	5
1・2 行頭字	妙介

### 【記載内容】

首題	妙法蓮華経勧持品第十三
書出	<b> 介時薬王菩薩摩訶薩及大楽説菩薩摩訶</b>
本文末行	讀誦説此経典後悪世衆生善根轉少多増
該当箇所	大正蔵 262.09/35c27 ~ 36a3

# 【細目データ 13-10】

(長さの単位 cm)

史料名	無量義経	徳行	員数	1点							
2114		1,00	1 111 //2		74	1 ////					
材質・技法	紙本墨書  装丁			・形態 断簡(前後欠) 書写年代 平					安中期		
紙数	1	全	長	長 9.5 紙高 21.8				識語	なし		
備考	あるいは	「註無	(量義約	圣卷	第三_	。左方台約	紙に「小野道	[風郷〔卿〕](	の書入あり。		

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	宿紙	界線	金	金界		全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	21.8	一紙 行数		_	一行 字数		17
本文料紙	界幅	1.9	界高	19.0	天机	高	2.0	地欄	高	2.8
	その他 所見	_								

# 【法量】

紙順	1
紙長	9.5
行数	5
1・2 行頭字	嚴持

# 【記載内容】

本文初行	嚴諸波羅蜜獲諸三昧首楞厳三昧入大捴
本文末行	名是経第九功徳不思議力
該当箇所	大正蔵 276.09/388c10 ~ c14

九六六)は三蹟の一人。

朱の区切点が見られる。左方の台紙に「小野道風郷」の書入がある。小野道風(八九四~(※) 一紙五行の断簡。「註無量義経 巻第三」の可能性もある。「註無量義経」は最澄の著作。

がある。

一紙五行の断簡。

紺紙銀界に銀字で記した装飾経。左方の台紙に「唐人无名氏」の書入

# № 13 – 12 増壱阿含経 巻第四七

紙三行の断簡。

天地に傷みがあり、上部は天墨界あたりまで欠損している。巻き取り

### 【細目データ 13-11】

【細目アータ	【細目アータ 13-11】 (長さの単位 cm)													
史料名	仏本行集	仏本行集経 巻第二八                員数   1 点												
材質・技法	紺紙銀	紺紙銀字 装丁・形態 断簡 (前後欠) 書写年代												
紙数	1	全	長	10	.0	紙高	28.2	識語	なし					
備考	左方台紙	左方台紙に「唐人无名氏」の書入あり。												

## 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	紺色	界線	銀	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	_	一 一紙 行数 一		_	一行 字数		14
本文料紙	界幅	2.0	界高	18.8	天桐	嗣高	5.9	地桐	高	3.5
	その他 所見									

### 【法量】

紙順	1
紙長	10.0
行数	5
1・2 行頭字	我身

### 【記載内容】

本文初行	我有兵馬象等軍 善解闘戰諸神將
本文末行	海水及此大地可移餘屬日月星宿
該当箇所	大正蔵 190.03/786a7 ~ a11

# 【細目データ 13-12】

(長さの単位 cm)

史料名	増壱阿含;	曾壱阿含経 巻第四七 員数 1点										
材質・技法	紙本墨	紙本墨書 装丁・形態				形態 断簡 (前後欠) 書写年代			時代			
紙数	1	全	全長 6.			紙高	23.2	識語	なし			
備考	左方台紙	左方台紙に「行基菩薩」の書入あり。										

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	_	一紙 行数		_	一行 字数		17
本文料紙	界幅	2.0	2.0 界高 20.7 天欄高 0.9 地欄高							1.6
	その他 所見	天辺地	天辺地辺破損あり。							

### 【法量】

紙順	1
紙長	6.1
行数	3
1・2 行頭字	亦意

# 【記載内容】

本文初行	亦復不奉持禁戒不具足身口意行當貪專							
本文末行	聞佛所説勸喜奉行							
該当箇所	大正蔵 125.02/806a13 ~ a16							

の書入がある。行基(六六八〜七四九)は奈良時代の高僧。二四四程度となり、文面が同巻の末尾に近いことと符合する。左方の台紙に「行基菩薩」状態で生じた虫損があり、対応する虫喰穴の間隔はこの付近で三・九四で、巻取径は一・

開き、修験道の中興とされる。

方の台紙に「聖寳僧正」の書入がある。聖宝(八三二~九○九)は真言宗の僧で醍醐寺を

一紙五行の断簡。第五行左側に縦界線があり、

左端上部に次行の文字の残画がある。

左

### 【細目データ 13-13】

(長さの単位 cm)

史料名	大方広仏	華厳絲	圣卷		員数	1点						
材質・技法	紙本墨書 装丁・形態 断簡 (前後欠) 書写年代							平安前期				
紙数	1	全	全長 10.			紙高	23.5	識語	なし			
備考	左方台紙	E方台紙に「聖寳僧正」の書入あり。										

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	i裏打
	一紙 長	_	一紙 高	_	一紙 行数		_	一行 字数		17
本文料紙	界幅	20	20 界高 2.0 天欄高 1.6 地欄高							
	その他 所見	左端上	左端上部に次行の文字残画あり。							

# 【法量】

紙順	1
紙長	1
行数	5
1・2 行頭字	復眼

### 【記載内容】

本文初行	復有無量主夜神所謂普徳浄光主夜神喜
本文末行	喜主夜神示現浄福主夜神如是等而為上
該当箇所	大正蔵 279.10/3c16 ~ c20

### 【細目データ 13-14】

(長さの単位 cm)

史料名	大般若波	般若波羅蜜多経 巻第五八九 - 員数 1点												
材質・技法	紙本墨書 装丁・形態 断簡 (前後欠) 書写年代							平安前期						
紙数	1	1 全長 25.9					27.1	識語	なし					
備考	左方台紙	E方台紙に「小野篁卿」の書入あり。												

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	裏打	
	一紙 長	_	一紙 高	28.4	一紙 行数		_	一行 字数		17	
本文料紙	界幅	1.9	1.9 界高 20.7 天欄高 2.3 地欄高 1								
	その他 所見	料紙中	に繊維の塊あ	<b>b</b> 。							

# 【法量】

紙順	1
紙長	25.9
行数	9
1・2 行頭字	界是

# 【記載内容】

本文初行	界若樂若苦樂観聲香味觸法界若樂若苦
本文末行	常是菩薩摩訶薩行他行處若菩薩摩訶薩
該当箇所	大正蔵 220.07/1048c15 ~ c24

の台紙に「小野篁卿」の書入がある。小野篁(八〇二~五二)は平安前期の公卿・文人。一紙九行の断簡。文字の線が細く、料紙には叩解不十分な繊維の塊が散見される。左方

のカナ点・オコト点が見られる。

紙三行の断簡。

染紙

(現状は褐色)で、水濡れによると思われるシミがある。墨・朱

# 【細目データ 13-15】

	【細目アータ 13-15】 (長さの単位 cm)											
史料名	観無量寿4	見無量寿仏経										
材質・技法	紙本墨	書	装丁。	書写年代	平安	中期						
紙数	1 全長 5.				2	紙高	22.5	識語	なし			

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	褐色 (現状)	界線 墨		墨界		修補 全面	
本文料紙	一紙 長	_	一紙 高	_	一紙 行数		一 一一行 字		字数	17
平义件瓶	界幅	1.7	界高 19.9 天欄高 1.6 地欄高						同高	1.0
	その他 所見	天辺地:	辺切断。オコ	ト点・カ	カナ点	(朱・	墨)あ	, b 。		

### 【法量】

紙順	1
紙長	5.2
行数	3
1・2 行頭字	有世

# 【記載内容】

本文初行	有五百億寳華一一寳華荘嚴高顕如極楽
本文末行	方金光佛刹乃至上方光明王佛刹於其中
該当箇所	大正蔵 365.12/344b2 ~ b5

# 【細目データ 13-16】

(長さの単位 cm)

史	<b></b>	金剛頂一	☆剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経 巻下 員数 1点										
材質	質・技法	紙本墨書 装丁・形態 断簡 (前後欠) 書写年代						平安前期					
;	紙数	1 全長				0	紙高	26.5	識語	なし			
備考 あるいは「撰定事業灌頂具足支分第一」。													

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	裏打
1 1 101 14	一紙 長	_	一紙 高	26.5	一紙 行数		_	一行 字数		17
本文料紙	界幅	1.8	1.8 界高 20.7 天欄高 3.1 地欄高							2.6
	その他 所見	虫損多	くあり。							

# 【法量】

紙順	1
紙長	9.0
行数	5
1・2 行頭字	最現

# 【記載内容】

本文初行	最勝悉地安楽悦意受用故能転一功悪趣
本文末行	剛界大曼茶羅纔入己一切如来果尚不難
該当箇所	大正蔵 865.18/217c11 ~ c16

がある。虫損の穴が多数見られる。現存する紙幅の中で、巻き取りや折目に対応する虫損 右端は縦界線が残る。左端に縦界線は認められないが、下から四字目の左方に文字の残画 わゆる金剛頂経の巻下一紙五行の断簡。「撰定事業灌頂具足支分第一」の可能性もある。

形状の類似などは判然としない。

# 13 I 16 金剛頂一 切如来真実摂大乗現証大教王経 卷下

No.

褪色しているか。表題・本文とも金字で書し、本文は銀界を施す。

紙一〇行の断簡をつき合わせで貼り込んで構成される。料紙は本来は紫色の麻紙で褐色に

第一紙は表紙表題部分の断簡で、その左方に巻首冒頭の一

二紙からなる装飾経の断簡。

### 【細目データ 13-17】

(長さの単位 cm)

史料名	摩訶般若沒	皮羅玺	員数 1点							
材質・技法	彩箋金	彩箋金字 装丁·形態 断簡(前後欠) 書写年代					鎌倉前期			
紙数	2	全	長	21	.3	識語	なし			
備考	本来は紫色	本来は紫色料紙か。金字銀界の装飾経。								

### 【料紙】

表紙	第1紙は矛	第1紙は表紙外題部分の断簡(高 26.2cm)。										
	紙質	麻紙力	染色・加工	褐色 (現状)	界線 銀		界	修補	全面	裏打		
	一紙 長	_	一紙 高	_	<ul><li>一 一紙 行数 一 一</li></ul>		一行	字数	17			
本文料紙	界幅	1.7	界高	20.7	天橋	閘高	2.7	地榻	高	3.5		
	その他 所見	料紙中は	に繊維の塊あ	<b>b</b> 。								

# 【法量】

紙順	1	2
紙長	3.4	17.9
行数	1	10
1・2 行頭字	摩	摩須

# 【記載内容】

外題	摩訶般若波羅蜜経巻第卅六
内題(首題)	摩訶般若波羅蜜経善達品第七十八 卅六
本文初行	須菩提白佛言世尊云何菩薩善達諸法相
本文末行	人有根本實事有垢有浄不須菩提言不也
該当箇所	大正蔵 223.08/398a7 ~ a17

### 【細目データ 13-18】

(長さの単位 cm)

史料名	大般若波	一般若波羅蜜多経 巻第五九二                員数     1 点										
材質・技法							平安後期					
紙数	1	全	長	25.6	識語	なし						
備考	紺紙に金生	<b>対紙に金字銀界の装飾経。</b>										

# 【料紙】

L. Lulel for	紙質	楮紙	染色・加工	紺色	界線	銀	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	25.6	一紙 行数		一 一一一 一行 字数		字数	17
本文料紙	界幅	1.7	界高	19.5	天机	嗣高	3.0	地桐	同高	3.2
	その他 所見	_								

# 【法量】

紙順	1
紙長	44.5
行数	26
1・2 行頭字	何離

# 【記載内容】

本文初行	何以故満慈子是諸菩薩摩訶薩衆常不遠
本文末行	為汝更説譬喩諸有智者因斯譬喩於甚
該当箇所	大正蔵 220.07/1063c14 ~ 1064a10

一紙二六行の装飾経の断簡。紺紙銀界に金字で書す。

紙八行の断簡。

朱のオコト点、

カナ点、

勾点、連読符等が付され、

行間に墨書の注記

がある。巻き取り状態で生じた虫損があり、対応する虫喰穴の間隔はこの付近で一一・六

皿である。本紙より横長の裏打紙を付し、その状態で台紙に貼り込む。左方にのぞく裏打

紙に「管公」(菅原道真)の書入がある。

# 【細目データ 13-19】

(長さの単位 cm)

史料名	因明入正3	理論項	荒 巻	員数 1点					
材質・技法	紙本墨書 装丁・形態 断簡 (前後欠) 書写年代						平安中期		
紙数	1	1 全長 20.9 紙高 28.4							なし
備考	本紙よりれ打紙に「行						で台紙に貼り	) 込む。左方	にのぞく裏

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	i裏打
本文料紙	一紙 長	_	一紙 高	28.4	一紙 行数		_	一行	一行 字数	
	界幅	2.6	2.6 界高 25.0 天欄高 1.7 地欄高							
	その他 所見		名・オコト点 損多くあり。	京・勾点	(朱)	、校合	·等の注	注記(墨	是) あ	り。紙

### 【法量】

### 【記載内容】

紙順	1
紙長	20.9
行数	8
1・2 行頭字	成無

本文初行	成異法不定相違種々過起宗之所立其法極寬如聲
本文末行	同品非有摂四六五是同品亦犯能立不成若非説所
該当箇所	大正蔵 1840.44/111a22 ~ b4

### 【細目データ 13-20】

(長さの単位 cm)

史料名	中阿含経	中阿含経 巻第四一 員数 1点										
材質・技法	紙本墨	紙本墨書 装丁・形態 断簡 (前後欠) 書写年代							前期			
紙数	1	全	全長 4		.1	紙高	26.5	識語	なし			

### 【料紙】

	紙質	楮紙力	染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	裏打
المال حلي مال	一紙 長	_	一紙 高	26.5	.5 一紙 行数		_	一行	字数	17
本文料紙	界幅	2.0	2.0 界高 20.9 天欄高 3.4 地欄高							
	その他 所見	虫損あ	虫損あり。修補裏打に二種類あり。							

### 【法量】

紙順	1
紙長	44.1
行数	22
1・2 行頭字	沙逝

### 【記載内容】

本文初行	沙門瞿曇如来无所着等正覺明行成為善
本文末行	稱流布周聞十方優多羅益曰唯然尊我受持
該当箇所	大正蔵 26.01/685b8 ~ c5

れる。後者の修補の後、裏打によって巻き取りが太くなったことが考えられる。近で一三・六㎝程度のものと、一一㎝程度のものの二種類がある。両者は、穴の下に見え近で一三・六㎝程度のものと、一一㎝程度のものの二種類がある。両者は、穴の下に見え一紙二二行の断簡。巻き取り状態で生じた虫損があり、対応する虫喰穴の間隔はこの付

# No. 13 - 20 中阿含経 巻第四

取り・折本いずれの状態で付いたものかは不明。左方の台紙に「安覺上人」の書入がある。

陀羅尼雑集巻第二の可能性もある。虫損穴が多く認められるが、巻き

紙三行の断簡。

安覚は平安末~鎌倉時代の僧で、一筆一切経を書写したことで知られる。

### 【細目データ 13-21】

(長さの単位 cm)

	史料名	七仏所説	伸呪約	圣卷	第二				員数	1点
;	材質・技法	紙本墨	書	鎌倉中期						
	紙数	1	全	長	5.	0	紙高	24.8	識語	なし
	備考	あるいは『	陀羅月	己雑集	巻第二	か。	左方台紙に	に「安覺上人	」の書入あ	<b>b</b> 。

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	裏打
t. Lulat toe	一紙 長	_	一紙 高	24.8	一紙 行数		_	一行 字数		17
本文料紙	界幅	1.7	界高	19.8	天机	嗣高	2.4	地桐	同高	2.6
	その他 所見	_								

# 【法量】

紙順	1
紙長	5.0
行数	3
1・2 行頭字	負初

### 【記載内容】

本文初行	負衆生苞含一切心無疲倦是名菩薩欲登
本文末行	福成一相好我今略説今欲説呪令速成辨
該当箇所	大正蔵 1332.21/546a11 ~ a13

### 【細目データ 13-22】

(長さの単位 cm)

史料名	大般若波	般若波羅蜜多経 巻第二二       員数   1 点												
材質・技法	紙本墨書 装丁・形態 断簡 (前後欠) 書写年代						書写年代	平安後期						
紙数	1	全	全長		12.3 紙高 25.4		25.4	識語	なし					
備考	左方台紙	方台紙に「俊寛僧都」の書入あり。												

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	裏打
	一紙 長	_	一紙 高	25.4	一紙 行数		_	一行 字数		17
本文料紙	界幅	1.7	1.7 界高 20.2 天欄高 2.4 地欄高							
	その他 所見	朱の句	句点あり。							

# 【法量】

紙順	1
紙長	12.3
行数	7
1・2 行頭字	一世

# 【記載内容】

本文初行	一切相智无為增語是菩薩魔訶薩不不也
本文末行	尊即一切智生増語是菩薩魔訶薩不不也
該当箇所	大正蔵 220.05/125c3 ~ c10

の間隔はこの付近で四・六㎝程度である。左方の台紙に「俊寛僧都」の書入がある。一紙七行の断簡。朱の句点がある。巻き取り状態で生じた虫損があり、対応する虫喰穴

盛公」の書入がある。

紙七行の断簡。右端○・三㎝が右方の台紙下に入り込んでいる。左方の台紙に「平重

### 【細目データ 13-23】

(長さの単位 cm)

史料名	大般若波	大般若波羅蜜多経 巻第一一三 員数 1点									
材質・技法	紙本墨書 装丁・形態 断簡 (前後欠) 書写年代							平安後期			
紙数	1	全	長	13	.2	紙高	25.3	識語	なし		
備考	左方台紙	E方台紙に「平重盛公」の書入あり。									

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線	墨	界	修補	全面	裏打
-La -La viril dur	一紙 長	_	一紙 高	25.3	一紙 行数		_	一行 字数		17
本文料紙	界幅	1.9	1.9 界高 20.6 天欄高 2.6 地欄高							
	その他 所見	朱の句	点あり。							

# 【法量】

紙順	1
紙長	13.2
行数	7
1・2 行頭字	何三

### 【記載内容】

本文初行	何以故以眼處性空與一切陁羅尼門一切
本文末行	與一切陀羅尼門一切三摩地門无二无二
該当箇所	大正蔵 220.05/623a17 ~ a24

# 【細目データ 13-24】

(長さの単位 cm)

史料	名	円覚道場	略本作	員数	1点							
材質・技	支法	紙本墨書 装丁・形態 断簡(後欠) 書写年代							鎌倉後期			
紙数	Č.	1	全長			.5	紙高	識語	なし			
備考	:	本紙左方i	※紙左方台紙に「世尊寺行尹卿」の書入あり。									

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線 墨		界	修補 全面		裏打
本文料紙	一紙 長	_	一紙 高	25.8	一紙	行数	_	一行	字数	18
	界幅	1.8	界高	21.1	天机	制高	2.2	地桐	高	2.5

# 【法量】

紙順	1
紙長	11.5
行数	6
1・2 行頭字	圓

# 【記載内容】

首題(内題)	圓覺道場略本修證義/晋水沙門 海源 錄
本文初行	第一惣叙縁起 第二嚴諍道場 第三啓請聖賢
本文末行	第十警策勧修 諸家礼懴皆先香花供養今先啓/請者廣 儀日若不先請欲供何人
該当箇所	_

に「世尊寺行尹卿」の書入がある。行尹(一二八六~一三五〇)は鎌倉~南北朝時代の公同書冒頭の一紙六行半の断簡。著者浄源(一〇一一~八八)は延暦寺の僧。左方の台紙

二紙一六行の断簡。

押界あり。現状は二紙(各八行)を貼り継いでいるが、

第一·二紙

—

地辺が切断され、

裏にも文面(仏書か)が記されていることから、

### 【細目データ 13-25】

(長さの単位 cm)

初期の法相宗僧。

に「解脱上人」の書入がある。解脱上人貞慶 (一一五五~一二一三) は、平安末期~鎌倉 を表裏二葉に相剥にした可能性もあろう。天辺は欠損し、地辺も破損がある。左方の台紙 の冊子装で、袋綴一折を折目で切断して二紙としたうえで貼り継いだか。あるいは粘葉装 こと、第一紙右端と第二紙左端にそれぞれ二四程の空白があることなどから、もとは袋綴 継目付近を中心として左右対称の虫損・破損が存在すること、紙継目の箇所の行間が広い

史料名	仏書断簡	L書断簡										
材質・技法	紙本墨書 装丁·形態 断簡 (前後欠) 書写年代							鎌倉	中期			
紙数	2	全	長	29.6 紙高			26.9	識語	なし			
備考	左方台紙	   左方台紙に「解脱上人」の書入あり。										

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線	押	界	修補	全面	裏打		
	一紙 長	_	一紙 高	_	一紙 行数		8	一行	字数	25		
本文料紙	界幅	1.6	1.6 界高 22.2 天欄高 2.3 地欄高 2.									
	その他 所見		子装(袋綴) 【状の継目幅 (				断し	て貼り	)継い	だもの		

### 【法量】

紙順	1	2
紙長	14.7	14.9
行数	8	8
1・2 行頭字	故得	塵珠

### 【記載内容】

本文初行	故非反化等也言等者主相云若是大乗宗所 明神力反化故大小
本文末行	理等者則實智中如重境此境皆實智所現元 非稱實
該当箇所	_

### 【細目データ 13-26】

									(長さの単位 cm)		
史料名	某寺牒断行	簡 至	建治元4		員数	1点					
材質・技法	紙本墨	書	装丁・形態		竪紙	(前後欠)	書写年代	鎌倉中期	(建治元年)		
紙数	1	全	長	:長 40.		紙高	27.6	識語	なし		
備考		辺切断。右方台紙に「凝然大徳」の書入あり。「(明) 治二巳迄五百九十三年」 書した新附箋(上欠)あり。建治元年は西暦 1275 年。									

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線	な	l	修補	全面	面裏打
本文料紙	一紙 長	_	一紙 高	_	一紙	行数	_	一行	字数	15 前後
	その他 所見	地辺を	切断し、紙背	を典籍	書写 (*	仏書カ	) に二(	欠利用	した一	次文書。

# 【法量】

紙順	1
紙長	40.2
行数	19
1・2 行頭字	戌寺

箋を貼附する。附箋上部は現装丁の本紙にあわせて切除されたもので、「治二巳」は明治 二年己巳(一八六九)か(№13-31参照)。 一三二一)は、鎌倉後期の東大寺僧。 本牒が一次文書であろう。右方の台紙に「凝然大德」の書入がある。 一九行の断簡。 料紙左上部に「治二巳迄五百九十三年」と書した附 凝然(一二四〇~

No. 13 Ι 26 某寺牒断簡 建治元年八月日

の文字に触れるような位置で切断されており、縦墨界は見えない。

紙五行の断簡。

黄麻紙。

右端は、

縦墨界と一つ前の行の残画が残る。左端は、

、第五行

# 【細目データ 13-27】

【細目アータ 13-27】 (長さの単位 cm)												
史料名	大方広仏	方広仏華厳経 巻第六五 員数 1点										
材質・技法	紙本墨書 装丁・形態 断簡(前後欠) 書						書写年代	奈良	時代			
紙数	<b>紙数</b> 1 全長		8.	8	紙高	26.6	識語	なし				

# 【料紙】

本文料紙	紙質	麻紙	染色・加工	黄色	界線	界線 墨		修補全面		裏打
	一紙 長	_	一紙 高	26.6	一紙 行数		_	一行 字数		17
	界幅	1.7	界高	19.2 天欄高 3.2 地欄高 4.						4.1
	その他 所見	右端に	<b>石端に縦界及び前行の文字残画あり</b> 。							

### 【法量】

紙順	1
紙長	8.8
行数	5
1・2 行頭字	菩法

# 【記載内容】

本文初行	菩薩廣大深心欲持菩薩无量勝行於菩薩
本文末行	量币愍勤瞻仰辤退而去
該当箇所	大正蔵 279.10/350b22 ~ b27

# 【細目データ 13-28】

(長さの単位 cm)

史料名	四分律刪	繁補關	<b>男行事</b>	員数 1点					
材質・技法	紙本墨	送書 装丁・形態			断簡(前後欠) 書写年付			鎌倉後期	
紙数	2	全	長	36.2		紙高	25.5	識語	なし
備考									

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	なし	界線 墨		界	修補	修補 全面	
	一紙 長	_	一紙 高	一 一紙 行数		_	一行	字数	22	
本文料紙	界幅	2.1	2.1 界高 22.3 天欄高 1.9 地欄高							1.3
	その他 所見		断カ。紙背か 用されている		新訳華	厳経七	二処九会	会頌釈章	至力):	書写に

# 【法量】

紙順	1	2
紙長	18.1	18.1
行数	9	9
1・2 行頭字	随得	出煮

# 【記載内容】

本文初行	隨轉一々僧残僧祇當在申手内一夜中三度以手相尋不
本文末行	利己不准道教故律中廿餘戒偏結和上之罪故律云
該当箇所	大正蔵 1804.40/154b9 ~ c2

釈章か)が書写されている。紙背に界線はなく、表の界線を利用していることから、表が 一次利用、紙背が二次利用であろう。 二紙一八行の断簡 (第一紙九行、第二紙九行)。紙背にも仏典 (新訳華厳経七処九会頌

白二行半である。第二紙と第三紙、第四紙と第五紙の貼継は本来の状態を伝えているよう 行と尾題・訳場列位 大般若経巻三二二の断簡で、 (前半)、第四紙は訳場列位 現状は五紙からなる。第一・二紙は本文、 (後半) と左方に空白四行、 第三紙は本文末 第五紙は空

三・六四程度となっている。軸径は一四前後と推定される。 考えて矛盾はない。 損の間隔も第一紙は約六・三㎝、第二紙は約五㎝で連続的な変化となっていない。 地辺にずれがある。巻き取り状態で生じたと思われる虫喰穴の形状も両者で対応せず、 たものを、 以上から、第一紙と第二紙以下は本来は離れた部分であり、第二紙以下は、本来三紙であっ たが、そのままつきあわせで配置したもののようで、装丁にともなう作業かと思われる。 第三紙と第四紙は、文字が両紙にまたがって記されており、もとの料紙をいったん切断し 末行、第二紙初行には、紙端で文字が途切れているものがあり、第一・二紙接触部分の天辺・ の料紙であり、中間に存在した三〇数行分の紙面が抜き取られていると思われる。第一紙 大般若経巻三二二の文面で同筆と思われるが、内容は連続しない。もともとは離れた箇所 第一紙 (六行) と第二紙 形状の対応から巻き取られた状態で生じたと考えられる虫喰穴の間隔も、こう その二紙目を中間で切断したが、本来の姿を残す形で手鑑に貼り込まれたと考 相対応する虫喰穴の間隔は、 (五行) は、 継目の無いつきあわせの状態で接している。 第二紙五四程度から逓減し、 左端付近で 同じ 虫

### 【細目データ 13-29】

	(長さの単位 cm)											
史料名	大般若波	羅蜜	多経	卷第三	員数 1点							
材質・技法	紙本墨	書	装丁・形態 断簡 (前後欠) 書				書写年代	奈良時代				
紙数	5	全	長	長 82		3 紙高 26.5		識語	あり			
備考	考 訳場列位に「顕慶五年 (650) 六月八日」の年紀あり。											

### 【料紙】

	V11/12-47										
	本文料紙	紙質	楮紙	染色・加工	黄色	界線  墨		墨界		全面裏打	
		一紙 長	56.3 カ	一紙 高	26.5	一紙 行数 29		29 カ	一行	字数	17
		界幅	2.0	2.0 界高 20.4 天欄高 3.0				3.0	地榻	同高	3.1
		その他所見	第1・2紙の中間欠。第3・4紙はもと一紙か。紙面に虫損あ								<b>b</b> 。

# 【法量】

K 10-1-1-1						
紙順	1	1 2		4	5	
紙長	11.4	9.6	29.1	27.2	5.0	
行数	6	5	15	14	2.5	
1・2 行頭字	得不	浄異	便	大大	_	

# 【記載内容】

本文初行	导此中陁羅尼門不可得陁羅尼門真如亦								
本文末行	便善巧力故於實際作證取聲聞果								
尾題	大般若波羅蜜多経巻第三百廿二								
該当箇所	大正蔵 220.06/647c17 ~ 22 648a29 ~ b6								

横界は金、

縦界は銀で施される。右端・左端に縦界が見えないことから、本来の料紙一紙

紙面に虫喰穴が数点確認でき、その間隔は右端付近約九・五四、

左端

行おきに金字・銀字で交互に書写した一紙二五行の装飾経の断簡。

界線も天地

分の可能性がある。

付近約八・六㎝で、巻取の状態で生じたものであろう。

### 【細目データ 13-30】

(長さの単位 cm)

史料名	大方広仏	華厳絲	圣卷		員数 1点				
材質・技法	紺紙金鉛	艮字	装丁	・形態	態 断簡 (前後欠)		書写年代	平安後期	
紙数	1	全	長	47.0 紙高		26.2	識語	なし	
備考	紺紙に行	ごとり	こ金銀	字、金	:界(	横)・銀界	(縦)の装賃	飾経。	

### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	紺色	界線	金針	限界	修補	全面	裏打
本文料紙	一紙 長	47.0 カ	一紙 高	26.2	一紙 行数 25		25 カ	一行	字数	17
	界幅	1.9	1.9 界高 20.3 天欄高 2.7 地欄高							
	その他 所見	本来の料	×来の料紙一紙分か。							

## 【法量】

紙順	1
紙長	47.0
行数	25
1・2 行頭字	所世

### 【記載内容】

The #VL 1.II.	
本文初行	所願悉満未来諸佛具佛莊厳虚空法界等
本文末行	我以善根廻向供養諸佛以无量香盖无量
該当箇所	大正蔵 278.09/495b7 ~ c4

№13 – 31 大般若波羅蜜多経 巻第五七二(安倍小水麻呂経)

数計算が五○年合わない(№13 - 26参照)。 主となって貞観一三年(八七一)三月三日に書写した旨が記されており、 ある。軸径は一㎝弱と推定される。願文に、前上野国権大目従六位下安倍朝臣小水麿が壇 虫喰穴の間隔は右端付近で約四・八四、左方に進むにつれて逓減し、左端付近で約三四で にあわせて切除されたもので、 に三○数巻が伝わり、願文の文面はそれらと共通の内容である。 水麻呂願経の一つである。小水麻呂願経は、 分の直前で切断したものであろう。形状の類似から虫損は巻き取り状態で生じたもので、 かけて虫損が多数あり、第三紙付近は天辺・地辺ともほぼ欠損している。左端は、 えているものと思われる。第一・二紙に本文及び尾題、第三紙に願文を書す。紙面左方に 大般若経巻五七二の巻尾部分三紙からなる断簡。 「治三午迄九百五十年」と書した附箋を貼附する。 「治三午」は明治三年庚午(一八七〇)と思われるが、年 埼玉県慈光寺に一五二巻ほどが、その他諸所 黄楮紙。 附箋上部は現装丁の裏打紙天辺 貼継はいずれも本来の姿を伝 第三紙の「貞観三年」の いわゆる安倍小 軸附部

# 【細目データ 13-31】

(長さの単位 cm)

史料名	大般若波	羅蜜	多経	員数 1点							
材質・技法	紙本墨	書装丁・形態			断簡	<b>f</b> (前欠)	書写年代	平安	前期		
紙数	3	全	全長 105		6.0	紙高 26.7		識語	あり		
		安倍小水麻呂経。願文に「貞観十三年(871)三月三日」の年紀あり。「治三 下迄九百五十年」と書した新附箋(上欠)あり。									

# 【料紙】

本文料紙	紙質	楮紙	染色・加工	茶色	界線	界線 金銀		修補	全面	i裏打
	一紙 長	42.2	一紙 高	26.7	一紙 行数		21	一行	一行 字数	
	界幅	2.0	2.0 界高 20.4 天欄高 3.4 地欄高							2.9
	その他 所見	紙面にり	虫損あり。尾	題よりた	定方は_	上部・	下部欠	:損。		

# 【法量】

紙順	1	2	3
紙長	22.9	42.2	39.9
行数	12	21	21
1・2 行頭字	月不	於殺	無不

# 【記載内容】

本文初行	月人面亦尒假使充満西牛貨洲預流一来
本文末行	千倍為勝乃至鄥波尼殺曇倍亦復為勝
尾題	大般若波羅蜜多経巻第五百七十二
該当箇所	大正蔵 220.07/957c27 ~ 958a26







表紙

蓋表

# No.14 仁王護国般若波羅蜜多経

かあり、理源大師(聖宝、平安前期の真言宗僧)の真蹟と伝える。 仁王護国般若波羅蜜多経の全二巻。江戸末期の修補と六孫王神社への奉納を伝える識

界線は無く、紙継目を避けずに書写している。全面に朱書によるオコト点・句切点、墨書による振仮名が見られる。現状は巻子であるが、四行ごとに折目痕があり(幅七・七四)、以前は折本に仕立てられていたものと見られる。全体的に朱汚れが広がる。折本段階の虫以前は折本に仕立てられていたものと見られる。全体的に朱汚れが広がる。折本段階の虫以前は折本に仕立てられているが、裏打により修補されている。一方で巻子段階の虫損は修善されていない。紙継目には文字がずれたり切れたりしている部分が多く見られることがら、すべての紙継が一度はがされて修補が行われたと考えられる。紙継目の下部裏に漢数ら、すべての紙継が一度はがされて修補が行われたと考えられる。紙継目の下部裏に漢数ら、すべての紙継が一度はがされて修補が行われたと考えられる。紙継目の下部裏に漢数は無く、紙継目を避けずに書写している。全体的に朱汚れが広がる。折本段階の虫以前は修補時のもので、以下のように記される(上巻による。下巻もほぼ同文)。 「新譯仁王経上紙数二十六枚、下紙数二十六枚、二巻理源大師

清更无疑者也。衣為

真蹟更无疑者也。依為

神明法樂最上為 神寶永奉納玉殿訖。

理源大師御真蹟仁王経一部二巻、加修補訖。累代相承之安政五戊午年五月 傳領主大通寺七十一世弘阿。」

法寳也。如守眼肝努力。不可令他散者也。

嘉永七甲寅歳孟春 末資弘阿謹識

れ、宝永四年(一七〇七)東山天皇の勅により理源大師の称号が贈られた。代前期の真言宗僧である聖宝(八三二~九〇九)の諡号である。醍醐寺の開山として知らろう)への奉納を伝えるとともに、本品を「理源大師御真蹟」とする。理源大師は平安時嘉永七年(一八五四)の修補と、安政五年(一八五八)の玉殿(六孫王神社を指すのであ大通寺(六孫王神社を鎮守とし、同社の北に隣接する)七一世の弘阿が記したもので、

箱書「理源大師真蹟/仁王般若経全部二巻」が記される。 白木の箱(縦二五・九㎝、横一一・○㎝、高五・七㎝)に上下二巻ともに収納されており、



「巻 第3・4紙裏下部 修補時墨書



上巻 第2・3紙裏下部 修補時墨書



上巻 第 19・20 紙継目下部 附箋

三紙第一四行以下は「仁王護国般若波羅蜜多経観如来品第二」 端裏に「二十」、第二四紙右端裏に「廿一」、第二六紙右端裏 裏に「一」、第三紙右端裏に「二」、第四紙右端裏に「□」(下 品第三」を、第二三紙第三行以下は「仁王護国般若波羅蜜多 を、第九紙第一六行以下は「仁王護国般若波羅蜜多経菩薩行 擦消上に記されるが、朱点もあわせて擦消されている。この 第一一行第九字「積」に附された振仮名「シヤク」の墨書は 左端下部の破損により欠損した三字を補っている。第二一紙 がした痕であろうか。第一九・二○紙の継目下部に に「廿□」の墨書がある。修補時の貼り継ぎ順を示すもの[四元] 紙左端裏に「十七」、 第一四紙左端裏に「十三」、 「八」、第一一紙右端裏に「十」、第一二紙左端裏に「十一」、 五紙右端裏に「四」、第八紙左端裏に「七」、第九紙右端裏に 部欠損)、左端裏に「三」(下部欠損で「二」に見える)、第 ことから、朱点の後に振仮名が書き込まれたことがわかる。 と墨書した附箋(縦五・五㎝、横一・二㎝)があり、第二○紙 六紙左端裏に「十五」、第一七紙右端裏に「十六」、第一九 巻首「仁王護国般若波羅蜜多経序品第一」から始まり、 第一八紙第一五行天欄に青い繊維がある。青紙を貼っては 紙継目の下部裏に漢数字等が記入されている。第二紙左端 第二〇紙右端裏に「十八」、第二三紙左 第一五紙右端裏に「十四」、 「相而於

【細目データ 14-1】

一諦品第四」を書写する

(長さの単位 cm)

									(及さの年世 田田)		
史料名	仁王護国般若沙	皮羅蜜多	経巻	員数	1 巻						
材質・技法	紙本墨書	1	装丁	書写年代	平安區	寺代カ					
紙数	27	全長 89				紙高	22.9	識語	あり		
備考	後補の軸付紙に補修時の識語あり。										

### 【表装】

	120201											
	表紙	表紙(縦 23.0	)、横 20.7)	は後補、	青色、宝	相華模様	)					
	红机	薄茶の巻緒、	竹の八双、	見返しに	金砂子散	らし。						
		原・補別	後補	Ì	軸長	長 23.1			軸端	形状	切り落とし	
軸     軸端 法量     天部 縦     一     大部 最大径     1.5							地部 最大径	1.5				
		軸附様態等	後補の軸付	紙あり。	糊痕なし	)						

### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	黄色 打紙	界線		なし	修補 全		面裏打		
本文料紙	一紙 長	32.7	一紙 高	22.9	一紙	行数	17	一行	字数	17		
平又件瓶	界幅	_	一   界高   一   天欄高   一   地欄高   一									
	その他所見	墨書・朱書の酒	È記あり。黄染:	紙が薄茶に変色	してい	る。修补	甫の軸付紙に	こ奥書あ	り。			

# 【法量】

紙順	表紙	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
紙長	20.7	30.2	32.7	32.8	32.7	32.3	32.4	32.4	32.7	32.5	32.2	32.5	32.7	33.0	32.9
行数	_	12	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17
1・2 行頭字	_	仁大	摧無	介身	介一	諸應	者想	内無	於持	来無	摩而	復五	復能	佛薩	薩修
紙順	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	軸付紙	
紙長	32.3	32.6	32.7	32.6	32.7	32.7	32.7	32.6	32.7	32.6	17.9	32.6	29.5	12.2	
行数	17	16	17	17	17	17	17	17	17	17	9	17	11	_	
1・2 行頭字	五三	戒無	進常	一如	波羅	於中	歓於	諦首	大地	幻若	非諸	有波	蜜於	_	

外題	仁王般若経 上
首題 (内題)	仁王護國般若波羅蜜多経序品第一/大興善寺三蔵沙門不空奉 詔譯
本文初行	如是我聞一時佛住王舎城鷲峯山中興大
本文末行	空忍無量菩薩得住十地
尾題	仁王護國般若波羅蜜多経巻上
該当箇所	大正蔵 246.08/834.c1 ~ 839.c21

嘱衆品第八」を書写する。 貼ってはがした痕であろうか。第一四紙右半に縦の押界が見 時の貼り継ぎ順を示すものであろう。 端裏に「○」、第二五紙右端裏に「○」の墨書がある。修補 第六紙第六行以下は「仁王護国般若波羅蜜多経不思議品第六」 える。第二一・二二紙の陀羅尼部分には全面的に振仮名が付 二三紙左端裏に「袮」、第二四紙右端裏に「な」、第二四紙左 左端裏に「た」、第二一紙右端裏に「れ」、第二一紙左端裏に 第一九紙左端裏に「か」、第二○紙右端裏に「与」、第二○紙 「○」、第一七紙左端裏に「を」、第一八紙右端裏に「わ」「□」、 右端裏に「る」、第一六紙左端裏に「○」、第一七紙右端裏に 第一四紙右端裏に「り」、第一五紙左端裏に「ぬ」、第一六紙 に「波」、第六紙右端裏に「仁」、第一三紙左端裏に「ち」、 左端裏に「い」「い」、第四紙右端裏に「ろ」、第五紙左端裏 「そ」、第二二紙左端裏に「そ」、第二三紙右端裏に「つ」、第 巻首「仁王護国般若波羅蜜多経護国品第五」から始まり、 第八紙第一六行第一一字「行」に青い繊維がある。青紙を 紙継目の下部裏に平仮名や記号が記入されている。 第八紙第五行以下は「仁王護国般若波羅蜜多経奉持品第 第二三紙第一二行以下は「仁王護国般若波羅蜜多経 第三紙

【細目データ 14-2】

(長さの単位 cm)

史料名	仁王護国般若沙	支羅蜜多	経巻	下				員数	1巻			
材質・技法	紙本墨書	t i	書写年代	平安時代カ								
紙数	27	全	長	83	5.7	紙高	22.8	識語	あり			
備考	後補の軸付紙に	前の軸付紙に補修時の識語あり。										

### 【表装】

表紙	表紙 (縦 23.0	)、横 20.4)	は後補、	青色、宝	相華模様。	)					
<b>衣料</b>	薄茶の巻緒、	竹の八双、	見返しに	金砂子散	らし。						
	原・補別	後補	Ì	軸長	23.1			軸端	形状	切り落とし	
軸	軸端 法量	天部 縦	天部 縦         -         地部 縦         -         天部 最大径         1.6         地部 最大径								1.6
	軸附様態等	後補の軸付	紙あり。	糊痕なし。							

# 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	黄色 打紙	界線		なし	修補	全	面裏打
* - ** *** ***	一紙 長	32.4	一紙 高	22.8	一紙	行数	17	一行	字数	17
本文料紙	界幅         一         天欄高         一         地欄高									_
	その他所見	墨書・朱書の酒	主記あり。黄染	紙が薄茶に変色	してい	る。修补	甫の軸付紙し	こ奥書あ	り。	

# 【法量】

紙順	表紙	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
紙長	20.4	14.5	16.0	32.4	32.3	18.8	32.1	32.3	32.5	32.4	32.4	32.4	32.5	32.3	32.3
行数	_	4	8	17	17	10	17	17	17	17	16	17	17	17	17
1・2 行頭字	_	仁大	有誦	量先	自行	羅到	報受	波寶	思當	粮能	復生	念故	猛復	俗醫	一復
紙順	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	軸付紙	
紙長	32.4	32.3	32.3	32.3	32.3	32.5	32.5	32.5	32.3	32.5	32.5	32.5	9.1	12.1	
行数	17	17	17	17	16	17	17	17	17	17	17	17	1	_	
1・2 行頭字	道於	魔見	為切	雷雹	衆足	南日	之滅	羯娜	六處	大貴	減日	蹄等	仁	_	

外題	仁王般若経下
首題 (内題)	仁王護國般若波羅蜜多経護国品第五/大興善寺三蔵沙門不空奉 詔譯
本文初行	<b>尒時世尊告波斯匿王等諸大國王諦聴諦</b>
本文末行	喜信受奉行
尾題	仁王護國般若波羅蜜多経巻下
該当箇所	大正蔵 246.08/840.a1 ~ 845.a2

# 15 仏母大孔雀明王経

本品は紙本墨書、三巻からなり、上巻表紙(茶紙)の外題には「佛母大孔雀明王経巻上」上巻首題には「讀誦佛母大孔雀明王経前啓請法」とあり、上部には朱印「栂尾山/善財院」(縦四・九四、横三・八四)が斜めに捺され、下方には朱印「高山寺」(縦四・四四、横一・七四)(縦四・九四、横三・八四)が斜めに捺され、下方には朱印「高山寺」(縦四・四四、横一・七四)が捺される。上巻巻末には「佛母大孔雀明王経巻下」が墨書される。中巻の外題には墨書「佛母大孔雀明王経巻下」が墨書され、その下に朱印「高山寺」、同「栂尾山/善」院」が捺される。巻末には「佛母大孔雀明王経巻下」が墨書され、その下に朱印「高山寺」、戸巻の外題には墨書「佛母大孔雀明王経巻下」が基書され、巻末には「佛母大孔雀明王経巻下」が墨書され、一三巻ともに表紙、見返し、本紙第一紙の虫損が甚だしく、第二紙以降も虫損が多い。本経巻下」が墨書される。三巻ともに白色の軸付紙が付く。経全体に、墨書の振仮名・送仮名・ヲコト点・校合、た書の句切点・合点・校合・声点を確認できる。

相違可多本校合」と薄墨で書かれる。箱蓋表には「孔雀経三巻」と墨書される。并心蓮院本一百廿五ト有之余本一百二十四也/今校合之処「此本并心本」卅 □ 脱有之故大孔雀明王経/上中下」と墨書され、朱印「古筆」が捺される。また別の小札には「當本大乳雀明王経/上中下」と墨書され、朱印「古筆」が捺される。真武/経巻三本/仏母古筆家による極札、書状も付属しており、極札には「小野道風」真蹟/経巻三本/仏母





極札



蓋表

【細目データ 15-1】 (長さの単位 cm)

史料名	仏母大孔雀明3	E経 巻	上					員数	1巻	
材質・技法	紙本墨書	<u>t</u>	装丁	形態		卷子	書写年代	鎌倉門	寺代カ	
紙数	17	全	長	89	4.6	識語	なし			
備考	虫損はなはだし	R損はなはだしい。別紙に極書あり。巻首に朱印 2 種、巻尾に真言あり。								

# 【表装】

表紙		表紙(縦 26.1、横 23.3)は原装カ。茶色。模様なし。見返しは金砂子が蒔かれる。茶地で緑の巻緒。竹の八双。 表紙は本紙と同じ虫損あり。										
	原・補別	後袖	甫力	軸長 27.7				軸端	形状	切り落とし		
軸	軸端 法量	天部 縦	_	地音	ß 縦	_	天部 揖	最大径	1.2	地部 最大径	1.2	
	軸附様態等	後補の軸	付紙あり	0								

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	薄褐色 打紙	界線		墨界	修補	全	面裏打
	一紙 長	47.8	一紙高	25.8	一紙 行数 2		<b>行数</b> 26		字数	17
本文料紙	界幅	1.8 界高 20.2 天欄高 2.7 地欄高								
	その他所見	墨書・朱書の	注記あり。虫技	員はなはだしい。	首題の	下に「雨	高山寺」のプ	方形朱印	J <sub>o</sub>	

6

50.1

26

或或

7

50.1

26

隠曩

8

50.2

26

誐跋

9

50.1

26

枲枲

10

50.3

26

死合

11

50.0

26

為能

12

50.1

26

左式

13

50.0

26

九九

14

49.9

26

天宣

5

50.2

26

帝若

# 【法量】

紙順	表紙 見返し	1	2	3	4
紙長	23.2	44.8	47.8	50.1	50.3
行数	_	23	25	26	26
1・2 行頭字	_	讀	耀引	為令	怛弭
紙順	15	16	17	軸付紙	
紙長	49.7	49.7	42.6	35.4	
行数	26	26	22		
1・2 行頭字	里擔	我見	満頻	_	

外題	佛母大孔雀明王経巻上
首題 (内題)	讀誦佛母大孔雀明王経前唘請法/特進試鴻臚卿大興善寺三蔵沙門大廣智不空奉 詔譯
本文初行	南謨母駄野 南謨達摩野 南謨僧伽野
本文末行	菩提妙花遍荘厳 随所往處常安楽
尾題	佛母大孔雀明王経卷上
該当箇所	大正蔵 982.19/415b15 ~ 422b26

【細目データ 15-2】 (長さの単位 cm)

史料名	仏母大孔雀明3	E経 巻	中					員数	1巻	
材質・技法	紙本墨書	ŧ	装丁	・形態 巻子 書写年代			鎌倉田	持代カ		
紙数	25	全	全長 1214.4 紙高 25.8						なし	
備考	虫損あり。別糸	R損あり。別紙に極書あり。巻首に朱印 2 種、巻尾に真言あり。								

# 【表装】

表紙		表紙(縦 26.1、横 23.3)は原装カ。茶色。模様なし。見返しは金砂子。茶地で緑の巻緒。竹の八双。表紙は本 紙と同じ虫損あり。										
	原・補別	後	後補 軸長 27.8 軸端 形状						切り落とし			
軸	軸端 法量	天部 縦	従   0.9   地部 縦   0.9   天部 最大径   1.1   地部 最大径						1.1			
	軸附様態等	後補の軸	付紙あり	0								

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	薄褐色 打紙	界線		墨界	修補	全	面裏打
	一紙 長	47.3	一紙 高	25.8	一紙 行数		25	一行	字数	17
本文料紙	界幅	2.0 界高 20.4 天欄高 2.6							闌高	2.8
	その他所見		注記あり。虫抗 ソワカ)」とあ	員あり。首題の下 り。	だ「高	山寺」の	)方形朱印。	本紙の	奥に「	唵筏素駄利

# 【法量】

紙順	表紙 見返し	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
紙長	23.3	45.0	47.3	47.7	47.4	47.8	47.6	47.5	47.5	47.5	47.6	47.4	47.5	47.6	47.
行数	_	24	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
1・2 行頭字	_	佛	金大	日勝	鉢湧	氷摩	賀計	惟百	諸阿	嚩引	者苗	令復	称以	嚩娑	處黨
紙順	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	軸付紙			
紙長	47.2	47.5	47.3	47.6	47.6	47.5	47.5	47.5	47.5	47.6	17.2	36.1			
行数	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	9	_			
1・2 行頭字	婆二	訶此	其刼	羅此	賀鉢	引嚩	種役	龍王	那龍	拏叉	佛	_			

外題	佛母大孔雀明王経巻中
首題 (内題)	佛母大孔雀明王経 卷中/特進試鴻臚卿大興善寺三蔵沙門大廣智不空奉 詔譯
本文初行	佛告阿難陀汝當稱念大薬叉王及諸大薬
本文末行	菩提妙花遍荘厳 随所往處常安穩
尾題	佛母大孔雀明王経卷中
該当箇所	大正蔵 982.19/422a1 ~ 433b10

【細目データ 15-3】 (長さの単位 cm)

史料名	仏母大孔雀明3	E経 巻	下					員数	1巻		
材質・技法	紙本墨書	<u>t</u>	装丁	を丁・形態 巻子 書写年代			鎌倉門	寺代カ			
紙数	15	全	長	76	7.1	識語	なし				
備考	虫損あり。別糸	R損あり。別紙に極書あり。巻首に朱印 2 種、巻尾に真言あり。									

# 【表装】

表紙	表紙(縦 26.1、横 11.0)は原装カ。茶色。模様なし。見返しは金砂子。上巻と同じ。茶緑の巻緒。竹の八双。 表紙は本紙と同じ虫損あり。											
	原・補別	後補		軸長	28.0			軸端	形状	切り落とし		
軸	軸端 法量	天部 縦	_	地音	ß 縦	_	天部 揖	最大径	1.2	地部 最大径	1.2	
	軸附様態等	後補の軸付紙あり。										

# 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	薄褐色 打紙	界線	:	墨界	修補	全	面裏打			
	一紙 長	49.9	一紙 高	25.9	一紙 行数		26	一行	字数	17			
本文料紙	界幅	1.9 界高		20.3	天欄高		2.7	地欄高		2.9			
	その他所見	墨書・朱書の注記あり。虫損あり。首題の下に「高山寺」の方形朱印。本紙の奥に「唵筏素駄利□□(梵字:ソワカ)」とあり。											

# 【法量】

紙順	表紙 見返し	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
紙長	11.0	47.3	49.9	50.0	50.0	50.2	50.2	50.3	50.3	49.5	49.7	49.8	49.7	49.7	49.8
行数	_	24	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
1・2 行頭字	_	佛	喜怛	黎脾	説怛	多哩	彦羅	者者	跢属	日此	娑釋	止怛	者菓	所摩	以誰
紙順	15	軸付紙													
紙長	15.6	44.1													
行数	8	_													
1・2 行頭字	_	_													

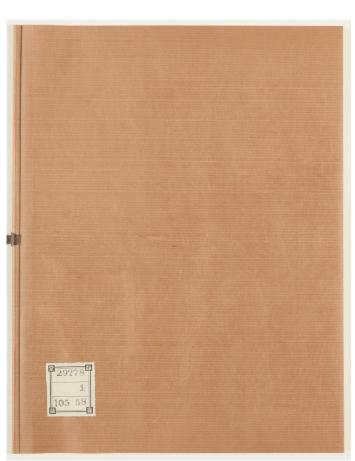
外題	佛母大孔雀明王経巻下						
首題 (内題)	佛母大孔雀明王経 卷下/特進試鴻臚卿大興善寺三蔵沙門大廣智不空奉 詔譯						
本文初行	佛告阿難陀過去七佛正遍知者亦復随喜						
本文末行	菩提妙花遍荘厳 随所往處常安楽						
尾題	佛母大孔雀明王経巻下						
該当箇所	大正蔵 982.19/433b11 ~ 439b20						

# No.16 金光明最勝王経 巻第二

本品には双郭方形朱印「海龍王寺」が捺されている。海龍王寺は藤原不比等邸(後の法 本品は紙本墨書の経巻一巻。表紙や見返しは新調され、装飾はなく、その状態は良好で ある。見返しの左に隔て紙(補紙)を付け、本紙が続く。本品の前段は失われ、巻頭にシ ある。見返しの左に隔て紙(補紙)を付け、本紙が続く。本品の前段は失われ、巻頭にシ ある。見返しの左に隔て紙(補紙)を付け、本紙が続く。本品の前段は失われ、巻頭にシ ある。見返しの左に隔て紙(補紙)を付け、本紙が続く。本品の前段は失われ、巻頭にシ まや本紙欠損を認められるが、概ね良好な状態を保つ。界線は細い墨の単線、天地には装 がはなく、改装された痕跡はみられない。

文の書き直しが認められる。がえる。第六紙天欄に「生」、第一二紙天欄に「倿」が墨書される。その他、振仮名、経がえる。第六紙天欄に「生」、第一二紙天欄に「倿」が墨書される。その他、振仮名、経巻首は経文から始まり、経の途中から始まっているので、前段が切除されたことがうか

参尾には尾題「金光明最勝王経巻第二」と墨書され、その下に朱印「海龍王寺」(縦四・八㎝、巻尾には尾題「金光明最勝王経巻第二」と墨書され、その下に朱印「海龍王寺」(縦四・八㎝、巻尾には尾題「金光明最勝王経巻第二」と墨書され、その下に朱印「海龍王寺」(縦四・八㎝、巻尾には尾題「金光明最勝王経巻第二」と墨書され、その下に朱印「海龍王寺」(縦四・八㎝、



表紙

【細目データ 16】 (長さの単位 cm)

史料名	金光明最勝王絲	圣 巻第	=					員数	1巻			
材質・技法	紙本墨書	Ė	装丁・形態 巻子 書写年代 鎌倉後期									
紙数	24	全	長	75	9.8	紙高	23.8	識語	あり			
備考	前欠。尾題下に	て。尾題下に双郭方形朱印「海龍王寺」あり。元亨 2 年(1322)5 月 8 日。近年制作された箱、帙あり。										

#### 【表装】

表紙	表紙(縦 24.0、横 18.5)は後補。茶色、模様なし。茶色の巻緒。竹の八双。											
原・補別     後補     軸長     26.6     軸端 形状     撥形												
軸	軸端 法量	天部 縦	1.4	地音	ß 縦	1.4	天部	最大径	1.4	地部 最大径	1.4	
	軸附様態等	後補の軸付	紙。糊痕	なし。								

#### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	なしカ	界線	į	墨界	修補	全	面裏打	
	一紙 長	31.6	一紙 高	23.8	一紙	行数	16	一行	字数	17	
本文料紙	界幅	1.9	界高	18.4	天植	嗣高	2.9	地棉	闌高	2.5	
	その他所見	墨書・朱書の注	主記あり。本紙	末に識語あり。							

#### 【法量】

紙順	表紙 見返し	補紙	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
紙長	18.5	12.9	31.7	25.6	31.6	31.6	31.6	31.6	31.6	31.6	31.6	31.6	31.6	31.6	31.6
行数	_	_	16	13	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16
1・2 行頭字	_	_	如衆	二解	種相	二復	議如	寶是	便修	悩故	脱子	海亦	生明	吉臣	音已
紙順	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24				
紙長	31.6	31.6	31.6	31.6	31.6	31.6	31.6	31.5	31.4	21.7	17.7				
行数	16	16	16	16	16	16	16	16	16	11	9				
1・2 行頭字	断佛	無人	於無	我我	我我	如諸	遠一	悉随	顔悉	合諸	皆				

外題	なし
首題 (内題)	なし
本文初行	如是法如如如如智亦無分別以願自在故
本文末行	皆歓喜信受奉行
尾題	金光明最勝王経巻第二
該当箇所	大正蔵 665.16/408c24 ~ 413c6

# № 17 韓婆沙 巻第六(神護景雲経

本品の文字の右横には、ところどころに朱の校合注記がみられる。願文の末尾四行を記紙片の天欄が現状よりも長いことから、これらの紙片は裏打・化粧裁ちされる前に離脱し紙片の天欄が現状よりも長いことから、これらの紙片は裏打・化粧裁ちされる前に離脱したと考えられる。

二四)を捺す。北海翁(松浦武四郎)の名前がみえる。松浦武四郎記念館所蔵『蔵品目録』 Ш 不許/記之以見余於此経不能忘情云 抄巌谷脩題」と墨書し、 九一五)が「余見古寫佛経多矣無如 木箱に巌谷一六(一八三四~一九○五)が「鞞婆沙経 1101111 鞞婆沙 /神護慶雲奥書付] とあり、松浦武四郎旧蔵品であることがわかる [内 朱文円印「古杲」を捺す。函蓋の裏には楊守敬(一八三九~ 楊守敬」と墨書し、 北海翁所蔵此/鞞婆沙経之精者屡欲求索而 朱文方印「楊印/守敬」(方一・ 神護景雲奥書/明治辛巳歳 北海

紙片 2



紙片 1



第1紙 離脱紙片とその脱落箇所

紙片3

【細目データ 17】 (長さの単位 cm)

史料名	韓婆沙 巻第7	: (神護	景雲経	)				員数	1 巻			
材質・技法	紙本墨書	紙本墨書 装丁・形態 巻子 書写年代 奈良時代										
紙数	21	全	長	104	5.2	紙高	27.2	識語 あり				
備考	神護景雲経。神	護景雲経。神護景雲 2 年 (768) 5 月 13 日の識語あり。朱字校合痕あり。表紙・軸・巻緒・八双なし。										

#### 【表装】

表紙	なし										
	原・補別	_		軸長		_		軸端	形状	_	
軸	軸端 法量	天部 縦	_	地音	ß 縦	_	天部 揖	最大径	_	地部 最大径	_
	軸附様態等	_									

#### 【料紙】

	紙質	楮紙(第 21 紙は麻紙)	染色・加工	黄色 打紙	界線	:	墨界	修補	全	面裏打	
本文料紙	一紙 長	56.5	一紙 高	27.2	一紙	行数	24	一行	字数	17	
	界幅	2.4	界高	23.2	天相	闌高	1.8	地相	闌高	2.4	
	その他所見	朱字校合痕あり。継目裏に印影あり。別置の断簡3つあり。									

9

56.5

24

六細

10

56.5

24

本日

8

56.5

24

日涅

11

56.5

24

生入

12

56.5

24

切云

13

28.3

12

利化

14

7.0

3

六何

15

56.5

24

八或

#### 【法量】

紙順	1	2	3	4	5	6	7	
紙長	53.3	56.5	56.6	56.5	56.7	56.6	56.5	
行数	23	24	24	24	24	24	24	
1・2 行頭字	鞞	那此	有蒼	流世	入名	説作	器燧	
紙順	16	17	18	19	20	21		
紙長	56.9	56.8	56.6	56.5	37.7	13.7		
行数	24	24	24	24	16	5		
1・2 行頭字	澹一	空性	虚非	日虚	問盛	非慧		

外題	なし
首題 (内題)	鞞婆沙 第□八 六
本文初行	十二入者眼入色入耳入聲入鼻入香入舌
本文末行	是謂差別廣説六界處盡
尾題	鞞婆沙巻第六
該当箇所	大正蔵 1547.28/454a8 ~ 457b27 460a23 ~ 461c9

## No. 18 仏説阿弥陀経

讃浄土経」の語を確認することができる。「無量寿経」「観無量寿経」とともに浄土経の根 四年(四〇二)の鳩摩羅什によって漢訳され、中国、朝鮮半島に広く普及した。日本には 本経典である浄土三部経とされ、後に時宗で重んじられた。 奈良時代、玄奘による別訳「称讃浄土仏摂受経」も伝わり、正倉院文書に「阿弥陀経」「称 極楽の美しく清らかなさまを説いた「阿弥陀経」。「仏説阿弥陀経」は、後秦時代、 弘始

伴い、その見返しには金銀砂子、箔を散りばめている。表紙・見返しの幅はせまく、表紙 の宝相華は定型化した形で、平安時代末期から鎌倉時代の制作であろう。 装飾経といえる本品は金銀泥で宝相華を描き、その四周に瑞雲を線描した濃紺の表紙を

地欄に近づくほど字間が詰まり、字姿も扁平になる傾向がある。絵裏紙にも金銀箔、 題と尾題には「仏説阿弥陀経」と墨書する。経文には朱の句点、墨による振仮名を施す。 を蒔き、その装飾は見返し、 本紙には金泥で界線を引き、 軸付紙と共通している。軸首には水晶を用いる。 天地には金銀切箔、砂子に加え、刷毛跡も確認できる。首 砂子

跡から巻子→折本→巻子と改装を繰り返したことがうかがわれる。 金銀箔の影響によるものと推測される。本紙の四行ごと(幅約八・○㎝)の折れ跡、 本紙全体に折れや虫損、シミが認められる。本紙全体のシミはかつて総裏紙に施された 切断

四郎旧蔵品とわかる。 四郎記念館蔵『蔵品目録』に「一 仏説阿弥陀経 日下部鳴鶴(名は東作、一八三八~一九二二)によって墨書されたことがわかる。松浦武 尊寺行成」は、平安時代中期の公卿で、三蹟の一人に数えられる能書・藤原行成(九七二 史日下東作」と墨書され、白文方印「東作」(縦一・一㎝、横一・一㎝)が捺されている。「世 ~一○二八)のこと。蓋裏の墨書から明治一三年(一八八○)、明治時代を代表する書家・ 箱の蓋表に「仏説阿弥陀経 世尊寺行成御筆」、蓋裏に「明治庚辰春二月題匣/鳴鶴仙 世尊寺行成卿筆 ミ」とあり、松浦武(1巻)



蓋裏



蓋表

表紙

【細目データ 18】

(長さの単位 cm)

史料名	仏説阿弥陀経							員数	1巻	
材質・技法	彩箋墨書	彩箋墨書 装丁・形態 巻子 書写年代								
紙数	5	全	長	26	0.7	紙高	26.1	識語	なし	
備考	_									

#### 【表装】

表紙	表紙(縦 25.9、横 15.0)は紺色、金銀泥。紫色の巻緒。金属の八双。												
	原・補別	後補	Ì	軸長	27.8 軸端 形状 水晶、六					水晶、六角	角材		
軸	軸端 法量	天部 縦	1.0	地音	8 縦	0.7	天部士	最大径	1.4	地部 最大径	1.4		
	軸附様態等 後補の軸付紙。糊痕なし。												

#### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	金銀箔、 雲母	界線		金界	修補	全	面裏打
本文料紙	一紙 長	47.1	一紙 高	26.1	一紙	行数	24	一行	字数	17
	界幅	1.9	界高	20.7 天欄高 2.5					闌高	2.9
	その他所見	金泥による界線、金銀箔を蒔く。								

#### 【法量】

紙順	表紙 見返し	1	2	3	4	5	軸付紙
紙長	15.0	46.5	47.1	49.0	50.6	43.0	9.5
行数	_	24	24	25	26	22	_
1・2 行頭字	_	佛如	徳又	佛数	大不	仏為	_

外題	なし							
首題 (内題)	<b>弗説阿弥陀経</b>							
本文初行	11是我聞一時佛在舎衛國祇樹給孤獨園							
本文末行	<b>多羅等聞佛所説歓喜信受作礼而去</b>							
尾題	佛説阿弥陀経							
該当箇所	大正蔵 366.12/346.b23 ~ 348.a29							

### No. 19 妙法蓮華経 卷第四

り、後に護国経典の一つとされた。法華経を受持し、書写し、読誦などすることにより功 徳を得られること、女人成仏などを説いていることから、平安貴族の信仰も篤かった。 鳩摩羅什の訳による「妙法蓮華経」は東アジアに広く普及し、日本には飛鳥時代に伝わ

「佐理卿真蹟」を書く。見返しには金銀箔で、すやり霞を表現する。 表紙には茶に染めた紙に金銀箔、砂子で霞が棚引くように装飾を施し、外題には墨書で

態は良好である。 で、軸木が巻き付けられていた部分も広げられていると思われる。本紙全体を通じて、状 尾題の後ろには八行分の本紙がのこり、巻末には糊痕、天地の斜めの切断が認められるの になり、時折、地欄に経文がはみ出る。この傾向から、発願者による書写も想定すべきか。 落が認められる。各行一七字で書かれるが、地欄に近づくほど字間が詰まり、字姿も扁平 される。よって、本経は一巻経のうちの第四巻で、経文は「五百弟子受記品」「授学無学 首題には「妙法蓮華経五百弟子受記品第八 四」、尾題には「妙法蓮華経巻第四」と墨書 経文部分の本紙にも小さな銀切箔が蒔かれている。天地の装飾は本紙裏の装飾とも似通う。 人記品」「法師品」までを含む。ただ、第五紙と第六紙、第七紙と第八紙の間に本紙の欠 本紙に截金による界線を引き、天地には銀箔を主体に切箔・野毛・砂子の装飾を施す。

仲」、朱文方印「釣玄斎」とあり、その包紙には「佐跡極 外套紙了伴書」と墨書される。 また、昭和三九年の修理記録が残る。 書「法華経四之巻/参議佐理卿/真蹟無疑者也/金子拾枚/元禄四年/季秋中一日古筆了 なお本経には元禄四年(一六九一)の年紀をもつ、古筆了仲による折紙が付属し、墨





折紙包紙

軸

【細目データ 19】

(長さの単位 cm)

史料名	妙法蓮華経 巻	<b></b> 巻第四		員数	1巻					
材質・技法	彩箋墨書	書   装丁・形態				卷子	書写年代	平安~鎌倉時代カ		
紙数	11	全	長 571		1.5	紙高	27.6	識語	なし	
備考	欠紙あり。極調	で紙あり。極書あり。新補の二重箱、太巻あり。								

#### 【表装】

表紙	表紙(縦 25.8	表紙(縦 25.8、横 20.2)金銀箔散らす。見返しも。金色の巻緒、竹の八双。									
+1	原・補別	後補	カ	軸長		27.5		軸端	形状	八角形・水晶・緑色着 色	
軸	軸端 法量	天部 縦	1.0	地音	地部 縦 1.0 天部 最大径 1.1 地部 最力						1.1
	軸附様態等	後補の軸付	紙。卷尾	に糊痕あ	<b>b</b> 。						

#### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	銀、雲母	界線	主	に截金	修補		なし
本文料紙	一紙 長	49.4	一紙 高	25.6	一紙	行数	27	一行	字数	17
	界幅	1.8	界高	19.5 天欄高 3.0 地欄高						3.1
	その他所見	欠紙あり。本紙裏にも表と似通う装飾あり。								

#### 【法量】

紙順	表紙 見返し	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	軸付紙
紙長	20.2	47.2	49.4	49.6	49.8	49.5	49.5	49.5	49.5	49.6	49.2	25.8	32.7
行数	_	26	27	27	27	27	27	27	27	27	27	14	_
1・2 行頭字	_	妙	人中	内示	取離	而今	等諸	清千	枝五	塔牟	則常	是能	_

外題	佐理卿真蹟									
首題 (内題)	少法蓮華経五百弟子受記品第八 四									
本文初行	、時當楼那弥多羅尼子從佛聞是智慧方									
本文末行	於恐畏世 能須臾説 一切天人 皆應供養									
尾題	妙法蓮華経巻第四									
該当箇所	大正蔵 262.09/27.b10 ~ 29.b25 29.c29 ~ 30.c10 33.b6 ~ 34.b22									

# M20 大般若波羅蜜多経 巻第三五四

付く。ことが推測される。ただ、現在の総裏紙にも食害が認められる。巻尾には新たな軸付紙が通して甚だしい虫損は線対称に同形の欠損を見せるので、折本であった時に食害にあった手り目跡から五行ずつの折本に仕立てられていた時期があることがわかる。本紙全体を折り目跡から五行ずつの折本に仕立てられていた時期があることがわかる。本紙全体を



表紙

【細目データ 20】 (長さの単位 cm)

史料名	大般若波羅蜜多	多経 巻		員数	1 巻					
材質・技法	紙本墨書	基書 装丁・形態				卷子	書写年代	室町時代カ		
紙数	20	全	·長 983		3.0	紙高	23.7	識語	なし	
備考	所本から巻子に改装。									

#### 【表装】

表紙	新補表紙(高 26.9、長 26.3)。茶地に六歌仙の絵柄。見返しは金箔散し。紫巻緒、木製八双。												
	原・補別 後補 軸長 28.5								軸端形状なし				
軸	軸端 法量	天部 縦	0.7	地音	8 縦	0.7	天部日	最大径	1.8	地部 最大径	1.8		
	軸附様態等	本紙に糊痕	あり。軸	に新しい	軸付紙を	巻く。							

#### 【料紙】

	紙質	麻紙	染色・加工	黄色 打紙	黄色 打紙 界線		<b></b>	修補	全	面裏打		
	一紙 長	51.6	一紙高	23.7	一紙 行数		27	一行 字数		17		
本文料紙	界幅	1.9 界高 19.7 天欄高 1.8 地欄高								2.2		
	その他所見	5 行ずつ折本に仕立てていた折目あり。料紙の現状の色味は茶色がかる。										

8

51.5

27

世設

9

51.9

27

仏非

10

51.6

27

薩解

11

25.2

13

著性

12

26.1

14

性復

13

52.2

27

耳般

14

51.8

27

多忍

#### 【法量】

紙順	表紙 見返し	1	2	3	4	5	6	7
紙長	26.3	48.7	51.6	51.6	51.9	51.6	51.8	51.
行数	_	26	27	27	27	27	27	27
1・2 行頭字	_	大	外空	若静	諦不	羅諸	願眼	設
紙順	15	16	17	18	19	20	軸附紙	
紙長	51.6	51.8	51.5	51.3	51.7	16.0	13.4	
行数	27	27	27	27	27	9	_	
1・2 行頭字	念著	地蜜	法无	若寂	若遠	寂	_	

外題	大般若波羅蜜多経巻第三百五十四
首題 (内題)	大般若波羅蜜多経巻第三百五十四/初分多問不二品第六十一之四 三蔵法師玄奘奉 詔譯
本文初行	復次善現若菩薩摩訶薩作如是念甚深般
本文末行	寂静若遠離若不遠離
尾題	大般若波羅蜜多経巻第三百五十四
該当箇所	大正蔵 220.06/820a7 ~ 825c5

### No. 21 仏説阿弥陀経

で描く。表紙・見返しは縦折れが甚だしい。 花文や扇などが織り表された裂を表紙に用いた阿弥陀経一巻で、金箔地の札に「仏説阿 鎌足公」と外題が墨書される。見返しには金・青金地に蓮を銀泥、蓮の葉を青金

かつて六行ごとの折帖に仕立てられていたと思われる。 題にも「佛説阿弥陀経」と金泥で書かれる。経文も全て金泥を用いる。本紙の折れ跡から、 泥で描く。首題には「佛説阿弥陀経/姚秦三蔵法師鳩摩羅什奉詔譯」と金泥で書かれ、尾 唐草を金泥の線描で描く。本紙経文の前には、瑞雲上に甲(鎧)を身につけた韋駄天を金 本紙はうすい紅で染められ、界線は金の截金。天地の界線は二重線で、天地には宝相華

の極書の後に紅色の軸付紙 い、君水随世などと号した。極書文中には元禄四年(一六九一)の年紀が認められる。こ 一代目畠山牛庵(一六二五~九三)は古筆了佐に古筆鑑定を学んだとされ、名を義高とい 巻尾には秋草、五三桐、波を組み合わせた料紙装飾を施した極書が続く。極書を記した (後補)と軸が付く。

峰旧什一一巻」と墨書された箱を伴う。 十一年」は明治一一年と思われる。M.13 – 31を参照)、蓋表に「紅紙金字阿弥陀経 十六日薨寿五十六歳/当唐高宗総章二年 治十一年迠千弐伯十年」と書かれた小札 付属品に「千二百八年/阿弥陀経紅紙金泥 鎌足公」(表)、「天智天皇八巳己年十月 多武

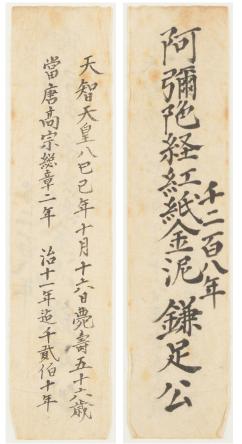
立博物館蔵)に納められている。 い。なお「多武峰切」とされる「法華経断簡」(三行分)が国宝・手鑑「藻塩草」(京都国 には「多武峰切」といわれ、高麗経と目された。とりあえず、その評価を踏襲しておきた 本品のような藤原鎌足を伝承筆者とし、天地に金泥の装飾画を有する経典は、明治時代



蓋表



巻尾極書



札裏

札表

【細目データ 21】 (長さの単位 cm)

史料名	仏説阿弥陀経				員数	1巻					
材質・技法	紅紙金字	Ž.	装丁	・形態		卷子	書写年代	高麗問	寺代カ		
紙数	11	全	長	41	8.3	紙高	39.5	識語	あり		
備考	紅紙金字の装飾	紙金字の装飾経。極書が本紙に貼り継がれる。									

#### 【表装】

表紙	表紙(縦 39.4	4、横 30.1)	青い裂の	表紙(後	補力)、原	・ 花の模	様、裏は	金銀泥、	蓮池。茶	色の巻緒、	金属	の八双。
	原・補別	原装	カ	軸長		41.8		軸端	形状	撥形 模核	金属	
軸	軸端 法量	天部 縦	0.9	地音	ß 縦	1.1	天部 :	最大径	2.1	地部 最大	:径	2.1
	軸附様態等	後補の軸付	紙あり。									

#### 【料紙】

	紙質	楮紙	染色・加工	薄紅色 打紙	界線	j	截金	修補	全	面裏打
本文料紙	一紙 長	一紙 長 58.8 一紙 高		39.5	一紙	行数	12	一行	字数	17
	界幅	2.5	界高	30.3	天植	嗣高	5.1	地相	闌高	4.1
	その他所見	装飾経。欠紙	<b>あ</b> り。							

#### 【法量】

紙順	表紙 見返し	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	極書	軸付紙
紙長	30.1	58.7	29.5	29.5	14.5	14.8	29.4	29.4	29.1	29.3	29.4	13.6	53.5	27.5
行数	_	18	12	12	6	6	12	12	12	12	12	_	8	_
1・2 行頭字	_	佛姚	土金	共音	照利	徳阿	弗名	念佛	其實	生護	不議	_	_	_

外題	佛説阿弥陀経 鎌足公
首題 (内題)	佛説阿弥陀経/姚秦三蔵法師鳩摩羅什奉詔譯
本文初行	如是我聞一時佛在舎衞國祇樹給孤獨園
本文末行	受作禮而去
尾題	佛説阿弥陀経
該当箇所	大正蔵 366.367/346b23 ~ 348a29

# M22 妙法蓮華経 観世音菩薩普門品第

Ħ.

金銀字経の装飾経である。した一品経のうちの一巻であったが、後に分かれ、本品のみ静嘉堂に伝来している。紺紙は一品経のうち巻第二五の観世音菩薩普門品にあたる一巻。もとは法華経を二八巻で構成

装飾経と考えられる。というの場が、外題の地を織り表した裂を表紙に用い、金箔地の見返しを付け当経は宝相華文の装飾、外題の地を織り表した裂を表紙に用い、金箔地の見返しを付け当経は宝相華文の装飾、外題の地を織り表した裂を表紙に用い、金箔地の見返しを付けられた。総裏紙には金の切片を蒔く。本紙の状態、装飾、左記の伝承筆者から江戸時代前期のる。総裏紙には金の切片を蒔く。本紙の状態、装飾、左記の伝承筆者から江戸時代前期のる。総裏紙には金の切片を蒔く。本紙の状態、装飾、左記の伝承筆者から江戸時代前期のる。総裏紙には金の切片を蒔く。本紙の状態、装飾、左記の伝承筆者から江戸時代前期のる。総裏紙には金の切片を蒔く。本紙の状態、装飾、左記の伝承筆者から江戸時代前期のる。総裏紙には金の切片を蒔く。本紙の状態、装飾、左記の伝承筆者から江戸時代前期のる。総裏紙には金の切片を蒔く。本紙の状態、装飾、左記の伝承筆者から江戸時代前期のる。総裏紙には金の切片を蒔く。本紙の状態、装飾、左記の伝承筆者から江戸時代前期のる。総裏紙には金の切片を蒔く。本紙の状態、装飾、左記の伝承筆者から江戸時代前期のる。総裏紙には金の切片を蒔く。本紙の状態、装飾、左記の伝承筆者から江戸時代前期のる。総裏紙には金の切片を蒔く。本紙の状態、装飾、左記の伝承筆者から江戸時代前期のる。といるではないます。

(一六六四~九○)は後西天皇の皇子で日光山輪王寺第二代門跡とされる人物。 付属の箱蓋表には「普門品 一品天真親王御筆 一軸」と墨書されている。天真親王



本文

蓋表

#### 【細目データ 22】

(長さの単位 cm)

史料名	妙法蓮華経 額	見世音菩	提世音菩薩·普門品第二五					1巻			
材質・技法	<b>紺紙金銀</b>	字	装丁	・形態		卷子	書写年代	江戸	時代		
紙数	6	全	長	28	9.1	紙高	29.2	識語	なし		
備考	紺紙金銀字の装	紙金銀字の装飾経。									

#### 【表装】

表紙	表紙(縦 29.2 竹の八双。	2、横 20.3)	後補力。	茶色に金、	紫、白な	よどで華林	莫様 (宝木	目華文カ)	。見返し	は金箔押。茶色	色の巻緒、
	原・補別	原装	カ	軸長	31.5			軸端	形状	六角形 水晶 小口に金泥を塗る	
軸	軸端 法量	天部 縦	1.0	地音	ß 縦	1.0	天部士	最大径	1.2	地部 最大径	1.0
	軸附様態等	本紙直継。	軸木径。								

#### 【料紙】

	紙質	楮紙力	染色・加工	紺色 金砂子、金箔	界線		金界	修補	部分	分裏打
本文料紙	一紙 長	46.4	一紙 高	29.2	一紙	行数	25	一行	字数	17
	界幅	1.9	界高	22.8	天相	闌高	4.0	地相	闌高	2.2
	その他所見	_								

#### 【法量】

紙順	表紙 見返し	1	2	3	4	5	6
紙長	20.3	46.0	46.4	46.6	46.6	46.6	36.6
行数	_	19	25	25	25	25	4
1・2 行頭字		妙介	況設	観人	門以	弘我	有示

外題	なし
首題 (内題)	妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五
本文初行	尒時無盡意菩薩即從座起偏祖右肩合掌
本文末行	阿耨多羅三藐三菩提心
尾題	なし
該当箇所	大正蔵 262.09/56c2 ~ 58b7

# №23 妙法蓮華経ほか

される[須藤 二〇二一]。 されている。宋時代(九六〇~一二七九)以前の変相図を伴う写経としては唯一の存在と陽神呪経」、「仏説七千仏神符益筭経」の三種の経典などを、一冊の折本の両面に貼り合わ冒頭に「法華経」に基づく変相図を伴い、「妙法蓮華経(法華経二八品)」、「仏説天地八

片面 以後、第一六○面まで基本的に同筆で、「普賢菩薩勧発品第二十八」までを書写する。次 判読し難いが「庚申歳三月三日題」と読める。続いて第二六面に「妙法蓮華経弘伝序 成される。 説七千仏神符益筭経」が続けて書写される。第一六一面以降の裏面が「変相図」に該当す 手千眼大慈大悲心真言啓請」、第一六七面より「仏説天地八陽神呪経」、第一七九面より「仏 のみとなり、書風も拙い。一行の文字数も三〇から三三文字となり、第一六三面 いで第一六一面より「加句霊験仏頂尊勝陀羅尼」が始まるが、以降、朱界線は無く、 寶塔品第十一」が書写される。第六面以降、朱界線が二重線となる箇所が散見されるが、 正蔵T262.09/32a4~7に該当)は欠である。ウラ面は見返しから始まり、ウラ第二面より「見 最終面(第一八五面)の最終行が裏表紙の下に入っているため「妙法蓮華経」の一行分(大 モテ面には、 南山釋道宣述」とあり、以後、 意絵の末に、 どを適宜施した素朴な表現で、 面まで、 る。 現状は折本。濃い黄檗色に朱界を施す本紙二枚を貼り合わせ、両面使いする特異な装丁。 (構成表参照 オモテ第一面、 一八五面からなる。数度改装されたとみられ、紙継を判別することが困難な箇所があ 経意絵「妙法蓮華経変相図」が続く。 描写は一貫して、 邪鬼が掲げ持つ蓮台上に牌標が描かれ、その中に墨書がある。消し痕があり 第二八面「序品第一」より第一七七面「法師品第十」の途中までが収まり、 朱の匡郭内に 墨線で輪郭をかたどり、朱を中心に緑青、群青、 朱の単界に濃墨で堂々と「妙法蓮華経」が書写される。 描かれた者を特定する短冊(墨書)を付す。 「白衣観世音霊験真言啓請」が墨書される。次に第二五 経意絵は、 二面ずつ朱の匡郭で区切って構 第二五面、 胡粉、 終 経

ゴル語・チベット語・西夏語などの諸語訳が存在し、アジア仏教史を考えるうえできわめ的な偽経であり、その成立時期は七世紀後半から八世紀前半とされる。ウイグル語・モンなお「仏説天地八陽神呪経」(ウラ第一六七面)とは、道教や儒教の影響を受けた典型

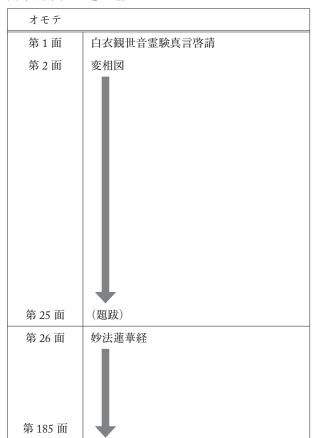
を抜粋し、部分的に仏教的な改変を加えたものである[増尾 一九九六]。 ラ第一七九面)は、中国撰述の道教的な疑偽経典であり、道経「太上老君説長生益算妙経経典伝播の考察に役立てられている[小田 二〇一五]。また、「仏説七千仏神符益筭経」(ウて重要な偽経である[木村 一九九七]。なかでも本品は中国古写本の貴重な史料であり、

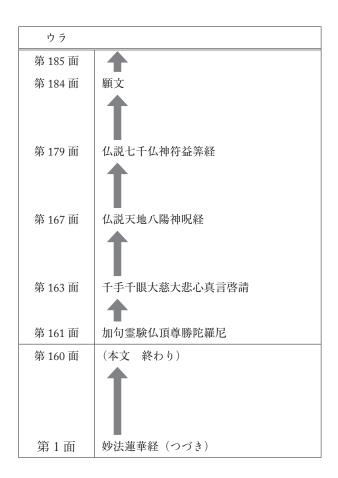
二〇二一]もあるが、「変相図」の絵画様式や「妙法蓮華経」その他の写経の書風や体裁 図」尾題より、 期は不明だが の堤它山(一七八三~一八四四)の子息・堤公樹(生没年未詳)による慶応三年(一八六七) 内箱は本品に合わせた寸法 横一九・三㎝、高一四・八㎝)で蓋裏に朱漆の梵字、「静嘉堂珍蔵」(朱印)を捺した紙を貼る ているが装丁は元使いされている。 などからも、再考の余地がある。なお昭和三九年(一九六四)に本紙裏打の修理がなされ 一七六七~一八四一)の所蔵であった[松本 の識語が墨書される。 に「妙法蓮華経画変相上」と墨書がある。中箱は黒漆塗りの足の付いた経箱(縦三四・○㎝ 陰刻される。三重箱で、外箱(縦三八・二㎝、横二二・七㎝、高二二・八㎝)は白木で蓋表 「妙法蓮華経壹部幷画変相上」、もう一方の表面に「女弟子彭城郡金氏十二娘発心写造」が 附属品に、木製の梵夾板(縦二六・四㎝、横一○・八㎝)があり、梵夾板の一方の表面に 「庚申歳三月三日題」を紹興一○年(一一四○)とする説[松本 「益州多寶寺宗慧釋道因傳」 天台僧・道因(活躍期:一二世紀中頃)らの結縁により、 それによれば、本品は文化年間に河合道臣 (縦三〇·五m、 (半紙版冊子綴じ) が附属する。 横一五·四ch、 一九二六 [山本 二〇二一]。他に書写時 高八・二四)で、 (姫路藩家老、寸翁大夫、 九 本経が成立した 因みに「変相 底に姫路藩儒 |六] [山本



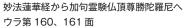
箱裏墨書

#### 「妙法蓮華経ほか」の構成











梵夾板

#### 【細目データ 23-1】

(長さの単位 cm)

_										(XC 5) + (E. CIII)		
	史料名	妙法蓮華経ほか‐	- オモテ		員数	1帖						
	材質・技法	紙本墨書・紙本墨	墨画淡彩	宋明	<b></b>							
	紙数	不明	全:	Ę	217	70.4	紙高	25.6	識語	あり		
	備考	表裏貼り合わせ。	長裏貼り合わせ。梵夾板(縦 25.7、横 11.9)あり。厚 3.5。妙法蓮華経、変相図などを含む。									

#### 【表装】

表紙 縦 25.8、横 11.7。梵夾板。

#### 【料紙】

	紙質	麻紙	染色・加工	黄色	界線	;	朱界	修補	部分	分裏打	
本文料紙	一紙 長	46.8	一紙 高	25.8	一紙	行数	36	一行	字数	26	
平义作机	界幅	1.2	界高	23.9	天相	闌高	1.0	地相	闌高	0.9	
	その他所見	見 第1紙~第7紙に変相図あり。第48紙左端一行は梵板の下に入る。									

#### 【法量】

紙順	表紙 見返し	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
紙長	11.5	31.5	46.6	46.5	46.4	46.4	46.5	46.3	46.7	46.7	46.7	46.6	46.4	46.5	46.4
行数	_	7と 経絵2面	経絵4面	経絵4面	経絵4面	経絵4面	経絵4面	経絵2面 序文18	36	36	27	36	36	36	36
1・2 行頭字	_	白一	_	_	_	_	_	妙粤	妙如	是相	以又	四威	即示	已離	不無
紙順	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
紙長	46.4	46.3	46.5	46.3	46.7	46.5	46.6	46.6	46.7	46.5	23.6	46.7	46.6	46.8	46.8
行数	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	27	36	36	36
1・2 行頭字	生生	貧我	皆乃	為従	毎以	舎具	大得	大度	皆者	即羊	佛我	受聾	提藐	除得	周造
紙順	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
紙長	46.7	46.8	46.7	46.7	46.6	46.7	46.7	46.6	46.4	46.5	46.5	46.5	46.3	23.6	46.5
行数	36	36	36	36	36	18	36	36	36	36	36	36	36	18	36
1・2 行頭字	我我	如人	威一	光介	億却	説我	所衆	等偈	今昔	當尊	度衆	第其	常助	誰成	具其
紙順	45	46	47	48	補紙	裏表紙	* A	氏継が不明	月瞭な箇戸		に場合は、	便宜的に	こ4面1約	氏と考え言	十測した。
紙長	46.3	46.0	45.5	21.0	0.8	11.7									

#### 【内容】

行数

1・2 行頭字

36

乎應

36

我見

36

女使

17

□法

外題	なし
首題 (内題)	白衣観世音霊験真言啓請
本文初行	一心鈑命東方補陀落山紫黒旃檀沈水香刹心同法界
本文末行	文殊五髻真言 阿囉鍰佐嚢
尾題	なし
該当箇所	_

外題	なし
首題 (内題)	妙法蓮華経弘傳序 終南山釋道宣述
本文初行	粤惟妙法蓮華経者統諸佛降霊之本致也蘊結大厦出彼千齡東
本文末行	者在空閑處我時廣遣天龍鬼神乾闥婆阿脩羅等聴其説法我雖 (次行僅存)
尾題	なし
該当箇所	大正蔵 262.09/1b11 ~ 32a4 (32a4 ~ 7 の部分は裏表紙の下)

【細目データ 23-2】 (長さの単位 cm)

史料名	妙法蓮華経ほな	法蓮華経ほか-ウラ 員数 1帖										
材質・技法	紙本墨書	<u>+</u>	宋時代									
紙数	不明	全	識語	あり								
備考	妙法蓮華経、任											

#### 【法量】

紙順	裏表紙 見返	補紙	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
紙長	11.3	1.1	44.0	33.9	46.0	34.7	46.3	34.3	46.6	46.7	46.1	46.6	46.6	46.6	34.9
行数	_		35	27	36	27	36	27	36	36	36	36	36	36	27
1・2 行頭字	_		欲穿	一彼	目寶	諸佛	妙介	空已	二佛	諸経	扠鶏	説好	其何	我欲	善問
紙順	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
紙長	46.4	46.8	46.5	46.5	46.5	46.5	47.0	47.0	47.0	47.0	34.8	46.6	46.7	46.6	46.7
行数	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	27	36	36	36	36
1・2 行頭字	是其	令捨	即而	何於	因及	佛聞	諸坐	若一	生語	介華	但復	阿師	復書	離求	於多
紙順	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
紙長	46.6	46.7	46.5	46.5	46.4	46.5	46.5	46.5	46.3	46.5	46.7	35.0	46.5	23.2	23.2
行数	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	27	36	18	18
1・2 行頭字	得億	一生	善而	小是	是必	欲國	脱昧	万福	或所	伺痤	王有	見法	衆繞	發受	妙加
紙順	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	表紙		
紙長	23.0	23.2	23.3	23.2	23.2	23.0	23.1	23.3	23.1	23.3	11.3	23.2	11.7		
行数	20	19	20	20	20	20	20	20	20	20	10	19	_		
1・2 行頭字	第薩	我消	婆阿	如佛	得但	世哉	月火	陽識	経滕	七七	百送	法謹	_		

1 2 门娱丁									
【内容】									
外題	なし								
首題 (内題)	なし								
本文初行	欲捨諸懈怠 應當聴此経 是経難得聞 信受者亦難 如人渴須水								
本文末行	刹弗等諸聲聞及諸天龍人非人等一切大會皆大歡喜受持佛語作礼而去								
尾題	妙法蓮華経一部七巻								
該当箇所	大正蔵 262.09/32a8 ~ 62b1								
外題	なし								
首題 (内題)	加句靈驗佛頂尊勝陀羅尼								
本文初行	稽首千□蓮華殿金剛座上尊勝王為滅七返傍生難固出寳手摩我								
本文末行	麼賀毋捺□ 娑嚩賀								
尾題	なし								
該当箇所	大正蔵 974C.19/387b11 ~ c18								
外題	なし								
首題 (内題)	千手千眼大慈大悲心真言啓請								
本文初行	稽首毗盧遮那佛霊山會上釋尊稽首無為金粟尊西方浄土弥								
本文末行	哪娑婆訶 大悲陁羅尼								
尾題	なし								
該当箇所	大正蔵 1950.46/975c28 ~ 976a14, 976a28 ~ b29								
外題	なし								
首題 (内題)	佛説天地八陽神呪経								
本文初行	聞如是一時佛在毗耶離達摩城廖廓宅中十方相隨四衆圍繞介時無礙菩薩在								
本文末行	見不得一法即涅槃樂								
尾題	仏説八陽神呪経一巻								
該当箇所	大正蔵 2897.85/1422b12 ~ 1425b3								
外題	なし								
首題 (内題)	佛説七千佛神符益筭経								
本文初行	佛説救護蓋筭身命濟人疾病苦尼経瑚跪合掌一								
本文末行	佛心滅罪□□閻真言 唵 摩尼□□ 吽□ □								
尾題	なし								
該当箇所	大正蔵 2904.85/1446a3 ~ c1								

### No. 24 金光明最勝王経 (讃岐切

が記される。松浦武四郎旧蔵品。 状では二○紙強の脱落がある。軸附紙に寛文二年(一六六二)の良尚入道親王による識語 金光明最勝王経全一〇巻を、細字で一行三四字、一紙五四行で記して一巻とするが、 現

れている。 表紙見返しには金銀装飾を施し界線の引かれた写経料紙(平安後期~鎌倉か)が流用さ 行三四字の細字で書写されており、縦界線は無く、紙継目を避けずに書写し

半から巻第八冒頭部分が欠落しており、第二紙と第三紙との間にはおおよそ二○紙強の脱 第一行以下は「付嘱品第三十一」を書写する。金光明最勝王経全一○巻のうち、巻第一後 提樹神讃歎品第二十九」を、同第四五行以下は「大弁才天女讃歎品第三十」を、第一四紙 歎品第二十七」を、同第二二行以下は「妙憧菩薩讃歎品第二十八」を、同第三二行以下は 「菩 第一○紙第四八行以下は「捨身品第二十六 十」を、第一三紙第九行以下は「十方菩薩讃 同第三六行以下は「除病品第二十四」を、第九紙第二四行以下は「長者子流水品第二十五」を、 同第四三行以下は「大吉祥天女増長財物品第十七」を、第四紙第一七行以下は「堅牢地神 第二紙第四行以下は「如来寿量品第二」を、第三紙第二六行以下は「大吉祥天女品第十六」を、 落があることがわかる。 品第十八」を、第五紙第六行以下は「僧慎尒耶薬叉大将品第十九」を、同第三七行以下は 一三行以下は「諸天薬叉護持品第二十二」を、第八紙第一二行以下は「授記品第二十三」を、 「王法正論品第二十」を、第六紙第三八行以下は「善生王品第二十一 九」を、第七紙第 巻首「金光明最勝王経序品第一」(以下、「金光明最勝王経」は省略する)から始まり、

(一六六二) の識語には、本資料を「天満天神之霊蹟」、つまり菅原道真の手跡としている。 曼殊院を洛中より洛北一乗寺村に移転して堂舎を造営しており、現在の建物の多くはこの である。曼殊院院主は代々北野社別当職を兼務していた。良尚は明暦二年(一六五六)に 秘々々。/寛文二年二月廿五日/北野寺務二品親王(花押)」と墨書される。「北野寺務二 ときのものである。 品親王」は後水尾上皇猶子であり曼殊院に住した良尚入道親王(一六二二~九三)のこと 後補の軸附紙に「此金光明最勝王経一軸者/天満天神之霊蹟也。奚有/棗梅之異哉。可 良尚は水墨画や書道・詩文・立花などにも造詣が深かった。寛文二年

> 道真が讃岐守の時の手跡と伝わるためという[小杉 一八九三]。 本資料のように白紙墨罫で細楷の墨字で記される最勝王経の類を「讃岐切」と称するのは、

物小幅 さ/ さ | 正蔵 665.16/436a10~19)が書写されており、 字配りなどからも、 行のみ)の掛軸が所蔵される「北海道博物館 が鑑賞し揮毫したことが知られる [内川 二〇一三]。同目録には続けて「一 同 六行 経巻/管公之真筆 一巻」とあり、武四郎の所蔵品を明治六年九月中旬に書家の永井盤谷(意) 薫手拝観并題籤」と墨書され、印文未詳の朱文方印二顆がある。永井盤谷(一八二〇~ 部に相当する。 八四)は江戸で活動した書家。また松浦武四郎記念館所蔵『蔵品目録』には「一 「讃岐切 一巻」、小口に「讃岐切」と墨書される。蓋裏に「明治六年九月中浣 大江喜暉(\*####) 白木の箱(縦三一・○㎝、横六・○㎝、高五・三㎝)に一巻のみで収納されており、箱書 | 」とあり、松浦武四郎記念館には該当すると思われる断簡(ただし四 本品と一連であることは間違いなかろう。断簡には巻第七の一部(大 二〇一八]。本断簡は、 本品第二紙と第三紙との間の脱落部分の一 金界の様態や書風





蓋裏

【細目データ 24】 (長さの単位 cm)

史料名	金光明最勝王絲	圣(讃岐	:切)					員数	1巻		
材質・技法	紙本墨書	Ė	装丁・形態巻子				書写年代	平安時代			
紙数	14	14 全長 740.8 紙高						識語	あり		
備考	装飾経。讃岐均	節経。讃岐切。2 紙と 3 紙の間に欠落あり。後補の軸付紙に識語あり。									

#### 【表装】

表紙		表紙(縦 27.3、横 23.5)は原表紙カ。茶色。見返しは金銀装飾。界線あり。 巻緒は黄緑と茶の組紐。八双は竹カ。										
	原・補別	後補	後補 軸長 29.0 軸端 形状 切り落とし、水晶									
軸	軸端 法量	天部 縦	0.8	地音	ß 縦	0.8	天部士	最大径	1.1	地部 最大径	1.1	
	軸附様態等	後補の軸付	すの軸付紙あり。糊痕なし。									

#### 【料紙】

	紙質	楮紙カ	染色・加工	なし 打紙 雲母カ	界線	金界(	天地のみ)	修補		なし
本文料紙	一紙 長 48.7		一紙 高	27.1	一紙	行数	54	一行	字数	34
	界幅 —		界高	20.0	天欄	高	3.0	地框	闌高	4.0
	その他所見	箱書に「讃岐り	刀 一巻」とあ	り。軸付紙に「	寛文二年	= (1662	)」の奥書あ	<b>う</b> り。		

#### 【法量】

紙順	表紙	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
紙長	23.5	47.9	48.7	48.8	49.0	49.0	48.9	49.1	49.1	49.1	49.0	49.0	49.0	49.1	44.6
行数	_	52	54	54	54	54	55	54	55	54	55	54	54	54	35
1・2 行頭字	_	金如	方慈	歸妙	謨祥	所矩	葉如	苦心	離果	若藥	魚信	寶繞	入悩	哀趣	金介
紙順	軸附紙														
紙長	37.0														
行数															
1・2 行頭字	_														

外題	なし
首題 (内題)	金光明取勝王経序品第一 三蔵法師義浄奉 制譯
本文初行	如是我聞一時佛薄伽梵在王舎城鷲峯山頂於取清淨甚深法界諸佛之境如来所居
本文末行	佛説已皆大歓喜信受奉行
尾題	金光明取勝王経巻第十
該当箇所	大正蔵 665.16/403a2 ~ 405c26 665.16/438a6 ~ 456c19

# 引用文献一覧

三四、二〇一二 飯田剛彦「聖語蔵経巻「神護景雲二年御願経」について」『正倉院紀要』

料編纂所附属『画像史料解析センター通信』九九、二〇二三[市川 二〇二三] 市川理恵「静嘉堂所蔵「仏説中心経」と五月一日経願文」東京大学史

紀要』二、二〇二四 市川理恵「静嘉堂所蔵の三点の註楞伽経断簡について」『静嘉堂研究[市川 二〇二四] 市川理恵「静嘉堂所蔵の三点の註楞伽経断簡について」『静嘉堂研究

[岩本 二〇一五] 岩本健寿「長屋王発願経(滋賀県常明寺蔵和銅経)伝来考」新川登亀

[内川 二〇一三] 内川隆志編『松浦武四郎蒐集古物目録:静嘉堂文庫蔵』、二〇一三

文字・言語・造形と思想』勉誠出版、二〇一五

『仏教文明の転回と表現

開』吉川弘文館、二〇〇三 「五月一日経願文作成の背景」笹山晴生編『日本律令制の展[小倉 二〇〇三] 小倉慈司「五月一日経願文作成の背景」笹山晴生編『日本律令制の展

ジア史研究』三〇、二〇一五[小田 二〇二五] 小田壽典「偽経本「八陽経」写本からみた仏教文化史の展望」『内陸ア

[正倉院宝物特別調査 二〇一〇]「正倉院宝物特別調査 紙(第2次)調査報告」『正倉[小杉 八九三] 小杉椙邨「菅公の眞蹟といふもの、論」『大八州雑誌』八二、一八九三

院紀要』三二、二〇一〇

[新川 二〇一五] 新川登亀男編『仏教文明の転回と表現 文字・言語・造形と思想』「付二〇一六

【須藤 二○二一】 須藤弘敏「宋の経絵について」『アジア仏教美術論集』東アジアⅢ 五

代・北宋・遼・西夏』中央公論美術出版、二〇二一

[静嘉堂 一九九九] 静嘉堂文庫美術館編『仏教の美術』、一九九九

[静嘉堂 二○○○]『静嘉堂文庫の古典籍 第四回 王朝文化へのあこがれ』静嘉堂文

庫、二〇〇〇

[田中 一九七三] 田中塊堂『日本古写経現存目録』思文閣、一九七三

立歴史民俗博物館研究報告』七九、一九九九[田中 一九九九] 田中史生「「東大寺印」と「造東寺印」 正倉院文書の分析から」『国

(研究代表者 野尻忠)奈良国立博物館、二○一七[野尻 二○一七] 科研報告書『慈光寺所蔵「大般若経(安倍小水麻呂願経)」の調査と研究Ⅰ

[服部 一九七三] 服部匡延「内家私印について」『古文書研究』六、一九七三

[おおは、この一八] 北海道博物館ほか編集『幕末維新を生きた旅の巨人』松浦武「北海道博物館」二○一八] 北海道博物館ほか編集『幕末維新を生きた旅の巨人』松浦武

[増尾 一九九六] 増尾伸一郎「『七千仏神符経』と呪符木簡・墨書土器」『道教と中国撰 四郎―見る、集める、伝える』、二〇一八

古書院、二〇〇七 増田晴美編『百万塔陀羅尼の研究―静嘉堂文庫所蔵本を中心に―』汲述仏典』汲古書院、二〇一七、初出一九九六

[松本 一九二六] 松本榮一「法華経美術(一)~(三)」『國華』四二七・四二八・四三三、

一九二六

古代中世史料の研究』吉川弘文館、二〇一二、初出一九六二[皆川 一九六二] 皆川完一「光明皇后願経五月一日経の書写について」『正倉院文書と

写経と社会』塙書房、二〇〇六、初出一九九七[宮﨑 一九九七] 宮﨑健司「大谷大学博物館蔵「判比量論」断簡の性格」『日本古代の

編『仏教文明の転回と表現 文字・言語・造形と思想』勉誠出版、二〇一五[宮﨑 二〇一五] 宮﨑健司「正倉院文書と古写経―隅寺心経の基礎的観察」新川登亀男

倉院文書研究』七、二○○一[山下 二○○一] 山下有美「嶋院における勘経と写経―国家的写経機構の再把握―」『正

信仰と社会」『美術研究』四三〇、二〇二〇[山本 二〇二〇] 山本聡美「妙法蓮華経変相図(静嘉堂文庫蔵)にみる南宋時代寧波の

繊維束	繊維溜	地合	皺	硬さ	地色	簣目色	簀の目	糸目	板目	刷毛目	紗目	紙抄混入	備考	
無	無	打紙(強)	無	裏打ちあり。 調査できず。	茶(染)	不可視	不可視	不可視	不可視	不可視	無	墨付繊維	裏打ちあり。	
無	無	打紙(強)	無	裏打ちあり。調査できず。	茶(染)	茶	20本(普通)	20mm (太·微か)	不可視	不可視	無		膏薬張りの補修あり。	
無	無	打紙(強)	無	裏打ちあり。調査できず。	茶(染)	不可視	不可視	不可視	不可視	不可視	無		☆ ヤマシ ナ )。	
無	無	打紙(強)	無	裏打ちあり。 調査できず。	茶(染)	不可視	不可視	不可視	不可視	不可視	無		裏打ちあり。	
無	無	打紙(中)	無	柔	白黄(染)	不可視	不可視	不可視	不可視	不可視	無	青繊維·墨付繊維	+ (m )	
無	無	打紙(中)	無	普通	白黄(染)	不可視	不可視	不可視	不可視	不可視	無	墨付繊維	表紙なし。軸あり。 膏薬張りの補修あり。 紙端が厚い。 水損(第2紙)。	
無	無	打紙(中)	無	裏打ちあり。調査できず。	茶(染)	茶	22本(普通)	30mm (太·微か)	不可視	不可視	無	青繊維	表紙あり。軸あり。 裏打あり(裏打紙に切箔)。補紙 あり。 相剥ぎか。表面ももけ。 簣目・糸目は裏打ち紙の影響か。	
微	無	打紙(強)	無	普通	茶(染)	茶	24本(明瞭)	28mm (太·明瞭)	不可視	不可視	無	青繊維	表紙あり。軸あり。	
無	無	打紙(強)	無	普通	茶(染)	茶	24本(明瞭)	30mm (太·明瞭)	不可視	不可視	無		衣料のり。	
無	無	打紙(中)	無	普通	黄(染)	不可視	不可視	不可視	不可視	不可視	無	墨付繊維 青繊維·赤繊維	表紙あり。軸あり。	
無	無	打紙(中)	無	普通	黄(染)	不可視	不可視	18mm (太・微か)	不可視	不可視	無		補紙あり。	
無	無	打紙(軽)	無	普通	白茶(染)	茶	18本(普通)	28~30mm (太·普通)	不可視	不可視	無		表紙なし。軸あり。 膏薬張りの補修あり。	
微	無	打紙(軽)	無	普通	白茶(染)	茶	16本(明瞭)	22~28mm (太·普通)	不可視	不可視	無		表面ももけ(第2紙)。 パリパリ感。	
無	無	打紙(強)	無	裏打ちあり。調査できず。	茶(染)	不可視	不可視	不可視	不可視	不可視	無		裏打ちあり。 紙継ぎ部分に豆糊跡あり。	
少	無	打紙(強)	無	裏打ちあり。調査できず。	茶(染)	茶	22本(微か)	25mm (太·普通)	不可視	不可視	無	青繊維	裏打ちあり。表面ももけ。 簣目・糸目は裏打ちの影響か。	
無	無	打紙(中)	無	裏打ちあり。調査できず。	白茶(染)	自	16本(明瞭)	23mm (太·微か)	不可視	不可視	無			
無	無	打紙(中)	無	裏打ちあり。調査できず。	白茶(染)	白	20本(明瞭)	33mm (太·明瞭)	不可視	不可視	無		表紙なし。軸なし。 裏打ちあり。 繊維が細かい(第1紙)。 行頭を揃えるための刀子痕あり	
微	無	打紙(強)	無	裏打ちあり。調査できず。	茶(染)	不可視	不可視	20~25mm (太·明瞭)	不可視	不可視	微	墨付繊維	(第20·21紙)。 1〜20紙とは紙質が違う(第21 紙)。	

#### 静嘉堂所蔵古写経料紙調査一覧表

目録番号	文書名	対象	対象総数	和暦年月日	形状	法量(縦)	法量 (横)	縦横比	繊維配向(表)	繊維の種類	米粉	白土	非繊維物質	混入物	漉斑	
	大般若波羅蜜多経	第2紙	- 23紙	和銅5(712) 年11月15日	折本	23.8	47.7	縦:横=1:2.004201681	1.03767	楮	無	無	多	外皮·微少	皆無	
	巻第245 (長屋王願経)	第23紙				23.8	43.3	縦:横=1:1.819327731	1.009258	楮	無	無	中	外皮·微少	皆無	
2	大般若波羅蜜多経	第2紙	- 19紙	天平2(730) 年3月	折本	25.4	51	縦:横=1:2.007874016	1.117497	楮	無	無	微	外皮·微少	普通	
	巻第526 (永恩具経)	第19紙				25.4	32.5	縦:横=1:1.279527559	1.123016	楮	無	無	微	外皮·微少	普通	
		第2紙		天平 12(740)年5 月1日	卷子装	26.2	46.1	縦:横=1:1.759541985	1.013292	麻·雁皮	無	無	微	外皮·微少	皆無	
3	華手経 巻第4 (五月一日経)	第18紙	18紙			26.2	16.5	縦:横=1:0.629770992	1.001415	麻·雁皮	無	無	多	外皮·微少	皆無	
4	心経(般若波羅蜜多 心経、隅寺心経)	第1紙	1紙	奈良時代	卷子装	24.9	44	縦:横=1:1.767068273	1.046797	楮	無	無	多	外皮·微少	皆無	
6	増壱阿鎗経 巻第22 (善光朱印経)	第2紙	22 VII.	天平宝字 3(759)年11 月4日	卷子装	27.6	50.7	縦:横=1:1.836956522	画像不鮮明のため計算できず。	楮	無	無	多	外皮·微少	皆無	
		第33紙	-33紙			27.6	40.5	縦:横=1:1.467391304	画像不鮮明のため計算できず。	楮	無	無	多	外皮·微少	皆無	
1 2 1	仏説中心経(仏説忠 心経、五月一日経)	第2紙	- 7紙	天平 12(740)年5 月1日	卷子装	26.6	45.9	縦:横=1:1.72556391	1.028145	麻·雁皮	無	無	中	外皮·微少	皆無	
		第6紙				26.6	42.2	縦:横=1:1.586466165	1.010341	麻·雁皮	無	無	中	外皮·微少	皆無	
9 5	大宝積経 卷第23	第2紙	- 16紙	平安前期	卷子装	27.2	54.1	縦:横=1:1.988970588	1.010513	楮	無	無	微	外皮·微少	微少	
		第15紙				27.2	53.4	縦:横=1:1.963235294	1.015377	楮	無	無	微	外皮·微少	皆無	
13-2	古経鑑 大般若波羅蜜多経 巻第576	第2紙	2紙	奈良時代折本	26.6	54.3	縦:横=1:2.052631579	1.053385	楮	無	無	中	外皮·微少	皆無		
13-3	古経鑑 宝網経	第2紙	2紙	平安時代前期		27.1	14.0	縦:横=1:0.527675277	1.058325	楮	無	無	多	外皮·普通	微少	
1.77		第2紙		神護景雲 2(768)年5 月13日	卷子装	27.2	56.5	縦:横=1:2.077205882	画像不鮮明のため計算できず。	楮	無	無	中	外皮·微少	皆無	
	鞞婆沙 卷第6 (神護景雲経)	第20紙	1			27.2	37.7	縦:横=1:1.386029412	画像不鮮明のため計算できず。	楮	無	無	中	外皮·普通	皆無	
		第21紙				27.2	13.7	縦:横=1:0.503676471	画像不鮮明のため計算できず。	麻か	無	無	中	外皮·微少	皆無	

- ①調査方法の確立の経緯については、髙島晶彦『デジタル機器を利用し た古文書料紙の分析』(「古文書研究」第80号、吉川弘文館、平成28 年1月)を参照されたい。
- ②正倉院事務所「正倉院の紙」(日本経済新聞社、昭和45年3月)1~2頁。 47~59頁。
- ③宫内庁正倉院事務所「正倉院紀要」第32号、(平成22年3月)1~71頁。
- ④成田山書道美術館「青島居清賞 松崎コレクションの古筆と古写経 古写経編」(平成30年1月)104~107頁。
- ⑤前掲註③、64頁。
- ⑥前掲註①、2~5頁。および、江前敏晴 HP「非破壊による紙の表面 繊維配向解析プログラム FiberOri8single03.exe(v.8.03)」(http://www. enomae.com/FiberOri/index.htm)
- ⑦正倉院文書の繊維配向については、前掲註③85~95頁の増田勝彦『正 倉院文書料紙調査所見と現行の紙漉き技術との比較』で反射光画像を 用いて検討されている。
- ⑧湯山賢一「多可町立和紙博物館壽岳文庫所蔵 寿岳文章和紙コレク ション料紙調査研究」2019 ~ 2021 年度東京大学史料編纂所一般共同研 究(東京大学史料編纂所研究成果報告書 2021-12、令和 4 年 3 月) 54~ 56頁。渋谷綾子編「古文書を科学する 料紙分析はじめの一歩」科学 研究費補助金基盤研究 (A)「『国際古文書料紙学』の確立」(東京大学 史料編纂所研究成果報告書 2021-9、令和 4 年 2 月) 21 ~ 23 頁。
- ⑨湯山賢一『古代料紙論ノート 『延喜式』にみる製紙工程をめぐって -』 (「古文書の研究 - 料紙論・筆跡論」(平成29年・青史出版株式会社)) 153~171頁。湯山氏は延喜式の図書寮式年料紙条を検討されており、 「紗一疋一丈七尺」について、「紙床に置くごとに紗を敷いたとするの は量的に考えても誤りで、紗は短く裁断された麻紙や繊維の短い雁皮 紙、もしくは漉返紙を漉く際に用いられたと考えるべき」としている。 現代の紙漉きでも繊維の短い雁皮を漉く時には紗を簀の上にのせてい 30

#### ⑩前掲註⑤。

- ①上村六郎『正倉院宝物の紙に関する調査研究』(「大阪女子学園短期大 学紀要」第6号、1962年7月)45~46頁。また、「紙麻」を楮の古名、 別称とされる。
- ⑫湯山賢一『我が国に於ける料紙の歴史について 「料紙の変遷表」覚書 』 (「古文書の研究 - 料紙論・筆跡論」(平成29年・青史出版株式会社)) 95頁。麻紙の製紙工程は裁断(截)や叩解(春)を含めて、楮の四倍近 い時間を費やす上、打紙加工が不可欠であったとしている。また、紙 となる原料の全てに裁断(截)を行っていること、紙料調整にボロ布、 麻、苦参が穀、雁皮に比べ3倍の1ヶ月ほどかかり、臼を用いた叩解 に手間がかかったことが示されている(前掲註⑨)。

に組み込んだ初水(簀面)と最後に組み込む捨水とでは、初 水の方が脱水が速く、繊維が引っ張られるように伸ばされる ために強い配向となる。紙漉き後の紙床には初水 (簀面) 側 が上にくるように重ね、乾燥板に張り付けるときは、初水(簀 面) 側が乾燥板面と接するように和紙を持って刷毛で撫でつ ける。繊維の種類や紙漉きの地域によるが、楮の料紙の場合、 最終的に書記面(一般的に表と称する面)になる面が、初水 側(簀面側・乾燥板側)であることが多い。

今回の調査史料のうち、「2 大般若波羅蜜多経 巻第 526(永 恩具経)」のみが配向の区分として、やや配向している数値(第 2紙…1.117497、第19紙…1.123016) となっているが、限り なく無配向に近いといえる。それ以外の史料は無配向の数値 域となっている。反射光の繊維画像でも配向している気配は 感じられないので、調査料紙は、多少の揺する動きはありつ つも、「溜め漉き」で製紙された紙と考えられる®。ただし、 裏面の繊維画像の撮影をしていないので、その結果次第では 結論が変わる可能性がある。

#### ・繊維の種別

調査した史料の全ての料紙に強弱はあるものの、打紙加工 が施されている。反射光による繊維の観察のみではその特徴 をとらえることが難しく、透過光による100倍率での顕微鏡 観察でわずかにその特徴をとらえることができた。その結果、 調査した古写経 10点(料紙 18紙)は、楮・麻(苧麻)・麻(苧 麻)と雁皮の混合紙であることが判明した。

まず、判別できた楮・雁皮・麻の各繊維に関する一般的な 特徴を示す。

楮は、繊維幅は狭いものと広いものがあり、線条痕または 十字痕などがある。幅の狭いものは先端が尖り、幅の広いも のは先端が丸く、細胞壁は厚く、断面は楕円形にみえる。繊 維長6~21mm、繊維幅10~30 μ m 程度で繊維は太いと される。繊維は薄膜で包まれており、透過光で観察すると繊 維の横に連続したり、途切れてはみ出したりしている薄膜も ある。先端は薄膜だけの場合がある。紙の形状では、繊維間 に隙間があるものの非繊維物質が間を埋めていることが多 い。密度は低く、表面の光沢が無く不透明で、全体的に紙質 は柔らかくしっかりしている傾向にある。

雁皮は、繊維幅は概して広いが狭い部分もある。縦条痕が あり、所々に結節がある。先端は丸く、細胞壁は薄く、断面 は扁平または円筒状にみえる。繊維長3~5mm、繊維幅10 ~30 µ m程度で、透明感があり、折り返しや捩れがみられ る。紙の形状では、密度が高く繊維が密集していて、光沢感 や透明感がある。墨の滲みも無い。

麻(苧麻)は、楮繊維より細胞壁が厚く、太くみえ、断面 は丸く多角形である。繊維長60~250mm、繊維幅10.8~ 80 μm、程度で、ボロ布を利用するためか繊維の裁断が顕 著にみられ、フィブリル化を起こしやすい。先端は丸いが二 股に分岐しているものが多い<sup>®</sup>。

麻と雁皮の混合は「3 華手経」と「8 仏説中心経」のいわゆ

る「五月一日経」にみられた。反射光繊維画像でも裁断され た太い麻繊維のなかに細い繊維が混在していることが確認で き、それを雁皮繊維と判断した。「手鑑」にも「五月一日経」 が 2 点確認でき (「手鑑」No.9・No.75)、2 点とも麻と雁皮の 混合(No.75 の麻は大麻としている)という結果がでている (註④参照)。また、打紙加工がされているものの潰されて いる感じが弱い。反射光や透過光観察では繊維が潰れている ように観察できるが、麻繊維の打紙加工は楮の打紙加工に比 べて立体的にみえる。

麻のみの料紙は「17 鞞婆沙 巻第6(神護景雲経)」の第21 紙(最終紙)にみられた。同巻の第1紙と第20紙とは質感が 異なっていて、反射光繊維画像で打紙加工が確認できるも、 潰れ方が均一ではなく、繊維は太く、細胞壁は厚く感じられ る。加えて、紗目がわずかながら確認できたことは特徴的で、 麻繊維が裁断されていることは反射光繊維画像からも明かで あり、短い (裁断) 繊維を漉く際に漉き簀の上に紗をひいた ことを物語っている<sup>®</sup>。聖語蔵経巻「神護景雲経第2号 如 来示教勝軍王経」も最終紙が異なると指摘されており、紙質 と地色(最終紙は褐色)が違うことが判明している⑩。「17 鞞 婆沙 巻第6(神護景雲経)」も同様に、最終紙の紙質は麻で、 それより前の料紙は楮で、地色も最終紙が茶色、それより前 の料紙は白茶色であり、違いがはっきりあらわれている。

それ以外の調査史料は楮繊維で、反射光繊維画像および透 過光 100 倍顕微鏡観察では繊維が均一につぶれていることが 確認できる。

#### むすびにかえて

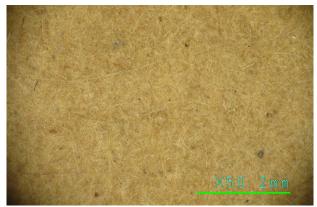
従来は麻と判別されてきた料紙が、調査の結果、楮であっ たことが判明した。当時、麻が必ずしも大麻や苧麻を指すの ではなく、別の原料を指す場合があった<sup>⑩</sup>。また、黄麻紙や 白麻紙という名称に繊維判別が引っ張られてしまったことも 判別の誤りの要因と考える。麻と雁皮の混合紙と判断した「五 月一日経(3・8)」は、麻を使った写経は特別な写経事業のみ という湯山賢一氏の指摘や、製紙にかかる手間を考え合わせ ると、その絶対量の少なさは納得いくところである<sup>®</sup>。

とはいえ、全体的に漉き斑や外皮、繊維束、繊維溜が無い、 もしくは少ないという傾向は写経料紙としては申し分ないの ではなかろうか。今回の料紙調査については、裏打ちや補紙 が施され、かつ、折本や巻子装の状態での調査となり、デー タとしては正確性に欠ける部分があることは否めない。今後 も同じような条件での調査が多いと考えられるが、そのよう な中でも、古写経の調査が進み、古代の料紙研究に深みがで ることを期待したい。

中程度施されている。地色は白茶色で、染色されて いる。 簀目は 20 本、糸目は太く、糸目幅は 33mm で、 ともに明瞭に見ることができた。簀目色は白色。板 目・刷毛目は透過光を使用しても観察できない。裏 打ちが施されている。行頭を揃えるための刀子痕が 確認できた。反射光及び透過光による観察の結果、 繊維の種類は楮と判断できる。

第 21 紙…法量は縦 27.2cm 横 13.7cm。縦横比は 1:0.50。繊 維配向は画像不鮮明のため数値化できなかった。 100 倍の顕微鏡で透過光による観察を行うと、米粉 や白土は無く、非繊維物質は中程度である。墨付繊 維が確認できた。外皮の混入は僅かで、漉斑は無く、 繊維束は僅かに観察でき、繊維溜は見られない。顕 微鏡の反射光観察によると、打紙加工が強く施され ている。地色は茶色で、染色されている。糸目は太 く、糸目幅は20~25mmで、明瞭に見ることがで きた。簀目・板目・刷毛目は透過光を使用しても観 察できない。わずかだが紗目が確認できた。裏打ち が施されている。行頭を揃えるための刀子痕がみら れた。同巻第1~20紙と比べ、紙質に違いが確認 でき、反射光及び透過光による観察の結果、繊維の 種類は麻の可能性が高い。

> なお、聖語蔵経巻「神護景雲経第2号 如来示教勝 軍王経」も巻末紙とそれより前の本紙 (第1~8紙) とでは紙質が異なるとし、麻の可能性を示している<sup>⑤</sup>。



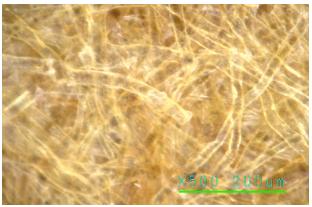
50 倍反射光画像



100 倍反射光画像



200 倍反射光画像



500 倍反射光画像

#### 料紙分析結果

#### ・繊維配向

従来の繊維配向は、縦方向と横方向から斜光を当て、その 繊維の並び(流れ)を目視で観察し、紙漉きの方法(流し漉き・ 溜め漉きなど)を判断してきた。

そのような中で、「和紙の物理的分別手法の確立と歴史学 的データベース化の研究」(2008~2010年度 科学研究費 基 盤研究(B)) において、東京大学農学部江前研究室(当時)の 協力を得て、繊維の配向の数値化が試みられた。

繊維配向の計算方法は、コードレスマイクロスコープで反 射光撮影した 100 倍率の繊維画像を 1024 × 1024 (もしくは 512 × 512。 画素数が 2 の階乗の正方形であること) で切り 取り、江前氏が開発した繊維配向解析プログラムに読み込ま せる。まず、画像の照明斑などを消すために移動平均法によ る2値化処理し、フーリエ変換によりパワースペクトルを求 め、配向の角度と強度(X軸正方向を0°として、反時計回り の角度(度)に対する平均振幅)が計算される(基本的にはプ ログラムの自動処理)。配向強度の目安は、1.1以下では無配 向、1.1~1.2 はやや配向、1.2 以上は配向が強いと判断して よいとされている<sup>©</sup>。

配向が弱い(無い)ということは、揺する動作がほぼ無い 状態で漉いた紙である。逆に配向が強いということは、揺す る動作があって漉いた紙である。現代では、前者を「溜め漉 き」、後者を「流し漉き」としている。流し漉きの場合、最初



100 倍反射光画像



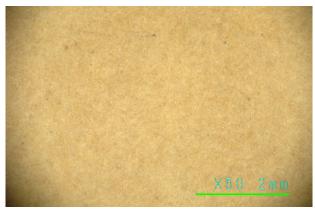
200 倍反射光画像



500 倍反射光画像

100 倍の顕微鏡で透過光による観察を行うと、米粉 や白土は無く、非繊維物質は中程度である。外皮の 混入は少なく、漉斑は無く、繊維束と繊維溜は見ら れない。顕微鏡の反射光観察によると、打紙加工が 中程度施されている。地色は白茶色で、染色されて いる。簀目は16本で明瞭に確認でき、糸目は太く、 糸目幅は23mmで僅かに見ることができた。簀目 色は白色。板目・刷毛目は透過光を使用しても観察 できない。裏打ちが施されている。反射光及び透過 光による観察の結果、繊維の種類は楮と判断できる。

第 20 紙…法量は縦 27.2cm 横 37.7cm。縦横比は 1:1.38。繊 維配向は画像不鮮明のため数値ができなかった。 100 倍の顕微鏡で透過光による観察を行うと、米粉



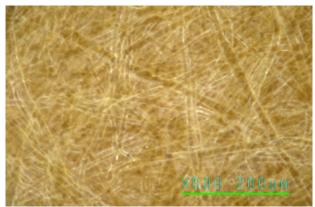
50 倍反射光画像



100 倍反射光画像



200 倍反射光画像

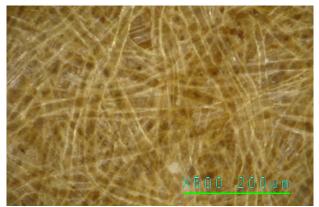


500 倍反射光画像

や白土は無く、非繊維物質は中程度である。外皮の 混入は普通で、漉斑は無く、繊維束と繊維溜は見ら れない。顕微鏡の反射光観察によると、打紙加工が



200 倍反射光画像



500 倍反射光画像

#### 13-3 古経鑑 宝網経 / 折本 (2 紙)

第2紙…法量は縦27.1cm 横14.0cm。縦横比は1:0.52。表面 の繊維配向は 1.05 で無配向である。100 倍の顕微鏡 で透過光による観察を行うと、米粉や白土は無く、非 繊維物質は多く、青繊維が確認できた。外皮の混入は 少なく、漉斑は無く、繊維束は少し確認でき、繊維溜 は見られない。顕微鏡の反射光観察によると、打紙加 工が強く施されている。地色は茶色で、染色されてい る。簀目は22本で僅かに確認でき、糸目は太く、糸 目幅は 25mm で普通に見ることができた。簀目色は茶 色。板目・刷毛目は透過光を使用しても観察できない。 裏打ちが施され、表面が擦れている。反射光及び透 過光による観察の結果、繊維の種類は楮と判断できる。



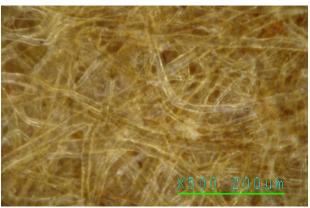
50 倍反射光画像



100 倍反射光画像



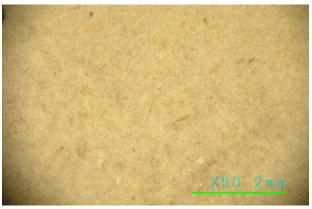
200 倍反射光画像



500 倍反射光画像

#### 17 鞞婆沙 卷第 6 (神護景雲経) / 卷子装 (21 紙)

第2紙…法量は縦27.2cm横56.5cm。縦横比は1:2.07。繊 維配向は画像不鮮明のため数値化できなかった。



50 倍反射光画像

第 15 紙…法量は縦 27.2cm 横 53.4cm。縦横比は 1:1.96。表 面の繊維配向は 1.01 で無配向である。100 倍の顕微 鏡で透過光による観察を行うと、米粉や白土は無く、 非繊維物質は少ない。外皮の混入も少なく、漉斑は 無く、繊維東はわずかに確認できるが、繊維溜は見 られない。顕微鏡の反射光観察によると、打紙加工 が軽く施されている。地色は白茶色で、染色されて いる。簀目は16本で明瞭に確認でき、糸目は太く、 糸目幅は22~28mmで普通に見ることができた。 **簣目色は茶色。板目・刷毛目は透過光を使用しても** 観察できない。虫損箇所に膏薬張りで補修が施され ている。同巻の第2紙と同様に、触るとパリパリす る。反射光及び透過光による観察の結果、繊維の種 類は楮と判断できる。



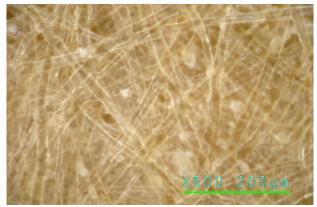
50 倍反射光画像



100 倍反射光画像



200 倍反射光画像



500 倍反射光画像

#### 13-2 古経鑑 大般若波羅蜜多経 巻第 576 / 折本 (2 紙)

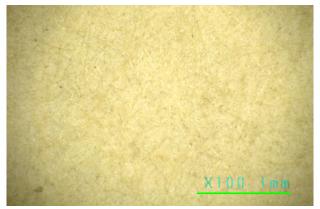
第2紙…法量は縦26.6cm横54.3cm。縦横比は1:2.05。表 面の繊維配向は 1.05 で無配向である。100 倍の顕微 鏡で透過光による観察を行うと、米粉や白土は無く、 非繊維物質は中程度である。外皮の混入は少なく、 漉斑は無く、繊維束も繊維溜は見られない。顕微鏡 の反射光観察によると、打紙加工が強く施されてい る。地色は茶色で、染色されている。簀目・糸目・ 板目・刷毛目は透過光を使用しても観察できない。 裏打ちが施され、継目に豆糊が使われたと推測され る形跡がある。反射光及び透過光による観察の結果、 繊維の種類は楮と判断できる。



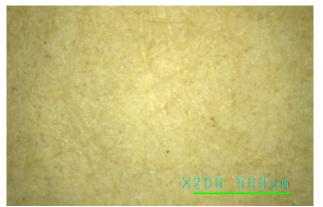
50 倍反射光画像



100 倍反射光画像



100 倍反射光画像



200 倍反射光画像

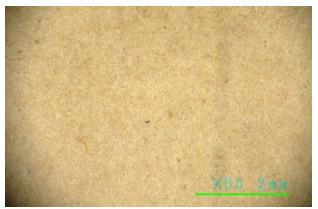


500 倍反射光画像

刷毛目は透過光を使用しても観察できない。補紙が 施されている。反射光及び透過光による観察の結果、 繊維の種類は麻と雁皮の混合紙と判断できる。

#### 9 大宝積経 巻第23/巻子装(16紙)

第2紙…法量は27.2cm。横54.1cm。縦横比は1:1.98。表面 の繊維配向は 1.01 で無配向である。100 倍の顕微鏡 で透過光による観察を行うと、米粉や白土は無く、 非繊維物質は少ない。外皮の混入も少なく、漉斑は わずかにあり、繊維束や繊維溜は見られない。顕微 鏡の反射光観察によると、打紙加工が軽く施されて いる。地色は白茶色で、染色されている。簀目は 18 本、糸目は太く、糸目幅は 28 ~ 30mm で、とも に普通に確認できた。簀目色は茶色。板目・刷毛目 は透過光を使用しても観察できない。虫損箇所に膏



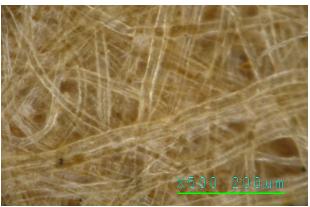
50 倍反射光画像



100 倍反射光画像

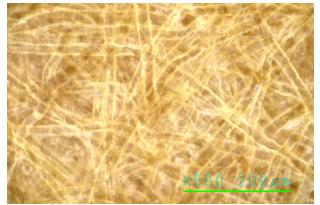


200 倍反射光画像



500 倍反射光画像

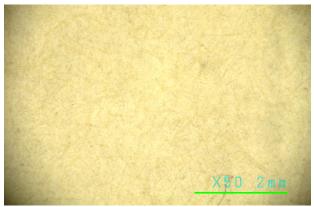
薬張りで補修が施されている。表面が擦れており、 今回調査した料紙の中では触るとパリパリと張りが ある。反射光及び透過光による観察の結果、繊維の 種類は楮と判断できる。



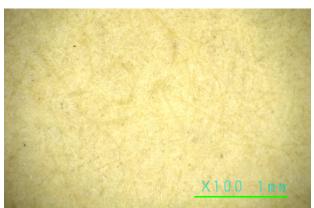
500 倍反射光画像

の反射光観察によると、打紙加工が強くされている。 地色は茶色で、染色されている。簀目は24本で顕 著に観察でき、糸目は太く、糸目幅は 30mm で明瞭 に確認できた。簀目色は茶色。板目・刷毛目は透過 光を使用して観察できなかった。反射光及び透過光 による観察の結果、繊維の種類は楮と判断できる。

8 仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)/巻子装(7紙) 第2紙…法量は縦26.6cm 横45.9cm。縦横比は1:1.72。表 面の繊維配向は 1.02 で無配向である。100 倍の顕微 鏡で透過光による観察を行うと、米粉や白土は無く、 非繊維物質は中程度である。墨付繊維や青・赤繊維 が確認できた。外皮の混入は少なく、漉斑も無く、 繊維束や繊維溜は見られない。顕微鏡の反射光観察



50 倍反射光画像



100 倍反射光画像



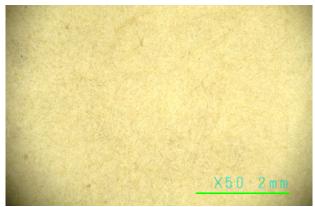
200 倍反射光画像



500 倍反射光画像

によると、打紙加工が中程度されている。地色は黄 色で、染色されている。簀目・糸目・板目・刷毛目 は透過光を使用しても観察できない。補紙が施され ている。反射光及び透過光による観察の結果、繊維 の種類は麻と雁皮の混合紙と判断できる。

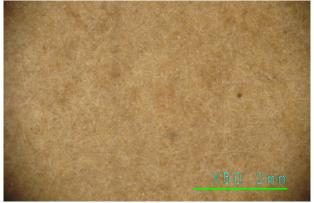
第6紙…法量は縦26.6cm横42.2cm。縦横比は1:1.58。表 面の繊維配向は 1.01 で無配向である。100 倍の顕微 鏡で透過光による観察を行うと、米粉や白土は無く、 非繊維物質は中程度である。外皮の混入は少なく、 漉斑も無く、繊維束や繊維溜は見られない。顕微鏡 の反射光観察によると、打紙加工が中程度されてい る。地色は黄色で、染色されている。糸目は太く、 糸目幅は18mmで僅かに確認できた。簀目・板目・



50 倍反射光画像

#### 6 增壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経) / 巻子装 (33 紙)

第2紙…法量は縦27.6横50.7cm。縦横比は1:1.83。繊維配 向は画像不鮮明のため数値化できなかった。100倍 の顕微鏡で透過光による観察を行うと、米粉や白土



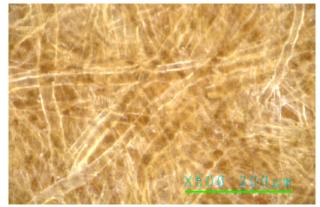
50 倍反射光画像



100 倍反射光画像



200 倍反射光画像



500 倍反射光画像

は無く、非繊維物質は多く、青繊維が確認できる。 外皮の混入は少なく、漉斑も無く、繊維束は僅かに 確認でき、繊維溜は見られない。顕微鏡の反射光観 察によると、打紙加工が強くされている。地色は茶 色で、染色されている。簀目は24本、糸目は太く、 糸目幅は28mmで、簀目・糸目ともに透過光で明瞭 に観察できる。簀目色は茶色。板目・刷毛目は透過 光を使用しても観察できなかった。反射光及び透過 光による観察の結果、繊維の種類は楮と判断できる。

第 33 紙…法量は縦 27.6cm 横 40.5cm。縦横比は 1:1.46。繊 維配向は画像不鮮明のため数値化できなかった。100 倍の顕微鏡で透過光による観察をすると、米粉や白 土は無く、非繊維物質は多い。外皮の混入は少なく、 漉斑も無く、繊維束や繊維溜は見られない。顕微鏡



50 倍反射光画像



100 倍反射光画像



200 倍反射光画像



100 倍反射光画像



200 倍反射光画像

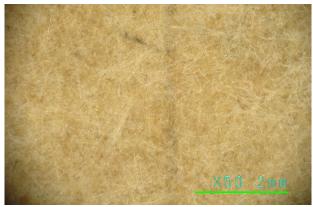


500 倍反射光画像

いる。反射光及び透過光による観察の結果、繊維の 種類は麻と雁皮の混合紙と判断できる。

#### 4 心経(般若波羅蜜多心経、隅寺心経)/巻子装(1紙)

本紙…法量は縦 24.9cm 横 44cm。縦横比は 1:1.76。表面の繊 維配向は 1.04 で無配向である。100 倍の顕微鏡で透 過光による観察を行うと、米粉や白土は無く、非繊 維物質は多く、青繊維が確認できる。外皮の混入は 少なく、漉斑も無く、繊維束や繊維溜も見られない。 顕微鏡の反射光観察によると、打紙加工が中程度さ れている。地色は茶色で、染色されている。簀目は 22 本、糸目は太く、糸目幅は 30mm で、透過光で はわすかに観察できる。簣目色は茶色。板目・刷毛 目は透過光を使用しても観察できない。裏打ち(裏 面に切箔) と補紙が施されている。料紙の簀目と糸



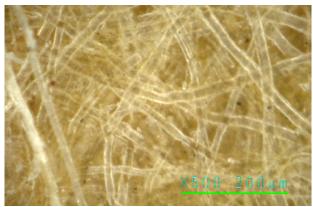
50 倍反射光画像



100 倍反射光画像

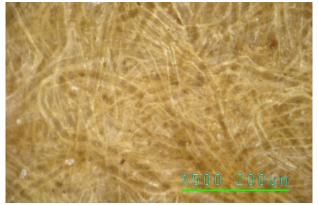


200 倍反射光画像



500 倍反射光画像

目は裏打ち紙のそれが影響しているとも考えられ る。反射光及び透過光による観察の結果、繊維の種 類は楮と判断できる。

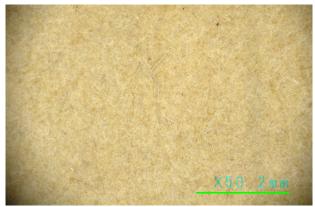


500 倍反射光画像

射光及び透過光による観察の結果、繊維の種類は楮 と判断できる。

#### 3 華手経 巻第4(五月一日経)/巻子装(18紙)

第2紙…法量は縦26.2cm 横46.1cm。縦横比は1:1.75。表面 の繊維配向は 1.01 で無配向である。100 倍の顕微鏡 で透過光による観察を行うと、米粉や白土は無く、 非繊維物質は僅かにあり、青繊維が確認できる。外 皮の混入は少なく、漉斑も無く、繊維束や繊維溜も 見られない。顕微鏡の反射光観察によると、打紙加 工が中程度されている。質感に柔らかみが感じられ る。地色は白黄色で、染色されている。簣目・糸目・ 板目・刷毛目は透過光を使用しても観察できない。 虫損箇所に膏薬張りで補修されている。紙端が厚く



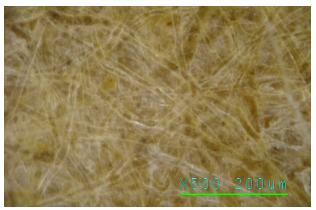
50 倍反射光画像



100 倍反射光画像



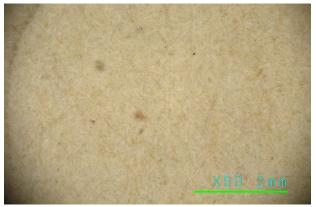
200 倍反射光画像



500 倍反射光画像

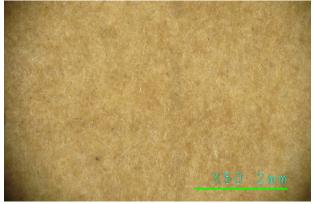
なっている。水損の影響がうかがえる。反射光及び 透過光による観察の結果、繊維の種類は麻と雁皮の 混合紙と判断できる。

第 18 紙…法量は縦 26.2cm 横 16.5cm。縦横比は 1:0.62。表面 の繊維配向は1.00で無配向である。100倍の顕微鏡 で透過光による観察を行うと、米粉や白土は無く、 非繊維物質は多く、墨付繊維が確認できる。外皮の 混入は少なく、漉斑も無く、繊維束や繊維溜も見ら れない。顕微鏡の反射光観察によると、打紙加工が 中程度されている。質感に柔らかみが感じられる。 地色は白黄色で、洗足されている。簀目・糸目・板目・ 刷毛目は透過光を使用しても観察できない。虫損箇 所に膏薬張りで補修されている。紙端が厚くなって



50 倍反射光画像

2 大般若波羅蜜多経 巻第 526(永恩具経)/ 折本(19 紙) 第2紙…法量は縦25.4cm横51cm。縦横比は1:2.00。表面の 繊維配向は1.11でやや配向している。100倍の顕微 鏡で透過光による観察を行うと、米粉や白土は無く、



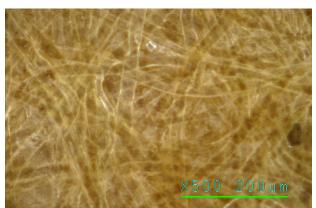
50 倍反射光画像



100 倍反射光画像



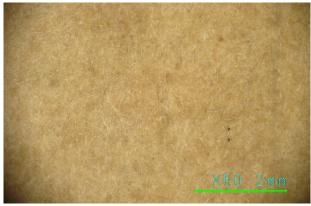
200 倍反射光画像



500 倍反射光画像

非繊維物質はわずかに確認できる。外皮の混入は少 なく、漉斑は普通で、繊維束や繊維溜も見られない。 顕微鏡の反射光観察によると、打紙加工が強くされ ている。地色は茶色で、染色されている。簀目・糸 目・板目・刷毛目は透過光を使用しても観察できな い。反射光及び透過光による観察の結果、繊維の種 類は楮と判断できる。

第19紙…法量は縦25.4cm 横32.5cm。縦横比は1:1.27。表面 の繊維配向は1.12でやや配向している。100倍の顕 微鏡で透過光による観察を行うと、米粉や白土は無 く、非繊維物質はわずかに確認できる。外皮の混入 は少なく、漉斑は普通で、繊維束や繊維溜も見られ ない。顕微鏡の反射光観察によると、打紙加工が強 くされている。地色は茶色で、染色されている。反



50 倍反射光画像



100 倍反射光画像



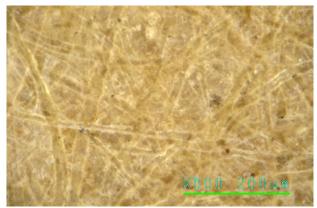
200 倍反射光画像



100 倍反射光画像



200 倍反射光画像



500 倍反射光画像

反射光及び透過光による観察の結果、繊維の種類は 楮と判断できる。

第 23 紙…法量は縦 23.8cm 横 43.3cm。縦横比は 1:1.81。表面の繊維配向は 1.00 で無配向である。100 倍の顕微鏡で透過光による観察を行うと、米粉や白土は無く、非繊維物質は多くもなく少なくもない(以下、中程度と表現する)。外皮の混入は少なく、漉斑も無く、繊維束や繊維溜も見られない。顕微鏡の反射光観察によると、打紙加工が強くされている。地色は茶色で、染色されている。簀目は 20 本 (1 寸あたり。以下同様)、糸目は太く、糸目幅は 20mm で、透過光でわすかに観察できる程度である。簀目色は茶色。板目・刷毛目は透過光を使用しても観察できない。裏打ちが施され、虫損箇所に膏薬張りで補修されて



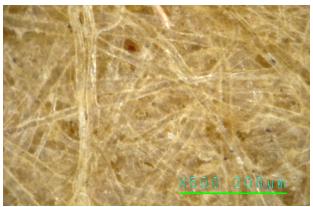
50 倍反射光画像



100 倍反射光画像



200 倍反射光画像



500 倍反射光画像

いる。反射光及び透過光による観察の結果、繊維の 種類は楮と判断できる。

#### 静嘉堂所蔵古写経の料紙調査

山口 悟史

#### はじめに

報告者が担当した静嘉堂所蔵古写経の料紙調査は、白色 LED ライトボード (MLT-A3N・武藤工業株式会社製) と 100 倍単眼顕微鏡(ミクロメータスコープ・株式会社杉藤製)を 用いた透過光観察、斜光 (300mm 幅斜光ライト・高槻電器工 業株式会社製)・通常光による目視観察およびコードレスマ イクロスコープ (DG-3X・スカラ株式会社製)を使用して 50 倍・100 倍・200 倍・500 倍率のレンズで反射光 (ライトは本 体搭載)の繊維撮影を行った。反射光の繊維撮影は、料紙の 中央部分を各倍率 5 箇所ずつ撮影した。特に 100 倍の反射光 繊維画像は、繊維配向計算を行い数値化した。本稿はこの調 査に関する結果報告である。

本料紙調査は、東京大学史料編纂所修理室で近年取り込ん でいる方法に基づいて行った①。調査は非破壊を原則とし、 正確なデータを得るには、装丁されていないウブな料紙の必 要がある。装丁されていた場合は、史料の解体修理が実施さ れ、裏打紙や補修紙が除去された状態になった段階で料紙調 査を行うことにしている。今回の調査対象の史料は、解体修 理に伴う調査ではないため、裏打ちや補修が施され、装丁も 折本や巻子装の状態での調査となった。調査で得られたデー タは蓄積し、歴史学の分野を中心に研究材料として活用され るとともに、修理に用いる補修紙の復元作製、選定を行う際 の貴重な情報源となっている。

これまでの古写経の料紙調査・分析については、正倉院文 書が質・量ともに充実している。正倉院文書の調査は過去に 2回行われており、第1回が昭和35年~昭和37年の間に3 回実施され、「正倉院の紙」にその成果がまとめられている。 この調査は、制約のある中で、肉眼による外観的観察と顕微 鏡による紙の表面の簡単な観察が行われた。同書には、その 調査を踏まえた研究編と透過光や通常光で撮影された調査料 紙と顕微鏡画像(50倍で撮影し、100倍率になるように拡大 したものを掲載)、標本紙が載せられている<sup>②</sup>。

第2回の調査は平成17年~平成20年の間に4回実施され、 調査結果が「正倉院紀要」に掲載されている。この調査の特 徴は、デジタル写真撮影(落斜光・透過光、全姿・部分、縦 横の斜光線による繊維の流れ観察) が行われたこと、料紙調 査項目が史料編纂所をはじめとするグループが近年行ってい る料紙調査とほぼ同内容(法量、糸目幅、簣目本数(3cm あ たり)、紗目の有無、板目、刷毛目、厚み、繊維の流れ、填 料の有無、加工の有無、繊維種、調査所見)であること、料 紙からごく微量の繊維片を採取し、C染色液を用いた呈色反 応による繊維分析(JISP8120「紙、板紙及びパルプ 繊維組 成試験方法」)を実施したことである。特にC染色液を用い た繊維分析は、従来の目視観察に比べ、繊維の判別率を飛躍 的にあげたといえる<sup>3</sup>。

そのほか、古写経が裁断され、手鑑に装丁されている史料 がある。そのうち一点が近年、解体修理の対象となり、それ に伴って繊維分析が行われた。(以下、「手鑑」)®。

#### 料紙調査結果

今回、調査した古写経10点(料紙18紙)について、その 結果を以下に示す (表記している番号は目録番号)。ただし、 前述したとおり、調査した料紙に裏打ち (1・2・4・13-2・ 13-3・17) や補修 (1・2・3・4・8・9) が施されていること、 装丁が折本(1・2・13-2・13-3)や巻子装(3・4・6・8・9・ 17) であることから、正確な重さと厚みが測定できないと判 断し、その調査項目については、今回は計測していない。ま た、反射光繊維撮影については裏面に裏打ちが施されていて 正確な料紙の撮影ができないため、撮影は表面のみにとどめ た。なお、調査・観察・撮影は、第2紙と最終紙およびその 1紙前の料紙について行った。

#### 1 大般若波羅蜜多経 巻第245(長屋王願経)/折本(23

第2紙…法量は縦23.8cm 横47.7cm。縦横比は1:2.00 (小数 点第3位以下切捨。以下同様)。表面の繊維配向は 1.03 (小数点第3位以下切捨。以下同様)で無配向で ある。100倍の顕微鏡で透過光による観察を行うと、 米粉や白土は無く、非繊維物質は多く、墨付繊維が 確認できた。外皮の混入は少なく、漉斑は無く、繊 維束や繊維溜も見られない。顕微鏡の反射光観察下 では、打紙加工が強くされていることがわかる。地 色は茶色で、染色されている。簣目・糸目・板目・ 刷毛目は透過光を使用しても観察できない。裏打ち が施され、虫損箇所に膏薬張りで補修されている。



50 倍反射光画像

番号	史料名	画像ファイル名	撮影光	撮影箇所 (左右)	撮影箇所	撮影箇所	構成物の内容
6	増壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	6-zoitsu-4-keiko	蛍光	右から 28.0cm	上から 11.3cm		細胞組織断片 5
6	增壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	6-zoitsu-5	透過	右から 8.0cm	下から 12.0cm	2 紙目	細胞組織断片 15
6	增壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	6-zoitsu-5-keiko	蛍光	右から 8.0cm	下から 12.0cm	2 紙目	細胞組織断片 7
6	增壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	5-zoitsu-6	透過	右から 28.0cm	下から 11.5cm	2 紙目	細胞組織断片 7
6	增壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	6-zoitsu-6-keiko	蛍光	右から 28.0cm	下から 11.5cm	2 紙目	細胞組織断片 8, 墨粒 4
6	增壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	6-zoitsu-7	透過	左から 6.0cm	上から 13.0cm	2 紙目	細胞組織断片 13
6	增壱阿鋡経 巻第22(善光朱印経)	6-zoitsu-7-keiko	蛍光	左から 6.0cm	上から 13.0cm	2 紙目	細胞組織断片 23
6	增壱阿鋡経 巻第22(善光朱印経)	6-zoitsu-8	透過	左から 6.0cm	下から 8.7cm	2 紙目	柔細胞 1, 細胞組織断片 6
6	增壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	6-zoitsu-8-keiko	蛍光	左から 6.0cm	下から 8.7cm	2 紙目	細胞組織断片 7, 繊維断片 1, 墨粒 8
6	増壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	6-zoitsu-9	透過	右から 14.0cm	上から 16.0cm	見返し	細胞組織断片 32
6	増壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	6-zoitsu-9-keiko	蛍光	右から 14.0cm	上から 16.0cm	見返し	細胞組織断片 24
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-1	透過	右から 1.5cm	上から 6.5cm	2 紙目	細胞組織断片 3
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-1-keiko	蛍光	右から 1.5cm	上から 6.5cm	2 紙目	細胞組織断片 5
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-2	透過	右から 2.5cm	下から 9.3cm	2 紙目	細胞組織断片 10, 繊維断片 1
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-2-keiko 8-bussetsu-3	蛍光	右から 2.5cm	下から 9.3cm 上から 12.0cm	2 紙目	細胞組織断片 11, 繊維断片 1
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経) 仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-3-keiko	透過	右から 23.0cm 右から 23.0cm		2 紙目	細胞組織断片 27 細胞組織断片 11
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-3-keiko 8-bussetsu-4	透過	左から 23.0cm			細胞組織断片 10, 繊維断片 2
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-4-keiko	蛍光	左から 23.0cm 左から 23.0cm		2 紙目	細胞組織断片 14、繊維断片 1
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-4-keiko-2	蛍光	左から 23.0cm		2 紙目	細胞組織断片 4
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-5	透過	左から 8.5cm		2紙目	細胞組織断片1
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-5-keiko	蛍光	左から 8.5cm		-	細胞組織断片 15
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-6	透過	左から 8.0cm	下から 6.0cm	2 紙目	細胞組織断片 4
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-6-keiko	蛍光	左から 8.0cm	下から 6.0cm	2 紙目	細胞組織断片 14
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-7	透過	右から 10.5cm	上から 10.5cm	巻末	細胞組織断片 3
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-7-keiko	蛍光	右から 10.5cm	上から 10.5cm	巻末	細胞組織断片 3
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-8	透過	右から 9.5cm	下から 8.0cm	巻末	細胞組織断片 1
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-8-keiko	蛍光	右から 9.5cm	下から 8.0cm	巻末	細胞組織断片 9
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-9	透過	左から 12.0cm	下から 11.0cm	巻末	細胞組織断片 7
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-9-keiko	蛍光	左から 12.0cm	下から 11.0cm	巻末	細胞組織断片 14
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-10	透過	左から 12.5cm	下から 9.7cm	巻末	細胞組織断片 8
8	仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)	8-bussetsu-10-keiko	蛍光	左から 12.5cm	下から 9.7cm	巻末	細胞組織断片 16
13-1	妙法蓮華経 巻第 4	13-1-myohorenge-1	反射	右から 4.5cm	上から 9.5cm		繊維断片 1
13-1	妙法蓮華経 巻第 4	13-1-myohorenge-1-keiko	蛍光	右から 4.5cm	上から 9.5cm		鉱物 2
13-1	妙法蓮華経 巻第4	13-1-myohorenge-1-keiko-2	蛍光	右から 4.5cm	上から 9.5cm	London data et	鉱物 2
13-1	妙法蓮華経 巻第4	13-1-myohorenge-2	反射	右から 5.0cm	上から 8.0cm		繊維断片 2
13-1	妙法蓮華経 巻第 4 妙法蓮華経 巻第 4	13-1-myohorenge-2-450	反射	右から 5.0cm	上から 8.0cm 上から 8.0cm	文字部分	
13-1	妙法蓮華経 巻第 4 妙法蓮華経 巻第 4	13-1-myohorenge-2-keiko	蛍光 蛍光	右から 5.0cm 右から 5.0cm	上から 8.0cm 上から 8.0cm	文字部分	不明
13-1	註楞伽経 巻第1	13-1-myohorenge-2-keiko-2 13-4-churyoga-1	透過	右から 13.0cm	下から 12.0cm	又于印刀	細胞組織断片 19
	註楞伽経 巻第1	13-4-churyoga-1-keiko		右から 13.0cm	下から 12.0cm		細胞組織断片 31
	開皇三宝録 巻第8(五月一日経)	13-5-kaiko-1	透過	右から 3.5cm	上から 7.0cm	1 紙目	細胞組織断片 6
-	開皇三宝録 巻第8(五月一日経)	13-5-kaiko-1-keiko	蛍光	右から 3.5cm	上から 7.0cm	1紙目	細胞組織断片 25, 繊維断片 2
-	開皇三宝録 巻第8(五月一日経)	13-5-kaiko-2	透過	左から 3.0cm	下から 10.0cm	4 紙目	細胞組織断片 7
13-5	開皇三宝録 巻第8(五月一日経)	13-5-kaiko-2-keiko	蛍光	左から 3.0cm	下から 10.0cm	4 紙目	細胞組織断片 27
13-9	妙法蓮華経 勧持品第13	13-9-myohorenge-1	透過	右から 3.5cm	上から 11.5cm	部分抽出	細胞組織断片 19
13-9	妙法蓮華経 勧持品第13	13-9-myohorenge-1-keiko	蛍光	右から 3.5cm	上から 11.5cm	部分抽出	細胞組織断片 37
13-11	仏本行集経 巻第 28	13-11-buppon-1	反射	右から 5.0cm	下から 16.0cm	部分抽出	不明
-	仏本行集経 巻第 28	13-11-buppon-1-keiko	蛍光	右から 5.0cm		部分抽出	
-	仏本行集経 巻第 28	13-11-buppon-1-keiko-led	蛍光	右から 5.0cm	下から 16.0cm		
_	仏本行集経 巻第 28	13-11-buppon-2	反射	右から 4.5cm	下から 16.0cm		
_	仏本行集経 巻第 28	13-11-buppon-2-keiko	蛍光	右から 4.5cm	下から 16.0cm		
-	仏本行集経 巻第 28	13-11-buppon-2-keiko-2	蛍光	右から 4.5cm		部分抽出	
	中阿含経 巻第 41 中阿含経 巻第 41	13-20-chuagon-1	透過	右から 6.5cm			細胞組織断片 21 柔細胞 1, 細胞組織断片 10
-	中門 古	13-20-chuagon-1-keiko 13-20-chuagon-2	蛍光 透過	右から 6.5cm 右から 8.5cm	下から 12.0cm 下から 13.0cm	本文	条袖尼 1, 袖胞組織断片 10 細胞組織断片 16
	中阿含経 巻第 41	13-20-chuagon-2-keiko	近 蛍光	右から 8.5cm 右から 8.5cm	下から 13.0cm 下から 13.0cm	本文	細胞組織断片 10
-	大方広仏華厳経 巻第 15	13-30-daiho-1	反射	左から 17.0cm		銀・徳	不明
	大方広仏華厳経 巻第15	13-30-daiho-1-keiko	<b>蛍光</b>	左から 17.0cm 左から 17.0cm		銀・徳	不明
	大方広仏華厳経 巻第 15	13-30-daiho-1-keiko-2	蛍光	左から 17.0cm	下から 12.0cm		不明
-	大方広仏華厳経 巻第15	13-30-daiho-2	反射	左から 14.0cm	下から 13.0cm	「是」	不明
	大方広仏華厳経 巻第15	13-30-daiho-2-keiko	蛍光	左から 14.0cm	下から 13.0cm	「是」	不明
	大方広仏華厳経 巻第15	13-30-daiho-2-keiko-2	蛍光	左から 14.0cm	下から 13.0cm	「是」	不明
	大般若波羅蜜多経 卷第 572 (安倍小水麻呂経)	13-31-daihannya-1	透過	左から 8.0cm			細胞組織断片 16
-	大般若波羅蜜多経 巻第 572 (安倍小水麻呂経)	13-31-daihannya-1-keiko	蛍光	左から 8.0cm			細胞組織断片 11
	•	·				•	

# 表 1 分析対象の静嘉堂所蔵古写経

番号	史料名	画像ファイル名	撮影光	撮影箇所 (左右)	撮影箇所 (上下)	撮影箇所 (説明)	構成物の内容
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-1	透過	右から 2cm		2 紙目	細胞組織断片 858
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-1-keiko	蛍光	右から 2cm	上から 10.5cm	2 紙目	細胞組織断片 2294
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-2	透過	右から 2.5cm	下から 7.3cm	2 紙目	細胞組織断片 57, 繊維断片 2
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-2-keiko	蛍光	右から 2.5cm	下から 7.3cm	2 紙目	細胞組織断片 150, 繊維断片 3, 鉱物 1
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-3	透過	左から 27cm	上から 10cm	2 紙目	細胞組織断片 131, 繊維断片 4
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-3-keiko	蛍光	左から 27cm	上から 10cm	2 紙目	細胞組織断片 84, 柔細胞 10, 繊維断片 7
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-4	透過	左 28.5cm	下から 7.8cm	2 紙目	細胞組織断片 58, 繊維断片 2
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-4-keiko	蛍光	左 28.5cm	下から 7.8cm	2 紙目	細胞組織断片 52, 繊維断片 2
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-5	透過	左から 2cm	上から 10cm	2 紙目	細胞組織断片 26, 繊維断片 1
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-5-keiko	蛍光	左から 2cm	上から 10cm	2 紙目	細胞組織断片 54, 繊維断片 2
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-6	透過	左から 2cm	下から 9cm	2 紙目	細胞組織断片 44
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-6-keiko	蛍光	左から 2cm	下から 9cm	2 紙目	細胞組織断片 71, 繊維断片 5
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-7	透過	左から 6cm	上から 8.9cm	巻末	細胞組織断片 18
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-7-keiko	蛍光	左から 6cm	上から 8.9cm	巻末	細胞組織断片 36
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-8	透過	左から 8cm	下から 11cm	巻末	細胞組織断片 37
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-8-keiko	蛍光	左から 8cm	下から 11cm	巻末	細胞組織断片 40
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-9	透過	左から 8cm	下から 11cm	巻末	細胞組織断片 18
1	大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)	1-daihannya-9-keiko	蛍光	左から 8cm	下から 11cm	巻末	細胞組織断片 14
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-1	透過	右から 4.0cm	上から 11.5cm	2 紙目	細胞組織断片 13
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-1-keiko	蛍光	右から 4.0cm	上から 11.5cm	2 紙目	細胞組織断片 35, 柔細胞 1
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-2	透過	右から 4.0cm	下から 7.0cm	2 紙目	細胞組織断片 9
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-2-keiko	蛍光	右から 4.0cm	下から 7.0cm	2 紙目	細胞組織断片 50
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-3	透過	右から 20.5cm	上から 11.0cm	2 紙目	細胞組織断片 16
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-3-keiko	蛍光	右から 20.5cm	上から 11.0cm	2 紙目	細胞組織断片 25
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-4	透過	右から 22.0cm	下から 6.5cm	2 紙目	細胞組織断片 14
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-4-keiko	蛍光	右から 22.0cm	下から 6.5cm	2 紙目	細胞組織断片 13
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-5	透過	左から 6.5cm	上から 9.0cm	2 紙目	細胞組織断片 19
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-5-keiko	蛍光	左から 6.5cm	上から 9.0cm	2 紙目	細胞組織断片 34
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-6	透過	左から 6.0cm	下から 9.5cm	2 紙目	細胞組織断片 21
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-6-keiko	蛍光	左から 6.0cm	下から 9.5cm	2 紙目	細胞組織断片 26, 繊維断片 1
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-7	透過	右から 3.0cm	上から 8.5cm	巻末	細胞組織断片 23
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-7-keiko	蛍光	右から 3.0cm	上から 8.5cm	巻末	細胞組織断片 54, 繊維断片 3
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-8	透過	右から 2.5cm	下から 11.0cm	巻末	細胞組織断片 17, 繊維断片 2
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-8-keiko	蛍光	右から 2.5cm	下から 11.0cm	巻末	細胞組織断片 21
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-9	透過	左から 7.0cm	上から 11.0cm	巻末	細胞組織断片 28
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-9-keiko	蛍光	左から 7.0cm	上から 11.0cm	巻末	細胞組織断片 67, 繊維断片 1
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-10	透過	左から 7.0cm	下から 8.7cm	巻末	細胞組織断片 30
2	大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)	2-daihannya-10-keiko	蛍光	左から 7.0cm	下から 8.7cm	巻末	細胞組織断片 58, 繊維断片 5
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-1	透過	右から 3.5cm	上から 4.5cm	2 紙目	細胞組織断片 19
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-1-keiko	蛍光	右から 3.5cm	上から 4.5cm	2 紙目	細胞組織断片 4
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-2			下から 12.0cm		細胞組織断片 8
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-2-keiko	蛍光	右から 4.0cm	下から 12.0cm		細胞組織断片 2, 鉱物 1
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-3	透過	右から 25.0cm		2 紙目	細胞組織断片 5
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-3-keiko	蛍光	右から 25.0cm		2 紙目	細胞組織断片 1
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-4	透過	右から 25.0cm		2 紙目	細胞組織断片 4, 繊維断片 1
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-4-keiko	蛍光	右から 25.0cm	下から 8.5cm	2 紙目	細胞組織断片 3
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-5	透過	左から 7.0cm	上から 9.0cm	2 紙目	墨粒 7
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-5-keiko	蛍光	左から 7.0cm	上から 9.0cm エから 7.7	2 紙目	墨粒 10
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-6	透過	左から 6.0cm	下から 7.7cm	2 紙目	細胞組織断片 1
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-6-keiko	蛍光	左から 6.0cm	下から 7.7cm	2紙目 南東王前	細胞組織断片 1
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-7	透過	左から 5.5cm	上から 8.5cm	奥書手前	細胞組織断片 7
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-7-keiko	蛍光	左から 5.5cm	上から 8.5cm	奥書手前	細胞組織断片 7
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-8	透過	左から 5.0cm	下から 7.5cm		細胞組織断片 6
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-8-keiko	蛍光	左から 5.0cm	下から 7.5cm	奥書手前	細胞組織断片 6
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-9	透過	右から 3.5cm	上から 10.5cm	奥書	細胞組織断片 9
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-9-keiko	蛍光	右から 3.5cm	上から 10.5cm	奥書	細胞組織断片 35
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-10	透過	右から 3.5cm	下から 9.5cm	奥書	細胞組織断片 11
3	華手経 巻第4(五月一日経)	3-keshukyo-10-keiko	蛍光	右から 3.5cm	下から 9.5cm	奥書	細胞組織断片 11
6	増壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	6-zoitsu-1	透過	右から 4.0cm	上から 12.0cm	33 紙目	細胞組織断片 4
6	増壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	6-zoitsu-1-keiko	蛍光	右から 4.0cm	上から 12.0cm	33 紙目	細胞組織断片 6
6	増壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	6-zoitsu-2	透過	右から 4.5cm	下から 8.7cm	33 紙目	柔細胞 2, 細胞組織断片 3
6	増壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	6-zoitsu-2-keiko	蛍光	右から 4.5cm	下から 8.7cm	33 紙目	細胞組織断片 6
6	増壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	6-zoitsu-3	透過	右から 9.0cm	上から 11.0cm		細胞組織断片 5
6	増壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	6-zoitsu-3-keiko	蛍光	右から 9.0cm	上から 11.0cm		細胞組織断片 5
6	増壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)	6-zoitsu-4	透過	付から 28.0cm	上から 11.3cm	2 紕目	細胞組織断片 4

### 4. まとめ

静嘉堂所蔵史料である古写経について、料紙の構成物の種 類や含有量などの分析結果を述べた。特に、繊維の形状や構 成物の内容から料紙の差の検討を行い、奥書や巻末の料紙が 異なることを指摘することができた。本分析結果が今後の古 写経等の研究で参考になれば幸いである。

### 引用文献

渋谷綾子・天野真志編: 古文書の科学 料紙を複眼的に分析する, 240 p. 文学通信, 2023.

渋谷綾子・高島晶彦・天野真志・野村朋弘・山田太造・畑山周平・小瀬玄士・ 尾上陽介: 古文書料紙の科学研究: 陽明文庫所蔵史料および都城島津家 史料を例として.東京大学史料編纂所研究紀要, 32, pp. 1-22, 2022.

渋谷綾子・野村朋弘・高島晶彦・天野真志・山田太造: 考古学・植物学 を活用した松尾大社社蔵史料の料紙の構成物分析. 東京大学史料編纂所 研究紀要, 31, pp. 59-74, 2021.

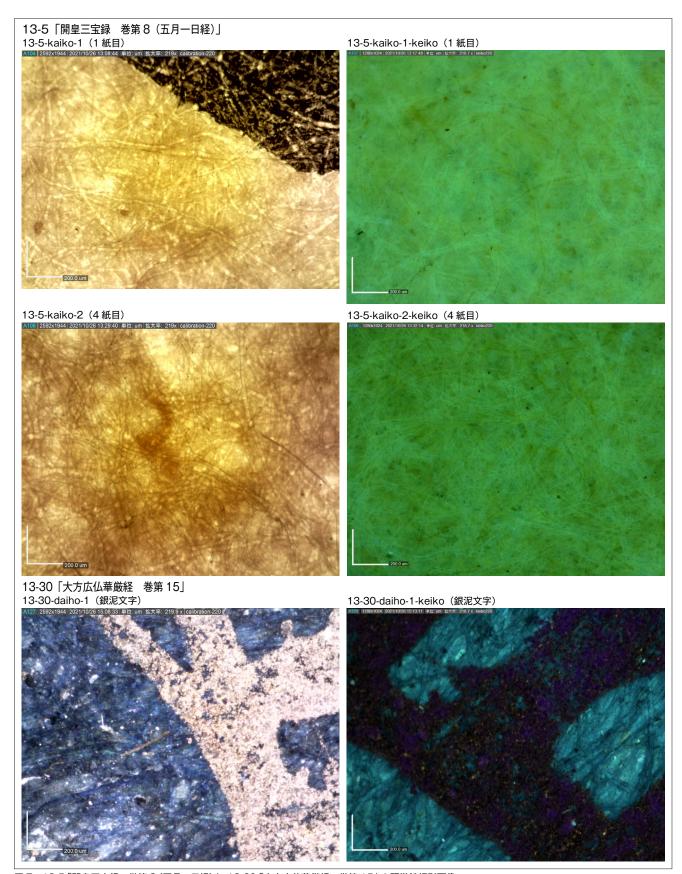


図 7 13-5 「開皇三宝録 巻第8(五月一日経)」・13-30 「大方広仏華厳経 巻第15」の顕微鏡撮影画像

### 3. 考察

### 1 打紙加工と料紙の構成物からみた料紙の差異

今回調査した史料では、目録番号1・2・6 は楮紙、3・8 は麻紙であり、それぞれ打紙加工が施されていた。紙質の詳 細は、山口悟史氏の報告を参照願いたい。

繊維の形状または打紙加工の強さ、料紙の構成物の内容を 合わせると、楮紙については、1の2紙目と巻末の料紙、2 の2紙目と巻末、6の2紙目・33紙目と見返しは、異なる料 紙を使用した可能性が高い。

麻紙については、3の2紙目・奥書手前と奥書の料紙は構 成物の内容と打紙加工の強さから異なる料紙であると考え る。一方、8については2紙目と奥書の料紙の構成物が非常 に類似しており、打紙加工の差異もそれほど明瞭ではなかっ た。今回の分析では料紙の違いは不明とし、今後の検討課題 である。

### 2 料紙における構成物の特徴

分析を行った史料のうち、楮紙の1・2・6には細胞組織や 繊維の微細な断片とともに、柔細胞が含まれていた。いずれ も繊維素材に由来するものであり、填料や鉱物などの他の物 質はまったく確認できなかった。麻紙の3・8は、繊維素材 に由来する細胞組織や繊維の断片とともに、3には鉱物1個 が確認された。蛍光による撮影画像 3-keshukyo-2-keiko だけ に確認された。史料作成時のものか、後世に付加されたもの か判然としないが、3の特徴として指摘したい。

13-1~13-31 はいずれも料紙の一部を抽出して撮影して おり、料紙全体・史料全体の特徴を明示することはできない。 銀泥の文字が書かれた部位に少量の鉱物を確認した程度であ る。紺紙など料紙自体に加工が施されている史料や裏打ちの 厚い史料では、料紙の構成物の識別は非常に困難であった。 料紙分析から史料・史料群の特徴の検討を行うのであれば、 可能な限り一紙全体の観察・撮影が望ましいことが判った。 今後の検討課題としたい。

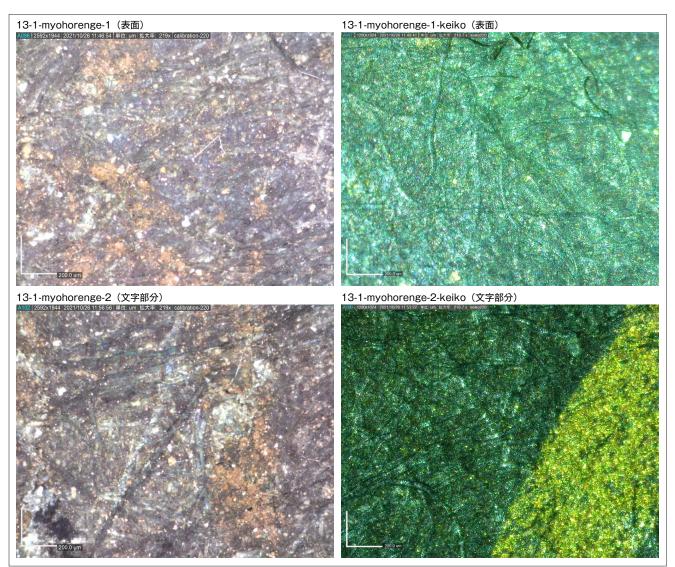


図6 13-1「妙法蓮華経 巻第4」の顕微鏡撮影画像

紙目の方がより強い加工が施されている。

8「仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)」について、画 像 8-bussetsu-1・1-keiko ~ 8-bussetsu-6・6-keiko は2紙 目、 8-bussetsu-7・7-keiko ~ 8-bussetsu-10・10-keiko は奥書の料 紙を撮影したものである <sup>(図5)</sup>。打紙加工の施された麻紙であ り、構成物はいずれも繊維素材のアサに由来する細胞組織や 繊維の微細な断片である。構成物の内容は2紙目・奥書の料 紙ともに類似しているが、蛍光による撮影画像(8-bussetsu-7-keiko ~ 8-bussetsu-10-keiko) では繊維が非常に平坦であり、 奥書はやや打紙加工が強く施されたと考える。

13-1「妙法蓮華経 巻第 4」は、画像 13-1-myohorenge-1・ 1-keiko・1-keiko-2 は紺紙である料紙表面、13-1-myohorenge -2·2-keiko·2-keiko-2 は文字部分を撮影したものである (図 6)。 料紙表面の状態を把握するため、これらの箇所の撮影を行っ た。表面は藍由来の紺色顔料が塗布されており、料紙の構成 物としては、文字部分の鉱物や繊維の微細な断片が少量確認 された。

13-4「註楞伽経 巻第1」は、麻紙の表面観察のため1箇 所のみ撮影を行った。料紙表面は打紙加工が施されており、 構成物は細胞組織の断片のみである。

13-5 「開皇三宝録 巻第8 (五月一日経)」については、画 像 13-5-kaiko-1・1-keiko が 1 紙目、13-5-kaiko-2・2-keiko が 4紙目を撮影したものである(図7)。料紙の構成物は、麻紙 の繊維素材アサに由来する細胞組織や繊維の微細な断片であ

13-9「妙法蓮華経 勧持品第13」は、麻紙の表面観察のた め1箇所のみ撮影を行った。構成物は細胞組織の断片のみで

13-11「仏本行集経 巻第28」は料紙表面2箇所の撮影を 行った。紺色顔料が塗布されており、料紙には文字や顔料に 由来する鉱物が少量含まれていた。

13-20「中阿含経 巻第41」は楮紙の表面観察のため、2箇 所の撮影を行った。繊維素材のコウゾに由来する柔細胞や細 胞組織の断片が含まれていた。

13-30 「大方広仏華厳経 巻第 15」は紺紙、銀泥で文字が書 かれており、文字部分2箇所の撮影を行った<sup>(図7)</sup>。構成物と して、塗布された顔料や銀泥に由来する鉱物が含まれている と考えるが、具体的な物質の内容は確認できなかった。

13-31「大般若波羅蜜多経 巻第 572 (安倍小水麻呂経)」は、 麻紙の表面観察のため1箇所のみ撮影を行った。構成物は細

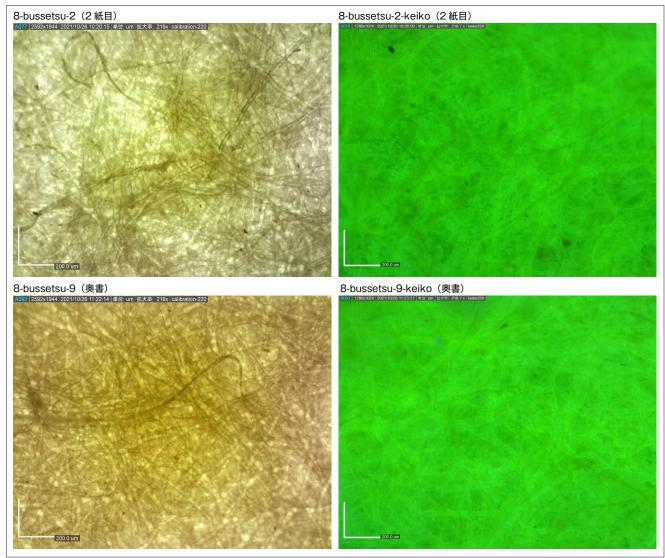


図 5 8 「仏説中心経(仏説忠心経、五月一日経)」の顕微鏡撮影画像

ると、2紙目・奥書手前の料紙よりも打紙加工が非常に強く 施されている。

6「増壱阿鋡経 巻第22 (善光朱印経)」について、画像 6-zoitsu-1·1-keiko ~ 6-zoitsu-2·2-keiko は33 紙目、6-zoitsu-3・ 3-keiko ~ 6-zoitsu-8・8-keiko は2 紙目、6-zoitsu-9・9-keiko は 見返しの料紙を撮影したものである (図4)。 打紙加工の施され

た楮紙であり、構成物はいずれも繊維素材のコウゾに由来 する細胞組織や繊維の微細な断片、コウゾの柔細胞、墨粒 (願文の墨が飛散したもの) である。構成物の内容はいずれ の料紙も類似しているが、見返しの料紙よりも2紙目・33 紙目は打紙加工が強く施されている。蛍光による撮影画像 (6-zoitsu-1-keiko、6-zoitsu-2-keiko) からは、2 紙目よりも 33

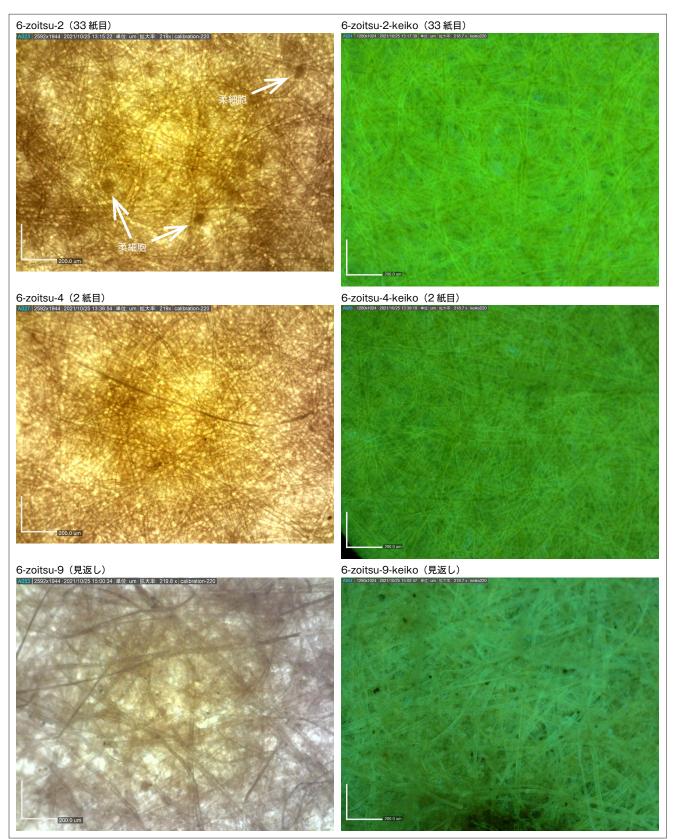


図 4 6 「増壱阿鋡経 巻第 22 (善光朱印経)」の顕微鏡撮影画像

きなかったが、蛍光の画像を比較すると、巻末の打紙加工は 2紙目よりもやや強めに施されている。

3「華手経 巻第4(五月一日経)」について、画像 3-keshukyo-1・1-keiko ~ 3-keshukyo-6・6-keiko は 2 紙 目、 3-keshukyo-7・7-keiko ~ 3-keshukyo-8・8-keiko は奥書手前の 料紙、3-keshukyo-9・9-keiko ~ 3-keshukyo-10・10-keiko は奥

書の料紙を撮影したものである (図3)。 打紙加工の施された麻 紙であり、構成物はいずれも繊維素材のアサに由来する細胞 組織や繊維の微細な断片、鉱物 (雲母か)、墨粒 (願文の墨が 飛散したもの)である。構成物の内容はいずれも類似するが、 奥書の料紙は繊維が全体的に非常に平滑である。蛍光による 撮影画像 (3-keshukyo-9-keiko、3-keshukyo-10-keiko) とあわせ

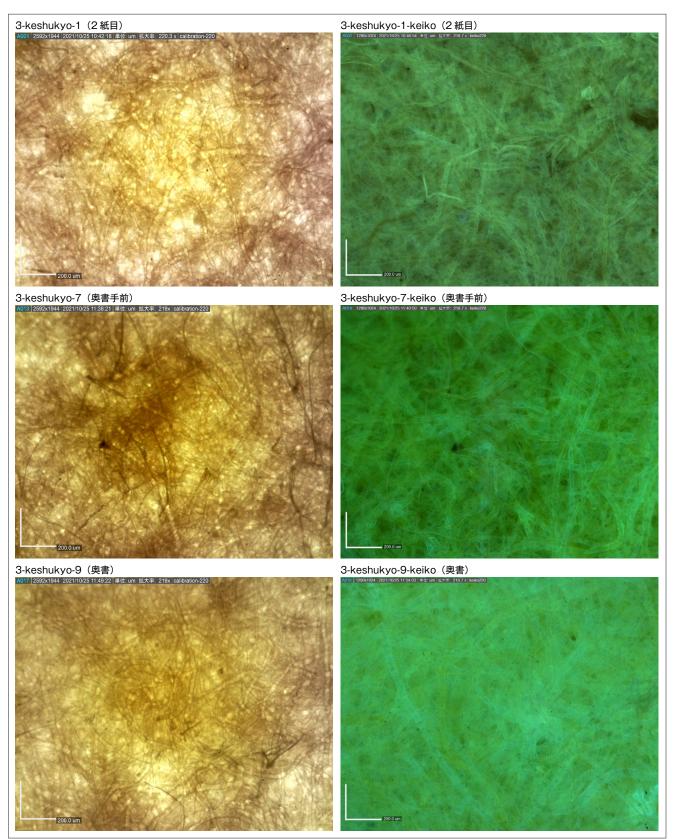


図3 3 「華手経 巻第4(五月一日経)」の顕微鏡撮影画像

の双方に偏光ポラライザーを装着することで、填料のデンプ ン粒と、柔細胞や鉱物など他の物質を明確に識別できるよう にしている。偏光ポラライザーを使用する理由については、 既存の調査報告(渋谷ほか, 2021, 2022)を参照願いたい。

マイクロスコープでの観察・撮影時は、文字の有無を問わ ず、料紙の大きさにあわせて一紙につき数カ所を選択し撮影 した。このとき、一紙の上下左右からの位置情報として数値 による撮影箇所の記録を行った。この複数箇所を選択して観 察・分析する方法は、考古資料に対する残存デンプン粒分析 で実施されている手法を応用している。料紙のどの箇所にど れぐらいの量の構成物が存在するのかを点的に表示すること ができ、撮影位置の数値記録により再現性を担保することが 可能である。

### 2. 調査対象の静嘉堂所蔵史料と料紙の構成物分析

今回調査対象とした史料は、目録番号1、2、3、6、8、 13-1、13-4、13-5、13-9、13-11、13-20、13-30、13-31 の 13 点である<sup>(表1)</sup>。3-1、13-4、13-5、13-9、13-11、13-20、13-30、13-31は、文字や銀泥などの部位を選択して撮影しており、

一紙全体の観察は行わなかった。そのため、本稿で述べる構 成物は史料の全体的な特徴を反映しているわけではないこと を断っておく。

今回の調査史料には、料紙の素材に由来する繊維の短い断 片や細胞組織の断片、柔細胞、鉱物が含まれていた (表1)。 填 料に由来する物質は確認できなかった。

1「大般若波羅蜜多経 巻第245(長屋王願経)」について、 画像 1-daihannya-1・1-keiko ~ 1-daihannya-6・6-keiko は2紙目、 1-daihannya-7・7-keiko ~ 1-daihannya-9・9-keiko は巻末の料 紙を撮影したものである<sup>(図1)</sup>。打紙加工の施された楮紙であ り、構成物はいずれも繊維素材のコウゾに由来する細胞組織 や繊維の微細な断片である。巻末の料紙に比べると、2 紙目 の料紙は細胞組織・繊維の断片が非常に多く含まれていた。

2「大般若波羅蜜多経 巻第526(永恩具経)」について、画 像 2-daihannya-1・1-keiko ~ 2-daihannya-6・6-keiko は 2 紙目、 2-daihannya-7・7-keiko ~ 2-daihannya-10・10-keiko は巻末の 料紙を撮影したものである (図2)。 打紙加工の施された楮紙で あり、構成物はいずれも繊維素材のコウゾに由来する細胞組 織や繊維の微細な断片、コウゾの柔細胞である。2 紙目・巻 末の料紙ともに、構成物の量・内容には大きな差異は確認で

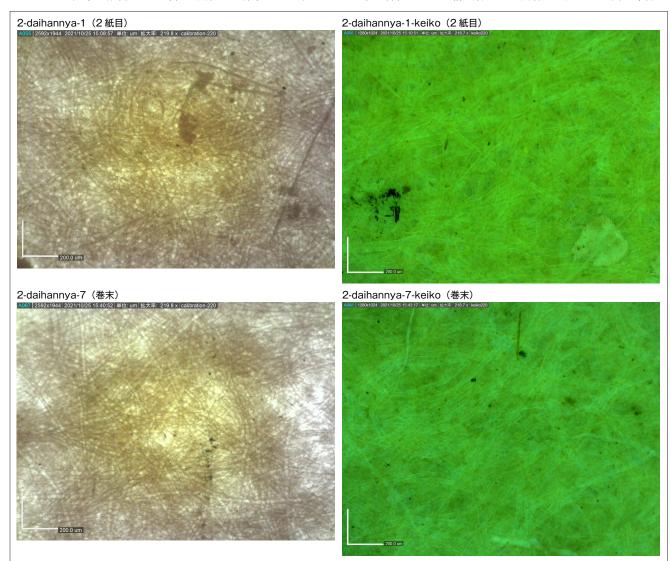


図 2 2 「大般若波羅蜜多経 巻第 526 (永恩具経)」の顕微鏡撮影画像

## 静嘉堂所蔵古写経における料紙の構成物分析 結果報告

渋谷 綾子

### はじめに

古文書や古記録類に用いられた料紙は、古文書学や歴史学 に加えて、植物学、製紙科学、文化財科学など他の研究分野 でも、顕微鏡を用いて料紙の構造を観察・分析する調査が各 所で実施されている(渋谷・天野編, 2023)。近年の古文書に 対する関心は、文字の読み解きといった歴史学的観点のみに 限定されない、さまざまな目的から情報を抽出する可能性が 提起されつつあり、そのための調査・分析手法が求められて いる。本稿は、静嘉堂所蔵史料である古写経について、料紙 の構成物の種類や含有量など、自然科学分析の結果を報告す るものである。

### 1. 料紙構成物の分析方法

分析はすべて非破壊観察を徹底し、基本項目はすでに定め たもの(渋谷ほか, 2021)に従った。この項目は、各所蔵機関 での史料番号や史料名、コレクション名、史料の作成年月日 や点数などの基本情報とともに、顕微鏡撮影画像について、 撮影倍率や撮影箇所等の記述情報、料紙の構成物の種類・ 量・密度、同定結果を盛り込み、植物学的特徴にもとづく構 成物の識別基準と合わせたものである。料紙の観察に使用す る機材は、デジタルマイクロスコープ Dino-Lite Edge S FLC Polarizer (偏光)、Dino-Lite Premier S Polarizer (偏光) 400 ×、 Dino-Lite Premier M Fluorescence(蛍光)TCFVW、顕微鏡用 偏光歪検査セット (バックライト) であり、今回の調査でも これらを使用した。

なお、マイクロスコープ本体と顕微鏡用偏光歪検査セット

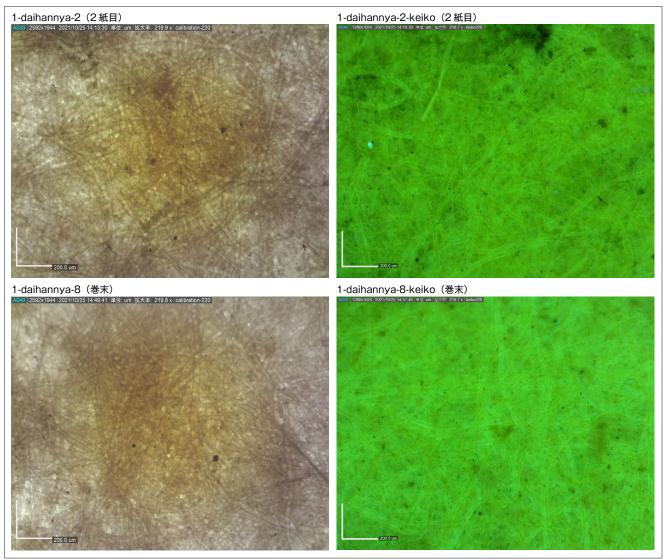


図 1 1「大般若波羅蜜多経 巻第 245 (長屋王願経)」の顕微鏡撮影画像

# 編集後記

し上げます。(五十音順、敬称略) 本調査および本書刊行にあたり左記の方々に御協力を賜りました。記して御礼申

杉本一樹

林寺正俊

藤原重雄

東京大学史料編纂所 渋谷綾子(前近代日本史情報国際センター)

高島晶彦

高山さやか

谷 昭佳

山口悟史(以上、史料保存技術室)

を中心に―」(代表者 市川理恵)の研究成果を含みます。 キストデータベース』を用いた静嘉堂所蔵古写経断簡の研究―「古経貼交屛風」「古経鑑」 なお本書は、令和五(二〇二三)年度一般財団法人仏教学術振興会研究助成「『大正蔵テ

東京大学史料編纂所研究成果報告書二〇二三-三

(公財) 静嘉堂調査報告書

# 静嘉堂所蔵古写経群の調査と研究

二〇二四年三月一日

者 静嘉堂所蔵古写経群の研究資源化プロジェクト

編集発行 東京大学史料編纂所 一般共同研究「静嘉堂所蔵古写経群の研究資源化」

公益財団法人静嘉堂

刷 株 セトプリント

印



